

眞實なる女性 クララ・シューマン  
原田光子著 昭和 17 年 第一書房發行 初版第2刷

眞實なる女性  
クララ・シューマン

原田光子著



東京  
第一書房

眞實なる女性 クララ・シューマン 目次

第一章 幼女時代（一八一九—一八二七年）	3
第二章 初舞臺（一八二七年—一八二八年）	6
第三章 ロバート・シューマンの登場	9
第四章 翼ある人々（一八二八年—一八三一年）	12
第五章 クララ巴里に行く（一八三一年—一八三二年）	18
第六章 芽生え（一八三二年—一八三三年）	25
第七章 霜降る日（一八三四年—一八三五年）	30
第八章 春を待ちつつ（一八三五年—一八三七年）	38
第九章 嵐	46
第十章 クララ維也納に行く（一八三七年—一八三八年）	51
第十一章 戀文	56
第十二章 ひとり旅（一八三八年—一八三九年）	62
第十三章 戦ひは終りぬ（一八三九年—一八四〇年）	70
第十四章 春、光りと雨（一八四〇年—一八四四年）	76
第十五章 ドレスデンに（一八四五年—一八四七年）	84
第十六章 ドレスデンの革命（一八四七年—一八五〇年）	89
第十七章 秋近し、ライン河畔に（一八五〇年—一八五三年）	96
第十八章 ヨハネス・ブラームス（一八五三年—一八五四年）	102
第十九章 斜陽	108
第二十章 夕翳りつつ（一八五四年—一八五五年）	116
第二十一章 終焉（一八五六年）	121
第二十二章 放浪の年（一八五七年—一八六二年）	126
第二十三章 バーデン 光りの谷街十四號（一八六三年—一八七三年）	135
第二十四章 ヨハネスをめぐりて	140
第二十五章 悲哀限りなく（一八七三年—一八七八年）	147
第二十六章 餘光（一八七八年—一八八九年）	154
第二十七章 日没（一八八九年—一八九六年）	161
あとがき	170

此の物語りの中に引用したロバート・シューマン、クララ・シューマン、ヨハネス・ブラームス等の多くの書簡や日記は、

クララ・シューマン編纂のシューマンの「若き日の手紙」

ストルク博士編纂の「シューマン書簡集」

リーズマン博士の「藝術家の生涯、クララ・シューマン」全三巻

マリエ・シューマンとリーズマン博士の共同編纂による「ヨハネス・ブラームスとクララ・シューマンの書簡集」全二巻

の中から譯出教しました。その他、此の物語りの資料と致しまして、前記のリーズマン博士の龐大な労作を始め、ロバート・シューマンの「音楽及び音楽家についての著作集」全三巻、ジョーン・バークの「クララ・シューマン」、末娘オイゲニー・シューマンの「想ひ出の記」、エールマンの「ブラームスの道、作品、世界」を始め、二三のブラームス傳その他から、多くの教示を受けましたことを、おことわり申し上げます。

## 第一章 幼女時代（一八一九—一八二七年）

一八一四年から一五年の冬のシーズンに、ライプチヒのゲヴァンドハウスの演奏會にいつも姿を現はす、清楚な黒服に身を包んだ瘦身の青年がゐた。未だ三十歳になつてゐないのであるが、學者らしい風格の持主で、フリードリッヒ・ヴィークと呼ばれてゐた。

サクソニーの一塞村で商人の子として生れた彼は、ウエルテンベルグの大學で神學を専攻し、ドレスデンの教會で最初の説教もすませて、ルーテル派の牧師としての平和な生涯を約束されてゐたのであつたが、少年の頃から持ち續けてゐた音楽への熱情が忘れられず、當時獨逸第一の音楽都市であつたライプチヒに、大望を抱いて出て來たのであつた。

やがて彼は市の有力者と親交を結び、生活に必要な弟子を、ともかくも集めることが出來た。最初の間は生活にこと缺かぬ程度であつたが、ピアノ教師としての優れた能力を發揮するに及んで、門下生の數は次第に増加し、遂にライプチヒ一流のピアノ教師としての名聲を得る程になつた。彼は教授の傍ら古今のピアノ奏法を詳細に検討し、クレメンティーやローゼの奏法の長所も加へて、自己獨特の奏法を案出したのであつた。

ライプチヒに落着いて間もなく、ヴィークは門下生の一人を心ひそかに好意をもつて眺めるやうになつた。プラウエンの合唱指揮者トロムリッツの娘である。ヴィークは結婚の相手の選擇を慎重にして、仕事の發展を不利にするやうな結婚は決してしない種類の間人であつた。娘の祖父の、ヨハン・ゲオルグ・トロムリッツはフリーユート奏者で、ゲヴァンドハウス管絃樂團の第一フリーユート奏者として、その頃招聘されたばかりであつた。此の有利な縁故關係が此の娘とのヴィークの結婚の決心を助けたことは疑ひのないところであらう。

一八一六年五月、マリアンネ・トロムリッツと結婚したヴィークは三十歳で、花嫁は十九歳になつたばかりであつた。マリアンネは若く美しく、生家の傳統に従つて音楽に秀でてゐた。結婚後も夫は彼女の教師となり、彼女の生々としたソプラノは結婚後滿一年を経ぬ間に、ゲヴァンドハウス演奏會のモツアルトの鎮魂曲の上演に際して、獨唱者に選ばれる程に見事に薰陶された。教授だけでは不足がちの一家の収入に、花嫁の歌は幾ターラーかの金額を加へたのである。

ヴィークは一八一八年に市の中心に近いノイマルクトに住居を移して、友人から資本の融通を受けて、音楽回覧文庫の經營を始めたが、これは音楽家達を自宅に集める爲の工夫であつた。その次の計畫は、各ピアノ製作會社の代理店の經營であつた。この仕事は門下生にピアノを賣る商賈と同時に、多くの樂器を扱ふことにより、各樂器の長所缺點に精通

して、彼がピアノの權威になることを助けた。又演奏旅行で訪れる藝術家にピアノを供給することによつて、彼等と親交を結ぶ機會を得る餘得もあつたのである。

マリアンネは結婚後二年目に母となつた。最初に生れた長女のアデルハイドは育たなかつたが、一八一九年の九月十三日には次女が生れた。小さな赤ん坊であつたが此度は丈夫な子供であつた。父親は此の子をクララ・ヨセフィネと命名した。

父ヴィークの心の中には、もう長い間或る一つの野心がひそかに育まれてゐた。他人に妨害される恐れもなく、彼の完成した教授法を我が娘の上に試みて、大ピアニストに仕立てあげたいといふ野心である。當時は未だ女流ピアニストは非常に珍らしかつたので、此の計畫が成功すれば彼の娘は世界の樂壇の話題となる筈であつた。機械的な達者なだけの演奏をする所謂天才兒以上のものを聽衆に示したいと彼は考へてゐた。彼の娘は最初から藝術家として發達させねばならない。生れて來た幼兒は此の父の目的に従つてクララ（光り輝く者の意）と命名された。何故なら彼女は輝く光りであり、彼の信條の松明であらねばならないからである。

彼の名聲は次第に擴がりピアノの商賈も益々繁榮したので、音樂回覽文庫の仕事は管理人に委せるやうになつた。家族が増加することに確定すると、彼はザルツゲッセンにより廣い住居を求めた。此の家は市廳の建物に續く横町にあり、以前の家以上に市の中心にあつた。當時二歳であつたクララと共にヴィーク夫婦が此の家に引き移つたのは一八二一年の復活祭の頃で、その後此の家でアルヴィン、グスターフ、ヴィクトールと三人の弟が續いて生れたがヴィクトールは四歳で夭折する運命にあつた。

マリアンネはピアノと聲樂の生徒をとることを夫に求められたばかりか、毎年次々と子供を生み育てながらも、一八二一年、二二年、二三年にゲヴァンドハウスの演奏會獨奏者として、當時流行のフィールドやデュセックのピアノ協奏曲を獨奏した程に、夫から訓練された。若い彼女は何の抗議をすることもなく、黙々としてヴィーク家の榮譽の爲に努力を續けてゐた。マリアンネは生れつき呑氣な温順な性格であつたが、妊娠によつて氣分が悪い時などに、何時間もピアノに向ふことを強要されたり、未だ衰弱してゐて眩暈がする産褥の床から、演奏會ピアニストの過酷な生活に起き上らねばならぬ折などには、流石に彼女も心樂しめないのであつた。ヴィークは妻に絶對服從を強要した。結婚生活の最初の頃はマリアンネも、夫の命令を師の命令として、争ふことなく常に喜んで服從してゐたのであつた。ヴィークが幼い娘の搖籃の側に立つて、歐洲第一の女流ピアニストに教育する決心だと、嚴肅に云ひはなつた時には、年若い母は黙つて嬰兒を抱きあげて愛撫した。それが彼女に精一杯の無言の抗議だつたのである。腕の中の幼い者がやがて彼女と同じく苦しむことを思つて、若い母ははらはらと涙を流すのであつた。

マリアンネの心に秘められてゐたもの思ひが遂に明かな反抗となつて現れる時が來た。ヴィクトールの生後三箇月日の或日、マリアンネは突然ヴィーク家を去つて、プラウエンの両親の許に歸へつてしまつたのである。一年後に離婚が法律で認められると、マリアンネは先夫の友人であつた、これもピアノ教師であるアドルフ・バルギールと再婚して、夫と共にライプチヒに歸へつて來た。

「拝啓、我が人生に残されし最愛なる者を御許に遣はし申し候。彼女の疑惑を刺戟するが如き言葉は、何卒一切お聞かせ下さるまじく特に願上げ候」といふヴィークの手紙をもつて、母がライプチヒに住んでゐた間に、時々母の家を訪ねるのをクララは幼心に楽しみにしてゐた。その後間もなくバルギール一家が伯林に移つたので、クララはその後ずつと實母の愛に觸れることなく育つたのである。

私は一八一九年九月十三日ライプチヒで生れ、クララ・ヨセフィネと命名された。両親は二人ともピアノ教授に忙しかつたので、私は女中のヨハンナの手にかかされて育つた。私が四五歳になるまで満足に發音出來なかつたのは、ヨハンナの言葉が明晰を缺いてゐた爲らしい。然しピアノ演奏は始終聽いてゐたので、私の耳は人の言葉より音樂に敏感になつてゐた。口の方も次第に進歩したが、それでも此の缺陷は八歳になるまで残つてゐた。

とあるやうに、クララ・シューマンの多難な、然し世にも稀なる美しい愛情に溢れた生涯の最初の記録は、未だ文字を知らぬ幼い彼女に代つて、父ヴィークの厳格な手跡で、その日記の第一頁に記されてゐる。

四歳になるとクララは、幾つかの小さな指の練習を學び、耳で聞き覺えた數曲の舞踏曲が弾けるやうになつた。満五歳の誕生日がくると、ヴィークは組織的に娘にピアノ教育をほどこすことにした。日記にもあるやうに彼女の言語は非常におくれてゐたので、十月になると彼は、クララと同年配で言葉の達者に喋れる幼女二人を、一組にして稽古をはじめた。やがてクララの物を云ふ能力も次第に發達し、同時に音樂の記憶力にも素晴らしい閃きを示すやうになつた。一二度弾いた曲は、暗譜でいつでも弾けた程であつた。アルファベットや數字を學ぶ前に、クララは樂譜を読み、リズムの感覺は生れつき掴んでゐた。讀譜力も知らず識らずのうちに發達してゐたし、音符は彼女にとって、既に耳と指のタッチでしたいものの名稱に過ぎなかつた。ヴィークの熱心な徹底的な薫育の結果、ピアノの鍵盤各音の位置と關係が幼い頭にしっかりと入つてゐたので、彼女は演奏に際して、集中して樂譜を目で追ひながら弾くことが出來たし、初見で自由に演奏出来る餘裕が培はれた。彼女の如き幼い年頃では洵に稀なことである。

ヴィークはクララ自身のピアノへの興味を呼び覺すことの重要さをよく心得てゐた。學校生活と遊戯が音樂の修業を補はねばならない。その上に健全な發達を遂げるためには、よい空氣と健康と幸福であることが何よりも必要である。クララは學校には満六歳から通ひだしたが、その頃の日課を日記からみると、學校が三時間から五時間、毎日父から受ける一時間のピアノの稽古と二時間の練習、それに健康のための新鮮な窓氣の中での運動や散歩が加はつてゐる。

「テクニックは手段であつて目的ではない」といふのがヴィークの教育法の信條で、彼が書いた音樂に關する感想集の中に、巧みな韻文で綴られてゐる。既に一八二七年に維也納のピアノ製作者である友人のアンドレア・シュタインにあててヴィークは、

「クララは技術的に相當困難な練習曲を、まるい透明な音で藝術家の如く演奏出來ます。然し私は練習過剰の結果、彼女自身を音樂的に殺すことを恐れてゐます。殆んど總ての演奏家、殊にピアニストには此の傾向があり、豊かな感情や眞の理解が失はれ、彼等の多くは單なる機械的な小手先の熟練を弄んでゐるのです。彼等は他人の演奏を落つて楽しむ氣持の餘裕もなく、常にただ己が弾くことのみを欲してゐます」と書いてゐる。

軽いアクションの樂器を用ひ、透明で端麗ではあるが、その燦爛さの中に冷たいヴィルトゥオジティーを誇る、當時の樂界を風靡してゐたチェルニーの流派にヴィークは烈しく反抗した。彼の傾向は本能的により知的で熱情的なクレメンティーが實證した傳統に近かつた。クレメンティーは他の氣取つた流派の人々が聽かうともしなかつた、ベートーヴェンの雷雨の如く強烈で専制的なピアノに傾聴した。クレメンティーの次には、詩的な感性と、のびやかに歌ふ音をピアノに與へ、器樂による旋律の花「ノクチューン」を通じて、ショパンの道を開いた彼の最愛の弟子ジョン・フィールドがゐる。

クレメンティー、フィールド、ショパンの道はヴィークの道でもあつた。たとへ當時の聽衆達が手品師の如きピアニスト達を喜び、早い音階や指先の小器用さに満足してゐたにしても、ヴィークはピアニストがその藝術に生命の血潮を注入すべき時代が迫つてゐることを悟つてゐた。ベートーヴェンはピアノを客間の玩具から、嵐の如き心を表現する樂器に變形させてしまつた。ベートーヴェンが開拓し世間が默殺した新しい道こそ、藝術家の行くべき唯一の道であることを、ヴィークはピアノを愛することによつて教へられた。新しい時代のピアノ演奏は、心の旋律を語り、情感の細やかな翳とアクセントを表現し、技術と心を調和させねばならない。ピアニストは此の使命を自覺し備へねばならない。眞のピアニストは曲藝的な技術の完成に満足するのみならず、音樂全般の教養は無論のこと、姉妹藝術や精神文化に對する理解が必要であると、ヴィークは論じる。

一口に云へばヴィークは娘クララを、浪漫主義精神に目覺めたピアニストに、仕立てようと計畫した。裾の短い衣裳を着て、ペダルに足がまたとどかない幼い頃から、クララの

演奏が聴く者の心を捉へたのは、決して所謂技巧の美しさの爲ではなかつた。幼いなりにピアノの前に坐つた彼女は、作品を愛し彼女の感ずるものを率直に表現した。ヴィークはクララが小さい手で聴き覺えた歌のメロディーを弾き始めた頃から、ピアノを歌はせることの重要さを強調して教へ、音の微妙な表情を教へて倦まることがなかつた。そして指のしなやかさと、手首のやはらかさを與へることに意を用ひた。又クララが適當な年齢に達した時には、聲樂の稽古も始めさせて、魅力あるピアノ演奏の基礎となる、よくつながつた旋律感を自然に會得出来るやうにはからつたのであつた。

又ヴィークは音樂理論、作曲、絃樂器にしたしむ事、總譜を讀む訓練等、多方所に亙る音樂教育をクララの理解力に應じて與へることを心掛けてみた。

これが後にロバート・シューマンの妻として、又ヨハネス・ブラームスの後援者として、半世紀に餘る長い歲月の間、歐洲ピアノ界の女王として君臨し、浪漫主義音樂演奏の權威として活躍したクララ・シューマンが幼女時代に受けた音樂教育であつた。

## 第二章 初舞臺（一八二七年—一八二八年）

父の手によつて始められたクララの日記は、やがて彼女のたどたどしい筆で埋められ、遂に榮光と悲哀に輝やくその長い一生の間、女らしい感動的な筆致で細々と書き続けられたのであつた。幼い手にペンを握り、父ヴィークの命令に従つて、日記の頁を埋める時や、父の厳格な批判の言葉を筆記する時などは、日記は彼女にとって相當の重荷であつたに違ひない。後年の歐洲各國にわたる演奏生活の多忙さに、日記の幾頁かが、白紙のままに残されてゐる時代もあるが、全くうち捨てられた時はなくて、彼女の敏感な感情と深い熱望とそして率直な意見が、聰明な筆致で記されて、彼女の人生の忠實な記録が、彼女自身の言葉で残されたのである。

父ヴィークによつて一人稱で記されてゐる幼女時代の日記を見ると、クララの才能が日に日に進歩してゆく有様や、此の支配的性格の親といへども、實際は娘の意志に従つて教育を與へてゐたといふ安心を、感じる事が出来る。一八二七年の日記には、彼女が既に各種の和音と調子を聴きわかることと、ピアノの上で隨意に轉調する能力を持つてゐたことが記されてゐる。演奏の方も次第に進歩して、

「私の打鍵はしつかりとしてゐて確實である。指も強くなり、むづかしい曲を二時間つづけて演奏しても、少しも疲れなくなつた。けれども父様は、私が相變らず頑固で我儘を云ふ、と云つてゐる」と記されてゐる。

僅か八歳の少女にしては驚異に値ひするクララの演奏ぶりは、彼女が父親から過酷な練習を強制されてゐるといふ噂の原因となつた。フランツ・リスト傳の著者、ラ・マールまでが後年クララについて「子供の好む遊戯や休養の時間を與へられないので、クララは僅に父の目を盗んで、小猫を愛撫して慰めてゐた」と記して、此のしばしば語り傳へられた噂を繰り返してゐる。演奏旅行中などに始終きかされる「お嬢さんは過勞ではありませんか」との質問に對して、ヴィークは常に、「どうかクララをよく御覽下さい。あの娘の様子がなによりのお答へになりませう」と答へるのであつた。

誠に父ヴィークは幸運であつた。「あのやうなお嬢さんを天から恵まれて、さぞ御満足でせう」との間に對して、彼は「感謝してゐる。雪が降る日に思ひがけぬ雪の一片が、私の手の掌に落ちた。素晴らしいではないか、それが諸君の眺めるままのクララであつた」と書いてゐる如く、此の祝福された幸運を、先づ誰よりも先きに認めたのは、ヴィーク自身であつたのである。

クララの素晴らしい進歩に、人々が驚嘆するには充分な理由がある。ピアノの稽古を始め僅か三年目に、ヴィークは娘の演奏を友人達に聴かせる爲に、私的な音樂會を催した。満八歳の誕生日を四日後に控へた幼いピアニストは、コンチェルト・マイスターの提琴家をはじめ、八人のゲヴァンドハウス管絃樂團の樂員達の伴奏で、モツアルトの變ホ長調の

協奏曲を立派に演奏して人々を驚かした。伯林に住む實母のバルギール夫人に宛てて書かれた彼女自身の此の日の感想は興味深い。此の手紙はクララが始めて書いた自筆の手紙で、八歳にしては相當に早熟な手跡であるが、當時の彼女が既に達してゐたピアノ演奏上の技巧とあはせ考へる時に、生れつき指の器用さに恵まれてゐたことが想像される

おなつかしい母様

今までは書けなかつたけれど、少し字が書けるやうになつたので、これからはきつとお喜びになるお手紙をあげます。八つのおたん生日には、ペルタとお父様からおくり物を貰ひました。お父様からはきれいな着物、ペルタからはお菓子と、かあいらしい、あみ物ぶくろを貰ひました。

それからお母様がよく弾いていらした、モツアルトの、變ホ長調のコンチェルトを、オーケストラのばん奏で弾きました。上手に弾けてちつともつかへませんでした。うまくゆかなかつたのは、カデンツァの中のクロマティックの音階を三度弾くところだけです。ちつとも恐くなかつたけれど、拍手には困つてしまひました。

お祖母様によろしく。弟たちもお母様によろしく云つてゐます。ではお手紙ちやうだいね。

あなたのおとなしい娘

クララ・ヴィーク

一八二七年九月十四日 ライプチヒ

もう直にお目にかかりにゆきます。そして連弾をしませう。よくピアノをお勉強して、コンチェルトをまちがへずに弾いたので、お父様ががりつばなピアノを、維也納のシュタインにたのんで下さいました。

一八二八年になると、クララが人前で演奏する機會も次第に殖えて來た。ヴィークは將來クララの爲になるやうな有力者達を自宅に招いたり、その人々の家にクララを伴つて演奏させたりした。此の頃一人の牧師が「最高の藝術は人格によることを忘れないやうに」とクララに語つたが、幼いなりに此の言葉に深い印象を受けたとみえて、日記にこれを記して「今後も度々自分に云ひきかすつもりです」と書いてゐる。

三月三十一日には、カールス博士邸でフンメル三重奏を演奏したが「一緒に弾いた紳士より私の方が間違へなかつた」と書かれてゐるし、ヘルツの變奏曲を大勢の來客の前で演奏した折には、ピアノが非常に硬い弾きにくい樂器であつたに拘らず、彼女は勇敢にもあらん限りの努力をして演奏した。弾き終つて盛んな拍手が起ると、彼女は大眞面目な顔をして立ちあがり、「皆さんは手を叩いて下さるけれど、下手に弾けたことをよく知つてゐるの」といつて泣きだしてしまつた。彼女が聴衆の前で泣いたのは此の時だけであつた、と父ヴィークは此の事件を記録している。

一八二八年七月三日には、淋しいヴィーク家に新しい夫人がむかへられることになつた。晴着を着せられて父の結婚式場に連つた八歳のクララは、二人の弟達と大きな目を見開いて、彼等の父様とフロイライン・クレメンティネ・フェヒナーが牧師の前に宣誓するのを眞剣な面もちで凝視めてゐた。ヴィークの新夫人は夫よりも二十歳も若かつたが、此度の結婚は成功であつた。新婦はやさしい性格の人で専横な夫の命令に柔順に従ひ、三人の繼子達の爲にも十分に親切な母となり、自分も三人の子供を生んだ。そのうちの一人のマリエは、父ヴィークのピアニスト養成の第二の希望となつた。

結婚式の三日後に新夫婦はドレスデンに蜜月の旅に出かけたが、あらゆる機會を巧みに利用することを忘れないヴィークは、多くの新しい人々と逢ひ、多くの未知の人々の前で演奏する旅行が、クララの子供らしいはにかみを克服する爲に最もよい機會だと考へて、クララを同行させることにした。ヴィーク親娘はドレスデンの好樂家達から暖く迎へられて、此の経験はクララの爲にも、その秋の十月二十日にライプチヒのゲヴァンドハウスで行はれた、最初の公開演奏のよい準備となつたやうである。

ヴィークが支配するザルツゲッセンの家の、生活の樞軸は、音樂であつた。朝から夜まで音樂、音樂で、家中の者が音樂を語り音樂を呼吸してゐた。朝は朝食が未だ濟まぬうちに、門下生の來訪を告げる呼鈴が鳴りだした。弟のアルヴィンはヴァイオリンを學ばね

ばならないし、クララも父とピアノの勉強をしなくてはならない。二時間の練習時間の他に、學校にも行くし散歩もしなくてはならない。夜になると各自樂器をかかへたヴィークの友人達が集ってくる。音樂家でないのはやさしい繼母のクレメンティネ夫人だけである。果しのない議論や音樂を、何時間も黙々として聽いてゐる彼女の忍耐には、並人ならぬものがあつたに違ひない。かういふ時に彼女は音樂に無能な者としての自分を幾分卑下して感じてみた。優れた音樂家であつた先夫人マリアンネの記憶は、此の點で彼女にとって苦しかつたに違ひない。かうした雰圍氣で育つた爲に、クララも新しい母を實母よりは、いくらか劣る者として眺めてみたやうである。

一八二八年十月二十日は、クララ・ヴィークにとって記憶すべき日であつた。ゲヴァンドハウスに於けるクララの初舞臺の日である。

その頃演奏者を迎へにゆく習慣になつてゐた「ゲヴァンドハウスの馬車」と呼ばれる美しい馬車を、クララはもう以前から楽しみにしてゐたので、その日の夕方になると今か今かと待ちかまへてゐた。彼女の長い豊かな卷髪は美しく梳られたし、曲目は充分に暗譜が出来て、細かな部分まで頭にはつきりとしてゐる。会場には父の盡力で弾きやすいグランドピアノが待つてゐる筈である、だから當日の夕刻いよいよ「お迎へのお馬車が参りました」と召使ひが呼びに來た時、クララの小さい心は、喜びと期待に一杯になつて、足どりも軽ろやかに玄開に出ていつたのであつた。ところが見知りごしの美しい馬車のかはりに彼女が乗せられたのは、まるで乗合馬車のやうな粗末な車で、おまけに晴着を着た大勢の見知らぬ娘達が乗つてゐるのであつた。その上に途々着飾つた娘達が乗り込んでくるのである。

薄汚い馬車に失望したクララの心は、いつか驚きと不安に滿され、やがてゲヴァンドハウスとは全く違つた方向に走つてゐるのに氣づいた時は、不安は恐怖にかはつてしまつた。彼女は勇氣をだして、隣りに坐つた婦人に、おづおづと尋ねてみた。

「ゲヴァンドハウスに行くんでせうか」

「ゲヴァンドハウスですつて？ オイトツツエに行くのですよ」

そして馬車は郊外にむけて走りつづける。クララは途方にくれてしくしくと泣きだしたが、丁度その時幸にも本物のゲヴァンドハウスの馬車がやつと追ひついて、クラブは無事に会場に運ばれることが出来た。何んでも郊外で催された舞踏會に行く、門番の娘で同名のクララを迎へにきた馬車が、誤つてこちらのクララに取り次がれたのであつた。

此の豫期しなかつた恐しい經驗は、幼い演奏家の心をすつかり脅かしてしまつて、やがて会場に着いたクララは亢奮して涙にむせんでゐたのであつた。先着して待ちかまへてゐた父ヴィークは、演奏の時間までに彼女の心が、いつもの平静さを取り戻せなかつた折の危険を悟つて、ニコニコ微笑しつづ娘を迎へ、何事もなかつた如く砂糖菓子をさしだしながら、

「クレールヘン、初舞臺の時にはね、誰でも間違つて連れてゆかれるのを、父様はお前に云ふのをすつかり忘れてしまつてね……」

と云つた。此の機智に富んだ父の一言のおかげで、當夜カルクブレンネルの變奏曲の二重奏をするエミリー・ライヒホルドに逢ふ頃には、クララもすつかり落着いて演奏をはじめることが出来た。

しづまりかへつてゐる聽衆は、如何にも冷淡にみえていくらかは氣になるのであつたか、ヴィーク家の夜の集りにくる専門家達の聴き手よりも、クララにとって批判的な聽衆ではなかつた。いよいよ最後のクライマックスに達する頃になつて、クララは聽衆の暖い好意を感じる事が出来た。然し不思議なことに彼女は此の瞬間、はじめて眞の恐怖を経験したのである。椅子から立ちあがり、聽衆の嵐の如き拍手喝采に答へて、正面をむいてお辭儀をすることに、最も技巧的に複雑なフレーズを弾いてのけること以上に、彼女は當惑するのであつた。クララ・シューマンは此の初舞臺の經驗を、後になつて人々に好んで語つてゐる。

翌日の朝、「音樂時評」が配達されるとヴィークは昨夜の音樂會の記事を、食卓に集つた家族一同の前で大きな聲で讀みあげるのであつた。彼の聲は明るく感謝に溢れてゐる。

「僅か九歳の才能あるクララ・ヴィーク嬢の演奏を聞いたことは、筆者の特に喜びとするところである。ピアノ演奏法に對する造詣の深さと、斯界への獻身的な熱情を以つて著名なる父君の經驗ある指導により、彼女の將來には刮目して待つべきものがある」

父が上機嫌で目を輝かしてゐることはクララにとつても嬉しいことであつた。ヴィークはよく勉強し立派に弾いた御褒美に、短いお休みをクララに與へたが、これは日課のピアノ練習に退屈するのを防ぐためにもい賢明な取りはからひであつたし、何んな幼い心にとつても適當な稱讚の言葉は、何よりも有効な強壯剤の役目を果すものである。無論それが過ぎてはいけないので、少しでも彼女になまけ心が起ると同時に、手綱は早速に締められる。初舞臺の九日後の日記には、此の事情が見出される。

「長い間私の性質がかはる事を切望してゐた父様は、今日又も私が相變らずなまけ者で、ぼんやりで、だらしなくその上に頑固で柔順でないこと、ピアノ演奏も出來が悪いことに氣づきました。ヒュンテンの新しい變奏曲をあまり下手に弾いたので、父様は私の目の前で樂譜を破つてしまひました。そして今日からはもう教へて下さらぬさうです」

その後の一週間の間彼女は、音階と顫音の練習ばかりやらされて、「以後は忠實に勉強すること」を誓つて、やつとヴィークからお許しが出るのであつた。

ピアノの勉強は物心がついて以來、彼女の生活の當然の日課であつた。うるんだやうな大きな美しい眸をもち、豊かな卷髪をいつも綺麗に結つた可憐な此の少女は、暗黙のうちに家族の者から特別の尊敬と同情の目をもつて眺められてゐた。召使達も含めて家中の人達はクララとかクレールヘンとか呼んで彼女を愛した。クララは健康で動作の静かな、のびやかな性質の子供で、彼女の明るい愉し氣な笑ひ聲が、一家中の空氣を明るくするのであつた。

威嚴に満ちた父と、温順な娘は不思議な對照を示してゐた。二人とも表面は極めて冷靜に見えるが激しい性格で、時々感情が火花を散らすことがあつた。然しその爆發の現れ方は違つてゐたのである。クララは生れつき意志の強い子供であるが、彼女の柔順さは決して強要されたものでなく、両親に對する子供らしい自然な信頼と尊敬から生れてきたものであつた。そして此の信頼の氣持は成長するに従つて感謝の念となつて、クララは一生を通じて、藝術への目を開いてくれた父の恩を、決して忘れたことがなかつた。クララの少女時代に於ては、彼等親娘の音樂への興味も生活も完全に一つに融合してゐたのである。

此の父娘の心を時々隔てるものは、我が意志に逆らふ者に對して、誰かまはず愛情を踏みこじつて威張り散らすヴィークの粗暴さで、こればかりはクララにとつて幼い時から我慢出來ぬことであつた。父ヴィークの賢明な計畫と細かい心遣ひに守られながら順調な道を圓滿に成長したクララにとつて、孤軍奮闘、一步一步逆境を克服してきたヴィークの、いつか習性となつた片意地は經驗外のものであつた。常に道理に柔順であるクララの生れつきの聰明さに溢れた性情は、最もいとしい者に對しても、或時は冷酷に粗野に振舞ひ得る父の性格が重荷であつたに違ひないが、彼女の温良さはよくこれに堪へたのであつた。ヴィークのこの性癖は、彼が功成り途げて鬭争の必要がなくなつてからも、晩年まで殘されてゐて、クララとロバート・シューマンの悲戀の原因となり、二人の若い心を必要以上に悩ましたのである。

### 第三章 ロバート・シューマンの登場

一八二八年三月三十一日に、カールス博士邸で催された音樂の集りでクララがフンメル三重奏を演奏した時、來客の一人にギムナージウムを卒業したばかりの慎み深い未知の青年がゐた。當時流行してゐた幅の廣い折襟の上衣をきちんと身につけてゐたが、此の青年の夢見る爲にあるやうなまなざしや、白い額をとりまいてゐる柔かな髪、隱やかな態度は、十九世紀初頭の獨逸の音年層によく見つけられた詩人型に屬してゐた。

彼は故郷のツヴィカウから、二三日前にライプチヒに出て來たばかりで、早速舊知のカールス家を訪れて來たのである。愉快なカールス博士と、美しい聲の持主であつた夫人は、

此の青年の讚美的で、彼は夫人のことを「歌謡歌手」と呼んで傾倒してゐる。博士が長らくツヴィカウに近いコルティクで開業してゐたので、彼はその頃からカールス家に出入してゐた。相當にピアノを弾き、作曲もしたので、音楽好きの夫人に可愛がられてゐたのであつた。

カールス博士は、此の青年を「友人のロバート・シューマン」と、當夜の客達に紹介した。本名はロバート・シューマンであつたが、夫人からは常に、シルレルのバラードに出てくるお小姓の名からとつたフリードリンといふ愛稱で呼ばれてゐた。

シューマンは敬愛する夫人にむかつて、二三日前にライプチヒ大學の法學部に入學したことを告げて、これからは立派な大學生であるから、これまでの詩的な呼び名は返上すると云つた。夫人にはいつも空想ばかりしてゐるフリードリンが、法律家になるなどとは想像もつかない。彼の眞面目な様子に微笑しながら、夫人は會話をもつと氣輕な音樂の話に戻すのであつた。

逝いて滿一年。一般の聽衆にとつては、未だ閉された書物に過ぎないベートーヴェンの名を、尊敬と熱情をもつて語る此の若き音樂家を、よき夫人は心ひそかに期待し、誇らしく思つてゐるのであつた。然し彼の音樂に對する蘊蓄は、大勢の來客の前ではなかなか披瀝されない。殊に有名なクララを生みだしたフリードリッヒ・ヴィークの、敵意さへ感ぜしめる程に尊大な態度には畏れをなして、益々はにかんでしまふのであつた。然し未だ慧眼な少數の人々にのみしか知られてゐなかつた、維也納の作曲家シューベルトに二人の話題が偶然に移つたおかげで、忽ちお互の間に深い理解が生れたのである。

後に最愛の妻となつたクララと、始めて此の世で逢ひ見た記念すべき夜である此のカールス家の集りも、動搖してゐる若いロバートの心には別に深い印象を残さなかつた。續く六週間の間彼は酒場で知りあつた友人、ローゼンとの交友に夢中になつて、好きな音楽さへ顧みなかつたらしい。

その頃のシューマンは嵐の如き情熱の詩人ジャン・パウル・リヒターの影響を多分に受けてゐた。その結果、突然に精神が異常に高揚する事が多く、その爲に散文的な一寸した出來事が、忽ち所謂超人の思想による大事件へと飛躍するのを度々経験するのであつた。彼の美に對する渴仰は深い瞑想を生み、瞑想は厭世主義的な傾向に彼を導いた。この方面に冷淡な友人達にとつては、ロバートの耽溺的な傾向は極めて退屈であつたので、これが變り者と考へられる大きな原因となつた。

ローゼンとロバートは逢つたばかりで、ビール杯が空にならぬ間に、お互がジャン・パウルの心酔者であることを發見し、忽ち肝膽相照らす友人となつた。ローゼンはハイデルベルヒの大學に入學の爲にライプチヒを去る直前であつた。別れを惜しんだロバートは同行して、先づ新しい親友を故郷のツヴィカウに伴ひ、それから二人は旅をババリアまで延ばしたのである。憧れの詩人ジャン・パウルの住んでゐたバイロイトを訪れ、詩人の未亡人を訪問して敬愛する詩人の在りし日の姿をしのんだり、ミュンヘンのハインリッヒ・ハイネへの紹介状を貰つて逢ひにゆき、此の詩人の現實の生活に幻滅の悲哀を感じたりしつつ愉快的放浪の旅を終へて、ライプチヒに歸つてきたロバートは、翌年の春には彼もまた、ハイデルベルヒの大學に移る決心を、心ひそかに固めてゐたのであつた。

ロバートは二年前に父を失ひ、未亡人となつた彼の母は、五男であり末子であるロバートをこよなく鐘愛し甘やかしてゐるのであつた。彼女はロバートのことを彼女の人生の「光明」とよんでゐた。出版商で自分も著述家であつたロバートの父は、息子の音樂の才能を理解して、激勵してくれてゐたのであつたが、父の死後、母は當時の中流階級的な偏見から、藝術家の生活に不安を感じて、反對した。文學的な才能を持つ青年にとつて、最も安全な職業を保證する法律を専攻することを、母は極力彼にすすめるのであつた。母を愛し、母のいつくしみ深い愛情に頼つてゐたロバートは、喜んで母の希望を承諾し、ライプチヒ行きが實現したのである。母に反抗することは、温順な彼の性格にとつては思ひもよらぬことであつた。それに若いロバートは、音樂と學問の都として歐洲に謳はれてゐたライプチヒの生活に、大きな魅力を感じてゐたのである。

さて、ローゼンとの青春の歡喜と興奮に満ちた放浪の旅を終えて歸つてみると、ライブチヒの生活はロバートにとって誠に單調であつたし、期待してゐた大學も失望そのものであつた。早速大學の名物である學生組合にも入會してみたが、無鐵砲な無知な享樂への狂奔があるばかりで、當時の學生達の粗暴さは、敏感なロバートにとって厭はしく怖い限りであつた。始めはつとめて陽氣な仲間に加はつてみたのであるが、心から共感することがどうしても出来なくて、いつか沈黙の殻の中に閉ぢこもり、やがて眞の失望に沈んでゆくのであつた。

かうして内氣なロバートは、元氣な仲間から次第に忘れられていつた。陰鬱な思ひに襲はれてやりきれなくなると、彼は心の慰めを知らず識らず音樂に求めてゆくのであつた。當時彼は母への手紙に

「僕の生活は單調で別に面白いこともありませんが、一人住居でないことは幸福です。それでなければ憂鬱症に陥ることです。街を歩いてみても面白くないし、馬鹿者共を見るとやりきれなくなります。

けれども心の中に、慰めがないわけではありません。人間からは與へられないものが、音樂によつて與へられます。ピアノは他では現し得ない僕の高邁な精神感情を語つてくれます。僕は自分が極度に敏感なことを、よく承知してゐます。深く感じる者は誰でも必ず不幸なものなのです」

と自らその邊の消息を傳へてゐる。大學の講義は少しも彼の興味をひかなかつたが、母の爲に彼は大決心をして、「僕は克服します。男子が意志を以つて望めば、必ず成就する筈です」と書き送り、時計のやうに正確に忠實に講義にも出てゐると、母を安心させるのであつた。同じ頃にローゼンに宛てた手紙の中で「僕はまだ一度も講義に出てゐない」と書かれてゐるのを見る時、ロバートが如何に母に心配をかけまいと心を用ひてゐたかがよく解る。

講義と酒場と決闘に暮れる賑やかな學生生活も、喧騒に満ちな大都會の毎日も、靜寂を求める十八歳のロバートにとっては耐へ難いものであつた。日が経つにしたがつて、彼は外出することも益々少くなり、孤獨な生活の中でジャン・パウルの幻想に耽りながら、母とローゼンへしばしば手紙を書いた。

僕は未だどこ家庭ともしたしくならない。理由は別がないが、むしろ哀れな同胞共を避けてゐる形である。だから外出はあまりしない。時には此の利己的な世界の卑劣さと悲惨さに、押しつぶされるやうに感じる。

ああ、人間のあない世界は何んなであらうか？ 限りなく續く墓場、夢なき死の眠り、花も春も訪れぬ自然、人影なく生命なき覗き目鏡、ああ、今此の世界には人間が満ちてゐるのに、何んといふことであらう。それは埋められた夢想の廣大なる墓場、泣きぬれた柳と絲杉の園、涙多き人影に満ちた覗き目鏡に過ぎない。おお神よ！ これが此の世の姿なのだ！

ローゼン宛の此の手紙に示されなやうな、十八歳のシューマンの感情の露出は、一八二八年時代の獨逸のインテリ音年層に流行してゐた誇張癖の影響に過ぎないとしても、彼の生々とした敏感な、調子の高い想像力を推察させるに充分である。

間もなくシューマンはライブチヒの音樂界に心の慰安を見出すやうになつた。カールス家には始終出入してゐたので、やがて、ヴィーク家の音樂の集りにも歡迎される常連の客となつた。あまりに獨善的な主張だとヴィークの意見に不満な點もあつたが、彼はヴィークの個性に強く刺戟されて、彼からピアノの稽古を受けることになつた。ロバートは音樂好きな學生を集めて、三重奏團をつくり、祕に練習を重ねて、或夜、下宿に師を招いてシューベルトの夕を催したりした。此の頃のクララの演奏はロバートを慰め、勵げまじとはなつたが、彼女の印象は彼の意識の表面には未だ現れなかつた。宿命的に結ばれた此の戀人同志の、最初の出逢ひに、神祕的な瞬間を想像したいところであるが、八歳の少女と十八歳の少年から多く期待することは困難であらう。ロバートも最初のうちは、母への手紙に時折、名をあげるぐらゐで、別に深い關心も示してゐない。クララの日記にシューマン

が最初に現れたのは一八三〇年になってからで「シューマン氏は聖ミカエルの日から、家に住んで音楽を學んでゐる」と記されてゐる。

後年、シューマンはクララの最初の記憶を想ひ起して、「机にむかつて、夢中で何か書きながら、時折大きな黒い眸で、自分を見上げてゐた少女」と書いてはゐるが、ザルツゲツシェンの家に對する當時のシューマンの興味の對象は、残念ながらヴィーク嬢ではなくて、ヴィーク氏その人であつたらしい。

然しクララは尊敬して「ヘル・シューマン」とよび馴れてきた青年を、常に變らぬ好意をもつて眺めてゐたし、ヘル・シューマンも亦相弟子の此の幼い友に、いつくしみ深い愛情を抱いてゐた。ロバードは時によると長い間、澁面をつくつて黙りこんでゐる時があつたが、時には人懐っこい微笑をたたへて、目を輝やかせながら彼女を凝視してゐる。クララは呑氣者で夢想的な、それでゐて上品な此の大學生が大好きであつた。九歳の少女に惱める詩人の高邁なる思想が解る筈がないから、ロバートが幼いクララから或時は退屈な人だと思はれるのも無理はない。瞑想にふけりはじめると、ロバートの心は果しもなく幻想の翼にのつて、飛躍してゆくので、傍で自分をちらりちらりと眺めてゐる少女から、想ひは忽ち何千里の彼方に引き離されてしまふのであつた。

丁度此の同じ頃に、ヴァルソーでは後にシューマンと共に浪漫派の巨星の一人となつた若いショパンが、一婦人に對する愛情の悩みを、親友に打ちあけてゐるのであるが、シューマンも又十七歳の頃に彼の人生に訪れた戀愛について、友人に書き送つてゐる。彼に新しい感情の世界を示した二人の年若い少女がその頃ゐたのであるが、ライプチヒを訪れた頃には、此の少年期の戀の吐息や片思ひには既に卒業してゐたやうである。アグネス・カールス夫人に對する彼のおだやかな憧憬の中には、もつと永續的な落着いた質が加はつてゐた。何故ならば此の夫人は、若い少女達には求め得ない、豊かな理解と同情を以て、若いロバートの心を圓滿につつんだからである。

その上にアグネスは既に幸福な結婚生活を營んでゐたし、總ての點で成熟した婦人であつたので、ロバートの感情的な心酔ぶりに微笑しながらも、彼等の友情には常に適宜な平衡が保たれてゐたのである。夫の博士も此の若い友人の罪のない惑溺をよく理解してゐて、彼等のフリードリッヒが、意味あり氣なまなざしを夫人にむけたり、彼女の手を握つたりしても、平氣な顔をしてゐるのであつた。

一方シューマンはヴィークの稽古を受けてはゐたが、指をしなやかにする爲、又打鍵に確實性を加へる爲に與へられる練習を、その必要は充分に認めながらも、無味乾燥だと考へて無視し勝ちであつた。ヴィークが彼の朦朧たる作曲理論を、はつきりさせようと鋭く突つ込んでゆくと、彼は強情になり、心の中で反抗して、果ては稽古を懶けるやうになつた。

ヴィーク父娘がドレスデンに出かけると共に、シューマンもいよいよ法律に専心することにして一八二九年の春にはハイデルベルヒに移ることになつた。シューマンの當時の母への手紙には、ハイデルベルヒの大學の著名なる法律學者ティボウの膝下で學び得る好機會について熱心に書かれてゐるが、ティボウ教授が講義を終へ、ガウンをぬぐと共に、忽ち熱烈な素人音楽家に早變りをする事、青春や戀愛についても法律同様に深い理解があることを、報告するのは忘れてゐるのであつた。彼は新しい環境による充實した生活を期待してゐたので、退屈なライプチヒを去つて、山水の自然の美に恵まれた學都ハイデルベルヒに移ることを、むしろ非常に喜んでゐたやうである。然し、彼は音楽への關心を全く捨てたわけではなかつた。度々衝突はしたものの、ヴィークの熱心な堅實な指導によつて、彼の演奏がより豊に深められたことを、自らよく悟つてゐたので、彼は心ひそかに將來ピアニストになる夢を育ててゐるのであつた。そしてハイデルベルヒの下宿にも、指の訓練をつづける爲に無音ピアノを、たづさへることを忘れなかつたのである。

#### 第四章 翼ある人々（一八二八年—一八三一年）

一八二九年の十月に實現したヴァイオリンの巨匠ニコロ・パガニニのライブチヒ訪問は、同市の好樂家にとつて又特にヴィーク家にとつても一大事件であつた。その年の早春二月の或夜、大パガニニが伯林に向ふ途上、ライブチヒに泊したと聞きこんだヴィークは、此の不世出の大演奏家の演奏會を、是非ライブチヒで開催したいものと、八方に手をつくして奔走したが、遂に此の試みは不調に終つてしまつた。そこでヴィークはわざわざ伯林までパガニニを聴きに出かけていつて、非常な感動に満されて歸つて來た。

彼はクララの日記に「私はかつて如何なる聲樂家に於てさへも、パガニニの如く人の心を動かすアダヂオを聴いた覚えがない。又彼の如くあらゆる意味で近づき難い偉大さをもつ藝術家は、かつて生れたことがないであらう」と記してゐる程に、深い感銘を受けたのである。ヴィークが中心となつて、ゲヴァンドハウスの支配人に懇請した結果、同年の秋になつて、遂に伊太利の巨匠の訪問が實現した。

第一回演奏會は十月五日であつた。前日の朝、ヴィークはクララを連れて宿舎にパガニニを訪問し、早速早く迎へられた。「私は古ぼけたピアノで弾かされた。自作の變ホ長調のポロネーズを弾くと彼は大變に氣に入つて、私には音樂の天分がある、音樂の感覺を持つてゐると父に告げ、練習の折にいつでも聴きにくる許しを興へられた」と、クララが日記に書いた如く、カムパニア生れの此の巨人は、クララが生れつき持つてゐた美に對する純粹な感覺を見出したのであつた。

その後の數日間は、クララが物心がついて以來、最も刺戟的な充實した毎日であつた。五、九、十二、十六日の四日開催された演奏會に、彼等父娘は洩れなく出席し、そのうちの二回までは、パガニニの賓客として特に舞臺上の席を興へられたり、伯林の有名な批評家レルシュターブをはじめ、獨逸各地から參集した著名な音樂評論家達に、巨匠から紹介される好機會に恵まれた。或日、パガニニを訪問して、よい樂器が置いてあるのを見出したヴィークは、パガニニの協奏曲からとつた四つの主題によるロンドを、クララとともに聯弾して巨匠を悦ばした。「パガニニは私の演奏を褒めて呉れた。落着いて弾くことと、體をあまり動かさないで弾くやうにと注意された」と、彼女の日記に残つてゐる。

パガニニの出發にあたり、九歳のクララは、四歳のパガニニの息子に、紫と青の葡萄二房を贈り、パガニニはクララの記念帳に自作の諧謔曲の四小節と共に「稀なる天才をもつクララ・ヴィーク嬢に、パガニニ」と署名して贈つた。

シューマンもパガニニの評判を聴いて、わざわざフランクフルトまで聴きに出てきて、此の古今無比の天才と親交を結んだヴィークを羨望してゐる。「パガニニの手にかかつては、無味乾燥な練習曲さへもアポロの神の神託の如く、いみじくも燃えあがる」と書いてゐる程にシューマンの受けた感動も、ヴィークに劣らず熱烈なものであつた。

さて、ヴィークはパガニニに刺戟されて、クララを此の伊太利の驚異パガニニに匹敵する、ピアノの名手に仕立てあげる野心を待つた。先づ第一歩として、彼は熟考の上の一つの計畫をたてた。彼はクララを連れてドレスデンを訪問した頃から、伯林やドレスデンより以上に音樂的に重要な都會として、當時の演奏家の檜舞臺であつた巴里をクララの爲に考へてゐたのである。巴里こそ彼の夢想の都であつた。巴里で人氣を贏ち得た藝術家は、世界を征服したことになるのだ。例へばチェルニーの弟子のフランツ・リストを見るとよい。リストの名が巴里に於て魔力の如き魅力を發揮しだすと、全歐洲が忽ち此の少年の前に脆いたのであつた。無論クララ・ヴィークの巴里入りも、無名ピアニストとしてではなく、彼女にふさはしい榮光のうちに實現されなければならない。その爲には先づ獨逸國內の主要都市で有名になる必要があり、又全獨逸の關心を深める爲には故郷のサクソニーの首都ドレスデンから始めなくてはならない。かうした遠大な計畫のもとに、クララ父娘は一八三〇年の三月ドレスデンに最初の演奏旅行に向つた。

ドレスデンに到着くと、先づ最初にヴィークがしたことは、宮中顧問官カールス氏を訪問することであつた。此の人の盡力により、間もなく父娘はサクソニーの國王に拜謁を許される運びとなり、クララは引き続き四回も御前演奏をする光榮に浴したのであつた。或時、賓客の一人から提出されたアウバーの主題にもとづいて、試みた彼女の即興演奏が、

特にルイゼ女王のお氣に召して、お褒めの御言葉を賜はったこともあつた。ドレスデンの上流社會各方面の「驚くばかりに好意ある歡迎」について、ヴィークは次の如く妻に書き送つてゐる。

「我々は期待以上の大歡迎を受けてゐます。彼等の喝采と讚美がクララに悪影響を與へないかと、案じられますが、もしもその危険が少しでも認められたら、早速出發して彼女を中流階級の生活環境の中に、連れ戻す積りです。あの娘のしづかな、つつましさを私は世界の如何なる榮譽とも、取替へたくありません。あの娘は昔のままの無邪氣な自然な可愛らしい少女ですが、時には驚く程の深い想像力と理解力を示し、我儘ではありますが高貴な敏感な性格を持つて居ます。演奏中は信じ難い程に落ち着いてゐて、聴衆の数が多し程立派に弾きます」

ヴィークは女流ピアニストといふハンディキャップなしに、あらゆる點で卓越したピアニストに娘を養成する決心をしてゐたので、魅力ある容姿や美しい微笑で、演奏の技巧的缺陷を補ふ種類の、サロンの演奏を絶対に排斥した。彼は如何なるディレクタントイズムにも、クララを毒さしめぬ用意があつた。かうした父の厳格な心遣ひのもとに成育したので、理想主義と綿密さはクララの性格の一部となり、彼女の行爲の中にしみこんでゐる。ヴィークが機會あるごとに、聲を大きくして注意してゐる如く、彼女は決して所謂「神童」ではなかつた。クララは子供らしい率直さを以つて、音樂にぶつかり、單刀直入的な感受と表現力を以つて演奏し、當時の樂壇に流行してゐた劇的な大げさな身振りや、感情的なポーズには關心を示さなかつた。音樂そのものもつ純粹な最も自然な美を、導き出す彼女の演奏は、煽情的な誇張的な技巧的なものが幅をきかしてゐた當時のサロンに於ては、稀にみる簡素な新鮮な迫力をもつてゐたので、忽ち聴く人の心を掴んだのである。

一八三〇年の十一月八日に、自ら主催する最初の公開演奏會を、ゲヴァンドハウスに開いた夜、クララは歸宅すると日記に、「父様と聴衆を満足させることが出來た。けれども私のお辭儀は、一番始めのをぬかして、あとみんな早過ぎて上出來ではなかつたさうです」と書いた。新聞にも讚辭が寄せられ、會の純益は三十ターラーであつた。

〔一ターラーは約三マルクに相當する。〕

「お骨折の御禮として父様に二十ターラー差し上げた。それ以上はおとりにならないので、これからは家の人達を時々お菓子屋さんで御馳走するつもり」と日記に記されてゐる。

降誕祭の季節にヴィーク父娘は、再びドレスデンを訪問した。

彼女の人氣と名聲は益々あがり、讚美者の數も増加したが、同時にクララが十一歳ではなくて、實は十六歳で、しかも一日に十二時間の練習を強制されてゐるといふ、事實無痕の噂が囁かれるやうになつた。

ライプチヒに歸宅すると、父の計らひで新春早々、クララは正規の音樂理論の教育を、ヴァインリッヒについて學ぶことになり、管絃樂法と對位法の勉強をはじめ、J・S・バッハの對位法作品の構造の研究がはじめられた。

〔テオドール・ヴァインリッヒ (1780—1842) はバッハで有名なライプチヒのトーマス教會附隨のトーマス學校の合唱指揮者であり、常時の音樂理論の權威であつて、ワグナーも常時彼の門に學んでゐた。〕

一方バイデルベルヒに於けるロバート・シューマンは、母の愛情と期待に對する彼の眞劍な誓ひを日々心に繰り返して、苦しい努力を續けてゐた。大學の雰圍氣はライプチヒより快く、多くの學生の中には、彼と美しい精神的な交際をするにふさはしい仲間を見出すことも出來た。然し、人生への思索、戀愛、美、これ等の一つ一つが、彼にとって法律の條文よりも興味深く思はれることを、彼はどうすることも出來ないのであつた。従つて、シャンペンが抜かれ、ビールの盃があげられて討論の花が咲くことが、机の前に坐ることより多かつた。

或時は、假裝舞踏會に美人を捜しにローゼンと共に出かけつたロバートが、用意をしてきた詩篇をめざす少女に意味あり氣にわたさうとすると、その娘の母なる人に、「生體宅の娘は詩が一向に解らないのでございますよ」と叱られて、引き退つたこともあつた。

又學期末に突然、スイスと北伊太利への旅に出かけたり、要するに此の時代のロバートの落着かぬ行動の總ては、法律と音樂の間に動搖してゐる彼の心の反映に過ぎない。

大學の講義が終るや否や、法律學者は去つて詩人と作曲家が現れる。ロバートの頭には絶えず空想が翼を擴げ幻想を追つてゐるうちに、それはやがて音樂の形をととのへる。然し組織的な訓練もなく靈感の湧くままに氣まぐれに書かれた、此の音樂の斷片が彼の一生の仕事に發展するとは未だ夢にも考へられぬことであつた。然しピアノ演奏の方は好んで友人達とのささやかな集りで弾いてゐたので、公開演奏を希望される程に評判になつた。彼は内心何時かは彼の尊敬するバッハ、シューベルト、ベートーヴェンを立派に演奏して、一舉にして何千の俗物共を葬り去りたい夢をひそかに抱いてゐるのであつた。

然しバイデルベルヒに於ける最初の數箇月間の、彼の母への手紙は「勤勉なる法科學生」に忠實にとどまつてゐた。演奏家として必要なメイクアップがお前には無いとの母の言葉につつましい彼は答へやうがない。然しその間にも彼の交友關係や興味は、彼の意志に反して自然に音樂を中心に形づくられてしまつた。彼の友人達は、彼がラテン語の勉強を嫌惡してゐることをきかなくとも、彼の性格が法廷の訴訟経過を考へるよりも、はるかに音樂にむいてゐることを見ぬいてゐた。

一年のハイデルベルヒの學生生活が終へた頃には、以後は一生の仕事として音樂に専心したい強い決心を、母に書き送る程に、ロバートの心は音樂に集中されてゐた。此の時に書かれた手紙は、實に人懐っこい可愛らしい手紙で、何んな母でも最愛の息子のかくまでの願ひを、とりあげないではゐられないやうな調子で書かれてゐる。彼の母も祕藏息子のたつての願ひを拒み難く、ロバートの音樂家としての將來性に對する率直な意見をヴィークに求めた。そして五箇條からなる有名なヴィークの返事によつて、遂にロバート・シューマンの運命に、最後の決定が與へられたのである。ヴィークの意見によれば、ロバートに必要なのは冷靜なメカニズムの征服にあるので、彼と共にみつちり學ぶかたはら、ヴァインリッヒについて正規の音樂理論を忠實にやる決心をすれば、將來は保證するといふのである。

「彼の才能と想像力により、必らずや三箇年のうちに、現存せる大ピアニストの一人に養成すべく、喜んで御子息をお引き受け申し候」といふロバートの心を歡喜に踊らせた手紙は、その後が続く何箇條かの苦い言葉にも拘らず、ロバートの心に久しく經驗しなかつた晴々としたものをもたらしたのであつた。一八三〇年八月二十一日附の尊敬する師に宛てて書かれた彼の手紙には、彼の希望に満ちた心が躍動してゐる。

どうか私が謙遜で同時に忍耐強く、信頼に値ひし柔順であることをお信じ下さい。私は凡てを先生におまかせ致します。どうか私をこのまま忍耐をもってお引き受け下さい。御叱責も私を落膽させず、又お褒めのお言葉も私を懶けさせることはありません。冷たい理論も私を傷けることなく、私もそれに決して辟易は致しません。御期待に添へるか、先生の五つの條件を熟考し、自問致しましたが、私の心も理性も「無論のことです」と早速答へました。

尊敬する先生、どうか私の手をとってお導き下さい。お出での處には何處なりともお供致します。先生が今私の心を読みとることがお出來でしたら何んなによいか。柔かに朝の微風が靜かに囁いてゐて、すべては平和に満ちてゐます、どうかお信じ下さい。私は先生の門弟と呼ばれるにふさはしい人間になります。

ああ何んといふ祝福でせう！ では心からお別れ申し上げます。三週間のうちにはお側に参りませう。そして？

最も忠實なる  
ロバート・シューマン

同時にロバートは、母にも手紙を書いた。後年、クララ・シューマンが編纂して出版したロバートの「若き日の手紙」の中に収録されてゐる此の手紙に、ロバートは、彼が盗人や無頼の徒の安訴訟の法廷の中央に立つてゐるをかしな繪を描いて、お母さんのロバートが午前七時から午後七時まで、辯護依頼人にお世辭を云つてゐる光景が、御想像お出來ですか、と書いてゐる。無論彼女は最愛の息子の切なる懇願に反對は出來ない。音樂に對す

るロバートの燃ゆるやうな熱情は、母にとつても疑問の餘地がなかつた。ロバートは勤勉なヴィーク一家の中でも、最も勤勉な人物になるために、また母を安心さす爲にも、ヴィーク家に半年の間、同居することに定められた。

「法律の道は冷たく險阻なる山である。藝術への道も険しい。然しその道には美しい花が咲き、希望と夢がある」ロバートの此の種の感傷はヴィークの合理的な主知的な本質とは、根本的に相異してゐるのであるが、ヴィークもロバートの本質の非凡なるものを、或る程度まで見ぬいて信頼してみたい。天才は制限を越えて運命の導くままに、ゆかしめねばならぬことをヴィークは心得てゐたのであらう。

一八三〇年の十月シューマンはライプチヒのヴィーク家の二間つづきの部屋に、張り切つて引越して來た。そして忽ちのうちに家中の人気者になつてしまつた。ヴィーク家での生活は、音樂上の刺戟の豊かな點に於ても、家人の誰彼の親切な友情に於ても、ロバートにとつてまたとない幸福な日々であつた。ロバートは子供好きであつたので、クララと二人の弟達の間ではひどく人気があつて、少年達は彼の友誼を尊敬した。ジャン・パウル式にはあつたが、彼は即座に妖魔や幽霊や鬼婆の物語りを創りあげて、子供等の心をいつでも捉へることが出來た。此の種の怪談には、いつも黄昏の時刻が選ばれ、彼は話の効果をあげる爲にランプを床の上に降ろして、薄暗い奇怪な影を作つたり、子供等だけを部屋に残しておいて、突然毛皮裏の外套を裏がへしに頭からすつぽりかぶつて現れたりする。かうした彼の努力は、夢中になつて息を呑んで聽いてゐる子供達の、不思議な光りに輝やいてゐる眸を見る時に、十分に償はれるのであつた。

此の時代のクララとロバートの關係は混乱してゐる。クララは十一歳の少女が常に二十歳の大人を見る如く、此の友人を眺めてゐる。彼女の感じやすい心は、彼の音樂にある稀なる説明し難い美しいものを、敏感に感受する。然し、ともすれば日課をごまかして、つまらぬ交際やビールに夢中になる彼の傾向は、意志的で、良心的で、素朴なクララの氣にいらぬ。その結果、彼等二人の間にいつもたたへられてゐる、明るいユーモラスな空氣の中で、ひやかすやうな調子で彼女のやさしい忠告がロバートに囁かれることになるのである。

一八三一年の正月、ヴィーク父娘がドレスデンから歸宅すると、ヴィーク家に集る常連達は、少々變り者の學生リヒアルト・ワグナーの噂でもちきつてゐた。彼の師のハインリッヒ・ドルンは劇場の支配人でもあつたので、ワグナーの序曲が特別演奏會で演奏されることになり、その總譜が、絃、木管、眞鍮管と三色の異つた色で書かれてゐたといふ。

〔ハイリッヒ・ドルン (1804-1892) はライプチヒの作曲家で理論家、シューマンも後に師事した。〕

作曲者ワグナーの人物同様に彼の音樂も風變りなもので、思ひがけない間隔において、太鼓が絶えず強打されるので、その度に聴衆が笑ひだすのであつた。ヴィークは青年ワグナーが彼の經營する圖書館にきて、ローヂェの「ゲネラル・バス理論」を借りていつたことを憶ひ出した。此の本は、期限が切れても途に戻らなかつた。

ヴィーク家の客間の話題は、常に音樂が中心でしかも眞面目なものであつた。シューマンの天才の發展の途上に於て、これ程理想的な好都合な環境は到底他には求むべくもない。ヴィーク家のサロンこそは音樂の世界に、將に新しく起らんとするものの温床であり中心であつた。當時の音樂界は伊太利歌劇の影響を受け、聴衆を倦きさせない爲の、一種の技巧の見世物の如きものが、歌手、演奏家に要求され、流行の歌劇も内容的にみれば、覚えやすい陳腐な旋律と、むなしい華麗さだけであつた。音樂も文學の世界に劣らず、今こそ墮落の底から立ちあがつて、改革されるべき時であつた。

シューベルトは音樂の抒情的力を、詩の高さにまで高め得たし、ベートーヴェンは彼の力強い理念の具體化に於て、巡かにゲョーテを凌いでゐる。然しシューベルトの歌の時代が去り、より偉大なるベートーヴェンが樂譜のまま閉されて、未だ顧られぬ當時に於ては、純粹音樂を守る後繼者が不在であつた。ライプチヒのゲヴァンドハウスと巴里のハベネックがベートーヴェンを定期的に演奏する唯二つの交響樂團であつた。ベートーヴェンの最後の四重奏もピアノ奏鳴曲も、素人に拒否されるのは當然として専門家にも無視され

てゐたし、大バッハもエマヌエル・バッハの父のオルガン奏者としてのみ知られてゐる状態であつた。約一世紀の昔に、二十五年の間トーマス學校の聖歌隊指揮者、大バッハの輝かしい合唱曲を、毎日曜の禮拜に聴いてきたライプチヒの市民の子孫も、當時は彼の偉大な音楽を問題にしようとしなかつた。

此處に發見し、研究し、演奏して世の冷淡なる凡俗共に示さねばならぬ音楽の寶庫がある。音楽のルネッサンスの機運は既に熟して、新浪漫主義運動と稱された時代の波は、今や堂々と波頭をもたげんとしてゐた。詩的表現、創作の自由、音楽の高貴さの復古は、此の輝かしい使命をもつて生れ出た人々の共通な旗印であつた。此の運動は全く自然發生的であつて、共通な言葉を語る音楽詩人が、世界各地に期せずして輩出したのである。

先づ最初に生れたベルリオーズは、巴里に於て顧られることもなく絶望的な孤獨のうちに所信に向つて闘ひを続けてゐた。ベルリオーズが此の世の光を浴びて僅か四年にして、新しき音楽の世界を創造する輝しきアポロの一群が、相ついで生れて來た。此の一群の人々が今や誕生後二十年を經過して、その活躍期に達し、互の存在を識ることになつたのである。彼等は互を認めるのに何の紹介も必要としない。短いフレーズ一つが彼等に共感を喚び起す熱情の試金石となり、一頁の作品が相手を瞬間にして認めさすに充分であつた。彼等とは一八〇九年に生れたメンデルスゾーン、一八一〇年生れのショパンとシューマン、翌一一年生れのリスト、二年とんで一八一三年生れのワグナーである。

メンデルスゾーンは未だライプチヒに現れない。噂の種を蒔いて歩いてゐるワグナーの中には、リスト同様にシューマン達とは性格を異にする種子が成長しつつあつたものの、浪漫主義の新しき道の開拓者として、彼等はお互を本能的に認めあひ、無敵の共同戦線を張るのであつた。ライプチヒは此の運動の最初の戦場であり、ヴィーク家のサロンはその焦點であり、ヴィーク氏は守護神であつた。ライプチヒ樂壇の革新論者は日毎に此のサロンを訪れ、又各地から同市を訪れる同志の訪客も絶えることがなかつた。

ヴィーク家ではバッハのフーガが常に演奏され、未だ試みられぬベートーヴェンの室内樂の幾頁が初めて研究され、又シューベルトが頁から頁へと丹念に試みられた。彼の大きな決心にも拘らず、不決斷と無節制と勤勉を嫌ふ傾向からぬけだし得ない矛盾を、友人達からさへ揶揄はれてゐるシューマンではあるが、彼の敏感なる感受性と獨創的な意見と叡智は、何時か彼を、此のサロンの中心人物にしてゆくのであつた。

一八三一年の夏、彼等は新しい大發見をした。モツアルトの主題による變奏曲で、ヴェルソーの若いピアニスト、フレデリック・ショパンの作である。冷たい機械的な華麗さのかはりに、もつと人間的な感情が、細やかな息づかひのうちに語られてゐる此の作品に、ピアノ音楽の新しい様式の發芽を發見した彼等は熱狂し、シューマンは早速「諸君、帽子をとり給へ、天才だ！」との有名な言葉を含む「作品二」といふ感動的な一文を音楽雜誌に發表して、此の作品と作者ショパンの名を獨逸に紹介した。作品二はヴィーク家のサロンの十八番となり、新しい客が現れる度に演奏された。クララが作品二について、

「八日間かかつて勉強したショパンの作品二は、私が今まで學んだ一番むづかしい曲です。この獨創的で靈感にあふれた作品は、多くのピアニストや教師達から、わかりにくい、演奏の困難な曲だと考へられてゐた程、未だ人に知られてゐない曲で、此の次の演奏會で私が初演する筈です」

と言つてゐるやうに、クララは、ショパンの作品を公開演奏會で最初に弾いたピアニストとしての榮譽を持つてゐる。

クララは大勢の青年達が興奮して話しつづける折には、静かな聴き手の一人に過ぎなかつたが、新しい三重奏やヴァイオリン奏鳴曲等が試演される時に、父の命令でいつもピアノの前の位置を與へられることになつた。そして遂にバッハのプレリュードやフーガやベートーヴェンの奏鳴曲を演奏する役を受持つやうになつた。マイエルベールやロッシニは忽ち青年達の間皮肉な應酬を呼び起すのであつたが、ベートーヴェンはクララが二度三度繰り返して演奏するうちに、まるで魔法をかけたやうに彼等の心を捉へるのであつた。青年達の論ずる哲學的な又美學的な言辭は、彼女には未だ理解出來なかつたが、音楽その

ものは彼女の心に、もつと直接に共感を喚び起した。瞑想的なそして突如として火の如き情熱が漲るベートーヴェンの音楽は、彼女が共感をもつて率直な表現をする時に、他の音楽には見られない説得的な迫力をもつて再現されるのであつた。

かうして、嘗てシューマンがインタープリテーションの點ではむしろ指導をしてみた少女が、新しい音楽の理解に彼を導いてゆく役目を果すやうになつた。音楽はクララとシューマンの間に九歳といふ年齢のひらきを超越して、精神的な深い理解を築きつつあつたのである。

## 第五章 クララ巴里に行く（一八三一年—一八三二年）

一八三一年の秋が近づくと、ヴィークは巴里を最終目的地として、獨逸の重要な各都市に及ぶ一大演奏旅行を計畫した。ところが八月になるとクララが麻疹にかかつたので出發を暫時延期することになり、麻疹の恢復期はクララのフランス語の勉強に利用された。間もなく、クララは全快したが運悪く此度はコレラが流行しだして、伯林が危険區域になつてしまつた。伯林が旅程から除かれたので、最初の目的地となつたワイマールにむけて、ヴィーク父娘がライプチヒを出發したのは、九月二十五日のことであつた。その頃はライプチヒさへも日に日にコレラの危険が迫つて來たので、死の妄想に常に悩まされてゐたシューマンは、誰よりもひどく怯えてゐた。

ワイマールに宿をとると、ヴィークは老ゲョーテの住居をクララに見せる爲に早速出かけていつた。獨逸最高の大詩人であり、音楽と青年の理解者だと知られてゐるゲョーテに逢ふことは、彼等がワイマールを訪れた主要な目的であつた。別に紹介状なども持つてゐなかつたので、父娘は詩人の朝の散歩の折を待つことにして、ゲョーテの家の前の並木道に待つてゐると、正面の扉がさつと開いて、出て來たのは彼等が既に幾つかの肖像畫でしつたい老詩人であつた。老齡のためにやや腰がまがり、杖をついたゲョーテは、従者一人をお供に、悠々とした歩調で父娘の横を通り、彼等の挨拶に丁寧な目禮をかへして歩み去つた。これはヴィーク父娘にとってささやかな幸運ではあつたが、呆氣なく瞬く間に過ぎてしまつた。

ヴィークは傳を求めて官内大臣のシュピーゲルや蔵相のゲナルトを訪問して援助を求めたが、彼等は音楽には全然無理解で、演奏會の爲に國立劇場を使用することさへも拒絶する冷淡さであつた。然し此の大きな失望の直後に、ヴィークは有力者でもあり音楽的教養も高いシュミットといふ樞密顧問官を見出すことが出來た。此の紳士がベートーヴェンの音楽の信奉者であつたことが、總てを解決することとなつたのである。クララはベートーヴェンを演奏し、ヴィークはベートーヴェンを語り、話は遂にポーランドの若き作曲家シヨパンにまで及び、クララが例の作品二を演奏して、此の紳士の心を捉へることが出來た。シュミット氏はクララのピアノを聴かせる爲にお客をしたり、又ワイマールの有力者達に次々と彼女の稀に見る才能を讚美して紹介し、後授してくれたので、少女ピアニストの噂はやがて大ゲョーテの耳にも傳はつて、その結果ワイマール大公國宰相の花押のあるゲョーテの招待状が届き、クララの記事に記された「十月一日正十二時に八十三歳の老宰相ゲョーテ閣下との會見」がいよいよ實現することになつた。

約束の日にヴィーク父娘が召使に案内されて客間に通ると、黒衣をまとつたゲョーテは、印象的な、姿勢で書見をしてゐたが、本を傍に置いて二人を決く迎へ、クララを長椅子の彼の席の横に並んで坐らせるのであつた。間もなくゲョーテの令息夫人が、十歳と十二歳の二人の可愛らしいゲョーテの孫になる子供を連れて席に加はり、クララは演奏を求められた。ピアノの椅子が低かつたところ、ゲョーテは自ら次の間にクッションをとりゆき、彼女の爲に手づから椅子の上のせるのであつた。クララは華麗なヘルツの作品を演奏した。演奏中に他の訪客も加はつたので、ゲョーテは彼女にもう一度繰り返して演奏することを求めた。ゲョーテはクララが、彼女自身の知性と感性に従つて演奏してゐることを指摘し、作曲家ヘルツについては、明るく氣がきいてゐて佛蘭西的だと感想を述べた。

次の週には第二回目のゲョーテ訪問が行はれた。この時は絢爛たる技巧を要求する大曲が選ばれて、クララはゲョーテから「六人の少年を集めた以上の力がある」と褒められた。その二日後に、クララの許に老詩人から贈り物が届けられた。それは詩人の肖像を浮彫にした青銅のメダルで、そへられた宮廷用の書翰箋には

「才能あるクララ・ヴィークへ  
一八三一年十月九日の記念に  
ワイマールに於て J・W・ゲョーテ」

と署名されてゐた。

ワイマール公國の官僚達の無理解さを征服する旅券にも等しいゲョーテの裏書を得て、ヴィークは非常に喜んだ。ワイマールでは、此の詩人の一言は數萬金の力を持つてゐて、町中の人々を足下にひれ伏さしめる魔力を持つてゐたのである。

例の宮内大臣も忽ち百八十度の轉向をして二人を宮中に招いたので、クララはワイマールの大公の御前でも演奏した。その結果、国立劇場も無料で提供されることになり、クララは五百人のワイマールの上流社會の人々からなる聴衆の前で演奏した。

かくして大成功のうちに二人は十月十二日に、ワイマールを出發したが、シュミット氏はその後ヴィークとの交際を用心するやうになつた。といふのは彼が、敏感にもヴィークのベートーヴェンに対する熱情が純粹なものでなく、ワイマールに於けるクララの成功の爲の政治的なものであつたことを見てとつたからである。シュミット氏夫妻は、クララの天分を十分に認めてはゐたものの、ヴィークの野心と彼のやりかたが、遂には、折角恵まれてゐるクララの才能を破滅に導くであらうといふ結論に達してゐたので、率直に此の意見を述べて、ヴィークが依頼した紹介状を與へることを、婉曲に拒絶したのである。非常に憤慨したヴィークは「彼は紹介状を押へ、私は大パガニニと大ゲョーテの自筆によるクララ禮讃の辭と共に、クララ・ヴィークを所有してゐる。神は我等を導き給ふであらう」と日記に鬱憤をはらしてゐる。

父娘の旅人はそれからエルフルト、ゴータ、アルンスタットを訪れ、或時はあまりにひどい楽器にクララが涙ぐんでしまふやうなこともあつたが、遂に當時歐洲樂壇に名を馳せてゐた有名なルイズ・シュポールが住むカッセルに到着した。

〔ルイズ・シュポールはヴァイオリンの巨匠にして作曲家、指揮者としても歐洲樂壇の有力者であつた。〕

ヴィークはエルフルトから前もつてシュポールに手紙をだしておいたので、シュポールは父娘を快く書齋に迎へた。クララが演奏する折には妻と娘をも呼び入れて熱心に聴き、彼女の技巧に感歎した。ヴィークが早速此處でもショパンの名をあげると、無論シュポールは來だ名前すら聴いたことがないといふので、例の作品二の變奏曲が再び演奏された。シュポールは熱狂して「飛びぬけて幻想的で獨創的な作品だ」と絶讃するのであつた。シュポールは、華やかな宮廷の演奏會を皮切りに、カッセル市で催された公私數回に亙るクララの音樂會の爲に、自ら先に立つてクララの爲に盡力して呉れた。

選舉侯の王宮の晚餐會に招かれた折には、シュポール自身に導かれてクララはピアノの前に現れ、彼女の演奏は人々の讚美的となつた。殊に選舉侯は非常に感歎されて、自ら歌劇場の使用許可を申し出られた程であつた。その夜は引き續いて舞踏會となり、クララは夜中の二時まで起きてゐなくてはならなかつた。カッセルからフランクフルトに行つたが、フランクフルトでは萬事都合悪く、演奏會開催の機會を待つうちにいつか降誕祭になつてしまつた。寒く、うつつうしい日のつづく降誕祭の季節を、馴れぬ不便な宿屋で過す佗しさに、ライプチヒの弟妹に圍まれた楽しい例年のクリスマスをしるので、クララの心にはホームシックの情がはじめて忍びよるのであつた。ライプチヒには決して彼女を忘れぬ友が一人あつた。ヘル・シューマンである。一八三二年の正月がくると、彼女を元氣づける楽しい手紙が、シューマンからヴィークと彼女に一通づつ、届けられた。

ヴィーク父娘のみないライブチヒは、ロバートにも淋しく、彼は寂寥をどうすることも出来なかつた。時折彼が訪れるヴィークの留守宅の音楽のない静けさは、まるで墓場のやうに思はれた。ロバートの此の頃の憂鬱にはヴィークに告白し得ない大きな原因があつた。ヴィークがシューマンの母親に與へた激勵的な手紙は、ロバートの一大決心の原動力となり、彼は師の期待に報いる爲に、師の留守の間に、獨力でも彼等の期待以上の進歩が出来ることを示すべく、朝に夕にひたむきな努力を續けてゐたのであつた。彼は一日中をピアノ練習に捧げ、ピアノに向はなは指の弱い筋肉を強化するために自ら發明した装置によつて指の訓練を續けてゐた。クララが持つてゐる粒の揃つた眞珠の如きタッチを自分の物とする爲に、彼は懸命の努力を續けたのであるが、四の指はバネ仕掛の如き力が加はるかはりに、熱心なあまりの猛訓練が禍ひしたのか、次第に衰弱して痛みを感じるやうになつた。シューマンは最初の頃は此の痛みを別に氣にもしなかつたのであるが、やがて練習に耐へられなくなつて相談した醫者の診察により、永久に四の指の筋肉を壊してしまつたことを知つたのであつた。此の不慮の災難のために、彼のひそかな野心、ピアニストとしての夢は、突如として破られてしまつた。絶望したロバートは一室に閉ぢこもり、ピアノを閉ぢて、誰にも逢はず懊惱した。然しやがて此の苦しい災厄を最早隠し終へなくなると、彼は勇氣を振り起して最愛の母にだけは事實を書き送つたのであつた。然し師に向つては遂にその勇氣がどうしても出てこなかつた。彼にはヴィークの返事は貰はない先からよく解つてゐた。彼は立腹し、憤慨し、烈しいけれど正當な非難を浴びせることであらう。何んといつてもロバートは、焦るあまり輕率であつた。もしあらかじめヴィークに相談すれば、ヴィークはその危険を豫知して、適當に忠告したに違ひない。師に内密にはじめた後めたさと悲惨な失敗は、日夜、ロバートの心を責めるのであつた。彼は、賑やかな降誕祭の宴會にも氣がすすまず、一日中家に閉ぢこもつて唯一つ残された心の慰めの作曲に耽けることを好み、やがて朝も夜もなく、作曲に心を打ちこんでしまふのであつた。

三週間かかつて書かれたヴィークへの手紙は、ライブチヒの音楽界の噂で埋められてゐる。當時彼が受けてゐたドルンの授業は永遠の焦躁であり、「ドルンとは決してうまくゆきません。彼は、遁走曲だけが音楽だと信じさせようとするのです」又ドルンはシューマンのショパンへの熱狂振りに憤慨して、ショパンの變奏曲はヘルツの影に過ぎないと、首を振つたので、シューマンがすっかり氣を悪くして、黙つて歸つてしまつたことが告げられてゐる。「何んなに先生やクララと早く御一緒になれることを切望してゐるか、到底おわかりにはなりませんまい」とも書かれ、「敬愛する先生、何卒お許し下さい。お話したいことが多く、最も重要なことを忘れてゐるかもしれない程です。もし御親切に短いお返事でもいただければ、コレラ、ポーランド人、ヘルツ信奉者、ベートーヴェン信奉者について、それから先生とクララについて長い手紙を又差し上げます」と結ばれてゐる。

封入されたクララへの手紙は

尊敬するクララ

昨日ディダスカリア誌上に「クララ・ヴィーク嬢の演奏によるヘルツの變奏曲」の記事を読んだ時、僕は微笑せずにはゐられませんでした。尊敬するフロイライン、どうか失禮はお許し下さい。何もつけない方がフロイライン等といふ敬稱以上でしたね。誰がバガニニ氏だとかゲョーテ氏などと云ひませうか。僕は貴女が、月光に氣がふれた貴女の謎々作りをどんなによく理解して下さるかよく知つて居ります。では、したいクララ、僕は度々、貴女のことを想つてをります。兄さんが妹を、又友が友を想ふやうにではなく、巡禮が遠い祭壇の上の聖畫を仰ぐやうに、想つてゐるのです。

貴女のお留守の間に、僕はお氣に入るやうなお伽噺を仕入れに、アラビアに行つてきました。人間の分身の話や六つ、百と一つの謎々、八つの面白い判じ物、その上に面白くて恐ろしい強盜の物語り、そして、あの白い幽霊！ ウォー……僕は顫へてゐるのですよ。

アルヴィンはすっかり立派な青年になりましたよ。僕のと丁度同じ青い色の上衣と、皮の帽子が大變によく似合ひます。グスターフについては別に變つたこともありませんが、驚く程脊がのびて、僕と丁度同じ高さです。クレメンスは愉快な可愛らしいはっきりした男の子で、やさしい綺麗な聲で物を云ひ、大きくなりました。アルヴィンはきつとヴァイオリンを續けるでせう。

貴女は作曲をしましたか？ 何んな曲が出来ましたか？ 僕はドルンとの勉強は三聲部の遁走曲に

なりました。その他に變口短調の奏鳴曲と胡蝶の組曲が出来ました。胡蝶の方は二週間のうちに印刷になります。

今日は上天気です。フランクフルトの林檎は如何ですか。それからショパンの變奏曲の、例の高音部のへの音は如何ですか。紙が一杯になりましたから友情をのぞいてこれで終りに致します。

常にC・W嬢の熱心な讚美者なる

R・シューマン

此の手紙にある明るい調子は、ロバートの感情が彼を裏切る瞬間の他は、常に、クララと彼女のヘル・シューマンの間に保たれてみた気分であつた。大小各地の聴衆の前でクララが演奏し、感動の渦を巻き起してゐるニュースを新聞等で讀む時、彼は誇らしい歡喜と敬愛の情にいつも満された。彼は嘗つてヴィークに書いてゐる。

「世界が非凡なものを、あまりに早く忘れることは眞實であります。私はそれを時折、電光が閃いた瞬間に驚いて空を見上げるが、直に又黙々として草を食んでゐる家畜の群と比較致します。電光とはシューベルト、パガニニ、ショパン等で、クララもやがてその一人となるでせう」

謙遜なロバートは彼自身も又その稀ひなき電光の一人であることを、此の頃は、考へもしなかつたやうである。

藝術家としてのクララの能力と理解力は、本來ならば年齢の幼さの爲に彼女は加へられなかつたに違ひないシューマンの心の中の神聖な領域、即ち彼の憧れる永遠の女性の住む國へ、彼女を加へたのであつた。シューマンの心には常に彼の守護女神たる、理想の女性の影像が彷彿としてゐた。此の理想の女性の対象は時々變つたが、彼がその女性の美と清純さを崇拜し、又彼に答へて彼の内氣な性格に絶対必要な暖い支持を與へて呉れる女性でなくてはならなかつた。これ等の女性が彼の理想を傷けた折には、彼の心は母か又好きな兄嫁のロザリーに向けられてゐたのであつた。クララの存在が、幼女期を過ぎて少女になり、成育するに従つて、ロバートが單にからかつたり可愛いがつたりする遊び相手から、一種の彼の守護女神に變つていつたのはむしろ當然のことであらう。

ヴィーク父娘の旅はフランクフルトからダルムスタットの演奏會をすまして、マインツにまですすんだ。次の目的地はいよいよ待望の巴里である。

遠くそしてごころ難攻不落の巴里！

一八三二年には未だ鐵道も出来てゐなかつたので、クララ達の馬車による冬の旅は現在の人々は想像も出来ない程に苦しいものであつた。巴里までの僅か二百五十哩の道程に四日四晩を要したのである。寒氣厳しい二月十五日、遂に未知の大都會に着いた疲れ切つた父娘の旅人は、一種の烈しい精神的戰慄を感じるものであつた。二人はヴィークの義理の兄弟にあたる藝術家のフェヒナーに懐かしい獨逸語で迎へられた。馬車はごみごみと狭く汚い當時の巴里の街をすべつてゆく。大勢の乞食、各種の行商人、露店商人、そして人々の早口で喋りあふ聲は、父と伯父の間にはさまつて坐つてゐるクララの疲れた耳に、凡てかん高いスタカットに聞こえるのであつた。

ライプチヒの市民には單なる小波の如き波紋しか描かなかつた七月革命が、その中心であつた巴里では今だに熱病の如き亢奮状態を保つてゐた。貧しい階級の人々には相變らず飢と絶望があり、富裕なる階級の人々には、享樂と浪費による絶望があつた。ヴィーク父娘の巴里入りの僅か六箇月前に、祖國を後に巴里に運命を開拓すべくやつてきたショパンは、當時の巴里について、次の如く故郷に書き送つている。

街では見すばらしい服装ながら由緒あり氣な人々に出逢ひ、又時には興奮して愚かなルイ・フィリップを呪ふ聲を耳にします。フィリップも奥方も共に髪の毛一本につながつた命です。下層階級の人々は政府を怨んでゐて、何時なりとも喜んで悲惨な生活状態に切りをつけたいところでせうが、政府も用心してゐて、市民側の一寸した集會も、忽ち騎馬巡査に解散させられてしまひます。……此處には極端な奢侈と極端な野獸性と、そして極端な偽善があります。到るところに性病藥の廣告があり、喚聲、騒音、雑沓が實に想像以上の醜惡さで展開されます。人は此の樂園に殉ずることが出来ます。誰も他人の生き方に注意を拂はないのは、誠に好都合です。冬の最中に襤褸をまとつ

て街を歩いたり、社會の最高階級の人物と交はることも出来ます。金鍍金や鏡を張りめぐらしたカフェで、三十二スーの豊かな晩餐を食べることも出来れば、翌日は小鳥にさへもささやか過ぎる料理に、三倍もよけいに拂はせられるといった次第なのです。……………

巴里は心のままです。享樂するなり退屈するなり、笑ふなり泣くなり御勝手です。貴方が何をしようと誰一人注意するわけではないのです。他にも何千人の人が自分のことばかり考へてゐて、同じやうなことをやっているのですから。

ショパンは又別の手紙で「こんなに多くのピアニストがある所はありません」と書いてゐるが、これがヴィーク父娘が希望に心を踊らせて着いた巴里の姿であつた。政治的紛擾の爲に市民の平和な生活は破壊され、窃かなる怨嗟の聲は巷に漲り、しかも一方榮華と富に満されてゐる巴里。各國の亡命者の殺到により、人口は日に日に増加し、音樂家は街に溢れてゐる。特にピアニストは充満してゐて、實力の伴はぬ者の野心と熱を冷すには好適な土地であつたが、氣まぐれな上流社會の人々は、ピアニストが眞の藝術家か手品師が、そんなことには一向無頓着であつた。流行の作品でも弾いて彼等に氣に入られれば、忽ち拾ひあげられ、一夜にしてサロンの花形になることが出来る有様であつた。ピアニスト達は、サロンからサロンへ、恰も灯を求める蛾のやうに飛びまはつてゐるのであつた。

故に巴里に到着したヴィークの最初の努力は、人に名を知られることと出来るだけ紹介状を貰ふことであつた。紹介状を利用して有力者のサロンに招かれれば、誰か一人でもクララに興味をもつて話しかけ、演奏を求めるかもしれない。そしてその機會に人々を感動さし、強い印象を残すことが出来れば、多分音樂會が出来て、それ等の有力者達や知人の間に切符がはけるかもしれない。ショパンが巴里にゐることをきいた彼は、カッセル滞在中に既に計畫をたてて、ショパン宛に彼の「作品二」に對する懇切な感想を書き送つた。ショパンは此の思ひがけない批評について、ポーランドの友人に書き送つてゐる。

「僕の變奏曲に熱狂したカッセルにゐる一獨逸人から、十頁にあまる評論を受け取りました。彼は一小節づつ丹念に分解して、普通の變奏曲ではなくして一種の幻想的描寫であると指摘してゐます。第二變奏曲ではドン・ジュアンがレポレロと駈けてゐる。第三では彼がツェリーナと抱擁してゐる左手でマゼットが怒つてゐる。アダヂオの五小節目ではドン・ジュアンがニ長調で再び彼女に接吻する。と云ふのです。そして彼の義理の弟があゝの作品をレヴュー・ミュージカル誌に送ると主張します。親切なヒルラーはその義理の弟に、賢明どころか、非常に馬鹿げたことだと云つて、やつとのことで僕を助けだして呉れました。ヒルラーは素晴らしい才能のある男です」

ヴィークが此の不器用な策略で、ショパンを辟易せしめなかつたにしても、その當時はショパン自身が、巴里の視聽を何んとかして彼一身に集めたいものと、絶望的な苦闘をしてゐた頃であるからショパンの助力は期待出来なかつた。當時の巴里は一八三一年の革命によるポーランドからの亡命者が溢れてゐて、フランス國民の、同情を集めてゐたものの、ショパンの如き天才でさへ數人の弟子によつて僅に音樂家としての體面を整へてゐるに過ぎなかつた。一八三二年の巴里に見出されるアクションの重いピアノは、ビロードのやうなタッチを持つと云はれたショパンの細い指にとつても、又未だ充分に肉體的に發達してゐないクララの小さい手にとつても、誠に弾きにくい難物であつた。

ショパンは當時ピアノ演奏の最高權威として、世界的に名聲を謳はれてゐたカルクブレンネルの門を叩いた。此の人の演奏は技巧的には完璧で、平靜さの極致とも云ふべきその演奏は、一口に云へば情熱の脈搏以外のものは凡て完備してゐる演奏であつた。彼はショパンの演奏を聴いて、喜んでホ短調のピアノ協奏曲の贈呈を受けたが、ショパンの演奏法に對しては首を振つて、三年間彼と共にみつちり勉強するなら世界的ピアニストに仕立あげると約束した。此の頃のショパンのカルクブレンネルに對する傾倒ぶりは非常なもので、彼は早速、ヴァルゾーの友人ティトゥスに僕は「カルクブレンネルのやうに弾きたいと思ふ。もしパガニニが完璧なら、カルクブレンネルは別の形で彼に匹敵する。彼の靜けさ、魅力あるタッチ、比類のない音の均等、一音ごとの巧みさは形容出来ない程です。彼は巨人です」と書いてゐる程である。ショパンには此の新しい師に對する熱狂ぶりを、盛んに

擲揄ふ同年配のピアニストの友人たちがゐた。その一人は僅か二十一歳のフランツ・リストで、リストの演奏は燃る火の如き熱情に裏うちされた華麗さがあり、その人柄は人混みの中でも、瞬間にして人々の注意を一身に集めるやうな資質をもつてゐた。ショパンに缺けてゐた種類の才能を凡て備へてゐたと云つてもよく、既に巴里の聴衆の大半を、彼の大膽な演奏によつて魅了してゐたのである。

リストの他には同年の十二月月上旬に巴里に到着し、僅か二週間を出ずして社交界の人気者となつたフェリックス・メンデルスゾーンがゐた。此の信じ難い程巧みに即興演奏をする眉目秀麗な青年は、如何なる折にも優雅な態度を失はず、その上にショパンよりも豊かな財布を持っていたので、彼の前に幸運が笑みかけたのも、別に不思議ではないのである。

此の三人の若い音楽の詩人は、丁度その頃フランスの藝術界に咲き誇つてゐた浪漫主義運動の、音楽の分野に於ける中心人物となつた。彼等三人は巴里で互に知り合ひ、忽ちお互の本質を理解して、終世變らぬ友情を結んだのである。

或日、此の仲間はピアニストのフェルディナンド・ヒルラーを加へて、珈琲店のテラスに陣どつて彼等がショピネットの愛稱で呼んでゐたショパンが、カルクブレンネルの門下に本氣で加はる決心であるのをひやかしてゐた。中でもメンデルスゾーンはカルクブレンネルの自惚の強いことを眞面目に憤慨してゐた。ショパンの音楽の中にこそ、新しいピアノ演奏法の卓越せる様式があるのではないか。創作的才能のない男との指の練習などは是非やめさせたい、勿體ないと親切なメンデルスゾーンは本氣で思つてゐるのであつた。ふと彼等が大通りを見ると、噂の主の當のカルクブレンネルがいつもの氣取つた歩調で近づいてくる。青年藝術家達の心は、期せずしてその瞬間陽氣な衝動にかられた。後年ヒルラーはメンデルスゾーンの追憶記の中に、此の事件について詳しく物語つてゐる。

「突然我々はカルクブレンネルがやつて來るのを見た。いつも一分の隙もない紳士と見られたいのが、彼の野心ではあるし、悪戯者に出逢ふのを嫌惡してゐるのを知つてゐる我々は、早速馴れ馴れしく彼を取り圍んで、彼がすっかり氣をくさらせる程に、大聲で騒ぎだてた。實に愉快であつた。若者は同情がないものである」

もし此の事件について、後に彼等が後悔したとすれば、それはカルクブレンネルの後援で開催の運びとなつてゐた音樂會の不利を考へてのことであらう。二度も延期された後に一八三二年の二月二十六日、遂にショパンの演奏會がプレイエルの會堂で、大勢の音樂家の贊助出演を得て催された。當夜の聴衆の中には二週間前に巴里に着いたばかりのフリードリツヒ・ヴィークが、娘のクララと共に、彼等が演奏し、讚美してゐた「作品二」が、作曲者自身によつて演奏されるのを楽しみに、大きな期待に胸を轟かせて坐つてゐるのであつた。

曲目中のカルクブレンネルの作曲になる六臺のピアノによるポロネーズでは、小さい樂器を與へられてゐた故もあるが、ショパンの音は他の五人の音に消されてしまつた。然し獨奏では、彼の独自の天才を立派に證明することが出來た。訪衆の中にゐたリストも、メンデルスゾーンがカルクブレンネルをちらりといたづららしく眺めながら、わざと盛んに拍手しだすと、負けずに手を叩いた。

ヴィークはショパンのホ短調のピアノ協奏曲を聽いて、非常な興味を感じたらしいが、ショパンの全く獨創的な新しい演奏法を、充分には理解出來なかつたらしい。彼はベートーヴェンの演奏家としてメンデルスゾーンを讚美し、カルクブレンネルについては「私の理想に近い」とまで感嘆してゐる。幼いクララは此の絢爛たるピアニストの一群に當惑し、彼女が長い間懸命な氣持で演奏してきた作品の上に印刷されてゐた名前が、戲談を云つたり、微笑したり、陽氣に騒いだりする青年達の名であるのに、目を見張るのであつた。

或時クララが藝術家達の控室で見た、メンデルスゾーンとショパンとヒルラーの三人の若者が樂し氣に取つ組みあつて騒いでゐる愉快的な光景が、いつまでもクララの記憶に残つてゐた。

當時の巴里の夜會は午後十時頃から始まつて、午前二時頃まで續けられる習慣であつたので、未だ十二歳の少女に過ぎないクララにとつては、毎夜のやうに夜會に出ることは退

屈でもあり、相當に重荷であつた。然し遂に長い間待つてゐた甲斐があつて、カルクブレンネルに聽いて貰ふ機會が與へられた。クララが自作品を弾くと、「素晴らしい才能がある」と褒めて、彼は彼女に接吻をして呉れた。煖爐の傍に坐つて、巴里最新流行の扇を弄んでゐた美しいカルクブレンネル夫人は「折角の才能が獨逸で埋れてしまふのは惜しいことね」と云つた。「そんなことはありません。私がさせません」とヴィークが抗議すると、カルクブレンネルは、誇らかに

「然し、獨逸では、皆同じスタイルで弾くではありませんか。例の維也納派のフンメルやチェルニー式の演奏ですよ。獨逸から來る人は皆同じだ」

然しヴィークも負けてゐなかつた。彼は冷静に、

「では、どうか私を最初の例外とお考へ下さい。私はあの奏法の反對者なのです。私はフィールドの奏法で娘や生徒を教育してゐます」

ヴィークは此の論争について、留守を守つてゐる若い妻に詳しく書き送り、「誰が正しいか、時が彼に教へるに違ひない」と結んでゐる。

クララの演奏會を計畫してゐたヴィークは、その頃巴里樂壇の大御所的存在であつたマイエルベールに逢ふことが出來た。幼いクララはマイエルベールの邸宅の壯麗さに先づ驚き、彼の洗煉された優雅な態度に壓倒されてしまつた。然しヴィーク父娘が得ることが出來たのは、彼のオペラへのパスだけであつた。

丁度その頃巴里に來あはせた舊知のパガニニは親切にも、クララの演奏會に賛助出演を早速快諾して呉れたのであるが、パガニニの突然の病氣によつて、此の幸福もむなしい夢となつてしまつた。遂に演奏會は四月九日といふことに決定して、招待状まで發送されたが、運悪く、その年に大流行を極め、彼等が伯林を避けた原因であつたコレラが、巴里にまでいよいよ來襲したので、クララの聽衆となるべき富裕な上流社會の人々は我を争つて巴里を逃げたし、田舎の別荘へと避難を始めた。凡ての事情はコレラの爲に一變した。ヴィーク父娘も、演奏會後は早々に巴里を引きあげることになつた。

此の困難な折に、彼等にとつて、思ひがけない救ひの女神が現れた、ウィルヘルミネ・シュレーダー・デヴリアン夫人が、賛助出演を自らすすんで申し出て呉れたのである。先にベートーヴェンに、後にワグナーに靈感を與へたこの獨逸の大聲樂家は、當時巴里の歌劇場でマリブランと共に滿都の人氣を競つてゐた。デヴリアンは後輩に對して誠に寛大な人で、才能のある無名な音樂家を見出すと、力の限りの助力をいつも惜しまなかつた。

クララの演奏會は種々の事情から、最初豫定されたよりも小さな一音樂學校の講堂で行はれた。彼女はベストをつくして、巴里の習慣に従つて、生れて始めて全曲を暗譜で演奏し、又始めて公開の席で即興演奏を試みた。然し世間がコレラ騒ぎで落着かなかつたので、幼いクララの必死の努力にも拘らず、巴里人の心に小波一つ立てることは出來なかつた。

その數日後の四月十三日、ヴィーク父娘は故郷にむかつて祕かに巴里を出發した。如何なる幸運がたとへ待つてゐようとも、コレラ蔓延の徴候が認められる以上、長居は無益であつた。彼等は故郷を出てから巴里への旅に五箇月を費し、巴里に二箇月も滞在してゐたのである。七箇月の長い旅、居心地の悪い宿屋で重ねた幾夜、馬車の旅、就寝時間も過ぎた夜更けに華やかな客間で懐しく故郷を想つてゐた幾夜、その上に弾きにくい硬いピアノ、十二歳のクララにとつて思へば辛い七箇月であつた。

一八三二年の五月一日の午前十一時頃に、新緑に包まれた懐しいライプチヒの街の姿が、彼等の馬車の行く手に姿を現した。やがて馬車は久しぶりで我家の前に止まり、クララは懐しい石造りの我家をしみじみ見るために、ボンネットを投げたのであつた。暖い春の陽は豊に靜に彼女の上に輝き、外國での長い夢から今日覺めたやうな安心に似た感じを與へるのであつた。失望と困苦は消え失せて、忽ちクララはしたい家の者に取り圍まれながら、目を輝かしておみやげ話をしてゐる自分を見出したのである。

十二歳の少女にとつて、自國語で自由に語り得る我家程に楽しいところはない。ヴィークの日記には「歸宅すると間もなく、クララは臺所でナイフを磨いてゐた」と記されてゐる。が、此の光景はまるで懐しいお伽噺の一節のやうではないか。硝子の馬車と黄金の衣

裳は消え失せて、シンデレラはちろちろ燃える爐邊に坐つて、過去と未來の夢を見てゐる。さて、王子様はどうしたのであらうか。

## 第六章 芽生え（一八三二年—一八三三年）

久しぶりに我家に歸りついたクララ父娘が、家族の者と抱擁もしないうちに、弟のアルヴィンとグスターフは、早くも大好きなヘル・シューマンを迎へに、駈け出してゆくのであつた。ヴィーク父娘不在中の寂寥と指を痛めて絶望に沈んだ自らの心を慰める爲に、シューマンが専心作曲してゐた「胡蝶」は此の時既に完成してゐたが、此の作品は彼の作曲の師ハインリッヒ・ドルンとの勉強の結果生れた作品ではなかつた。ドルンとの勉強は常に意見の衝突の爲に中絶しがちで、その度ごとにシューマンからの和解の手紙で辛うじて續けられてゐた有様であつた。七月五日附の手紙でシューマンはドルンに「氷風呂の如く寒い土地に、先生は伊太利の青空を押し擴げようと仰しやるのですか。私は考へるだけでもぞつとして震へあがります」と書いてゐる程で、もう一人の弟子ワグナーと共にシューマンも、保守的なドルンにとつて、よほど扱ひにくい弟子であつたに違ひない。シューマンはドルンに學んでゐた此の期間に、青年らしい彼の野心、例へば「ハムレット」の歌劇化や交響曲の作曲等の大望を、抑制することを學んだ。そしてハイデルベルヒで書き始めた頃には、斷片に過ぎなかつたピアノの爲の組曲の推敲に熱中し、彼の言葉によれば、恰も蠶（かいこ）が繭を作り、それから翅が生えた蝶が生れてくるやうに完成したのである。

「胡蝶」（作品二）はシューマンの創作力が獨創的な色彩の翼を、豊に擴げた最初の作品であつて、彼はヴィーク父娘に此の作品を聴かせる日を、楽しみに待つてゐたのであつた。

巴里の樂壇のゴシップ、ショパンやメンデルスゾーンやマイエルベールの話など、ヴィーク父娘の澤山のみやげ話は何時時間も續けられた。彼等の話を喜んで興味深く聴きながら、シューマンは「胡蝶」をクララに弾いて貰ふのには、もつと適當な折を待たなくてはなるまいと考へるのであつた。その夜下宿に戻ると彼は「ライプチヒ生活の記録」と名づけてゐた日記をとりだして、感想を書きつけた。

五月三日……過勞による放心の結果かもしれぬが、あらゆる點でヴィークは以前より弱つてゐる如く思はれる。彼の自尊心と短氣と常にまばたいてゐる目だけが、前と同じである。クララは美しく、丈夫さうになり、背がのびて落着いてきた。そして獨逸語を佛蘭西風のアクセントで話すやうになつたが、これは早速、又もとに戻るであらう。彼女は新しい自作のカプリスを弾いたが、まるで騎兵の行進のやうに聴えた。（巴里で重いピアノを弾き馴らさればならなかつた爲に、彼女のタッチが變化した結果による印象と思はれる）彼女の子供らしい獨自性はあらゆるものに現れて、「胡蝶」では第三番を一番好んでゐる、

四日……ブランドで友人仲間の集りがあつた。ヴィークは非常に丁寧で、クララは素朴である。我々は夜更けて歸宅した。クララと僕は互に腕をくんで、……彼女は騎兵のやうに弾く。

七日……クララや子供達とサーカスにいつた。豹は何んと優美で、自然で、敏捷なのでもらう。僕等も學びたいものだ。お馬鹿さんにもクララは怖はがつた。

九日……家でインテルメツオを弾いたり、書いたりした。クララに贈呈するつもりである。

十六日……クララはフィールドの協奏曲を神の如く弾く。然し「胡蝶」は自信なげに冷淡に弾く。

二十三日……クララは「胡蝶」の精神を掴んだ。表現は來だ充分に洗煉されてゐないが、情感が溢れ、健康な感傷がある。

二十五日……クララがバッハの第二遁走曲を聴かして呉れた。透明に、はつきりと色彩豊に、生命ある色彩感加へられた遁走曲は、最早技巧ではなくて藝術品である。父親は彼女の虚榮心についてつぶやいてゐる。幾分かの眞理はある。夜は彼等やロザリーとワッサーシェンケ（料理店）に夕食に出かけた。我々は愉快地談笑した。クララは鴨が鶯鳥だか鴨だか解らないので、一同大笑ひをした。

〔ロザリーはシューマンの兄カールの妻で、ロバートは此の兄嫁を特に愛慕してゐた。〕

二十六日……クララが「胡蝶」を弾いた。曲を正しく把握して活気を以つて演奏した。ヴィークは曲の解説を試みて「ハレキン」を指摘し、「マスク」の深い意蘊を説明した。そしてロザリーに向つて、「奥さん、クララは貴方のロバートのよい代理役でせう」と云つた。

二十七日……クララが弾くいている時に天使(カールス夫人)が入つて來た。それからロザリーも。クララが今日の如く弾いたことを、かつて聴いたことがない。凡ては素晴らしく美しい。「胡蝶」も昨日以上の出來てあつた。

二十八日……ヴィークのサロンで夜會があつた。來客達は「胡蝶」を正しく理解出來なかつたやうである。お互に顔を見合せて、あの音色の急速な變化に追ひついてゆけぬらしい。それにクララも日曜のやうによくは弾かなかつた。心身ともに疲勞してゐるらしい。十一時近くになつて彼女は再び「胡蝶」を弾いた。始めの時より亂暴に弾いたが、活々としてゐた。クララは非常に可愛らしく元氣だつた

シューマンは、今は幼女期から少女期に移り、心身ともに成長し、自信に満ちてゐるクララを見て、彼女の父に對する盲目的な服従心を、少しづつ捨て去ることを望むのであつた。世界を相手に新しい道を切り開いてゆく者は、自ら語ることを學ぶ必要がある。此の頃の彼女の態度の中には、厭制的な父への反抗心は見えなかつたものの、穏やかな繼母に對して、突然外目には何の理由もない癩癩を起すことが時折あつた。ロバートが此の頃の日記に

「六月一日……クララは近頃、彼女の繼母(あの人は最も尊敬すべき人だ)にむかつて、我意を通すことがある。老人はクララを叱つた。然し今に彼も亦、彼女の意のままになるであらう。既に彼女はレオノーレの如く命令する。しかも同時に幼兒のやうに甘えたり、おねだりをするので出来るのである」

「六月四日……クララは、我儘を云つて泣いてゐた。年長者が眞面目に述べる非難の數言は、きつと彼女の出來心によい効果を與へるであらう。彼女の氣まぐれな虚榮心をうまく刺戟して、藝術家にとつて最も必要な自尊心にまで、成熟させればよいと思はれる」と記してゐるやうに、丁度年の變り目にあつた此の頃のクララは、シューマンが名づけてゐる如く、ベートーヴェンの歌劇の女主人公レオノーレそのままに自信に満ちてゐたらしい。

ロバートが日記で、しばしば騎兵といふ言葉で表現した如く、巴里から歸つたクララの演奏は、彼女が、征服しなければならなかつたアクションの重いピアノに影響されて、精力的な筋肉的な正確さが加はつてゐた。七月九日と三十一日に、ゲヴァンドハウスで演奏會を開いたが、此の折には巴里で學んで來た習慣に従つて、始めて曲目全部を暗譜で演奏をした。暗譜による演奏は、當時の獨逸では未だ一般に行はれてゐなかつたので、一際深い印象をライブチヒの聴衆に與へたのであつた。

クララは、一八三三年には、ゲヴァンドハウスの定期演奏會に二回出演した。ゲヴァンドハウスの經營が當時は缺損續きであつたので、クララに對しても以前の報酬の二分の一の金額で契約したいと申し出たのに對して、ヴィークは「娘が參加した演奏會は常に滿員の盛況であつたから、彼女には缺損の責任がない。慈善を目的とする演奏會の爲ならば、何時でも喜んで無報酬で出演するが、興行である以上割引は承知出來ない」と、斷乎として拒絶したのであつた。

ヴィーク家で催される音樂の集りの興味の中心が、クララであつたことは、當然である。彼女はショパンの近作のマズルカやノクチューンを、シューマンの作品二の「胡蝶」やパガニニの主題による練習曲等を、自作のカプリスと共に人々に紹介した。此の頃になるとクララは聲樂の教授も父から受けるやうになり、巴里旅行中休んでゐた作曲や對位法も、ヴァインリッヒやドルンの許で再び始められた。當時の作品である彼女のカプリスやポロネーズは、和聲學的にも正確で趣味よくまとまつてをり、彼女の演奏會の曲目として大いに役立つのである。

ロバートは悲しくも永遠に害はれた右手の四の指を、たうとう師に見せねばならなかつた。指は全く絶望といふ程ではなかつたが、個人的集りで弾ける程度で、演奏會ピアニストとしては全く望みがなかつた。彼は此の災厄にあつても絶望はしなかつたらしい。神學をやらうかなどと、母にその頃書いたりしてゐるが、事實は此の事件を境として、音樂の創作的方面への彼の熱情と關心は益々たかまつてゆくのであつた。演奏を必要とする時

は、常に代りに弾いて呉れる人が彼の傍にゐたのである。クララが彼の作品や他の作品を演奏するのを、常に味ひ楽しむことが出来た彼は、彼女のしなやかな指が巧みに易々とそれ等の音楽の魅力を織りなしてゆく時、彼自身のピアノへの努力は無駄なものに思へるのであつた。

ドルンに學ぶのをやめた、といふより斷られてから、シューマンは書齋に引つこんで、バッハの平均律ピアノ曲集の研究に没頭した。「僕は愛するバッハの平均律ピアノ曲集の遁走曲を詳細に分析してゐる。此の勉強の効果は素晴らしい。人間の心を理論的に強壯にする。バッハは徹底的に人間そのものだからだ。彼には不足するものも、病的なものも、少しもない。凡ては永遠性の爲に書かれたやうである」とシューマンはその頃友人に書き送つてゐる。

シューマンもワグナーと共に音楽理論の法則を法則として認めることが出来なかつた。生命ある有機的な現れ方をしない限り、様式は彼等にとって何の意味も持たない。彼は古今の傑作を深く研究することによつて、教育と靈感を同時に自ら得たのであつた。バッハの靈感とドルンへの反抗に育まれて完成した「胡蝶」は、その時代に挑戦的な點に於て世に多く論ぜられ書かれたショパンの「作品二」に匹敵する。そして形式、構成、發展、凡ての點で理論家ドルンを啞然とさすに充分であつた。若い夢想家は空想の翼を誰はばかることなく、軽やかに擴げてゐるのだ。恰もジャン・パウルの「未青年」の謝肉祭に、踊り狂ふ男女の假装の人々の間を飛び廻る胡蝶のやうに。此の捉へ難い情調の繪畫は、分析好きな理論家達を呆然とさせながら、シューマンは獨創的な作品を以つて、美しく不思議な新しいピアノの詩を描いたのである。クララが、如何に此の新しい音楽美の精神を次第に把握し、表現したかは、前述のシューマンの日記を讀めば、十分に首肯出来る。

此の年の九月三十日の、ゲヴァンドハウス定期演奏會後にシューマンは、雑誌「慧星」に「アンナ・ヴェルヴィーユとクララ」と題する一文を寄稿してゐるが、其他種々の機會に彼はしばしばクララについて書いてゐる。

「二人を比較することは出来ない。各自異なる流派を汲む名人である。ヴェルヴィーユの演奏は技巧的に美しい。然しクララの演奏はより情調的である。ヴェルヴィーユの音は、快くはあるが耳までしか達しない。然し、クララの音は聴く者の心にまで滲透する。彼は女流詩人であり、是は詩そのものである」

「眞珠は水面を泳いでゐない。危険を冒して海底深く捜さねばならない。クララは一人の海女である。フロレスタン」

「彼女（クララ）は幼少にしてイシスの女神の面纱をあげた。この幼女は靜かに見あげてゐる。……大人たちは其の光輝に盲になるかもしれぬ。ユーセビュース」

「クララ・ヴィークは獨逸最高の女流藝術家である。フロレスタン」

[アンナ・ヴェルヴィーユ（1808—1888）はチェルニーの門下で當時女流ピアニストとして歐洲の樂壇に謳はれてゐた。]

以上のやうにシューマンが讚へてゐる如く、此の頃のクララの演奏は大きな飛躍をとげた。演奏ばかりでなく、満十三歳になると共にクララの少女らしい美しさに魅力がいよいよ加はり、青年シューマンの彼女に對する態度にも、やさしいガラントリーが加へられてきたやうである。

一八三三年の八月に、シューマンが「クララ・ヴィークの主題による變奏曲」を書いたお禮に、クララは自作の「ロマンス」をロバートに捧げた。ロバートは非常に感激して、すぐさま彼女に禮状を書いた。

「心からの御禮を云ふより、僕からは何にも差しあげるものはありません。もし貴女が此處にいらしたら、貴女と握手をして（たとへお父様のお許しがなくても）表紙に二人の名前が共に記されたことが、將來二人の意見と理想が一致することの豫言でありたいと願ふ希望について、少しばかりお話したかつたのです」

ロバートの此の暗示的な言葉も十三歳のクララにとつては、未だ朦朧としか映らなかつ

たのであらうが、一種不思議な印象を残したとみえて、彼女は此の手紙を大切に保存して  
みたのである。一八三三年の六月、シューマンは母への手紙に

「クララは以前のやうに、大變僕になつてゐます。未だ子供のやうに奔放で、氣まぐ  
れに急に駈けだしたり、飛びはねたり、遊んだり致しますが、思ひがけない時に素晴しく  
深い思慮と叡智をもつて語ります。彼女の心と胸に満ち溢れるものが、表出されるのを見  
守ることは、僕に大きな喜びを與へます。

先日コネウッツから歸りに（我々は毎日、二三時間と一緒に散歩をします）、僕は、彼  
女が「何んで私は幸福なのかしら」と、繰り返へし繰り返へし、ひとりて自分に云つてゐ  
るのを、聴いてしまひました。この彼女の言葉を聴きたくない者があるでせうか？ 道に  
は邪魔な石塊が澤山に散らばつてゐます。僕は歩く時に下を見ず、上ばかり見てゐますの  
で、クララは後からついてきて、石がある度に轉ばぬやうに、僕の上衣をやさしく引つば  
つてくれます。そして僕の爲に心配しながら、彼女自身は時々つまづいてゐるのです」

シューマンの故郷のツヴィカウを含むサクソニー各地の演奏旅行に、クララ父娘が出か  
けたのは、此の手紙が書かれた年の前年、一八三二年のことであつた、ロバート・シュー  
マンの名前がクララの名と並んで音樂會のプログラムにのせられたのは、此のツヴィカウ  
での音樂會が最初であつたが、曲目の第二部で演奏された彼の交響曲の一部は、クララの  
驚異的な演奏振りに、熱狂した故郷の人々の前に、淡い印象さへ残すことが出来なかつた。

此の旅行の前に、ロバートはヴィーク父娘のツヴィカウ訪問を報らせて「クララはお考  
へになる材料を澤山母上に提供するでせう」と母に書いたが、事實、當時僅に十三歳に過  
ぎなかつたクララが、シューマンの母の多くのもの想ひの原因となつた。クララの父のヴ  
ィークでさへも未だ氣づかぬ若い二人の友情の向ふ方向を、シューマンの母は、その女ら  
しい鋭い直観で早くも感知したのであつた。

そして或日、素晴らしいことが起つた。シューマンの母がクララと共に窓ぎはに立つて  
話してゐる時に、丁度窓の下を通りかかったロバートが、上を見上げてニコリと二人に  
會釋して行き過ぎたことがあつた。此の時シューマンの母は不思議な感情に駆られて、傍  
にゐた少女の體を我胸に暖くひきよせて「いつかロバートと結婚して下さいね」と靜かに  
囁いたのであつた。此の言葉はその頃のクララにとっては、單なる言葉に過ぎなかつたが、  
それでも此の出来事は幼い彼女の心に、終生忘れ難い深い印象を残して、長い年月を経た  
後になつても、彼女はその時の感動を、ありありと憶ひ出すことが出来た。

ロバートの母は愛する息子の將來に大きな不安を常に感じてゐた。彼は風變りな氣質で  
あつたばかりでなく、危険なまでに感じ易かつたからである。そして常に母の愛情と指導  
を切實に求めてゐたので、將來彼女に代つて呉れる、深い理解と愛情に富んだ婦人がなけ  
れば、大成は困難であることを彼女は誰よりもよく知つてゐたのである。そして彼女は母  
親らしい直観力をもつて、未だ無心のクララの中に、深い愛情と強い意志と聰明さと調和  
をもつた女性、將來のクララの頼もしい姿を豫感してゐたのであらう。

旅行からライプチヒに歸つたクララは、猩紅熱（しょうこうねつ）にかかり、一八三三  
年の正月まで、充分に恢復しなかつた。恢復期の徒然に、彼女はお裁縫をならひ覺えてそ  
れが大きな楽しみとなつた。クララは病床から故郷にゐるシューマンにライプチヒのニュ  
ースを書き送つてゐる。

一八三二年十二月十七日 ライプチヒ

お懐しいシューマンさん

「たうとう手紙がきた。いつも約束を思ひ出しもしない人だ！」と、貴方が仰しやるのがちやん  
と聞えます。でも忘れたのではないの。どうか、先づ此の手紙御覽になつて、そして何故直におた  
よりしなかつたか、おきき下さいな。

家に歸つて數日後、モリッケ〔當時有名だった提琴家〕の音樂會で弾くことになつてゐた丁度そ  
の日に、私は猩紅熱にかかつて、二三日前まで退屈な寢床にゐなくてはならなかつたのです。でも  
輕かつたので、もうよくなり一日に數時間は起きてゐるお許しが出たので、又ピアノを弾いてゐま  
す。ゲヴァンドハウスで弾くことは出来ませんでした。モリッケとは一緒に弾いたのですけれど、

傳染るのを怖れて、それ以來彼は現れません。でもシューマンさんはどうぞ是非いらして下さいね。お正月にはもうすつかりよくなつて、一月八日には、ゲヴァンドハウスで弾きますから。

ああ、何んとお知らせすることが澤山にあるのかしら、でも今はやめます。さうでないといつヴィカウに根が生えておしまひになりさうだから。ライプチヒを想ひ出して下さるやうに、ほんの一寸だけ羨しがらせに申し上げるだけにします。まあ聽いて頂戴！ ヘル・ワグナーが貴方を追ひ越しましたのよ。交響曲が演奏されましたの。それがベートーヴェンのイ長調に、まるで二つの豆のやうにそつくりなのですつて。お父様はシュナイダーの交響曲は、ウエルツェンまでゆくのに、馭者が馬にいくら怒鳴つても、二日がかりでのろのろとゆく馬車だが、ワグナーの方は、青くなつたり黒くなつたり、石につまづいたり道を踏みはずして溝に落ち込んだりしながらも、何んとか一日でウエルツェンまで漕ぎつける馬車だと、云つて居ります。

手紙の此の部分は、お父様も手傳つて下さいましたの。

シューマンは此の手紙に非常に心をひかれて「クララの手紙中の交響曲の比喻は、人々を特に喜ばせました。無邪氣な『お父様も手傳つて下さいましたの』は、まるで、クララ自身が私の耳許で、何か囁いてあるやうに感じました」と返事に書いてある。報告が終るとクララはシューマンの字が讀みにくいことや、時々彼がぼんやりとしてゐることを揶揄つてゐる。

馬車の中にシャツを忘れるなんて、何んといふお利口さんでせう。馭者が返して呉れましたか？ 私は降誕祭を大變に楽しみに待つてをります。貴方のためのお菓子も、召しあがるのを待つていますが、但しまだ焼けてをりません。

早くお目にかかる日を待ちつつ。では今日はこれでやめます。いつまでも貴方の友の  
クララ・ヴィーク

幸福であつたヴィーク家にも、一八三三年の二月には悲しい運命が訪れた。クララの末弟で殊に彼女が大好きだつたクレメンスが、僅か四時間程の患ひで死んでしまつたのである。ヴィークは家族一同の悲しい氣持に變化を與へる爲に、ドレスデン訪問を思ひ立ち、その機會にクララは演奏會を開き、アルヴィン、グスターフの二人は同地の學校に入學した。

此の頃クララには新しい友達が出來た。獨逸政治經濟學の樹立者であるフリードリッヒ・リストの娘エミリーである。エミリーはクララより一年年上であつたが、長らく米國で育ち、年若くして各地を旅行し、見聞が廣く、普通の娘達と違つた教育を受けた點でもクララと共通なものがあつた。趣味の廣い落ち着いた性格の少女であつたので、ヴィークもクララと彼女の交友を喜んでゐたやうである。クララはエミリーを非常に愛して、此の少女時代に始まる交友は、一生の間美しく續いたのであつた。然し何んと云つても、クララの興味を中心は、ロバート・シューマンであつた。

母の許で冬を過したロバートは、一八三三年の四月になると、ライプチヒに歸つてきて、街の騒音から離れた靜かなリーデルス園に、居を定めた。それは小さい二間つづきの居心地のよい部屋で、日光も十分に楽しむことが出來たし、窓からは、新緑の野や森が豊に眺められた。ロバートは、此處の美しい自然に恵まれた、靜かな環境の中で、思ひつきり幻想を楽しみながら、時々、街の人々、殊にクララに手紙を書いた。此の時代に交はされた二人の手紙は、二十三歳の若者と十四歳の少女の間に育まれてゐた友情の發展を暗示するよい記念であらう。五月二十二日に、ロバートはクララに書いた。

懐しいクララ

お早う。リーアルス園の朝が何んなに素晴らしいか、僕の部屋の窓にくる鷺まで、あらゆるものが何んなに囀り、唄ひ、喜んでゐるか、散文的な町では到底想像もつかないでせう。近いうちにコネウィッツにいらつしやいませんか。何時頃がよろしいか？ わざわざ馬車に乗らねばゆけない人は何んと氣の毒なのでせう。

此のやうな朝には、僕の心は美しい想ひで一杯に滿されます。例へば此の暖い快い日が、六月と七月中ずつと續くこと、僕が蝶々で、世界中が僕の爲の花園であるとか（これは少し夢物語すぎま

すね)、此の部屋に輝いてゐる日光がシュネーベルグのベッカーさんの家に射しこんでゐるのと同じであること、陽光がまるで音と戯れてゐるやうに、ピアノの上に輝いてゐる時に、いつも嬉しくなることなど、それは光りが音になつて聽えるのです。實を云へば僕にも、何故だかその一つだつて理由は解らないのですが、貴女は共鳴して下さいませんか。

ロバート・シューマン

風邪でやすんでゐた七月十三日附のロバートの手紙には、空想的な不思議な提案が書かれてゐる。

懐しい親切なクララ

僕は貴女が生きておいでだか、何んな風に過しでおいでだか知りたい。お医者さんに何にも戀ひしがってはいけなと固く禁じられました。殊に貴女を……疲れるからです。でも今日はお医者さんが書くのをとめようとしたので、包帯を全部とつて、目の前で笑つてやり、好きなやうにさせて呉れなければ、病気を傳染してやるとおどかしてやりました。

お話したかつたのは、こんなことではなくて、實は願ひなのです。私達二人をお互ひにつなぎ、又憶ひ出させる電力のやうなものも今はありませんから、僕が一つよい工夫をしたのです。

僕は明日十一時が鳴ると一緒に、ショパンの變奏曲の中のアダジオを憚きながら、強く貴女を想ひ、貴女に心を集中します。願ひといふのは我々の靈魂が逢へるやうに、貴女にも同じことがしてほしいことなのです。我々の分身が出逢ふ場所は、きつとトーマス教會の小門のあたりでせう。もし満月が現れたら我々の望みが叶つたと認めることにしませう。御返事を切に待つてゐます。もし貴女が守つて下さらねば、明日十二時に一本の糸が切れるでせう。それは僕です。心の底から申し上げます。

ロバート・シューマン

おなつかしいシューマン様

お母様に助けていただいて、やつと御手紙が讀めました。そして早速お返事致します。お熱でお苦しみで本當にお氣の毒ですし、麥酒をお医者様にお禁じになられては、さぞ禁酒をお守りになるのは大變でせう。私が生きてゐるかとお尋ねですが、もうそれはお解りでせうし、何んな風に暮してゐるかは御想像がつかませう。貴方がちつともいらして下さいさなくて、楽しい筈がございません。

願ひは承知致しました。明日の十一時には私もトーマス教會の小門の前に参ります。悲しいことに、することが澤山にあつて、長い手紙が書けません。どうか又御手紙を下さいね。心から早くよくおなりのやうにお祈りしてをります。

クララ・ヴィーク

このやうに音楽を中心として、ロバートとクララの間には美しい友情が益々豊に育まれてゐた。然しシューマンと腕をくんで、無邪氣に快活に歩いてゆく少女は、いつまでも少女でとどまつてゐることは出来ない。彼等の清純な子供らしい友情の中に、何が芽生えつつあるかは、抜目のないヴィークさへも、未だ夢にも思ひ及ばない。然しシューマンの母が既に一年前に感じたやうに、春は直ぐ近くまで、最早ひそかに近づいてきてゐるのであつた。

## 第七章 霜降る日 (一八三四年—一八三五年)

十三歳のクララを巴里で見ると興味を抱いた人の中に、詩人のハインリッヒ・ハイネがゐる。

「クララを始めて見たものは、父や周圍の者達に對しても、極めて自然で温順な十三歳の少女に過ぎないと思ふであらう。然しより深く觀察すると、何か非常に特異なものを識別し得るのである。不思議な程にひたむきに相手を凝視めてくるまなざしをもつた、美しく愛らしい顔と、情感をたたへたその快い口許、それは殊に彼女が何か答へる折など、或時は蔑む如く又物思ふ如くなる口である。優雅さと奔放さのまじつた動作、年齢の割りに豊に發達した教養、それ等のものが、私の感情を不思議に刺戟したことを私は率直に告白しよう。『それはクララのもの悲しい微笑の反感』だと云ふより外に私は形容出来ない。そ

れは恰もあの少女が、歓喜と悲哀を織りこんだ長い物語を、語り得たやうなものである。然し彼女は何を知つてゐるといふのだ？ 音楽である。」

以上はシューマンの友人リーゼルが、詩人の故郷ハンブルグで發行してゐた誤誌「ツェチリア」に、ハイネが書いたクララの印象である。

クララは感情的には年以上に發達してゐたが、精神的には未だ子供の領域を出なかつた。勉強と演奏家生活の多忙さの爲に、小説本等は禁じられてゐたし、音楽中心の教育の結果、知識も制限を受けてはゐたのだが、彼女が無心に語る言葉には、生れつき自然に備はつた直観と叡智が閃いてゐるのであつた。十九世紀の初めの頃に育つた同じ年頃の少女達が、人形遊びや刺繍に過す毎日を、彼女は朝に夕に樂聖の作品にひたつて過した。そして幼い頃から、目的を持つて努力する者の、眞面目さと素朴さを持つてゐるのであつた。

クララの大きな、そして相手の心への深い共感を示す美しい瞳は、一生を通して、突然涙が一杯に溢れてくる癖があつた。非常に感情が敏感で想像力が發達してゐた一面には又氣が短くて、吞氣になれないやうな傾向もあつたのであるが、それは決して病的な神経質なものではなかつた。クララが一生持ちつづけた精神の平衡と調和は、たとへ努力の結果得られたものにせよ、シューマン一家にとって最大な幸福の源泉であつた。

明るく輝いてゐた十五歳のクララの行く手に、その頃思ひがけず落ちてきた暗い翳げがあつた。その試練に美しく堪えたことは、彼女が感じ易い少女期に既に並々ならぬ、精神の強靱さを所有してゐたことを物語つてゐる。

「四月二十一日 お友達のエルネスティネ・フォン・フリッケンが、父様にピアノを學ぶ爲に家に着いた」

と一八三四年の陽春四月の或日の日記の頁には、簡単にしるされてゐる。その數週間前にプラウエンで演奏會を開いた折に、クララ父娘は、男爵フォン・フリッケンとその十七歳の令嬢エルネスティネに紹介された。二人はボヘミアの國境に近い小都會アッシュから、わざわざクララを聴きに出てきたのであつたが、クララの素晴らしい演奏に音楽好きの男爵は、すつかり感動して、娘のエルネスティネをヴィークの許で是非學ばせたいと希望した。その結果、エルネスティネが弟子としてヴィーク家に同居することが、父親達によつて取り極められたのである。

クララは此の新しい美しい友の來訪を喜んで、早速仲よくなつた。子供らしいしたい信頼の氣持から「シューマンさんは、家で知つてゐる方の中で、私が一番好きな人なの」と無邪氣に告げるのであつた。クララより三歳も年上で、美しい金髪の少女として、多くの人々の讚辭に馴れてゐたエルネスティネは、微笑したのみで、來だ見ぬ紳士のことでクララと一緒に夢中になることなどは馬鹿らしいといつた風であつた。クララはその四年後に維也納からシューマンに宛てて當時の事を書いてゐる。

「あの頃の私は、何んといふお馬鹿さんだつたのでせう。エルネスティネがアッシュにはもつとずつと好きな人がある、と云つたので私は怒つてしまひました。けれども、それから間もなく、あの人も貴方を次第に好きになつてゆきました。そして貴方が訪ねていらした時には、何時もあの人を呼ばねばならないところまで、いつか來てしまひました。あの人貴方を好きなのが、私には嬉しかつたのです。もともと望んでゐたのですから、満足してをりました。あの人が來ると貴方はあの人とばかり話していらして、私には戯談しか仰しやいませんでしたけれど、私は始終御一緒だつたし、エルネスティネは私より大人だからだらうと、全く氣を悪くしなかつたといふわけではなかつたけれど、自分を慰めて居りましたの。

散歩に行つた時などに、貴方がエルネスティネとばかり話していらして、時々私に戯談を仰しやる時には、不思議な感情が私の心をかき亂しました。(若かつたけれど、私の心は暖く愛情に脈搏つてをりました) 父が私をドレスデンに送つたのは丁度此の頃で、私は再び望みをとりかへして、そして『いつか貴方が私の夫になつて下さつたら、何んなに幸福かしら』と思ふのでした。

此の手紙にあるやうに、エルネスティネがヴィークの家に寄宿して間もなく、クララは、

音樂理論をライジンガーに、聲樂を合唱指揮者のミイキッシュに學ぶ爲に、ドレスデンに送られた。此の突然の決定の裏には、シューマンとクララとの日毎の交際が、無邪氣ではあつても益々親密になりつつあることへの、ヴィークの父親らしい不安と心遣ひがあつたものと考へられる。然し結果はむしろ正反對の効果をあげ、別れて住むことは、幼いなりにクララの心にシューマンへの思慕の情を自覺させる温床となつた。

一八三四年六月八日 ドレスデン

お懐しいシューマンさん

今日は六月八日の日曜日、神様が天から輝やかなしい音樂の光りをお投げになつたので、貴方がお生れになつたのでせう。午後に二ところから御招待されてみますが、貴方に御手紙を書いてをります。

先づ、私の心からの希望を申し上げねばなりません。貴方がいつも天の邪鬼でないやうに——パリアの麥酒をあまりお飲みにならないやうに——皆が出かける時に一人お留守番をしないやうに——晝間と夜をとり違へないやうに——お友達のことも考へてゐる事を示して下さいませうに——せつせと作曲なさるやうに——讀者が待つてみますから澤山雜誌の爲にお書きになるやうに——それからドレスデンに來ると固い決心をして下さるやうに……

シューマンさん、お手紙も下さらない程、友達のことをかまはないでゐてもよいものかしら。郵便やが來る度に或る熱情氏からの手紙を待つてゐるんですけど、私はいつも失望しますの、それでも貴方が當地へいらして下さることと思つて、心を慰めてゐたところ、お父様からクノールが病氣なので、貴方がおいでになれないと書いてきました。

〔クノールはシューマンが中心となって浪漫主義音樂擁護の爲に發行してゐたダヴィット結社の機關誌「音樂新報」の編輯協力者。〕

エミリーも海水浴にゆくので、お父様と一緒に來ないのですつて、不運に不運が重なつてしまひました。(でもしかたがありません) 人間は運命をそのまま受け入れねばなりませんもの。貴方の新しいロンドを大變に期待してをります。ドレスデンでは皆が、そして殊にソフィー・カスケル(きれいな方よ)が貴方の即興曲に夢中で、熱心に勉強してゐます。彼女もベッカーさんでも、貴方がいらつしやらないといふので、がっかりしてゐます。本當に赦し難いことですわ。

私の戸口には、近刊音樂雜誌公認寄稿家クララ・ヴィークと張りだしてあります。いまに六頁もの原稿がゆきますでせうから、澤山に原稿料をお拂ひにならなくてはけません。グスターフが手紙を書いたのですつて? そして貴方も返事を、お書きになるおつもりなの? それなら私も御自筆のお手紙を待つてもいいでせう。でも御筆跡はさう獨特でなくても、讀めれば結構でございます。待つてゐていけませんかしら。貴方は急がされることがお嫌ひだから、熟考の後にお願ひする次第でございます。

クララ・ヴィーク  
クララ・ヴィークの分身

ドレスデンに行つて間もなく書かれたクララの此の手紙は、シューマンと別れた彼女の落着かぬ一種の焦燥感が滲み出てゐる。

七月には義妹のツェチリアの命名式に列席のため、クララも數日間ライブチヒに歸省した。シューマンとエルネスティネは教父母の役を務めた。クララの滞在期間は極めて短い間であつたが、敏感な彼女はローマンスが進行してゐることを、はつきりと悟つた。エルネスティネは始終落着かず、そはそはしてゐてクララの好意ある言葉にも、ぼんやりして答へなかつたりする上に、ロバートまでが、彼の新しい女神をやさしく尊敬することに夢中になつてゐて、クララは彼とゆつくり話す折さへ見出せなかつた。

エルネスティネはシューマンの來訪ばかり氣にしてゐて、クララと話してゐる最中にも、窓から道をひつきりなしに見下したり、夕方散歩に出かける前に、衣裳を着更へたりするのであつた。それ等の微候が既に明かな暗示をクララに與へた上に、思慮深い繼母が彼女を招いて、ロバートとエルネスティネの間の新しい重大關係についてヒントを與へて呉れたので、彼女の杞憂は遂に眞實となつた。

ヴィークは彼等二人の交際を見守つてゐたが、遂にエルネスティネの父に報告すべき時期が來たことを感じた。事實は周圍の者が想像した以上にすすんでゐて、二人はシューマンの友人であるヘンリエッテ・ヴォイグト夫人の家で、實は毎日逢つてゐた上に、祕かに

婚約までしてゐたのである。

[ヘンリエツテ・ヴォイグト (1809—1839) はライプチヒの富裕な實業家の夫人で、夫妻揃つて音楽に理解深く、積極的に若い音楽家を後援し、夫人自身も優れたピアニストで、ベートーヴェンの作品を好んで演奏した。シューマンと此の婦人は精神的に深い理解を互に感じてゐたようである。]

報告に驚いたブリッゲン男は、八月にライプチヒを訪れ、遂に令嬢をアッシュに連れ歸ることにした。なりゆきに責任を感じてゐたヴィーク家では、ほつとしたわけである。シューマンは別れにのぞんでエルネスティネに指輪を與へて、正式に婚約したつもりになつてゐた。此の夏のローマンスについて母に書き送つてゐるシューマンの手紙は、幸福感に満ちてゐて、「不思議な程純眞な幼子のやうな性格、温順で考へ深く、僕や凡て藝術的なものに深い愛情を持つてゐますし、又稀にみる程音楽的で、一口に云へば僕の妻にほしい人です」と書いてゐる程、エルネスティネに夢中になつてゐた。

慈善音樂會に出演のために、九月四日にドレスデンから歸宅したクララは、ショパンの二つの新作品 (管絃樂附のロンドと幻想曲) とシューマンの新しく出版されたトッカータの初演奏に興奮してゐた。トッカータは、公開演奏をされるシューマンの最初のピアノ作品であつた。音樂會への生々とした興奮や、新作品への活発な討論を期待してゐたクララは、歸つた我家の中に、何か不思議な氣にかかる空氣がただよつてゐることを感じた。

フォン・フリッケン男がエルネスティネと共に、アッシュに去つたのは、クララの演奏會の五日前であつた。演奏會の前日になるとロバートまでが、何の説明もせず突然行方不明になつて、彼女の心を傷けた。ロバートはエルネスティネの後を追つて、ツヴィカウまで行つたのである。やがてライプチヒに歸つたロバートと、アッシュのエルネスティネの間には、手紙が盛んに交はされた。然し冷靜に眺めれば、此の夏のローマンスは、此の時既に、破局への道を眞直に辿りつつあつたのである。美しい瞳、愛らしい微笑、溜め息、さうした感覺的なものを通じて、藝術や自分への深い理解者と思はれたエルネスティネも、遠くへ去つて手紙と文章に制限されてみると、美しいが平凡な少女に過ぎない彼女の本質を、ロバートの前に現はすことになつた。

ロバートは此の間に一曲のアレグロを彼女に捧げ、二つの初期の傑作を書いた。その一つは有名な「謝肉祭」で、エルネスティネの誕生の地 Asch にちなんだ、A, As, c, h 四つの樂音を中心として作曲された。不思議なことに Schumann の綴りの中にある樂音も、此の同じ四つの樂音だけである。もう一曲はフリッケン男の主題による變奏曲で、「交響的練習曲」と名づけられた。

シューマン自身自覺はしてゐなかつたが、エルネスティネとの愛情は、遠いツヴィカウ時代の少年期の戀と、その質に於て大差ないものであつた。然し、此の不幸な戀愛事件の思い煩ひに刺戟されたシューマンの精神的動搖は、病的に亢進して、遂に危険な絶望状態にまで、敏感な彼の神経を追ひやつたのである。直接の原因は彼の兄ユリウスの死と、それに續く最愛の兄嫁ロザリーの急逝であつた。彼は、夜となく晝となく死の幻影に悩されてゐたとみえて、當時の手紙は病的な憂鬱さに満ちてゐる。思ひあまつたシューマンは醫者に相談した。ところが醫者は微笑つて薬は何の役にも立たない、早く結婚なさい」と云つたのである。

シューマンの性格にとつて、『女性の愛情と激勵は、絶対に必要なものであつた。母へ書かれた數十通の手紙を見る時、母へ手紙を書くことが、彼の煩悶の通風孔であつたことがよく解る。ヘンリエツテ・ヴォイグトにツヴィカウから送られた當時の手紙には、彼の逡巡する氣持がよく示されてゐる。

「現在の精神状態を考へると、自ら身震ひがする程です。私は不幸な思ひ煩ひを固執することの名人です。それは、心の平和を嘲り反抗する悪魔のいぶきです。此の精神的な自己刺虐習慣は、しばしば私の性格をゆがめてしまひます。

エルネスティネは大變に幸福な手紙をよこしました。彼女の父は彼女を私に呉れるさうです。それが何を意味するか、お感じになつて下さい。それなのに現在の此の苦しみ・・此の寶石を、適はしくない手に……所有することを恐れてゐるやうな有様です。此の懊惱

の理由をお求めになつても、私には答へられません。懊惱そのものにあるのだと信じます。これ以上明確に説明出来ないのです」

耐へ切れなくなつたシューマンが十二月四日に、思ひ切つてアッシュを訪れると、エルネスティネがフリッケン男爵の相續人でもなく、正式結婚による令嬢でもなく、最近になつて男爵が認知した私生兒であつたことが判明した。これはシューマンにとつて新しい心患ひの原因となつた。美しい妻と共に直面しなくてはならない貧困の生涯、實にシューマンは此の時に、はつきりと將來を決定すべきであつたのであるが、氣が弱く、決斷力に缺けてみた彼は、婚約の自然解消の道を選んで、アッシュから沈黙のまま去つたのであつた。

エルネスティネはその後一八三八年にツェドウィツ伯と結婚し、數箇月で夫に死に別れたが、彼女自身も一八四四年にチフスで、その若い生涯を閉ぢてしまつた。彼女はシューマンとの戀愛が終つてからも、クララとシューマンのよき友として、死ぬまで變らぬ愛情を二人に捧げた。

シューマンの此の事件が進行中、クララは孤獨な淋しきや苦しい心持を誰一人に訴へるでもなく、一八三四年十月の日記に、簡単に「シューマンさんは二十五日にツヴィカウに出かけた。實はアッシュに行つたのです」と書いてあるのみである。事件は未解決のまま、クララは父と共にマグデブルグ、ブルンスウィック、ハンノーバー、ブレーメン、ハンブルグ等への長い忙しい演奏旅行にのぼつた。五箇月にわたる淋しい旅の間には、彼女も自らの心を慰めかねたか、繼母にあててブルンスウィックから、若いチェリストのフェルディナンド・ミュラーと呼ぶ青年が好きになつたなどと書き送つてゐる。これはその年頃にありがちな空想であり、シューマンへの面當に過ぎないものの、當時の彼女の満されない心の寂しさが推察出来る。到るところで驚異と稱讚に迎へられはしたが、長く侘びしかつた旅から、彼しい我家に歸りついたのは、一八三五年の陽春四月であつた。

眞先に彼等を訪ねて來たのは、彼女が夢にも忘れることが出来なかつたロバート・シューマンであつた。ヴィークとロバートが話をしてゐる客間に入つて行つた時に「貴方は私に目禮さへして下さいませんでした」と、彼にクララは此の忘れ難い日について、シューマンに書いてゐる。シューマンの冷淡な態度にクララは胸が一杯になつて、信賴する友にむかつて、「あの人を愛する程には、誰も愛してゐないのに、私の方を見て下さらなかつた」と、涙ながらに訴へた程、彼女の失望は大きかつた。然し事實は彼女の思ひ違ひであつたのである。久しぶりに見るクララ、既に子供ではなく、美しい少女になつて自分を凝視めてゐるクララを前に、ロバートは込みあげてくる感情の波の中で、思ふやうに口がきけなかつたのであつた。此の時のクララの印象について、ロバートは三年後にクララに書いた

「貴女は背がのびてすつかり變つてゐた。僕と一緒に遊んだり、笑つたり出来る昔の子供ではなくなつてゐた。貴女は聰明に語り、貴女の瞳の中に、愛の光りが深く秘められてゐるのを見た。その當時、僕に何が起つてゐたか御存知ですか。僕はエルネスティネと別れたのです。さうしなければならぬと感じたのです」

シューマンは此の時代の自分について、一八三八年二月十一日附の手紙でもクララに説明してゐる

愛する人よ。僕の傍に坐つて、いつも貴女がするやうに頭を右にかしげながら、どうか何もかもを僕に語らせて下さい。

此の暫くの間、僕は嘗てない程に幸福です。長い年月の間恐ろしい思ひに身を捧げ、物ごとの悲惨な暗黒面を捜しだすことにかけては天才を持ちつつ、銅貨を投げる如くに生命を投げ得る一人の男性に、貴女が輝しい日を取り戻して下さいたことをお聴きになれば、貴女もきつと愉快にお思ひになることと存じます。

僕は未だ誰にも見せぬ、心の内を貴女には赤裸々に申し上げます。神様の次に僕が愛する貴女は、凡てを知つてゐて下さらねばなりません。

僕の生活は、僕が自己と自己の才能を始めて自覺し、音樂への道を決心して、正しい方向に才能をむけることになつた時から、即ち一八三〇年以後に始まつたのです。當時の貴女は美しい大きな瞳を

もつた、強情な不思議な子供でした。貴女の他に、私にとってしたい人はロザリーだけだったので、

一八三三年になると、直面するのを恐れてゐた絶望感が襲つてきました。これは凡ての藝術家が意圖する如くものが運ばぬ折に、経験するものなのです。これに加へて僕の右手が中指の負傷のために、演奏不可能になりました。此の暗い物思ひの中で、踊りながら僕の方に近づいてきた人、それが貴女だったので。貴女は長い間僕を他の女性達から守つて下さいました。貴女がいつか僕の妻になつて下さるのではないかと考へが、その當時既に閃いたこともあつたのです。然しそれはあまりに遠い未來に屬することでした。僕は僕等の年頃にふさはしい氣持で、心から深く貴女を愛してゐたのです。

忘れ難いロザリーに對する愛は、全く違つた種類のものでした。僕等は同年でしたし、彼女は僕にとって姉妹以上の存在でした。然し戀愛の感情はなかつたのです。ロザリーは僕の面倒をよく見て呉れましたし、僕を常に激勵し、僕の才能を信じて呉れました。それなのに僕は幸福を感じる事が少かつたのです。何かが不足してゐる！ 兄の死によつて僕の憂鬱は益々烈しくすすみました。ロザリーの突然の死の報を受けた時の僕の精神は、こんな風な状態にあつたのです。

十月十七日から十八日への夜半にかけて、人間が経験し得る限りの最も恐ろしい考へが、突然心に浮びました。天が下し給ふ最も恐ろしい報復です。——意識の喪失です——僕は烈しく壓服されて、祈りさへも嘲奔と叱責の如く沈黙させられてしまひました。「お前は考へられなくなるかもしれない」この考へに僕は息の根が止つたやうに思ひました。間斷なき恐ろしい興奮状態の中で僕は醫者の許に行き、このやうな状態では、自らの命に絶望の手がかかることさへ、最早保證出来ないと訴へました。

どうか僕の天使よ、恐れなで下さい。

醫者は「葉は役にたたない。結婚しなさい。お嫁さんがなほして呉れる」と云つたので、それで僕の心は明るくなりました。

そこへエルネスティネが來たのです。彼女こそ私を救つて呉れる。僕は何か女性に力の限り縋りつきたかつたのです。彼女は僕を愛して呉れました。僕は少し恢復しました。その後は凡て貴女も御承知です。これが一八三四年の冬の事です。やがて彼女は去つた。僕は事件の結末を考へるやうになつた。又彼女に財産が無いことも知り、如何に専心努力しても、僕の稼ぎはささやかであることを考へました。これは足枷の如く僕の心の重荷になつて來たのです、希望が見えなくなつたその上に、エルネスティネの家庭の複雑な事情をきき、彼女が前もつて何一つとして打ち開けて呉れなかつたことを、責める氣特になりました。

これ等の凡てが僕を壓倒しましたし、僕自身が冷淡になつたことも告白しなければなりません。救はれ度いと縋りついた彼女の姿が、夢の中で幽霊の如く現れるのでした。僕は音樂の職人になつてパンの爲に働かうと考へて、母と相談しましたが、此の道は多くの勞苦の末に、又新しい困難をもたらすばかりであることに、母と意見が一致したのでした。

「貴女こそ初戀の人で、エルネスティネは我々を結合する爲に現れたのです」ともロバートは書いてゐる。然し決勝點までは、まだまだ長い道程があつた。クララはドレスデンから歸宅後も、時々短い巡遊の旅に出かけたし、シューマンも八月にはツヴィカウの母の許に歸省した。そして八月二十八日にクララにむけて、始めて心を傾けた手紙を書いた。

「天國の如き秋の光りと喜悅の中に、僕の能く知つてゐるクララに似た天使の顔がのぞいてゐます」そして手紙の最後は、「貴女が僕にとって何んなに大切な者か、御承知でせう」と結ばれてゐる。

此の手紙に對して、クララの方は昔ながらのおどけた調子で、「二時間もかかつて御手紙を讀んでゐますのに、まだ頭に入らない、少しばかり憎らしい字がございます」と、何氣なく書きつつ、僅か一行の文句で、彼の心に氣づいたことを、告白してゐる。

クララが音樂に熱中した時に示す、情操方面の成熟ぶりは、常にロバートにとつて驚異であつた。仲間の青年達の如く心理分析をしたり、言葉の笑しい綾を楽しんだりはしなかつたが、クララが音樂について率直に答へる時に示す明確な觀察と意見は、時折ロバートに、クララは自分よりも年上ではなかつたかと、錯覺を起させる程であつた。然しクララはその次の瞬間に、もうつまらぬ事柄に子供らしく無邪氣に笑ひだしたり、弟達との遊戯に加はる爲に駆けだしていつたりするのである。

シューマンは、クララへの新しい愛情を追求することなく、昔のままの平靜な友情のうちに、幾日かが過ぎていつた。日々共に暮してゐる十五歳の少女の香氣は、今やつと彼の心に忍び寄つてきたばかりで、シューマンは未だ自分の心をはつきり捉へ得なかつたのか

もしれない。然し日がたつにつれて、ロバートはクララが、次第に娘らしく肉づいて、蕾の花を開いてくる豊さに、恍惚とせずにはゐられなくなつた。子供らしい硬さが消えて、のびやかな肢體にはいつか匂やかな魅力がたたへられてきたのである。しかもその美しさには、青年の心を刺戟し、烈しい動悸を強ひるやうな煽情的なものは少しもなかつたので、常に心の動搖と恐怖の渦巻の中にゐたやうな、エルネスティネとの嵐の後に見出したクララとの静かな友情は、ロバートの心にとつて、何よりの慰安であり、祝福であつた。

かうした状態の中で、ロバート・シューマンは、作曲に新しい熱意を集中した。その結果生れたのが、シューマンの言葉によると、「クララへの心の叫び」である嬰へ短調の奏鳴曲で、深い感動に満ちた曲である。

「フロレスタンとユーセビュースからクララに」と献呈の言葉が附記されてゐるが、クララこそはE・T・A・ホフマンを眞似て、シューマンが創作した此の一人の人物、何れもシューマンの分身である火の如き熱情家で、無鐵砲なフロレスタンと、温順で瞑想的なやさしいユーセビュースの、最初の理解者であつた。

フロレスタンとユーセビュースが一般に知られるやうになつたのは、ロバート・シューマンが音楽上の新運動即ち浪漫派の音楽の發展を意圖して、一八三四年に音楽雑誌「音楽新報」を刊行してからのことである。フロレスタンとユーセビュースは、彼等二人の創造者シューマンの機關誌の有力な同人となり、中心勢力となつた。シューマンは此の仲間を「ダビッド結社」と名づけて、音楽文化上のあらゆる微温的な中庸主義への挑戦を開始したのである。

此の運動は間もなく、全獨逸の知識人の視聽を集めるやうになつた。結社の同人の正體は直に想像出来る。ラロー先生はフリードリッヒ・ヴィークであるし、唯一人の女性の同人であるクララは、キアラ、キアリーナ又はツィリアといふ名で登場する。新しく同人に加はり、忽ち一同の絶對的な尊敬を一身に集めたメルティスは、云ふまでもなくフェリックス・メンデルスゾーンである。

一八三五年には、彼等の長い間の憧憬の的であつたメンデルスゾーンが、ゲヴァンドハウス交響樂團の指揮者として、ライプチヒに移り住むことになつた。メンデルスゾーンに逢つたクララは、先づロバートの嬰へ短調の奏鳴曲を演奏し、同年配の二人の天才、シューマンとメンデルスゾーンの間には、暖い友情が急速度に育まれた、シューマンは、「彼は天國から直接此の世に贈られたダイヤモンド」と云つてゐるやうに、玲瓏玉の如きメンデルスゾーンの天才と人となりを讚美せずにはゐられなかつたし、水晶の如く透明に磨きあげられた彼のオーケストレーションを、羨望と感歎の思ひで眺めてゐたやうである。

タヴィット結社の同人中最年少者であるクララの十六歳の誕生日は、メンデルスゾーンやシューマンを始め、同人達によつて心から祝はれた。九月十三日の朝は、午前七時といふのに、彼女はクーヘンガルテンに連れてゆかれて、同人一同から美しい瀬戸物の籠に入れた黄金の時計を贈られた。此の思ひがけぬ素晴らしい贈物に、クララはすっかり狼狽して、一言も口がきけない程に感動してしまつたので、彼女は家へ歸つてからも、皆に失禮ではなかつたかと小さい心を痛めてゐた。

晝食にはメンデルスゾーンも加へて六人の同人が、ヴィーク家のクララの祝ひの食卓を圍んだ。あまりの嬉しさに興奮したクララは食事の途中で突然立ちあがり、シャンペンの杯を手に、生れて始めて正式の挨拶をやつてのけた。

「美しい贈り物に對して、皆様心からの御禮を申し述べずにはゐられません」

此の時の光景について、クララは親友のエミリー・リストに「紳士達は大變に感動なさいました。兩親は私が兩親については何も云はなかつたので、驚いてゐました」

食後一同はいつものやうにピアノの周りに集り、クララはメンデルスゾーンと彼の二臺のピアノの爲のカプリチオ（作品五）を演奏したメンデルスゾーンは、フランツ・リストとショパンの演奏振りを巧みに眞似て一同を喜ばした。

タヴィット結社の前には輝しい薔薇色の日がやがて訪れてきた。彼等のチャンピオンであるメンデルスゾーンが勝利を得たからである。ゲヴァンドハウスの此の新しい指揮者の

魅力と光彩の前には、ライプチヒの最も保守的な人々さへも、戦ふことなく降伏した。粹な仕立の上衣から、優美な容姿、彼の美しい色彩豊かな音楽、凡てメンデルスゾーンに屈するものは、世間の禮讃の的となつた。彼が優雅な姿勢でピアノの前に坐り、軽やかな透明な和絃の上に、夢見るやうに無言歌を奏する時、反對派の人々さえも恍惚とし、彼がゲヴァンドハウスで指揮をする時、ライプチヒの聴衆は始めて、ヴァイオリンの代りに指揮棒を持ち、個性ある解釋と表現を與へる専門の指揮者の意義を、経験するのであつた。獨逸第一に管絃樂が發達してゐた音樂の都、ライプチヒに於ては、ゲヴァンドハウスの指揮者は、市民の偶像であり、彼の言葉は法律でさへあつた。

メンデルスゾーンは、百年の間埋れてゐた大バッハのマタイ受難樂を復活し、未だ知る人の少ないベートーヴェンやシューベルトの交響樂を演奏したが、それ等は凡て聴衆から熱烈な支持を受けることが出來た。數年前に巴里で見かけて以來、クララの偶像であつたメンデルスゾーンは、今や全獨逸の好樂家の偶像となつたのである。

此の頃、カールスパットに湯治に来てゐた兩親訪問の旅の途上、ショパンが一日ライプチヒの舊友メンデルスゾーンを訪ねてきた。メンデルスゾーンはショパンの希望によつて、早速彼をヴィーク家に伴つた。クララは運悪く午後の散歩に出かけて留守だつたので、此の遠來の客は、一時間も彼女の歸りを待つたのである。クララはショパンにシューマンを紹介する爲に、嬰へ短調の奏鳴曲を弾き、又ショパンの協奏曲の終曲とエチュード二曲を演奏した。聴き終つたショパンは心情を吐露してクララを絶讃し、お禮の爲にと云つて、新作のノクチューンを素晴らしいピアニッシモで演奏した。ショパンのフランス風な優雅な洗煉された態度は、クララに深い印象を残した。シューマンは長年敬愛してゐたこのピアノの詩人を目のあたりに見て興奮した。ショパンの短い來訪はタヴィット結社の一同に、大きな刺戟を與へたのである。メンデルスゾーンは手紙の中に、「ショパンの演奏には、本質的に独自の境地がある。完璧なヴィルテューオーズと呼ばれるべきであらう」と記してゐるが、クララの方は冷靜にショパンを観察してゐる。彼女は日記に、フォルテの部分を演奏する時に、ショパンは前かがみになつて上體の重みを用ひねばならない程に、體が弱つてゐたこと、そのピアニッシモの絶妙さ、又彼のルバートがあまりに誇張されてゐて、氣まぐれ過ぎるといふことを記してゐる。「ショパンが來た！ フロレスタンは彼に駆けよつた。私は二人が腕をくみあはせて、歩いてゆくといふより、飛ぶやうにゆくのを見た。ユーセビュース」と、シューマンはその日の彼の感動を印象的に書いてゐる。

その頃、もう一人の優れた來訪者があつた。ロンドンから來たイグナツ・モシュレスである。一八三五年の十月六日、ヴィークはモシュレスとメンデルスゾーンを自宅に招き、クララを加へて此の三人は、當時發見されたばかりのバッハの三臺のピアノの爲の協奏曲ニ短調を試演した。メンデルスゾーンは此の曲を紹介する爲に、ゲヴァンドハウスの定期演奏會の曲目に加へ、當日は彼自身とクララの他にラーケマンがモシュレスの代りを務めた。此の演奏會の持つ音樂史的な大きな意義は、バッハのピアノ作品がゲヴァンドハウスで五十年目に聴かれたことである。その夜はクララにとつても忘れ難い一夜であつた。彼女はその他にメンデルスゾーンの變口短調のカプリチオと、自作のピアノ協奏曲を演奏したが、メンデルスゾーンはクララの演奏に感激して、「彼女は小さい惡魔のやうに弾いた」と家族の者への手紙に書いてゐる。

シューマンもクララの演奏について、公平なる批評を「音樂新報」に發表してゐるが、當時書かれた友人への手紙の中には「クララは日ごとに、いや一時間ごとに、身心ともに美しく成長してゐる」と書いてゐる。

此の頃のロバートは、クララとの靜かな友情に満足し、二人の間につづく平和を破壊して新しい關係に入ることを、むしろ恐れてさへゐたやうに見えるが、お互ひにひそかに愛情を一杯にたたへて動かぬ此の状態は、一寸した些細な事柄にさへ爆發する發火點に近づいてゐたのである。遂に十一月の末にその日が來た。ヴィークはクララと共に演奏旅行に旅立つこととなり、その出發の前夜には、無論シューマンが訪れて來た。その夜、來るべき淋しい冬の日に心重く、別れを告げて階段を降りてきた時、シューマンは、洋燈（ラン

プ) をもつて彼を造つてきたクララの顔を、しみじみと見上げた。洋燈のほのかな光りが彼女の頬に淡い影を作つてゐる。ロバートは突然、自分でもわからぬ熱情にかられて、彼女を固く抱擁した。此の夜の出来ごとについて、後年クララは「貴方が始めて私に接吻なされた時、私は氣を失ふのかと思ひました。目の前が眞暗になつて、貴方の爲に持つてゐた洋燈を落しさうになりましたの」と書いてゐる。

ロバートはツヴィカウまでヴィーク父娘に同行し、音樂會で彼女の演奏を聴きながら「水色の衣裳につつまれた彼女は、あでやかに愛らしくピアノの前に坐り、人々に愛され喝采されてゐる。然し彼女は僕一人のものだ。僕が此處にゐるのを彼女は知つてゐるけれど、気づかぬ振りをしてゐなくてはならないのだ」とひとりで考へてゐるのであつた。

## 第八章 春を待ちつつ (一八三五年—一八三七年)

若い二人は、お互ひの愛情の祕密を、その後數週間、守ることが出来た。エルネスティネとの事件が未だはつきりと解決してゐなかつたので、ロバートはヴィークに正式に告白することが出来ないのであつた。クララこそは息子にふさはしい唯一人の娘だと、もう長い間、心ひそかに彼等二人の愛情の成長を析つてゐたロバートの母の、たつての勤めにより、ロバートは大決心をして、書きにくい最後の手紙をエルネスティネに書いた。心やさしいエルネスティネは、早速、凡てを快く受入れて、彼の良心の長年の重荷を解消したばかりでなく、すすんで彼とクララとの愛情に、心からの祝福をさへ析つて呉れるのであつた。三年後に、シューマンはクララに次の如く書き送つてゐる

彼女には誠に氣の毒した。然し、もし彼女が僕と一緒にゐるやうなことがあれば、なほさら不幸になるところだつたのです。……あの人は環境の犠牲になつたのです。僕は自分の罪をよく自覺してゐるし、否定しようともしません。クララ、凡てを正しい道に戻す爲に、我々は出来る限り努力しなくてはならないのです。エルネスティネは僕の心から貴女を迫ひだしたと、僕が彼女と知る前から貴女を愛してゐたことを、能く知つてゐるのです。

「貴方はクララ以外の女を愛せないことを、私も能く知つてをりました。そして今でもさう思つてをります」と彼女はしばしば僕に書いてよこしました。彼女の方が僕よりもはつきりと見てゐたのです。

シューマンはこれまで長年の間、暖い友情のうちに、ヴィーク家に受け入れられてゐたので、エルネスティネとの問題以外には、クララとの新しい關係を告白し、ヴィークの承認を求めるについて、聊も逡巡するところはなかつた。ヴィークの承諾を夢にも疑はなかつたばかりか、むしろヴィークがクララの將來の夫として自分を選び、すすんで教育をして呉れたのだとまで、自惚れてゐたのである。若い戀人達が常でさうであるやうに、ロバートは二人の戀の前途に對して極めて樂觀的で、美しい夢を描くのであつた。

一八三五年の降誕祭に、シューマンはクララに眞珠を贈つた。クララの繼母は戲談に「眞珠は涙を意味してゐる」と云つたが、これは哀しくも彼等の戀の未來を暗示してゐた。世馴れた鋭敏なヴィークが、若い二人の間に急速にロマンスが進行してゐるのに気づかぬ筈がなかつた。そしてシューマンがこれまでヴィーク家でいつも感じてゐた暖い雰圍氣が、何時の間にか、口に出されぬ疑惑と緊張感に變つてきたのである。ヴィーク夫人のロバートに對する態度は、急によそよそしくなり、クララは思ひがけぬ成行に當惑し、悲しんで硬くなつてしまつた。そして一八三六年の正月以後は、ロバートも朝に夕に何年間も出入りしてゐた師の家を、訪れることさへ遠慮するやうになつたのである。

ヴィークは、最初此の戀愛を、クララの側の單なる少女らしい憧憬と惑溺に過ぎないと考へたので、クララをよんで厳しく叱責した。そしてシューマンと逢ふことも、手紙を交換することもならぬと命じて、一月十四日には彼女を再びサクソニーの首都、ドレスデンに送つたのである。冬の社交シーズンの間、ドレスデンでは、芝居や歌劇や櫓(そり)の集りなどが、賑やかに催される上に、ヴィークはクララにロバートを忘れさす手段として、

二つの演奏會を計畫して、その準備の爲に多忙な毎日を迭らせるやうに計らつた。

第一回の演奏會の夜、一月三十日の日記に、「クララが聴衆の前であがつたのは、今日が始めてである。彼女は音楽に感動して涙ぐんだ」とヴィークによつてしるされてゐるのを見ると、十六歳の少女のやわらかい若い心が、無情な父の反對と、繁忙な生活の中に、如何に傷つきやすく、無言のうちに懊惱してゐたかが想像されて、胸をうつものがある。

父の命によつて文通も禁じられてゐたにも拘らず、二人の間には何か祕密な連絡があつたとみえて、ヴィークがドレスデンを去つた數日の留守の間を利用して、ロバートは二月七日にクララの許に馳けつけた。

實は、六十五になつてゐたシューマンの母の死の報せが、二月四日にツヴィカウから届いてゐたのである。シューマンは狂ほしいまでに此の母の愛情を頼りにしてゐたので、母の死は彼に非常に大きな衝撃を與へた。少年時代から常に死の妄想に異常に悩まされてゐたロバートは、もしも此の時にあつて、たとへ年若くとも、彼を理解し、彼を守るクララの愛情がなかつたとしたら、孤獨と恐怖と絶望のうちに轉落してゐたかもしれない。

クララに逢つたことは、ロバートの心に新しい生命と慰安を與へ、彼は思ひがけない平靜な心で、母を見送るべくツヴィカウへ出かけてゆく力がでて來たのであつた。此の時の別離の想ひ出についてシューマンは一八三八年の二月十一日に書いてゐる。

「二年前の今日、僕はドレスデンを立ちました。『どうぞ心變りをしないで』と僕が云ふと、貴女は悲し氣に軽く頷きました。そしてその言葉を守つて呉れました」

紅い小さな帽子をかぶつた十六歳のクララとの、ドレスデンの驛馬車の停留所でのこの別れは、長い別れとなつた。

その二日後に、今は亡き母の遺書その他の始末をしたロバートは、延着したライプチヒの馬車を待ちつつ、クララへの最初の戀文を書いた。これは彼がクララにむかつて、獨逸語のしたい Du を用ひた最初の手紙である。

一八三六年二月十三日 夜 十時過ぎ ツヴィカウ驛馬車停車場にて

僕の目は睡氣がさしてゐます。もう二時間も急行馬車を待つてゐるのです。道が悪いので午前二時までは出發出來ないでせう。

愛する愛するクララ、貴女はまだ僕のすぐ側にゐて、手をだせば抱けるやうな気がしてゐます。以前には僕の感情の強さを表現する美しい言葉が、何時でも見つかったのに、今ではもうそれも出來ません。貴女が未だ御承知なくとも、もう僕には云へないのです。どうか僕を愛して下さい。僕といふ人間は多く捧げるので多く欲しいのです。今日は色々なことがありました。母がのこした遺書、彼女の死、けれどもそれ等の暗黒の中で、貴女の姿が常に輝いてゐて、僕に總てを堪へ忍ばせるのでした。

僕の將來の生活が、より以上に保證されたこともお話しなければなりません。といつて手を膝に坐食出來るわけでもなく、貴女が鏡の前を通られる度に御覧になるものを得る爲に、刻苦して努力せねばならぬことも事實です。——貴女だつてロッシー伯夫人ではなくて、藝術家として、僕と共に働き、僕の重荷も悦びも悲しみも共にわけあつて下さるでせうね。この事についてどうか御返事を下さい。

〔ロッシー伯夫人(1804—1854)は、當時歐洲第一にその美聲を謳はれてゐたヘンリエッタ・ゾントアハの結婚後の名である。ショパンは此の人の歌に非常に傾倒してゐた。〕

ライプチヒに歸つた僕の最初の心遣ひは對外的な問題の整頓です。内面的には既にすっかり安心してゐます。お父様も僕が祝福を求める時にまさか手をひつこめるやうなことはなさないでせう。此の問題に關してはまだまだ澤山に考へるべきこと、困難を除くべきことなど多くありますが、今のところは我々のよき心にまかせておきませう。我々二人はお互ひの者になるべく運命づけられてゐるのです。この事を僕は前から知つてゐたのですが、貴女に打ち開けたり、解つていただくやうとする程に大膽な希望は持てなかつたのです。

今日斷片的に書いたことを、いづれもつと詳しくはつきりと説明しませう。多分此の手紙は讀んでいただけないかもしれませんが、それならばどうか、僕が貴女を言葉で云へない程に愛してゐることを知つて下さい。部屋が暗くなつてきました。お客達は僕の傍で眠つてゐます。外は吹雪ですが、僕は頭にクッションをあてて片隅にもぐりこんで、貴女のことばかり考へてゐます。では御機嫌よう、僕のクララ

貴女のロバート

ドレスデンに歸つたフリードリッヒ・ヴィークは、留守中の出來事を忽ち發見した。彼

は非常に立腹して、もしシューマンが再び現れたら見つけ次第に射殺すると云つて、クララを脅迫したので、クララは首をうなだれで、父の怒りを黙つて忍ぶより他はなかつた。

若い二人の戀愛に對するヴィークの態度は、無論辨護の餘地もないが、その頃（一八三六年）には、此の音樂史に於ても他にその例を求むべくもない、美しい愛と努力のロマンスを、當事者二人を除いて未だ誰一人として豫知する者もなかつたのであつた。殊にヴィークは教師としての經驗から、此の若者の性格の弱點、彼を脅かす危険を誰よりもよく知つてゐた。シューマンは、創作的才能こそ恵まれてはゐるが、世間一般の常識眼から見れば、無責任で、浪費家で、空想のまにまに氣儘にただよつてゐるやうな頼りない變人に見えた。大規模な形式の作品を書く、技術的な素養にも當時は缺けてゐたので、ピアノ曲と歌謡しか完成してゐなかつたし、當時のあらゆる作曲家が、生活費を得る手段としてゐたピアノ教授による道は、指の障害の爲にシューマンには閉されてゐたのである。その上にもつと困つたことに、ヴィークは彼に精神病的な徴候さへあることを認めてゐたのである。ヴィークの人生にとって唯一の誇りであり、今や、榮譽輝やくピアニストとしての生活を始めたばかりのクララの未來の夫として、ヴィークの前に現れたのは、このやうな男だつた。

ヴィークはシューマンの音樂が持つ稀なる素質を否定はしない。シューマンのことを「第二のベートーヴェン」「獨逸のショパン」などと、しばしば書いてゐる程であつたから、彼の音樂に對する讚美の心は變らなかつたのであらうが、未來の娘婿としてのシューマンとなると、實際的な彼は不安に感じないではゐられなかつた。

文通の道を全く斷たれたシューマンが、クララのその後の様子を知るすべもなく過す間に、ヴィークはクララをブレスラウに伴つた。ロバートは戀する心の本能的な敏感さで早くもそれと察したが、ブレスラウには信頼出来る知人とでもなかつたので、仕事の上の文通はあつたが一面識も未だないカーレルト博士といふ人に、クララの近況報告を依頼する手紙を書いた。此の未知の男に心を打ち開けて書かれたシューマンの手紙は現存してゐて、誠に興味深いものがあるが、残念ながらこの手紙の結果については記録されてゐない。ブレスラウでの二回の演奏會が、大成功であつたに拘らず、クララが非常に疲勞してゐるのを發見して、ヴィークは、バーデンバーデンの温泉場で靜養させてから、ライプチヒに連れ歸つた。同じ町に住みながら、相見ることすら許されぬ悲しい日が、戀人達の上に重ねられたのである。

歸宅したクララを先づ訪ねて來たのは、メンデルスゾーンであつた。新しい作品のスケルツォを届けに來たのであつた。カッセルの舊い友人ルイズ・シュポールも訪ねてきて、彼女の作品を絶讚したので、それに刺戟されて、クララの作曲熱が俄に高調したのも、此の年のことであつた。ショパンも此の年に再び彼女をライプチヒに訪れた。ショパンは以前にも増して衰弱した印象を彼女に與へた。ピアノ協奏曲を含む彼女の最近の作品を、ショパンはクララに演奏させて、中でも殊に彼の氣に入つた作品五を絶讚して、その樂譜を所望して辭し去つた。クララの作品五はショパンの喜びさうな美しい曲で、彼が褒めたのも、お世辭ばかりではなかつたやうである。ショパンは此の時のライプチヒ訪問に於て、クララ以外はシューマン唯一人にしか逢はなかつた。

ショパンが去つた次の日はクララの十七歳の誕生日で、彼等二人の間に友情が芽生えて以來、離れ離れに過した最初のクララの誕生日であつた。シューマンは此の日を孤獨のうちに、ショパンの音樂の息吹きの中にひたつて過した。九月十四日に書かれたリガのハインリッヒ・ドルンに宛てた手紙には、次のやうに書かれてゐる。

「一昨日、貴君の御便りをいただき、御返事しようと思つてゐるところに、誰が入つて來たとお考へになりますか？ ショパンです。實に大きな喜びでした。我々は楽しい日を過しました。ピアノの前に坐る彼を見るのは悲惨でした。貴方は彼を愛するでせう。然し演奏家としてはクララの方が優れてゐて、ショパン自身が加へる以上に、彼の作品に深い意味を與へます。」ロバートはダヴィット結社の同志の者で盛大に祝つた一年前のクララの誕生日を想ひ起した。此の頃では彼女の演奏さへも、思ふやうには聴けないのである。彼

はその頃、ひそかにヴィークの家に近づき、窓の下にたたずんでは彼女の演奏を聴いて、自らの心を慰めてみたのである。

ヘンリエッテ・ヴォイグト夫人は、相變らず音楽家達を集めて夜會を催し、シューマンも常に出席してゐたが、何故か、クララはこの集りに加はつたことがなかつた。此の深く互ひに想ひあふ前途ある二人の結合を、心から祝福する人々は、二人が偶然に落合つた時に、見て見ぬ振りをする程度のささやかな好意ではあつたが、二人の爲に親切にして呉れた。偶然、路上で出會つた祈など、ロバートは心をこめた視線や素早い握手を送つたが、彼女の方から意志表示をすることは、人目を恐れて思ふにまかせなかつた。心ない第三者の証言に、此の頃の二人の精神的苦悶は一層煽りたてられてみたのである。

「私の不幸は限りないと思はれた日がございました。或夜私共がワッサーシェンケ（料理店）にゐた時、私達のテーブルの直ぐ横を貴方が通りました。ああ、ロバート！ その時私は死んでゐたらとさへ思ひました。私は氣分が悪くなり、烈しく身が慄へ、それがその夜一夜續きました。その夜の床の中で私は泣きたかつたけれど、泣けなかつた、ただ狂つたやうに祈るのみでした」と、後にロバートに告白したやうな、苦しい毎日がクララには續いてゐた。然し健氣にもクララはこれに耐へて、苦悶を外に現はすことなく、伯林への演奏旅行に備へて黙々と曲の準備に専心するのであつた。

さてクララは此の一年の間に、調和ある豊な表現と、稀に見る清潔な技巧を以つて、新進の演奏家としての地位を確立することが出来た。そして昔から彼女を支持して來た聴衆の感嘆と尊敬を、一種の愛情の如きものに強めてゆくことが出来たのであつた。今も、フリードリッヒ・ヴィークの弟子ではあつたが、既に自信ある獨立した藝術家としての、クララ・ヴィークの獨創的な閃きと想像力を、彼女の指を通じて示し始めてゐた。シューマンが當時「音樂新報」誌上に、

「クララ・ヴィークの才能を理解するには、彼女が時代の頂點に立つてゐる演奏家であることを知らなくてはならない。彼女はセバスチアン・バッハが掘りさげた深みと、ベートーヴェンが振りあげた巨人的な拳の高さに徹すると共に、此の深みと高みの間の空間の、かけ橋となり得る現今の新しい音樂運動を知悉してゐる。そして彼女の叡智を少女らしい魅力をもつて我等に分つのである。彼女の將來に對する吾人の期待はあまりに大きく、かへつて危懼の念を感じずる程であるから、敢へて豫想はしないことにする。

かかる天才の將來は、幾重にも垂幕にさへぎられてゐて、その一枚がはらひのけられるごとに、新しい驚異を生むのである。」

と書いた如く、クララは、當時の聴衆に歓迎されてゐた流行のフンメルや、ヘルツ等の作品の演奏から次第に遠のいて、過去に於ける偉大な樂聖達、即ちバッハやベートーヴェンの未だ世に知られざる作品の紹介と、來りつつある新しい時代の作曲家達、即ちショパン、メンデルスゾーン、リスト等の新しい作品の開拓に集中するやうになつた。世馴れた實務家であるヴィークは、聴衆への効果を考へて、最も己の好む作品を演奏せんとするクララの熱情を、長い間押へてきたのではあつたが、最初の演奏旅行に既にショパンの「作品二」を曲目に加へてゐた如く、クララのプログラムは一般と比較する時、際立つて進歩的なものであつた。彼女の名聲が獨逸全國に擴大されるに従つて、彼女の曲目上の冒険は適宜にすすめられたのである。

クララがメンデルスゾーンと呼應して、飽くことなき熱情を以つて、バッハとベートーヴェンを紹介する爲に、各地に演奏會を開いた時代が將に來らんとしてゐた。クララはより深い純粹音樂の紹介者として、大膽な新しい第一歩を踏みだした。一八三七年の三月、クララ十七歳の春のことであつた。

伯林に於ける八回にわたる演奏會の第一夜の演奏曲目には、セバスチアン・バッハの遁走曲、メンデルスゾーンのカプリス、ショパンのノクチューンと練習曲、ベートーヴェンの熱情奏鳴曲等を含んでゐた。現在より百年前の一八三〇年代の聴衆のレベルに對して、如何に此の曲目が進歩的な劃期的なものであつたかは、想像にあまるものがある。

當時メンデルスゾーンは未だ一部の伯林人から拒否されてゐたし、ショパンは未だ無名

であつた。バッハの遁走曲は無論のこと、ベートーヴェンさへも未だ極く少数の限られた理解者を持つてゐたのみで、一般大衆の支持を受けるには不向きな作品とされてゐた。嵐の如き絢爛さと、心をうつ旋律をもつた熱情奏鳴曲さへも、未だ公開演奏はされたことがない状態であつた。

有力な伯林の批評家レルシュターブが、プログラムを「單調だ」と云つたに拘らず、彼女の試みは大成功であつた。クララは次々と八回の演奏會を重ねて、バッハ、メンデルスゾーン、ベートーヴェン、ショパンの演奏を通じて、絶大な人氣を贏ち得ることが出来た。事實未だ演奏もせぬうちから、クララの名譽はプロシヤの首都に謳はれてゐて、例へば王立歌劇場の指揮者であつたシュポンティニを始め、多くの樂界及び社交界の名士が、彼女の演奏に興味と期待を持つてゐたのである。

有名な女流文學者ベッティナー・ブレターノ・フォン・アルニム夫人もその一人であつた。大ゲョーテに愛され、ベートーヴェンをして心臓の鼓動を高鳴らしめた往年の若さは去つて、既に五十歳を過ぎた女性ではあつたが、才糾溢れる彼女の一言一句は尚ほ人々の注目の的であつた。クララはベッティナーに逢つた後、早速日記に「聰明な生々した婦人であるが、音樂に關する限りは、誤つた判断を持つてゐる。諧謔に溢れてゐる」と記してゐる。

ベッティナーはクララを聴いた後に、「僅か十七歳の少女に、あれだけの仕事をさせるといふことは、恥辱である」と云ひ、又「嘗つて會つた限り最も堪へ難い藝術家だ。樂譜もなしにあの娘は何んと氣のきいた風をしてピアノの前に坐つてゐることだらう！ 樂譜を前に坐るデョーラーの方が、何んとつつましい事よ」とも云つた。樂譜を見て弾くことが、かへつて作曲者に對する尊敬の不足を意味することに、ベッティナーの如き知識階級の代表的婦人でさへも、當時は無理解だつたのである。

此の伯林訪問を機會に、ヴィークは長らくクララと逢はなかつたバルギール夫人の許にクララを伴つた。幼い頃に別れたままのバルギール夫人は、今や花の如く匂やかな年頃に成長した我が娘を前に、喜びと感動の目を見張るのであつた。そしてクララは此の母の中に、父にも又繼母にも求め得なかつた暖い肉親の愛情の豊さを發見し、その後は、解け難い絆が二人の間に急速に結ばれたのであつた。

ピアニストとしてのクララの技巧と若さは、彼女の増大する人氣の極く一部分の原因に過ぎなかつた。彼女は演奏家としての自己の力量に對しては、肌に泡がたつやうな不満な思ひもあつたが、彼女には別に深い一種の満足感があつたのである。愛する作曲家の作品の美しさを聴衆に説得する力の自覺である。事實多くの場合、彼女の爲にわきあがつた拍手が、作曲者の爲に終ることがしばしばあつた。

ヴィークはシューマンの音樂を、クララが公開演奏することを許さなかつた。これはシューマンの音樂を、彼が感服しなかつたといふ個人的理由からではなく、一般聴衆の理解を期待するのは困難だと認めてゐたからである。シューマンのピアノ曲には、聴衆の熱狂の原動力となる、一種の絢觸たる演奏効果が無視されてゐたからであつた。

然しクララは音樂的教養の高い人の集る私的な集會では、彼女の心近くに祕藏するロバートの作品を演奏する機會を決して逃さず、絶えず熱心に研究して、作者の精神の中に己を没入することをつとめてゐた。未知の人々に圍まれた他郷に於ても、クララはロバートの作品に始終觸れることによつて、彼の暖い心の囁きを常に身近に聴いてゐたのである。

ロバートの音樂がクララの心の慰安であつた期間は、作曲者にとつても作曲の仕事のみが唯一の救ひであつた。愛する二人の間に、早くも一年の歳月が何の音沙汰も無く過ぎてゐた。當時新たに出版された、彼が心血を注いで作曲した嬰ホ短調の奏鳴曲に、美しい獻呈の言葉を書いて送つた時にも、クララから何のたよりもなかつたことは、いよいよ彼を絶望的にした。彼は一人懊惱しながら、遂に彼女は永遠に失はれたとさへ考へる段階にまで追ひつめられたのである。なんとか文通の方法もあらうにと、クララから音信がないことにロバートの心は深く傷つけられるのであつた。さうした彼のところに届いたクララの手紙は明かに口述筆記をさせられた如き、簡単な文面で、これまでの彼の手紙の束が添へ

られてみた。彼女の書き送った手紙も凡て返送するやうに書かれた依頼の手紙である。クララが未だ十七歳の少女であり、幼時から何事も父ヴィークの専制的な命令に従ひ馴れてきたことを考へねば此の態度は理解出来ないのであるが、これは佞びしく彼女の手紙を待つてみたシューマンをひどく悲しませた。

今や慰めを求むべき母も戀人もないロバートは、兄嫁のテレゼに「クララは以前のやうに暖く愛して呉れますが、僕は諦めました」と書いてゐる。無論これは彼の誇張なのであるが、彼の氣分が如何に暗かったか、想像される。

此の一八三七年の二月について、ロバートは後にクララに書いてゐる。

「貴女の様子が全くわからず、貴女を忘れようと苦しんでみた眞暗な時、その頃二人の心は全く離れてみたのでせう！ 僕は貴女を諦めた——けれども再び昔の痛みがうづきだすのです。……そして毎夜毎夜神に、氣が狂はないやうに、此の苦しみを過ぎさせ給へと祈りました。そして貴女の結婚の記事が出てゐないかと新聞を見るのでした。僕は我身を地に投げ伏して叫びました。聲高く絶叫しました。救はれたい僕は、既に彼女の網に半ば私を引きずりこんでみた或る婦人と、無理に戀に落ちんとしたのでした」

此の婦人がシューマン式の架空な人物か、ヘンリエッテ・ヴォイグト夫人であるかは、はつきりわからない。然し此の時既に二十八歳の青年になつてみたシューマンの煩悶が、クララ以上に深刻なものであつたことは疑ひもないことであらう。藝術家はその現實の生活があまりに堪へ難い時に、かへつて創作對象に己を没入することがあるものである。此の年はシューマンにとつても、豊かな収穫の年であつた。

一方シューマンの交友關係は、益々豊になつて來た。彼は定期的にメンデルスゾーンやダヴィット等と晝食を共にしてみた。大詩人の孫にあたるワルター・フォン・ゲョーテや英國の作曲家スターンデール・ベネットもその仲間であつた。

〔ダヴィッド (1810-1873) は有名なヴァイオリン奏者で、メンデルスゾーンの親友。〕

當時作曲されたシューマンのへ短調ピアノ奏鳴曲も、嬰へ短調と同じく、當時の彼の精神生活の中心を占めてみたクララへの幻想と感情から靈感を得て書かれたもので、ゆるやかな徐緩調の變奏曲はクララの主題によつてみた。その次には、より偉大な息吹きと熱情の力に溢れるハ長調の幻想曲が生れた。

「第一樂章は、私の書いた中で最も熱情的な曲でせう。貴女への深い歎きです」とシューマンは後に書いてゐる。

ヴィークはクララの心を慰め轉換さす爲に、一八三六年の五月からカール・バンクといふ青年を、彼女の聲樂の教師としてむかへた。一つにはシューマンの代りに彼女の音樂の相手をつとめさす竟圖もあつて、一家揃つて彼の來訪を歓迎したのである。バンクはシューマンをも知つてみたので、クララの信じやすい乙女心は、彼を懐しく思ひ、シューマンの近況をききたがつた。ところが、此のバンクといふ青年自身が、美しいクララに特別の興味を持つことになつたので、シューマンに對する彼女のささやかな疑惑を一掃するどころか、嫉妬に狂つた彼は、かへつてロバートを故意に中傷するやうになつた。バンクは又ロバートに向つてもクララの言葉を誇張して告げる等、二人の中を裂くべく暗中飛躍をしたのである。

バンクから、クララは昔を忘れたやうに浮き浮きとして、戲談などを云つてゐるときかされたシューマンは、その瞬間、胸に鋭い苦満を感じるのであつたが、「然しあの人、君に本心を見せる筈はない」と斷乎として信頼に満ちた答へをしたので、それには流石のバンクも一言もなかつたと云ふ。シューマンは三十七年の「音樂新報」五月號に、カール・バンクを攻撃する爲に、彼を戲畫化した一文を草して暗に揶揄したが、此の文章の中に出てくるアンブロジーアといふ女流ピアニストを、シューマンが故意に自分を戲畫化して嘲笑したのだと、クララは思ひこんでしまつて、會つて話せば一言で溶けてしまふやうな蟠りが、二人の間に繁るのであつた。此の時代のクララが、此の上もなく不幸であつたことは、事實であつた。

やがてバンクの心ない中傷にも最後の時が來た。バンクの言動はあまりに効果があり過

ぎて、事ごとにクララを刺戟し、興奮させ、彼女の平靜な生活がかへつて亂される傾向を見てとつたヴィークは、或日のことバンクを客間に招んだ。バンクのクララに対するあまりに馴々しい親密げな態度も、ヴィークの目にあまつたのである。ヴィークにとってクララとシューマンの間に水をさす以上に出たバンクの態度は不愉快でもあり、不遜にも思はれた。即ち、その翌日からバンクの姿は突然、ヴィーク家に現れなくなつたのである。

ヴィークは、クララのロバートへの愛情を壊す爲にもう一つの策略を用ひた。彼女にエルネスティネを想ひ起さしめて、シューマンを若い純な乙女の感情を弄んで捨てて頼みない不眞面目な青年だと思はせようと試みた。然しクララは早速エルネスティネに手紙を書き、エルネスティネから彼等の間にあつた感情は既に過去のものであるといふ、はつきりした心の籠つた返事を受け取ることが出来た。

一八三六年から三七年の冬にかけてのクララの記事の中には、シューマンが彼の經營する音楽雑誌に、彼女の記事を書くことが少ないことを、氣にしてゐるのがしばしば見出される。事實クララのピアノ協奏曲が、ライプチヒのホーフマイスターから出版された時でさへ、シューマンは自ら感想を書かず、彼女の期待を裏切つて、他人に批評を書かせたのである。此の頃のクララは、シューマンの事が話題にのぼつた時などに、冷淡な言葉を吐くこともあつた。これは彼女のロバートに対するあつい心を隠す爲の一種の假面に過ぎなかつた。愛すればこそ、おとなしい彼女の反抗と焦躁が、周囲の人々の心ない言葉、殊にシューマンに欺かれてゐるのだと、毎日のやうに彼女を責める父ヴィークの言葉から我身を守る爲に、違ふ形で表現されたのに過ぎなかつた。

クララとシューマンの間が、かうした望みなき渾沌とした状態にあつた時に、仲間の友人達はどうなつてみたであらうか。メンデルスゾーンには既に美しい許婚者のセシル・ジャンルノーがフランクフルトで待つてゐたし、二回目にライプチヒを訪問した頃のショパンは、マリー・ウォジンスカに、彼の純情を捧げてゐた。又、メンデルスゾーンがコンチェルト・マイスターとしてライプチヒに伴つたグヴィクトも、ロシア生れの一少女と婚約を結んでをり、これ等の少女達はいづれもクララより一、二歳年上の娘達であつた。

今や愛情の深さが世の常のものではないだけに、疑惑と不満とに包まれてしまつた二人のロマンスをその本來の美しい素朴な状態にかへす爲には、積極的な友情と同時に聰明な手腕を持つた、第三者の出現を待たねばならなかつた。

ヴィーク家の友人であり、シューマンとも長らく親交のあつた人に、エルンスト・アドルフ・ベッカーといふ人物がゐた。此の人は非常な音楽愛好家で、シューマンがクララとの交際が最初に斷られた折に、手紙をひそかに此の人の名前でクララに送ることを依頼した人である。一八三七年の夏にドレスデンに旅行した際に、クララはこつそりと彼を訪ねて、シューマンの様子をきき、丁度當時出版された交響的練習曲を弾いてきかせた。二人の戀愛が實を結ぶことを心の底から切望してゐたベッカーは、その時の黙り勝ちなクララの態度から、忽ち彼等の戀愛の不幸な状態を察したので、二人が投げこまれてゐる此の困難な状態から、二人を救ひ出す大役を、自ら買つて出たのである。

同年の八月二日の朝、八月十三日にライプチヒで久しぶりに演奏會をする豫告をしたとの突然の報告を父から受けて、クララは驚いた。既に二年間もライプチヒでは公開演奏をしてゐなかつたし、ライプチヒにはロバートがゐる。彼も聴きにくるに違ひない。彼女は何か又新しい不幸の種が蒔かれるのではないかと、不安になるのではあつたが、頑固な専横な父親に反抗することを諦めて、「私は嫌でも應でも弾かねばならない」と佞びしい口調で、日記に書いてゐる。

親切なベッカーは、クララを慰め、彼女の心を落ち着けるべく努力をした。第三者である彼から見ると、此の音楽會こそ幸福への一つの道を示してゐる如く感じられるのであつた。その上にプログラムには、シューマン自身が「心の叫びだ」と云つた、嬰へ短調の奏鳴曲が加へられてゐるのだ。ベッカーはクララに交響的練習曲の演奏もすすめ、これも幸にヴィークによつて承諾された。演奏會が近づくにつれて、或はいつの間にか二人の間に築かれてゐた溝が、埋められる機會になるかもしれないと、クララ自身も心ひそかに思ふやう

になつて來た。

演奏會の豫告を讀んだシューマンの心は、流石にぎよつとして、ひどく傷けられるのであつた。彼等の愛情がこのやうな事情にある時を選んで、二人の間のひそかな想いを語る音楽を敢えて公開の席上で弾くクララの心がどこにあるのか、ロバートには解せなかつたのである。然し、此の際公開演奏に此の曲目を敢へて加へたクララ的心情を考へる時、十七歳の少女の絶望が、如何に大膽な決斷力をもつて勇敢な行爲をさせ得るか、心をうつものがある。

シューマンが「男でさへ顫へあがるやうなことを敢へてなさつたのですから、もう僕を愛して下さらないのかと思ひました」と、後に書いたのに對して、クララが「貴方は悟つて下さいませんでしたの？ 私の心の想ひを貴方に示す方法が、他になければこそ、私は弾いたのです。ひそかにすることが許されなかつたから、公開の席でやつたまです。私の心が顫へなかつたとお思ひになりまして？」と、此の運命的な演奏會について述懐してゐる如く、彼女は愛情に對して涙ぐましい程に勇敢であつた。

八月十日にライブチヒに着いたベッカーは、クララから喜び迎へられた。大決心をしてゐたものの、若い心は不安に戦慄いてゐたのである。過ぐる年の春にヴィークに強制的に口述させられた、冷酷な手紙と共にロバートから長年に亙つて貰つた貴重な手紙を送り返させられたことがあつたので、クララはシューマンの心が傷つき閉されたのではないかと氣懸りであつた。音樂會にも聴きに來て呉れないかもしれない。……ベッカーは、手紙の束を再び返して貰ふ使ひの役を、喜んで引き受けて、演奏會の前に約束を果たした。

手紙を送り返されたことに、果して氣を悪くしてゐたロバートの心は、ベッカーの言葉にすつかりなごやかにされて、「古い手紙は返せないが、新しい手紙を澤山に書きませう」と、はつきりと答へた。親切なベッカーはシューマンの腕をとつて、會場に伴つたのである。

此の演奏會こそは、一人の間に深く築かれた溝を埋め、再び純粋なお互ひの愛情を自覺する動機となつた。父ヴィークが知らず識らずこの音樂會を開く役割を務めたことは、誠に運命の皮肉である。舞臺に立つたクララは、大勢の聴衆中の唯一の人、溢るる眞實の心を傳へたいと切に思ひ、聴衆にまじるロバートも、落着かぬ氣持で人目をさけて坐つてゐたのであつた。然しクララの演奏がはじまると、ロバートはいつか聴衆の存在などは忘れ果て、彼の目は長らく逢はなかつた彼女の外見には乎靜な落着いた態度の中に、彼の心の有無を捜し求めるのであつた。プログラムはすすんで彼の作品が始まつた。ロバートは己の音樂の言葉によつて、彼女の心の答へを聴くのである。最早シューマンにとつては何の疑ひもなかつた。彼女のしなやかな體軀の中に漲つてゐる情熱の嵐は、何一つとして彼とかかはりのないものはなかつた。高い香氣と共に彼自身の情熱は、彼女の演奏を通じて彼の心に甦り、新しい愛と生命を、ひしひしと彼の胸に暖く流しこまないではおかなかつた。一度演奏に心を打ちこむと、クララは實に勇敢であつた。彼女は父ヴィークの前で、何千人の聴衆の前で堂々とロバートへの切なる愛情をかたむけて演奏したのである。然し演奏會が濟み、興奮が靜まると、彼女は再びやさしい少女に返つて、己の大膽な行動が不安になるのであつた。

その夜、シューマンは新しい手紙を書く爲に、我家に走り歸つた。交渉が破れて一年と六箇月ぶりに新しい手紙が彼女に届けられた。日付けは演奏會の當日になつてゐる。そして花束に添へられた封筒の上には

「苦しみと希望と絶望に満ちた、長い沈黙の日々のあとに、この手紙は昔ながらの愛情のうちに受け入れられねばなりません。もしもそれが無いのなら、このままご返送ください」

と書かれていた。クララは何の躊躇することもなく、直に封を切つた。

シューマンからクララへ 八月十三日

貴女は今でも眞實で、しつかりしてゐて下さいますか。貴女への信頼はゆるぐことが無いにしても、

世界一に愛する者から何の音沙汰もない時、最も強い心さへも亂れるものです。

僕は何十度となく、思ひめぐらしました。凡ては僕に「欲して行動すればきつと成就する」と告げるのです。もし貴女の誕生日九月十三日に、僕の手紙をお父上にわたしていただけるなら、どうか簡単に「ハイ」とお返事を下さい。

お父上も今は僕に對して好意を持つてみて下さいますから、貴女が懇願されれば拒絶なさいませんでせう。僕はこれを聖オーロラの日に書きます。何よりも「我々が欲し、行動すればきつと成る」ことを、固くお信じ下さい。この手紙の事は誰にも云はないで下さい。凡てを壊すと困りますから。そして「ハイ」といふお返事を忘れないで下さい。先のことを考へる前に、私はその安心がほしいのです。僕は全靈を傾けて本氣で申し上げます。そして僕の名を署名致します。

ロバート・シューマン

「最初のお手紙を、ベッカーさんが届けて下さった時の私の氣持！ それは冷たく、眞剣な、それでゐて美しく、ふさはしい嚴肅さに満ちたお手紙でございました。お手紙は私を云ひつくし難い程に幸福にして下さったのです。しかも二年前と同じ氣持でないなら、封のままで返せとの上書に、私は氣を悪く致しましたの。貴方は少し慘酷に私の愛を疑つていらつしやいますのね、私は理由の考へられる時でさへも、貴方を少しも疑ひませんでした」

とクララは、一八三八年の七月に、その時のことについて書いてゐる。

ヴィークは此の運命的な演奏會を、偶然にも彼等二人にとつて意味深い聖なる日に選んだのであつた。聖オーロラの日、八月十三日は、サクソニーの曆では聖クララの日と聖ユースセビュースの日にはさまれてゐたので、二人は彼等の戀愛の曙を象徴する日と、ひそかに記念してゐたのである。

ロバートの手紙に對して、クララは早速返事を書いた。

クララよりシューマンへ  
一八三七年八月十五日

ただ、簡単に「ハイ」とだけ書けと仰しやいますのね。短い言葉。けれど大切な言葉。私の心のやうに云ひつくし難い愛に溢れてゐる心が、全靈をもつてその言葉を云へないとお思ひになれまして？

私は云ひます。そして私の心はいつも貴方にさう囁きます。ああ私の心の苦しみ、多くの涙を描くことが出来ませうか、到底駄目なことでございます。運命は私達が間もなく再び語りあへることをきつと望んでをりませう！ 貴方の御計畫は危險な氣が致しますが、戀する心は危險を恐れませんが、すからもう一度「ハイ」と申し上げます。

私の十八歳の誕生日を、神さまは悲しい日になさるのでせうか。いいえ、それはあまりに恐ろしい。私も長い間「きつとさう成る」と信じてきました。世界の何者も私を躊躇させません。私は父に、若い心も固くなり得ることを見せるつもりでございます。

取り急ぎつ

貴方のクララ

ヴィークに知られることなくキューピットの役をつとめたベッカーは、十八日にライブチヒを出發してフライブルクの我家に歸つた。彼の鞆の中にはシューマンの近作「幻想作品」中の「夜に」の草稿が大切にしまはれてゐた。それには次の如き署名がしてあつた。

一八三七年八月十八日

懐しいベッカーに

ロバート・シューマン

面映ゆく然し愛情と共に

クララ・ヴィーク

## 第九章 嵐

ロバートもクララも、必死の思ひで、九月十三日の彼女の十八歳の誕生日にヴィークに

わたす手紙に、唯一の希望をつないであた。ヴィークの心を傷けぬやうに、此の計畫は細心の注意をもつて巧妙にやりとげねばならぬ。

作品をクララの演奏會の曲目に加へられたことを感謝して、ロバートがだした手紙が、ヴィークに快く受け入れられたのを見て、二人の心は勇氣づけられた。然しクララは、凡ての計畫が水の泡になるやうな、偶然の運命の悪戯が起りはしないかと、心を痛めてゐた。ナンニーと呼ぶ忠實な召使ひに託して、演奏會以後シューマンとの文通が堰を切つたやうに續けられてゐたからである。

八月十九日 取り急ぎ

懐しいロバート、忠實で無口なナンニーにもたせて、一筆お便りします。コレラが発生したと昨日ききました。心配なので一寸お報せ致します。どうかお氣をつけ遊ばして下さいね、……私のために……あなたがいらつしやらない私の生涯が、どんなになるか、お考へになつて下さいね。

誕生日にお書きになるまで、どうぞ父に二人の事は何も仰しやらないで下さいまし。貴方に對してよい感じを持つてきて呉れたやうですが、萬事ゆつくり運ばねばなりません。

お目にかかつてお話ししたい！ 私の切ない望みは到底書けない程ですの……機會がみつければお報せ致します。今朝はすつかり決心して、貴方のお宅のところまで参りましたの。心の方が一足先に行つてゐただけけれど、突然私は立ちどまり、貴方のお部屋の窓を見てみると……涙が泉のやうに目から溢れてきました。ああ、何んなに目があつくあつくなつたでせう。私は心一杯に情感を漲らせて歸つてまゐりました。貴方の愛への固い信頼は、私を幸福にしてくれます。私の心も、私の凡ても指輪と共にお届け致します。

何か仰しやる事がございましたら、どうかナンニーに御傳言下さいませ。私が貴方を愛するやうに、ナンニーは寡黙で信頼することが出来ます。この手紙から、私は何んなに心配してゐるかお解りでございます。早くお目にかかることが出来ますやうに。神かけてどうかお氣をつけ遊ばして下さいませ。

永遠に貴方の クララ

クララはナンニーを使ひに、九月九日の夜、親友のエミリー・リストの家を訪ねるから、歸り途で逢ひたいとロバートに告げた。忠實なナンニーに付き添はれて、久しく逢はなかつた二人は、その夜お互ひの手をかたく握りしめて、しばらくは言葉もなかつた。感動と緊張に二人は胸が迫つて、お互ひに不自然に固くなつてゐた。半年後の一八三八年一月末に、クララは維也納からその夜の事を追想してゐる。

「私達が始めて再び逢ひ見た時、貴方は冷淡で硬くなつていらつしやいましたのね、私ももつと暖くしなければいけないのに取り亂してをりました。自分を支へることが出来なかつたのでございます。

貴方が帽子をとつて、右手で額をお撫でになつた時、月光が美しく貴方のお順に光りを投げかけました。その時、私はかつて覺えたことがない喜びを味つたのでございます。私は最愛の人を再び見出したのでした」

待たれ、そして恐れてゐた九月十三日が遂に訪れた。ロバートからは正式の結婚申し込みの書状と共に、クララの繼母及びクララに宛てた手紙も届けられた。ヴィークへのシューマンの手紙は、概略次の如きものであつた。

申し上げたい事は誠に簡単なことながら、適當な言葉が見あたりません。ペンを持つ私の手は顫へてをります。私の手紙が書式に適はず、表現が不充分でありましても、何卒御諒承下さい。

今日はクララの誕生日です。私にとって此の世で最愛の人が、始めて日の光りをあびた日です。私の人生に深い關係を持つた人の此のよき日は、私にとつても特別に深い意味があります。私は今日の如く冷靜に、自分の生涯を考へたことは、嘗つてなかつたことを告白致します。

私は人間が未來に對して云ひ得る限りの範圍で生活を保證され、計畫に滿ちた頭腦とあらゆる高貴なるものに靈感を受ける若い心と、能く仕事をする手に恵まれ、將來活動する輝しい舞臺をも約束され、可能な限り凡てを成就出来る熱意を持ち、多くの人に愛され尊敬されても居りますが、私が渴望し、又心の底から眞實に私を愛して呉れるその人と、別れてゐる苦惱に比較する時、これ等がいつた何んでありませうか。幸な父君であられる先生は、此の人が誰であるか御承知でいらつしやいます。どうか彼女の目に私の言葉の眞實をお尋ね下さい。

十八箇月の間、先生は運命そのものの如く、私をお試みになりました。先生に對して私が怒ることが出来ませうか！ 私は先生を傷つけ、先生は私に苦行をお命じになったのです。どうか尚ほ私をお試み下さい。不可能な事さへ御要求になさらねば、先生の御希望に歩調を揃へてゆかれることと信じてをります。そして先生の御信頼を再び贏ち得るものと信じます。

先生は私が高邁な野心を持つてゐることを御承知です。私が男らしく眞實であることを、將來御承認いただけましたら、何卒我々の魂の結合に祝福をお與へ下さい。私共の幸福を完全に爲す爲に兩親の御許し程に望ましいものはないのであります。私の生命の凡てをクララに結びつけるものは、決して一時の興奮や熱情や外面的なものではありません。このやうな祝福された条件のもとに行はれる結合は稀有なものであるといふ確信と、凡ての人々に幸福と平安をまき擴げる、敬愛する高貴な少女自身が、我々の幸福をもゆるぎなきものとするのであります。

先生も幸に此の結論に到達なさるやうでしたら、どうかクララの將來に對して、速急に何事も決定しないことをお誓ひ下さい。私も又先生の御意志に反して、クララに告げぬことを名譽にかけて誓ひます。お二人が長期の旅行にお出かけの時は、何卒文通をお許しいただき度く、お願ひ致します。私は將來の幸福を、信頼して先生のお手におまかせします。私の地位、才能、人格は、先生の慎重な御返事をうける資格あるものと思つて居ります。御目にかかり御相談が許されたら一番結構に存じますが、愛情に満ちた不安な心が、能ふ限りの深い眞實のうちに、先生に以上を懇願申し上げました。何卒寛大にお受けいただき度く、先生の古い友を、再び友にいただき、優れたお子様のよい父上におなり下さるやう切に希望致します。

ロバート・シューマン

クララ宛の手紙には、簡単に「愛する愛するクララ、苦痛に満ちた別れてゐた日のあとに、私がお父上に書いた凡ての事を、何卒愛のうちに支持して下さい。他には何も申し上げられませんが、どうか私の足りぬ言葉をおぎなつて下さい」とあつた。二人は此の手紙の効果を、忍耐深く信頼の氣持をもつて待つてゐた。その後ヴィークに逢ふ祈など、ヴィークの態度がやや昔の親密さをとり戻してきたのをロバートも感ずる程であつたし、クララも又シューマンの最近の作品について父が熱情と尊敬の言葉で語つてゐるのを、悦んで見守る日などもあつた。然しヴィークの心は、若い二人が考へるやうな單純なものではなかつたのである。

十八歳の誕生日に私がどんなに苦しんだか、貴方には到底お信じになれないでせう。父は貴方のお便りを見せないばかりか、私宛に御封入の手紙も見せないのです。あまりに口惜しく、冷淡過ぎます。父には感じなくとも、母には解らない筈はございません。私はその日一日中、泣いて泣いて泣き暮してしまひました。私宛には數行書いて下さつたことを、知つたのみでした。誕生日だといふのに、こんな不當な取り扱ひをうけねばならず、一生のうちで一番不幸な誕生日でございました。

二三日たつても、私はまだ氣が落ち着かず、涙が絶えずはらはらと流れました。遂に父は少し心配になつたらしく、どうしたのかと尋ねましたので、私は眞實を申しました。すると父はお手紙を机からだして私の前に擴げて、「お前には見せたくないのだが、あまりわからな過ぎるから見せるのだ」と云ひましたので、私も自尊心を持つてゐたので、讀みませんでした。

心の傷手は、容易には癒え難いのでございます。その夜、烈しい雷雨になつた時、貴方のことが案じられて私は又泣いてしまひました。私の唯一の慰めは、貴方の肖像畫のみでございました。

その後行はれたヴィークとシューマンの會見は、完全に不調に終つた。感じ易いシューマンの心に、忘れ難い、苦い記憶を残して、彼の心は、尊敬してゐた師が彼に露骨に示した冷酷と嫌惡の情に、深く傷つけられるのであつた。彼の前に冷靜な態度で立つてゐるのは、未知の人間に過ぎなかつた。ヴィークは拒絶するでもなく、承諾するでもなく、明答を避けたのである。

シューマンは九月十八日の手紙の中に述べてゐる。

お父上は、我々が考へた以上の金が必要だと云はれて、途方もない金額を提案されました。此の問題について、云ひまるめられぬやうになさい。又「貴方はきつと涙を流すことがあるだらう、クララはお客好きだから」とも云はれました。クララ！ それは本當ですか？ 笑止なことではありませんか。彼は眞實の裏づけのあるものは何ものも掘りさげることが出来ないのです。正義と道理は我々の味方であり、我々を守護して呉れませう。

遂に二人は一切の文通も、二人だけで會見することも禁じられた。

……………僕は心の限り貴女を信じてゐます。そしてそれが僕を支へて呉れます。然し貴女はお考へになる以上にしつかりしなくてはなりませんよ。お父上は自ら恐しい言葉を吐かれました。「何事にも動かされぬ」と。彼は策略が駄目なら、力づくでも貴女に強制するでせう。どうか凡てを恐れて下さい。

……………今日僕はまるで死んだやうに、くさつてゐて、美しい想ひを浮べることも出来ません。貴女の面影すら飛び去り、貴女の美しいまなざしも心に描くことが出来ません。僕の最も聖なる心情は、毒され傷つけられました。貴女が一言云つて下さつたら……………僕がどうしたらよいか、どうか仰しやつて下さい。それでなければ身を捨てて運命の手にゆだねてしまひませう。二人だけで逢ふことすら許されないのです。人々の前、第三者の前で逢ふなんてまるで見せ物です。考へるとぞつとする程に薄ら寒く、心を痛めます。

……………お父上の拒絶に對して、高貴なる理由をむなしく捜してみました。藝術家として貴女が婚約によつて、犠牲を拂はれるとか、貴女が何んとしてもまだ年が若過ぎる、といった理由をです。然しこれ等は彼にとつて理由ではないのです。充分な資財と爵位を持つた人なら、彼は誰にでも貴女を投げ與へるでせう。その他は演奏會と巡遊が彼の重大關心事なのです。この世にも美しい私共の努力のさ中に、父上のその考へが、貴女の忍耐を悪用し、私の力を粉碎し、又貴女の涙を嘲笑するのです。

……………貴女からの指輪は「どうか貴方のクララの父さまの不平を云はないで下さいね」と、云つてゐるやうに見えます。貴女は先日から僕に三度も「しつかりして下さいね」と云つた。僕はそれが貴女の魂の深みから出て來たのを感じた。今日の僕が氣が弱く、お父上の機嫌を損じたとしても、どうか僕に腹を立てないで下さい。僕は正しいのです。

どうか努力して、如何にすべきか考へて下さい。僕は子供のやうに従ひます。萬事はこんな状態で長くは續きますまい。自然は堪へ得ないでせう。名譽にかけて、此の手紙に折り返しお返事を下さい。

では別れる前に、愛する者よ、我々の前に横たはる運命に對して、勇敢に抗する勇氣があることを、名譽にかけて誓つて下さい。僕が右手の指二本をあげて、此の瞬間誓ふやうに……………僕は決して貴女を思ひ切りません。どうかどうか信じて下さい。神よ二人を救ひ給へ！

永遠に貴女の ロバート

ロバートはクララの返事を恐怖の念のうちに待つてゐた。クララの雄々しく、やさしい心が、義理と愛情の苦しい試煉に、ただ一人直面してゐることを、彼は充分に知つてゐたのである。やがて彼女の信頼に満ちた手紙が、待ち兼ねてゐたロバートの許に届けられた。彼はその手紙の餘白に、「九月二十六日、無限の歡喜のうちに讀む」と自ら記してゐる。

貴方はまだ私をお疑ひになりますの。私は弱い少女ですもの、それは許してさしあげます。さうです、弱いけれども強い魂を持つて居ります。變らぬ心です。

これで貴方のお疑ひを、充分に拂つていただけませう。今まで私は、いつも大變に不幸でしたの。どうか此の手紙の終りに、一言保證の言葉をお書き下さいませ。そしたら私は安心して廣い世界に出て参ります。私は父に元氣にやること、あと數年間は藝術の世界に身を捧げることを誓ひました。今後貴方は私について色々とお聞きになるでせうし、聞かれれば又疑ひも起るでせう。どうかその時には、「あれは僕の爲にしてゐるのだ」とお考へ遊ばして下さい。貴方がもし變心なされば、一度しか愛せない私の心をお破りになるのです。

そして此の手紙の表には「開封遊ばして、又どうか私にお返し下さいませ。私の心の平和のために、どうぞ」としてゐる。

あのやうな尊いお言葉は、お返し出来ません。僕は志操堅固な人間です。もう昔のことは云はず、我々の人生の決勝點にむかつて、視線をちつとそそぎませう。

貴女が私からお去りになる前に、一つお願いがあります。ひそかに御目にかかり得た祈々に與へていただけ、したい Du を約束していただきたいことです。どうか僕の燃ゆるが如く愛する許婚者になつて下さい。そしていづれは……………今は接吻と共に、さよなら  
貴女のロバート

此の手紙に書かれてゐる如く、クララの長い巡遊の旅を前に控へた二人は、熱情に堪へられず、人通りの少ない路傍等で、勇敢にもしばしの逢瀬を楽しんだのであつた。

「貴方を通じて、私は強められたと感じます。貴方のお心と高貴な自尊心は、私に新しい信頼の氣持をもたらして呉れましたの、私は起り得る最悪の事態に對しても、用意が出来ました。昨日の夕べは何んと早く過ぎ去つたのでせう！ まだまだお話することが、澤山にございますのに。私は涙と喜びの前をさまよつてをります。手は顫へ、心は高鳴つてをります。心の奥深く感じ、口で云ひ現せないものは、きつと神の御力だけが貴方に囁くことが出来ませう。父の侮辱による苦惱も貴方のやうな高貴なお心を得た幸福で慰められます、あらゆる私の感情は、私を押しつぶしさうでございます。私の心懸りは凡て我が事ではなくて、貴方の爲なのでございます」

此のやうなクララの心境に對して、ヴィークは昔ながらの方法を再び講ずる他によい思案もなかつたとみえて、維也納への七箇月に亙る大旅行を、計畫した。獨逸音樂の發祥の地である維也納は、歐洲音樂界の檜舞臺であり、當時は維也納で成功すれば、世界を征服したと云つても過言ではなかつた。

クララは演奏家としての大きな野心を感じつつも、長い別れを前に、暗憊たる氣特にならざるを得なかつたし、シューマンも又、絶對の信頼を示しながらも、

「我々は長く互の安否をきかないかもしれません。手紙は父上に押へられるやもしれず、僕のことを中傷されるかもしれません。貴女を忘れたとか何んとか……どうかさうした言葉に耳をかさないで下さい。たとへ世界に悪が存在しても、我々は觸れますまい」

と、不安にかられて書かずにほられなかつた。此の手紙に對するクララの返事は、ヒステリックなロバートの焦躁感に影響されてゐないばかりか、かへつてロバートの弱氣を勵まし慰める、健氣な言葉に満ちてゐる。

クララとロバートの昔の子供と大人の關係が、今や逆になつたやうに、彼女の留守中の孤獨感を思つて不安になるロバートは、悲しいまでにクララの心の豊さに、もたれかかつてゐるのであつた。未だ十八歳の少女ではあつたが、クララはロバートと結婚する日がくるまで、父の命令に従つて、演奏家としての仕事を専心開拓してゆく決心を、雄々しくも固めてゐたのである。

今やロバートにとつてクララの愛と助力は、缺くべからざるものとなり、彼女を失ふことは、彼の藝術家としての生命を、精神錯亂か死にまで追ひつめることを意味してゐた。クララの存在と彼女のやさしい激勵がなければ、シューマンの藝術家としての精神の平衡は脅かされ、彼の心の平和は絶對にあり得ないのであつた。

一方クララは又演奏家としての自分の能力を反省する時に、その凡てが父の不斷の努力とよき指導に負ふことを自覺して、父の愛情に感謝を捧げずにはゐられないのであつた。彼女は此の父と許婚者を裏切らず、嵐と破壊を出来る限り避ける爲に、てきばきと率直に責任をもつて、凡てを處理してゆくのであつた。

私は、心を傷ける悲しい言葉に、毎日耳を傾けねばなりません。母は、貴方を不實になれる方だと申しました。不實？ まるで貴方のクララが彼女のロバートを、それ以上知らないかのやうに！

どうか母の手を経ず、直接父にお便りなさつて下さい。母にお逢ひになる折がありまして、何卒母をお信じ下さいますな。こんなことを申し上げるのは苦しいのですが、母は時々よく考へないで物を申します。私はしばしば氣づいてゐるのでございます。

貴方は私を欺くことかお出来になりますの！ 私の口に云へぬ程の愛情をそんな風に仰しやつて、御自分を赦すことがお出来になりますかしら。何事がやつて來ようとも、私は充分な勇氣を持つてゐると思ひます。

今日は、一瞬間も貴方を疑ふことなく、父の云ふことをちつと聽いてゐることか出来ました。信じる心は決して動かされません。如何なる輝しい機會が私の前に訪れても、私は凡てを喜んで拒絶します。破れた心を抱いてゐては富がいつたい何になりませうか。私を幸福にするのは愛だけでございません。私は貴方の爲にのみ生きてをります。そして凡てを貴方に捧げます。

今私は最愛の貴方から、別れて行かねばなりません。どうか御機嫌よう。貴方を想はぬ一瞬とてもないことせう。

貴方の眞實な クララ

此の率直なクララの愛の言葉にロバートはひどく感動して、手紙の裏に「私は豊かにされた。貴方が私を見棄てれば、凡ては千々に碎けませう。どうか私を棄てないで下さい」と書きつけるのであつた。

「仕事をしようとする私の力を、何が奪つたのであらうか。ピアノに坐つて即興的に弾かうとすれば、色が消え失せ、書かうとすれば、考へなくただ書くばかり、ただ一つ私は大きな字で、そして和絃で『クララ』とそこいら中に書きたいものだ」

クララの出發が切迫すると、シューマンの氣持は益々苛立つて、あらゆる機會を利用して彼女と逢ふべく努力するのであつた。クララは十月八日に告別演奏會をゲヴァンドハウスに開催した。メンデルスゾーンに導かれて彼女がピアノの前に坐つた時、シューマンの心は誇らしい氣持に溢れるのであつた。クララは彼の爲に嘗つてない程立派な演奏をした、とロバートは思った。そして出口で彼女の出てくるのを待つてゐたが、クララは父ヴィークや友人達にとりまかれてゐて、二人は儀禮的な挨拶だけしか取交はすことが出来ない。翌日ロバートは早速次のやうに書かずにはゐられなかつた。

「戸口で逢つた時のことを、僕は決して忘れない。このクララはお前のものだ、と僕は思った。それなのにそばに行けない。手を握ることすらも出来ない。あの會揚に僕の立場を想像出来た人があつたでせうか、貴女さへもむづかしかつたでせう。僕は軋り殺され、祝福され、疲労し、熱情に燃えたのでした。いつたい此の先どうなるのでせうか。貴女の心からの『よろしく』を、従弟が傳へて呉れましたので、一昨夜よりやすらかに眠ることが出来ました。然し僕は病氣です、大變に悪いのです、もう一撃やられれば、腐つてしまひませう」

出發を前に二人は、もう一回逢ふ祈に恵まれたらしい。

「昨日僕の胸で貴女が泣かれた時、貴女は天國と地獄を見せて下さつた。僕のクララ！僕は貴女を愛します、貴女も僕を愛して下さいませうね！どうか見捨てないで下さい。僕は貴女に縋つてゐるのです」

ロバートの手紙は益々激情的になつてゆく。

「貴女の最後の手紙に僕は接吻をした。何んなに僕を力づけ、高揚して呉れたことだらう、今に貴女は僕と共に何んなに幸福になるだらう！

昨夜の九時、僕の想ひは貴女と共にありました。時間を貴女がきめたのは、何んといひ思ひつきでせう。僕は近頃はじめて聲をだして泣いた。貴女が僕の氣持を知つてゐて下さるやうに、云ひつくし難い程に、貴女の存在を近くに感じたのです。貴女の最後の手紙のもたらした感動は、到底言葉では表現出来ません。ただ僕の行爲のみがお答へする筈です。」

## 第十章 クララ維也納に行く（一八三七年—一八三八年）

一八三七年の十月十五日、クララは維也納への巡遊の旅にのぼつた。一行は、ヴィーク氏と女中と彼女の三人である。簡素な旅行服に身を包んで、馬車に乗りこんだクララの大きな眸は、一抹の愁ひの翳が宿されてゐたものの、内心の動揺は色にも見せず、靜かに澄みきつてゐるのだつた。彼女の若い生命の最初の愛の危機は、將來への不安を孕んだまま、一先づ旅行によつて中絶したのである。

快く震動しながら、馬車はボヘミアのプラークへの道を、ゆるやかに進んでゆく、秋の大氣に輕やかな馬の足音ごとに、愛する人の住むライプチヒとの隔たりが、次第に擴がつてゆく。馬車の動搖に身をまかせてゐるクララの心には、痛い程に彼女を失つたロバートの悲しみが疼く。最後にちらりと見た、青ざめて何か云ひたげにしてゐたロバートの顔、その顔にありありと浮んでゐた悲哀の色は、クララの網膜に深く刻みつけられてゐる。何んとしても文通しなければならぬ、二人の爲に。と傍に嚴しい顔を正面にむけてゐる父の横顔を見ながら、クララは切に思ふのであつた。

彼女に手をさしのべ、救ひを求むる幼子にも似たロバートの心をひそかに抱きしめつつ、兩親の前に客人の前にいつも何氣なくにこやかに微笑してゐなければならぬ辛さに加へ

て、今やクララは一人前の藝術家として最大の試煉に直面しなくてはならない。傳統と榮光に誇る世界の檜舞臺、維也納の聴衆を前に、か弱い少女の身を以て藝術家としての全靈全力をつくして挑戦しなければならない。

父ヴィークの我が娘クララに對する期待は、果しなく大きなもので、クララのつつましい心は、ひそかに重荷に感じずにはゐられない。多くの天才を生み育て、彼等を苦しめ滅した維也納、モツアルトやシューベルトの如き大天才すらをも、貧困と絶望とのうちに死なしめて顧みなかった維也納、おまけに當代隨一の大演奏家として世界に謳はれてゐるタールベルグが、現在維也納の樂界に君臨してゐるのである。

此の藝術の都に於ける藝術家としての成功と、その成功がもたらす獨立のみが、ロバートとの悲戀を幸福な解決に導く唯一道であることを悟ると、十八歳のクララは雄々しくも必死の思ひで、此の戦ひに勝つことを固く決心するのであつた。

クララは途中ドレスデンでシューマンの作品等を私的な集りで演奏し、幾日かの馬車の旅を終へてプラークに着いた、若い二人はヴィークの鋭い目を逃れつつ、ともかくも非常な苦心の末に、文通をつづけることが出來た。このやうな條件の中で、二人は將來の設計に對して、自由に意見を述べあつてゐる。

十一月三日 プラーク 夜の九時  
〔シューマンの筆跡で、「七日入手」とある〕

何故御手紙を下さりませんか？ もう三週間何の音信もないので悲しく存じます。私の知らぬ間に父が書いた手紙に、どうして返事を下さらないのですか。ナンニーは父に信用があるので、父のすることは全部知つてをり、私を大變愛して呉れてゐるので、何んでも教へてくれますの。父の手紙に何んとお返事なさるか、どうか私にもお教へ下さいね。

私達は先週の日曜日にドレスデンを出發しました。美しい朝でエルベの流れも美しく澄んで、空の影を映してをりました。太陽はしたし氣に「あの人に、よろしくと傳へてあげませう」と囁くやうに輝いてをりました。陽光が公園をぬけて貴方の窓邊まで這ひよつてゆくのが私にははつきり見えるのでした。貴方にもおわかりになれたかしら。

父が私を失ふことを考へる時、何んなに不幸かと考へると、私の氣分も滅入ります。子としての義務をも意識してをりますけれど、私はやつぱり貴方を量りしれぬ程に愛してをります。父は私が貴方を忘れるべきだと思つてゐるのです。忘れる！ この言葉は私を戦慄させます。父は愛する心の強さを知らないのです。……ああ、何んと書いてよいか……こんな感じてゐるのに、少ししか云へない！ 心の聲がきつと貴方に告げることでせう。私の心は常に貴方と共にをります。私の心には硬い結び目が出ました。私は決してそれを解きません。ではどうか御手紙を下さいませ。

貴方の忠實な クララ

一八三七年十一月十二日 夜 プラーク

愛するロバート

御手紙は云ひつくし難い程に、私を幸福にしました。ナンニーが渡して呉れた時、私は悦びに顫へてしまひましたの。

でも先づお小言を云はせて下さいな。貴方は何んといふ慾張りな方なのでせう。始めには八週間に一度づつで手紙はよいと仰しやり、その後四週間に一度と仰しやつておきながら、私が三週間に一度差しあげたのに苦情を仰しやいますのね。もう旦那様らしくお振舞ひになるおつもりなのでせう！ よろしくございます。

でも「望みが沈んでゆく」と仰しやるのは、何の意味ですか？ 私の手紙からそんなこと、おひきだしになつたのでしたら、悲しい。何故つて、私は唯一つの望みの爲にのみ生き、唯一つの想ひに勵まされてをりますのに、どうして貴方はそんな事がお書けになれるのでせう！ こんな話はもうやめませう。

私がユーセビュースやフロレスタンを見る目を失ふ程に、素晴らしいダイヤモンドが出現して、新聞紙上に「クララ・ヴィーク嬢、眞珠の鎖氏、又は金剛石王冠氏と婚約す」との記事を御覧になる……眞面目に申し上げますが、私は學校に連れてゆかれるやうに、簡単に祭壇に導かれる程子供でせうか？ ロバート、それは違ひます。貴方が私を子供と呼んで下さるのは、本當にしたしくて嬉しいのですけれど、もしもまだ子供だとお考へなら、私は立ちあがつて「違ひます」と申します。

どうか、私を完全に信じて下さいませ。貴方は微笑んでいらつしやるのね、私も微笑んでをります。今

丁度、月光が「よろしく」と射しこんできました。愛するロバート、二人の問題はこのままそつとしておきませう。そして將來はどうか私を、貴方の眞實なクララとだけお呼び下さいませ。

今日は音楽院で演奏會をして、十三回もよびだされました。大變なことですわ、こんな歓迎を受けたのは始めてですの。何うしてよいかわからず、私が困つた様子が御想像がつくでせう。演奏中も貴方への思ひが私を勵ましてくれました。

時計を見まそう！ まあ大變に遅いこと、ゆつくりやすまなくてはならないのに、すつかりお喋りをしてしまいました。

維也納に到着したクララは先づアルンシュタイン男夫人の邸で、私的な音樂會を催して、音樂に眞の理解を持つ選擇された多數の賓客の前で演奏をした。大成功であつたので「氷は破れた。臆病な心はまるで魔法の如く消え去つた」と、クララはその日の日記に書いてゐる。

クララの通信によると、當時の維也納では、ショパンは一部の人々には相當知られてゐたが、ライプチヒでは神の如く謳はれてゐるメンデルスゾーンも、未だあまり人氣がなく、「無音歌」の樂譜は店先に積み重ねられてゐた。

シューマンの名は「音樂新報」の編輯者としてのみ知られてゐた。「作曲家ですつて？ 何んな作曲をするのです？」といふ人々の質問は、クララにシューマンのプログラムによる集りを是非開かうとひそかに決心させるのであつた。彼女は「音樂新報」の維也納駐在員の仕事をしてくれてゐて、ロバートの親友であつたフィショフと早速相談して、フィショフ邸で「シューマンの夕」を一夕催すことになつた。

十二月十四日の第一回公開演奏の日が、やがて近づいて來た。演藝新聞に現れた批評家ボイエレの文章は、まるで相撲でも見るやうに、演奏家を對抗させる當時の維也納の傾向をよく代表してゐる。

「獨逸に於て、ショパンやリストと並び稱されてゐる、此の少女藝術家が、タールベルグに肉迫する地位を識ち得るか否か、維也納こそ決定せねばならぬ」

タールベルグは、巴里に於てはリストの競争者と目され、二年前に維也納に移つてきた大ピアニストで、エラールピアノの構造に、その頃加へられた改良の波にのつて、音量と音色の分野に絢爛たる効果をあげる新しい技巧を開拓し、又當時の習慣であつた歌手や管絃樂の援助なく、ピアノのみによる獨奏會を催した最初の人であつた。メンデルスゾーンはタールベルグを評して「凡ては美しく計算され、工夫されてゐる」と激賞したが、シューマンは「あまりに妥當過ぎる演奏」に、満足出來なかつたらしい。

音樂協會で催されたクララの第一回の演奏會の聴衆は、極めて選擇された人々で、維也納の樂界社交界の有力者達で網羅されてゐた。勝利は壓倒的なものであつた。日記によれば二曲を繰り返へし演奏し、十二回も舞臺に呼びたされた程の盛んな拍手を受けたのである。クララはシューマンに、

「昨日は、長い間期待してゐた運命を決する日でございました。私の成功を到底貴方には申し上げられませんか。フィショフが貴方にお報せしたと云つてゐました。自分の口では適當にお話し出來ないのです」

續いて十二月二十一日に、第二回演奏會が催され、維也納では未だ曾て演奏されたことがなかつたセバスチアン・バッハの遁走曲が、プログラムに加へられた。ヴィークの妻への手紙には「クララは維也納の話題になつてゐる。彼女は、凡ての人の心を捉へ、宮廷に於ても同様である。新聞は熱狂して彼女の記事を掲げ、月桂冠を彼女の爲に編んでゐる」彼の満足の様が察せられる。

第三の演奏會は一八三八年の一月七日に決定した。ライプチヒで一人侘びしく降誕祭を迎へてゐるであらうロバートを懐しく忍びながら、クララは書くのであつた。

#### 降誕祭の夜

貴方とお話しする以上に、楽しく降誕祭のお祝ひが出來ませうか。私は今日は悲しうございますの、降誕祭の木がないのですもの。貴方は何處にいらつしやいますの、御幸福でいらつしやるかしら？ さうだと思ひます、愛の木が焰をたてて、燃えてをりますから。

今日は一つの思ひが私の心を占めてをりました。これから三年の間に何んな風になることでせう！  
きつと貴方も同じことを考へていらつしやるのではないでせうか。

一月の七日は第三回の演奏會、明後日の火曜日には、皇后様の御前で弾きます。ディアベリから最近出版された、シューベルトの遺作の四つの手の爲のピアノ曲を、私に獻呈して呉れました。何故だか自分にも解りませんが、私は大變に感動してしまひましたの。僅かなことで、近頃驚くばかり興奮しやすくなって、時々自分でも少し感傷的だと思ふ程でございます。

ああ、ハンガリア幻想曲を御一緒に聯彈出来たら、何んなによいでせう！ もう一度貴方が即興なさるのを聴けたら！ どうか貴方を愛してゐることを信じて下さいませ。

リストは未だ到着しませんが、大變に待たれてをります。次の會ではベートーヴェンのへ短調の奏鳴曲を弾き、その後私的な集りで、貴方の「謝肉祭」を弾きます。「幻想作品」はもう完成なさいましたか。

二十六日夜 十一時

もう遅うございますが、少しばかり書きます。今皇后陛下の御前から歸宅したところ、スープを飲んで手紙を書きあげます。皇帝も皇后様も私とお話して下さいましたが、私は貴方とお話したいのです。

いつたいこれから何うなるのでせう！ ブダペストやグラーツにまで行くと云はれてをります。昨日父様がナンニーに「もしクララがシューマンと結婚したら、死の床にのぞんでも『娘とは思はぬ』と云ふつもりだ」と又仰しやつたさうです。ロバート、悲しいとお思ひになりませんか？ これを聴いた私の氣持……でも何事も貴方の爲に堪へるつもりです。こんな事を申し上げたのは、お隠すにはあまりに深く私の心を動かしたからでございます。私はもう以前のやうに父が好きではなくなりました。前のやうに心からしたしめないのです。……然し私は凡てを父に負つてをります。

父様に今後も脅迫されるつもりであるか、とのお尋ねに對する私の答は「否、決して」でございます。

貴方の眞實な クララ

いつの世の若い戀人達も、常にさうであるやうに、語りたこと、訴へたことが二人の前にも溢れてゐるのであつた。然し旅の宿で手紙を書くことは、クララにとつて並たいていの苦心ではなかつた。多く夜の時間があてられたが、戸に鍵がかかつてゐると、ヴィークが激怒するので、何時誰が入つてくるともしれぬ不安のうちに、彼女は書かねばならなかつた。ロバートも又クララを想はぬ時とてもなく、大晦日の夜には、

一八三七年大晦日の夜 十一時

今年の最後の時を、かうして坐つてゐます。始め今夜中、貴女に手紙を書いて過さうと思ひました。然し書く言葉がないのです。

さあ、僕のそばに坐つて。貴女の腕を僕の肩にかけて、お互ひの目をぢつと凝視めよう！ 静かに……幸福に……

世界に二人の人がゐて、互ひに愛してゐる……十五分が鳴つた。遠くから合唱の聲がきこえる。この愛しあつてゐる二人が誰だか、君に解るかしら？ 何んと我々は幸福だらう！ クララ、さあ二人で跪かう、もつと僕の身近に寄るとよい、そして二人の今年の最後の言葉を至高き者に捧げよう。

一八三八年の最初の朝

何んと神々しい朝だらう！ 凡ての鐘が鳴つてゐる。空が澄み渡つて黄金の藍色に輝いてゐる。貴女の手紙が僕の前に擴げられ……僕の最初のロづけだ！ 我心の最愛の者よ！

維也納の生んだ不滅の樂聖ベートーヴェンを崇拜し、支持してゐた一部のグループの人々は、ベートーヴェンの熱情奏鳴曲が、クララの公開演奏の曲目に加へられたのを見て、色々な意味で興味を持つた。クララはベートーヴェンの多くの奏鳴曲の最初の公開演奏者としての光榮を持つてゐる。華麗ではあるが冷たい裝飾音符に埋められた、歌劇の編曲等に馴れた人々の耳に、感情的な迫力とロマンチックな旋律をもつた熱情奏鳴曲は、新鮮な驚きを與へたのである。クララはベートーヴェンの紹介者として、各方面の絶讃を受け、維也納の詩人グリルパルツェルは「クララ・ヴィークとベートーヴェンのへ短調奏鳴曲」といふ詩を「文藝新報」誌上に發表した。此の作は彼の最も美しい詩の一つと云はれてゐる。

第四回の演奏會はリストとタールベルグの曲目から成つてゐた。當時は、此の二人の作品の要求する最高度の技巧は、作曲者以外の人には演奏出来ないと思はれてゐたのである。維也納の批評界の権威として又、音樂美學の専門家として有名であつたハンスリックも、

「蕾のもつ魅力と、満開の花の香氣を一つに持つ、半ば開きかけた薔薇の花、彼女は神童ではないが、未だ子供であり、同時に驚異である。ヴィルテュोजティーの新しい發見である」

と彼女を支持したし、クララは、外國人で新教徒であつたに拘らず、宮廷で御前演奏の光榮に浴したばかりか、藝術家として最高の名譽である「カムマー・ヴィルテュオーゾ」の稱號をオーストリーの皇帝から贈られた。ヴィークの喜びと満足に反して、當人の彼女は此の光榮にもあまり關心を示してゐない。維也納の成功は經濟的にも決定的であつた。

滞在は次第に長びき、やがて四月になつたが、その御蔭でクララは長い間切望してゐたフランツ・リストの演奏を聴くことが出来た。今や二十七歳の青年になり、タールベルグの競争者として、世界的人氣の絶頂にあるリストを、維也納は、その幼年時代以來、聴く機會がなかつたのである。リストは愛人のダグール伯夫人を、伊太利のコモの湖畔に残して、祖國ハンガリーの大洪水救濟金調達の爲に、二回の慈善演奏會を開くべく、維也納に現れたのである。

友人のショパンから、しばしばクララについてきかされてきたリストは、彼女の維也納での成功の報をきいてゐたので、クララと逢ひ、彼女の演奏を聴くことをも、旅の目的の一つに數へてゐた。四月十一日に到着すると、その日のうちにクララのホテルにリストの名刺が届けられ、やがてリスト自身が訪ねてきた。そしてリストがクララの爲に弾き、クララがリストの爲に弾く日が續いた。最初の日からクララと父はリストの優美な禮儀正しい態度に感嘆し、彼の絢爛たる演奏に眩惑された。翌日も訪れて來たリストはウエーバーのコンチェルト・ステュックを、すさまじい迫力で弾いた。そして低音部の絃を三本切つてしまつたが、そんなことには馴れてみるとみえて、そのまま弾きつづけるのであつた。リストもクララの作品を弾き、クララもリストの作品やシューマンの作品を弾いて聴かせた。

「私は貴方の『謝肉祭』をリストにきかせました。曲は完全に彼を魅惑して、リストは『精神がある！ 私の知る限りでの偉大な作品だ』と云つてをります。私の喜びをお察し下さい」と、クララは作曲者に報告してゐる。

リストの演奏會は四月十八日に催され、舞臺には三臺のグランドピアノが並べられてゐたが、最後の曲目メフィースト・ワルツが演奏される頃には、三臺とも絃が切れてしまつた。リストは第二回目の演奏會を是非クララと共演したいと望んでゐたが、これはクララのグラーツに於ける演奏會の豫定の爲に實現出来なかつた。クララは

「リストは自分で聴き且つ見るべき藝術家です。貴方がまたお知り合ひになられぬのは残念でございます。きつと氣が能くおあひのことと思ひます」

又グラーツから、

「私は旅をつづける望みを失つてしまひました。リストを聴き見て以來、私はまるで女生徒のやうな氣がしますの」

とも、シューマンに書いてゐる。彼女は更にリストの印象について、

「彼は誰とも比較出来ない。彼は恐怖と驚異を巻き起す、そして非常に魅力のある人だ。ピアノに向ふ姿は形容が出来ない。彼の感情は制限なくはとぼしり、時々旋律を切つて弾いて美感を壊す。又ペダルを用ひ過ぎる爲に専門家は別として、素人には彼の作品の理解を困難にする。彼の藝術は彼の人生そのものだと云へるでせう」

と日記に書いてゐる。此のクララのリスト觀を讀む時、リストの書いたクララ・ヴィーク論も、誠に興味がある。

「私は幸にも此の冬のシーズンに、維也納で稀にみるセンセーションを巻き起した若いピアニスト、クララ・ヴィークを知ることが出来た。彼女の才能は私を喜ばした。彼女は

完全な技巧を持ち、眞摯な感情と深さを持つてゐるし、殊にその氣品の高い演奏態度は注目に値する。

ベートーヴェンの短調奏鳴曲へ與へた、彼女の非凡な驚く程洗煉された解釋は、有名な劇詩人グリルパルツェルをして、此の愛らしき藝術家へ、讚美の詩を書かしたものである」

## 第十一章 戀 文

半年にあまるクララの維也納旅行にも拘らず、ロバートとクララの前は内面的に益々魂の結合が深められたのであつた。然し彼等の結婚へのヴィークの反對は、クララの演奏家としての名聲が確立すると共に、一層烈しくなり、事件解決の曙光さへ見出せない暗鬱たる日が續いた。

ヴィークの反對理由の中には、具體的に交渉されなくてはならない問題も種々あり、又ヴィークを動かし得ない暁にとるべき手段によつては、彼等の現在の生活力を具體的に検討する必要があつた。二人の藝術家が、互ひの道を全うしつつ、如何にして幸福な家庭を築き得るか。その爲には何程の収入が必要であり、二人の収入は冷靜に考へて、何の程度まで期待出来るか。お互ひに知らねばならぬこと、相談せねばならぬことが、二人の間に數限りなくあるのである。何時間も誰に遠慮もなく音楽について語りつづけることが出来た、幼いクララとヘル・シューマンの時代は既に去つて、今は未來の設計に就いて語るべき多くの問題を持ちながら、二人は文通さへ思ふにまかせない。お互ひの目を見あはせ、手と手を取りあふ時、言葉なくして通じ、笑つてすませるやうな些細な事柄を、二人は苦心の末に何箇月もかかつて、手紙によつて解決せねばならない。

旅行中ヴィークは祈あるごとに、非常識な夢想家のシューマンこそ、彼女の未來に約束された輝かしい生涯の幸福を破壊するものだとクララを説得し、貧困の惨めさや、彼女を失ふ父親としての悩みなど、藝術家としては既に一家をなしてゐても、世間知らずの十八歳の箱入娘に過ぎないクララは、時祈り將來への故知らぬ不安に襲はれることもあつた。そして或時はロバートへの愛と、父への義理に板ばさみとなり、心重い日が續いた。

クララのかうした精神的動搖を、敏感にも感じたロバートは、老人の策動に迷はぬやう、度々彼女に警告してゐる。

當時ヴィークがロバートに與へた書簡の中には、「もし娘を嫁がすとすれば、それは貴君と別れさす爲である」といふ風な、露骨な侮辱的な言葉さへ書かれてゐる。シューマンはクララに、子として従順であり孝行であることも美しいが、彼の未來の妻として勇敢に一歩前進して暗い氣持を棄てるか、或は戀を諦めるか決心してくれるやうに求め、「指輪を返して呉れ」とまで強硬に云つてゐる。

「もし僕の愛によつて貴女が眞に幸福なら、愛を心に満たして、僕の缺點を許して下さい。そして愛するクララらしく、僕の些やかな生活に——たとへダイヤモンドや眞珠がなくとも——満足すると決心して下さい。疑ふ心こそ不實の始めです」

これに對して、クララは次のやうな返事をよこした。

十一月二十四日 金曜 夜

明日は維也納にむけて急行馬車で出發致します。

ナンニーは、たつた今、先夜二時間もかかつて、貴方のお手紙を苦心の末に讀んでから、私の眼がまだはれてゐると申しました。貴方のおかげでございます。

此の二三日、私も周圍の情況について、色々考へてをります。貴方は指輪に頼つていらつしやる。それはただ形式的な絆に過ぎないではございませんか。エルネスティネだつて、貴方の指輪をいただいてをりますもの。指輪が結果ではございません。私も眞面目に將來を考へてをります。一つ申し上げねばならぬことがございます。

それは事情が全く變るまで、私は貴方の者にはなれぬ、といふことでございます。無論馬やダイヤモンドをほしいとは思ひません。貴方さへあれば私は幸福でございます。けれども私は生計の心配な

く生活したく、藝術から離れることも、きつと不幸だらうと思ひます。毎日のパンの心配があれば、藝術藝術と云つてあられないこととございませう。氣持のよい生活をする爲には、多くいることと思ひます。どうか貴方がそれ等の心配が全くないところまで達しておいでかどうか、お考へ下さい。私は單純に何の心配もなく育つてきてしまひました。私は藝術も犠牲にしなくてはならないのでせうか。此の手紙は大變に暗い手紙になつてしまひました……どうか愛がさせたことと御諒承遊ばして下さいね。純粹な愛の心が書かせたのでございませう。

この冷靜で實際的な、如何にもヴィークの娘らしい手紙によつて、ロバートの満たされぬ心はひどく傷けられた。

「貴女は指輪を馬鹿にしておいでですね。昨日から、僕は貴女の指輪をはめてゐません」と、彼は悲しげに書いたが、亂れた彼の思考は忽ち飛躍して、

「僕は深い沼の畔りを歩いてゐる自分を、夢想しました……すると自分自身をも投げこんでしまひたい熱情が溢れてくるのでした」

然し、クララは父の固い決心を知り、ロバートを愛すれば愛する程、具體的な條件を冷靜に判斷することによつてのみ、彼等の結婚生活に眞の幸福が約束されることを、はつきりと悟るのであつた。家庭の幸福を守るためには夢のやうな甘い戀人同志の囁きだけでは不安なことを、彼女はよく自覺してゐた。詩人肌のシューマンを失望させながら、クララは勇敢に未來の設計を考へずにはゐられないのであつた。

クララが二人の結婚生活の幸福の爲には一定の収入が絶対に必要だと書いたのに對して、シューマンは、

お父上の幽靈が後に立つてゐて、貴女に筆をもたせたのでせう！ 然しとにかく貴女が書いた！ 貴女が表面的な幸福を考へるのは當然のことです。

空から寶でも降つて來ない限り、僕は短期間に収入を増やす道を知りません。僕の仕事が知的な仕事であり、頼みにならないことを貴女は御承知です。他の職業のやうにはゆかないのです。然し僕も仕事を順調につづけてゆけば、一二年のうちには心配なく、妻の一人や二人は養つてゆけることと、良心にかけて期待することか出來ます。

……我々が不足する銀何枚かの爲に、苦しむことは有り得ませう。貴女は僕の財産を御存知ですね。僕は半分もあればよいのです。残りの半分が貴女に足りなければ、貴女は御自分で儲けることもお出來でせう。我々の工夫一つだと思ひます。どうか僕の計畫をきいて下さい。

僕は現在の自由な立場を、もうしばらくつづけたい。郊外に氣持のよい家を持つて仕事をし、貴女と一緒に楽しく靜かに暮らす。無論貴女は貴女の偉大な藝術の爲に、勉強をつづけるのですが、それは利益の爲や一般の人々の爲ではなく、少數の選ばれた人々や、我々の幸福の爲になさるわけです。もし貴女がかうした生活を好んで下されば、此の種の生活はあまり費用もかからないでせう。僕はこんな生活が好きなのです。

「ええロバート、そんな風に暮ませよう」と貴女が云へるやうに、もつと生々とその生活の有様を描いておみせすることも出來たのです。僕を愛して下さいなら、どうぞさうして下さい。

もし貴女が廣い世界に出かけたいと思へば、僕も賛成です。さうなると家は三箇月ばかり空になります。巴里へ、倫敦へ。貴女は各地で大評判となり、僕にも友人や連絡が出來る。短く云へば榮譽と利益に不足はないでせう。我々はやがて寶をたづさへて我家に歸つてくる。ああ、その家は未だ存在しない！ ライプチヒは中心地です。太陽と月のやうに外界にそこから二人の光りを投げかけませう。然しこんな生活にも厭きた時、或朝僕が貴女にむかつて、

「可愛い奥さん、貴女の知らない間に、澤山の立派な交響曲や傑作品を書いたよ。一つ演奏旅行をしたいと思ふのだが、我々の寶石を荷作りして巴里にいつて住まうぢやないか」と云つたとしたら、貴女はどう答へますか。

貴女は「それはよいお考へだわ」とか「まあ聞いて頂戴」とか「貴方のおよろしいやうに」とか「此處に居りませうよ、此處が大好きなのですもの」といふ風に答へる。すると僕は又靜かに机の前に歸つて、雑誌の編輯をつづけます。

おお美しい繪！ どうかこれが壊れることがないやうに……我々の婚約にはお父上の許可がないといふのが現實です。我々の間には別に法律的な約束もないことは、云ふ必要もないでせう。もし貴女を愛し、貴女も彼を愛し、貴女を完全に幸せに出來る男が現れた時、僕が貴女の道を妨げるとお思ひですか。たとへ残された僕の人生が粉々に碎かれても、僕はそれ以上に貴女を愛し、又誇りも持つてゐるのです。……

我々の人生の最も美しい青春の時を、遠く離れて過ぎねばならぬことを考へると、胸が疼きます。

何處に出かけても、人々は貴女を語り、貴女の美しい性質を讃へます。それなのに、僕は貴女と語る  
ことすら出来ない……

貴女は熱情家で同時に冷静だ！ 一人の少女だと信じられない程に、貴女は暖く愛して呉れると同  
時に、人を怒らせる！ 最近の僕の生活は満足からははるかに遠い。貴女との別離、多くの恥辱の苦  
痛は時々心を重く押しつぶして、何も出来なくさせる。僕は目の前にかけてある、貴女の繪姿を見な  
がら、いつたい終りはどうなることかと、何時間も思案に暮れてしまひます。……どうか僕を支へる  
爲に出来るだけ度々お手紙を下さい……又くだらぬ作品の爲に雑誌に批評を書かねばならぬことは僕  
を苛立たせます……自分が硝子を切る爲に用ひられてゐる金剛石のやうな氣がして、哀れになるので  
す。

今も多くのシンフォニーが頭にあり、誇らしく思つてゐます。ですから、どうか僕が自分に力と自  
信が持てるやうに、やさしいお手紙を下さい。金の爲にもつと仕事をする事も出来ないことはあり  
ませんが、自然作品は平凡な薄手なものになりませう、創作力には或る制限があるものですし、人間  
は常に最高の力ばかり出し續けられるものではありません。

まだまだ話があります。お父上に文通を發見されたらどうしますか。勘當するとか何んとか云はれ  
ても決して恐れてはいけません。僕がお尋ねしたいのは、父上にたとへ知れても、貴女は文通をつづ  
けて下さるかといふことです。ドレスデンの時のやうに脅迫されておしまひなら、クララ、僕はもう  
二度と貴女に求めないつもりです。どうか怒らないで下さい。何んと凡ては悲しいことでせう。どう  
か貴女の旅を出来るだけ楽しいものにして下さい。

ショパンの容體が大變に悪いと、昨日メンデルスゾーンが云つてゐました。我々はヴォイグト家  
で逢つたのです。では心から貴女に接吻します……さよなら僕のフィデリオよ、どうかレオノーレのや  
うに貴女のフロレスタンに誠實であつて下さい。

貴女の ロバート

甘い空想の世界から、用件に移り、怨みの言葉から愛の囁きにと、唐突に感情が飛躍して  
ゆく此の手紙の原文は、此處に譯出した量の殆んど三倍にもわたる長いもので、ロバー  
ト・シューマンの詩的なロマンチックな性格をよく表現してゐる。クララの冷静な手紙に  
對して、焦躁と懊惱に動搖する彼の心が、赤裸々ににじみでてみて哀れである。  
クララの返事。

十二月六日 維也納

御手紙をいただいた喜びと同じく、最初の頁を讀んだ悲しみも大きくございました、どうしてこん  
なに私をお苦しめになり、苦い涙をおこぼさせになるのでせう！ こんな悲しい誤解をなさるのが私  
のロバートなのでせうか。私の言葉からあんな汚い意味を、おひきだしになるなんて、……多くの美  
しい善良な娘さん達が貴方を受け入れ、藝術家であるよりも、よい主婦になるであらうことは、私も  
能く知つてをりますよ。知つてをりますとも……でもそんなことを、私に……ただ貴方と貴方の爲  
に生きてゐる私に仰しやるなんてひどうございます。私が及びもつかぬだいたいそれだ望みを持つてゐ  
ると、お思ひなのでせうか、私は唯二つのもの貴方の愛と、貴方の幸福だけしか望みません。

貴方が私の爲に重荷を負つていらつしやると知つて、何んで私が平安であられませう。自分の快樂  
の爲に貴方の天才を、苦役にむけるやうな、そんな卑しい望みを持つことが出来ませうか。きっと今  
にもっと能く私といふものを、理解していただけたと思ひます。

私は御一緒に、藝術の爲に靜かに楽しく過す生活以上に、幸福な生活を心に描くことも出来ません。  
ですから、私達は完全に一致したわけです。私は貴方の胸に飛びこんで、「ええロバート、そんな風に  
暮らませう」と申します。私が熱情的に愛せないと、お思ひになりますの？ 私だつて熱情的ですわ。  
でも心があまりに心懸りで滿されてゐると、熱情は冷めてしまふのです。

簡素な生活にも多く必要なことを知つてをりますが、此の點では凡てがうまくゆくことと、疑つて  
はをりません。私は固く信じてをります。貴方の指輪は「信ぜよ、愛せよ、希望せよ」と毎日私に囁  
いてくれます。

激情的なロバートの手紙に對する、クララの此の短い返事には、彼女の女らしい靜かな  
愛情と共に、彼女の人格の抱擁的な豊かさとやさしさが溢れてゐる。總明で女らしい敏感  
さに滿ちた彼女は、常に動搖してゐるロバートの心を刺戟することなく、豊かに包んで鎮  
靜に導くこつを、本能的に知つてゐたやうである。シューマンの幻想作品十二及びダヴィ  
ット結社舞曲作品六は、かうした状態の背景のもとに、一八三八年の早春一月に完成した。  
『ダヴィット結社舞曲』の中には、結婚の想ひが秘められています。思い出し得る限りの

楽しい興奮から考へついたので。何時か貴女に凡てを説明しませう」  
とロバートは、クララへの手紙の中で書いてゐる。幻想作品は「クララの標語」と名づけられた三節の主題の第一曲から始まる十八曲のピアノ曲で、「謝肉祭」から一步前進してシューマンの獨創性をいよいよ確立した作品である。此の靈感に満ちた小曲集は、最初クララをまごつかせたが、その中の「高翔」「むら氣」「何故?」「お嘸」等をクララは非常に愛した。クララはト短調の奏鳴曲と共に、此の作品を維也納のフィショフ邸の「シューマンの夕」で演奏した。

當時のロバートは絃樂四重奏を考へてゐたが、ピアノの魅力に離れ難く、クララに弾かれる喜びも手傳つて、珠玉の如き作品が續々と生れて來た。

「憧れの心と期待程に、空想に翼を與へるものは他にないことを、僕は最近體驗致しました。最近の数日、貴女のお手紙を待ちつつ、僕は本一冊を満たす奇妙な楽しいピアノの小曲を作曲しました。きつとお弾きになつたら、貴女は目を見張られることでせう。貴女がかつて僕にお書きになつた言葉の、山彦かもしれません。……僕は貴女にとつて、きつと時々子供のやうに見えたでせう。いつれにしてもそれが靈感になつて、三十ばかりの奇妙な小曲が出來ました。そのうち十三曲を選んで『子供の情景』と名づけました。

きつと喜んで弾いて下さると思ひますが、貴女は大演奏家であることを、忘れて下さらねばいけませんよ。こんな題がついてゐます。

お化け、爐邊、鬼ごっこ、木馬の騎士、見知らぬ國から、不思議な嘸、等々……」

又シューマンは後に此の「子供の情景」について「私は此の小曲が非常に好きだ。自分で演奏すると非常に感動を與へる、殊に自分自身に」と云つてゐる。續いて四月の或る土曜日の午後の手紙には、

おお、クララ！ 今僕の心にはこんな音楽が溢れ、こんな美しい旋律がいつもきこえてゐます。まあ聴いて下さい！ 最後のお便りを書いてから、僕は新しい作品集を完成しました。「クライスリアナ」と名づけました。

貴女と貴女への思慕の想ひが中心です。貴女に此の曲を捧げます。貴女だけにです。きつと曲の中に御自身の姿を見出して、貴女は微笑なさるでせう……僕の音楽は今その簡素さに拘らず、驚く程錯綜して現れます。心から直接に流れでて、誰の心にでも感動をよび起します。何時僕が弾くピアノの傍に立つて、きいて下さるでせう！ ああ、その時、二人は子供のやうに泣くことでせう！……僕にはそれが解るのです……此の曲が僕を壓倒することが……

シューマンは、作品について自讃することがその生涯を通じて、殊に少ない人であつた。クララへの此の手紙は、創作後の興奮状態のうちに、音符を書いた同じペン先から、迸り出たのであらうが、彼自身此の作品を特に愛してゐることが推察出来る。當時維也納に於てクララを取り圍んでゐた音楽の世界は、ロバートが彼女の心に、このやうに豊かに絶えず注ぎかけてゐた、彼の音楽の世界とは、本質的に遙かに遠いものであつた。人氣ある演奏家としてのクララは、彼の新しい作品に或はまごついたかもしれない。然し維也納さへも變へることが出來ない、シューマンの愛したもう一人のクララは、ピアノ音楽に新しい詩と生命を投げこんだ、この稀なる作品の美しさの意味を、はつきり掴んでゐたのである。

ロバートはその仲間の樂人達が、既に刈り入れてゐる世の榮譽から、悲しくもとり残されてゐた。リスト、メンデルスゾーン、ショパンの名は既に歐洲各地で輝いてゐた、時代に認められることを切望しながらも、その希望さへも、彼の音楽様式を變へることは出來ない。ロバートの音楽は、彼の動搖しやすい氣分が、或る瞬間集中し、結晶して咲き出た花の、香氣の如きものであつた、つつましく、美しく、ひそやかな情感が溢れ、夕ぐれ斜光の中で、その色が深まるやうな音楽であつた。

「幻想作品」の中には、「何故?」「むら氣」などと各づけた曲があるが、狂氣じみた一種の魅力を持つこれ等の作品は、此の頃のロバートの氣分の鏡であり、彼を知り愛する者には、自ら理解と共感を感じ得る作品である。

演奏家としてのクララの常識は、私的な、したい、ロバートの此の種の作品の演奏効果について、懐疑的であつた。これは彼女が小集會に於てシューマンの作品を演奏する時に示される聴き手の冷淡な態度に影響されたのである。彼女の躊躇ひを敏感に悟つたロバートは、クララに彼の藝術家としての性格と意見を、十分に理解せしめる爲に努力してゐる。

貴方のしたいロバートを見て下さい。昔のままの幽霊や、恐いお凧の上手な、なまけ者の戯談の名人ではないでせうか。然し僕も時々眞面目になるのです。時には何日もそんな日が續いて、それが貴女にはうるさいのでせう……

今僕の頭腦は活動し、樂想が作品となりつつあります。僕は人間の世界の各種の動きに影響されます。政治、文學、人間、それ等を僕の方法で處理して、音樂の形式をとつて光りをあてるのです。ですから僕の或種の作品は理解がむづかしいのです。何故なら非常に遠い原因に源を發してゐるものもあり、又或時は稀有な事件が僕の心を捉へてゐるので、風變りにきこえるのです。世間の新しい作品中の少数しか僕を満足させない理由は、曲の構造は別として、純粹な感動に根ざして居らず、その結果浅い抒情の滲出ししか感じられぬからです。比等の作品の最善のものでも、僕の音變を他と區別するところまでも達してゐません。

彼等の作品は花であるかもしれない、然し僕のは靈魂の詩です。彼等は生々しいままの感情を持ち、僕のは詩的良心の表現です。作曲中、僕は別にさうしたことを意識してはゐません。後になつて考へるのです。既に高い段階にのぼつてゐる貴女には、僕の趣意がよくお解りでせう。

このやうな事柄を、多く考へてゐますが、口ではうまく云へません。音樂に於ては殊に矛盾が多く、推理に關聯をもたせるのが困難です。短く云へば貴女は僕があまりに嚴肅でゐるのを見出して、きつとどうしてよいかわからぬ時があることでせう。そんな時、僕が作曲してゐる時、あまり僕を凝視してはいけません、絶望に追ひやるでせうから。僕も貴女の戸口で立聞きをすることはしないことを誓ひます。かうすれば我々の前には詩と花に溢れた人生が與へられ、僕等は天使のやうに奏し、詩化し、人類に喜悅を贈るでせう。

……僕も貴女に彈いていただき、聴衆を夢中に出来るやうな作品を、一度でも書くことが出来たら、何んなに愉快だらうかと考へてゐることを告白します、我々作曲家は損な籤をひいたものです。

シューマンを娘婿として歓迎しなかつたヴィークも、作曲家としての彼の非凡な素質には理解を示し、クララが維也納でシューマンの作品を宣傳することを許したので、クララは音樂會の成功で心が和らいでゐる父に、氣が變らぬうちにと、シューマンとの古い友情を想ひ起させ、交際の許しを切に求めて、歸宅後は、シューマンがクララを訪問することも反對しないと云ふところまで、漕ぎつけることが出来た。そしてライブチヒ以外の土地なら、結婚も黙認するといふ父の返事を、遂に得ることが出来た。ライブチヒでは絶対許せぬと反對するヴィークの心理には、メンデルスゾーンの豪華な生活とそれに對するヴィークの見得が影響してゐるのであつた。

父の氣持の變り易いを知るクララは風向きのよいうちに、彼の公約に一札いれて貰ふことにした。彼女は日記帳を持ってきて、父の手にペンを握らした。ヴィークの條件は、ライブチヒに絶対住まぬこと、シューマンは哲學を研究しようといふ夢中にならうと勝手であるが、クララは年二千ターラー以上の生活をする事、といふのであつた。

クララは此の困難な條件を見ると、早速ロバートに、維也納に來ないかと視察した。彼女も生れ故郷のライブチヒでは一文も儲けることが出来ないが、既に名聲を獲得した維也納では多くの収入が期待出来るし、ロバートの雑誌も既に相當評判になつてゐるのであるから、維也納の書肆、例へばハスリンガー等から出版出来るかもしれない。その上に大會のことで生活費も低廉で、毎冬の演奏會の収入千ターラーと、ピアノ教授による千ターラー、それにロバートの収入千ターラーを加へれば、幸福な生活が充分に出来る筈だと、彼女は樂しげに計算してゐる。

ロバートも此の提案には賛成であつた。クララと藝術さへあれば、住む土地などは何處でもよいのであつた。然し同時にシューマンは、突然にこんな條件をだしたヴィークの眞意に疑問を持たずにはゐられなかつた。長年の地盤を築きあげたライブチヒから、彼を追ひ出すのがヴィークの目的ではないであらうか。結婚の承諾としては、あまりに不思議な

條件ではないか。此の疑問にも拘らず、シューマンが愛する故郷のサクソニーを離れて、未知の維也納に移る不利な第一歩をとるに到つたのは、長年の前にいつしらずシューマンさへも、世渡りについてはヴィークの意見に従ふことが習慣的になつてゐたからであらう。ロバートはただクララの希望を満すことを欲し、クララは肉親の父の良心を、まだいくらか信じてゐたからであつた。

維也納からの歸途、クララがドレスデンで入手したロバートの、四月十四日から五月九日まで殆んど毎日書きためられた長い手紙の狂つた調子は、一箇月にわたつて彼の心が少しもやすまなかつたことを告げてゐた。唐突に絶えず變化する彼の気分は、常に極端から極端に動揺してゐて、クララは此の變り者の戀人の中に、まだまだ知るべき未知のものが多いことを感ずるのであつた。

クララ、重大な話があります。お父上は又しても反對や愚痴で、僕を憤慨させました。僕は彼を、物質的な興味のみ生きる、感情を失つた、乾枯びた俗物で、若者の戀愛を小兒病、例へば麻疹の一種かなんぞのやうに考へてゐる人間だと思ひはじめました。

僕には彼に對する憎惡の氣持がしばしば起り——これは人情だと思ひます——此の深い憎惡は、彼の娘への愛情と比較して、殊に奇異な感じを抱かせます。過去に於て多く約束を破つた彼は、又破ることでせう。僕は彼に何の期待もしません。我々自身で行動すべきです。彼に頼つてゐては、僕は永久に妻を持つことが出来ないと考へるやうになりました。ですから、クララ、まあきいて下さい！僕は早速、維也納に行つて、貴女の御承諾を待つことに決心しました。貴女の美しい計畫は僕の目の前にちらつき、僕の足の下の地面は燃えるやうです。然し、僕の心を安心させていただきたい肝心なお尋ねがあります。貴女はお父上の承諾の有無に關係なく、我々の結合に大凡の期日を決める決心がお出来でせうか。

僕は今から二年後の一八四〇年の復活祭と決定すれば、貴女は娘としての義務も充分に果し、強硬手段をとつても法律的にも正常と認められると思ひます。その時は我々も丁年に達します。貴女は未だ父上の命令に従つて、二年間待たねばなりません。僕等の固い決心と忍耐を、試みることは出来ません。僕は絶対に思ひ切りませんから。

クララ父娘は五月十三日に、ライブチヒに歸つたが、果して二年前の一八三六年の場合と結果は同じであつた。音樂の集りを自宅に催したヴィークが、シューマンの友人達を招待しながら、彼を加へないことは、シューマンの心を深く傷けるのであつた。

或夜のこと、道をへだててクララの家の前にはたはずんで、自ら憐憫の情に耽りながら眺めてみると、嵐が吹きつづつて來た。それは満されぬ反抗的な彼の氣特に快く、彼ははずぶ濡れになりながら、いつまでも立ちつくしてゐたのであつた。

ヴィークの計畫に、追ひこまれる結果になるのではあるが、ロバートは、既に住むことが堪へ難くなったライブチヒを離れて、維也納にその將來を賭ける決心をつけた。

ヴィークは常識的な人間であり、世馴れてゐたので、シューマンが維也納で大成功を贏ち得るとは夢にも信じなかつたし、彼がクララに與へた承諾は、單に時間的に結末を遅らす爲の手段に過ぎなかつた。「音樂新報」の主筆として、折角長年の間に築きあげた名譽を捨て去ることは、愚ではないかと、かへつてヴィークはクララにロバートの決心を嘲笑するのであつた。維也納が如何に音樂的な都であるとしても、シューマンといふ人間は、未知の土地で成功を贏ち得ることの最も困難な種類に屬する人間であつた。だからいよいよシューマンが維也納に出かけた時、その年の十月にきいた時、ヴィークは當惑して腹を立てた。クララは早速父に呼びつけられて、「約束の全部が無効であること、今後は絶対に結婚の承諾を與へない事」を申しわたされた。

ヴィークはシューマンの雑誌の發行を妨害すべく、維也納の知人凡てに、シューマンの人物に對する注意を喚起する書簡をよせた。然し此の彼女の信賴を裏切つた父の態度は、おとなしいクララに新しい決心がさせる原因となつたのである。彼女は今までにない獨立自尊の精神を以つて、シューマンに父の仕打を語り、ロバートのヴィークへの怒りにも増して、彼の心を感動に顫はせたのである。

御両親が僕を思ひ切らずべく、貴女に與へられた約束を讀んで、僕は微笑しました。貴女はさぞ幸福に生活出来るでせう！ 彼等は貴女に美しい衣裳を着飾らせて、町につれてゆき、オレンヂを食べさせる……これが彼等の云ふ幸福です。

……僕は維也納行が、僕が將來に對して如何に眞劍であるか、喜んでいただける機會になることと信じてみました。僕が維也納で一定の地位を獲得出来たら、僕を信賴して貴女を下さることと、思ひこんでみたのです。然しお父上は、今最も殺人的な敵意ある戦術をおとりになつたのです。

僕は再び貴女に、即刻彼をお捨てなさい、と云ふより他はありません。純眞な若い娘がこのやうに扱はれるべきではないのです。殊に性格の高貴さの點で、形容する言葉もないやうな貴女のやうな方が……貴女を愛してゐる彼が、世界が見てゐる前で、貴女を少しも尊敬せず傷けて、青春の花を滅ぼすとは……我々は長く忍耐し過ぎたのです。

貴女にとって二人に従ふことは、最早不可能です。貴女は彼か、僕か、その一人を思ひ切らねばなりません。では御機嫌よう。

行動なさい！ 行動なさい！

變ることなく貴女の ロバート

## 第十二章 ひとり旅（一八三八年—一八三九年）

盲目的な親の愛情といふものは、感情の激發に刺戟されると、最愛の我が子に對してすら、驚く程残忍な行爲をさせるものである。今やクララの前に現れたヴィークは、娘の結婚を敵視するのみか、娘の藝術家としての生活に對してさへも、復讐的な策略を弄して脅迫する、完全な反對者と化してしまつた。彼は今彼を愛し、尊敬してゐる最愛の我が娘を、自ら傷け苦しめることに、恰もその昔彼女の訓育に捧げたのと同じやうな熱情を感じてゐる如くに見えた。

ヴィークはクララが信賴と愛情を感じてゐたナンニーを解雇し、ロバートへの文使ひを、ひそかに務めてゐた友人のロイター博士を疑ひ、博士が歸宅すると入れ違ひに、繼母に命じて強制的に彼女の衣服を調べさせるやうなことでした。エルンスト・ベッカーがフライブルグから出て來て、ヴィーク家を訪問した時に、シューマンは彼が無事にヴィーク家から出て來たのを、驚いた程であつた。過去に於てベッカーが務めたキューピットの役割を、ヴィークが聴き知つたら、人殺しに近い大騒動が起つてゐたかもしれない。

ヴィークは同志を得ようと、エルネスティネ・フォン・フリッケンに手紙を書いたが、彼女からの返事は

「クララの御機嫌は如何ですか。新聞でいつも色々拝見して、両親も私も大變に嬉しく存じてをります。クララはシューマンなしには、決して幸福になれません。彼女自身が私に云つたやうに、言葉では云へぬ程に彼を愛してゐるのです」

ヴィークは又、益々クララに加はる名聲と人氣により、彼女の収入が増加することを無念に思ひ、十二歳の時から七年間の演奏による彼女の貯金全額を、弟に譲ることを強要した上に、ヴィーク家を去るならば、ピアノをも含めて、彼女の一切の所有品の價格約一千ターラーを、將來償却せよとまで云つた。かうしたあまりに冷酷なヴィークの態度は、遂に温順なクララをして何の躊躇することなく、父に反抗する決心をかためさせることになつた。彼女はロバートに書いた。

「どうか私におまかせ下さい。時が來たら、貴方を追つて私も御地に參ります。父と別れるのは苦しいでせうし、色々難儀も致しませうが、愛は私に勇氣を與へませう、天の神はきつと私を赦して下さいますわ、愛がさせるのですもの」

希望に満ちて維也納に到着したシューマンを待つてゐたものは、失望であつた。彼の手紙は樂觀的ではあるが、維也納にはダヴィット結社進出の餘地がない事を彼は悟らざるを得なかつた。メンデルスゾーン型の人物なら、合唱團や管絃樂團を組織し、忽ち周圍に讚美者の群を作ることであらうが、シューマンにはさうした派手な實際的手腕は、先天的に恵まれず、彼の唯一の武器は、彼のピアノ作品だけであつた。ピアノ音樂の作曲者が、當時最も早く人氣を得る近道は、自作を演奏することであつたが、彼はピアニストでもなかつたのである。

維也納で發行する希望の音楽雑誌も、検閲の關係もあり、各出版書肆と相談したが、遂にまとまらなかつた。オーストリアの政治的不安により、出版物に對する當局の干渉が嚴重になつてきたからである。「少なくとも自由に呼吸出来る」と、シューマンはその醜惡さもこめて、ライブチヒを懐しがつてゐる。

クララはロバートとの結婚への道を開く爲にも、巴里か倫敦の如き大都會で運を試みてみたいと考へてゐた。ヴィークは「シューマンを思ひ切らねば、此の冬のシーズンは家で過させる」と、脅かしたのであるが、クララは斷乎として、シューマンを思ひ切らぬこと、そして巴里に行くことを明言した。ヴィークはその冬は商用でライブチヒを離れられなかつたので、「行くなれば一人で行け」と云つた。まさかそれでも出かける決心は出来まいと思つてゐたのであるが、クララは「ではひとりで参ります」と答へた。

ヴィークはクララに危険なひとり旅をさせ、巡遊が失敗に終り、旅先で經濟的にも困窮することが、シューマンとの結婚を妨害する彼の最後の機會となると考へた。未知の都會での演奏契約、使用樂器の件、住居の問題、その他の困難にクララが、ひとりで途方に暮れて詫びをいれるだらう、といふのがヴィークの狙ひどころであつた。

忠實なナンニーもゐない今、クララは父の選んだ氣心のしれぬフランス生れの女中一人を伴つて、出發することとなつた。未だ近代的な交通機關の發達せぬ、今から百年前のライブチヒから巴里への旅は、長く困難であつたばかりでなく、想像も出来ないやうな危険に満ちてゐた。そして、巴里に無事に着いたとしても、言葉に不自由勝ちな、事情にも疎い若い娘が、後援者もなく、權式ある所謂巴里のサロンに迎へられることが、果して可能であらうか。

出發する時、クララは、用事が濟み次第、きつと父も後を追つて來て呉れるものと、信じ込んでゐたらしい。然しヴィークの方では、シューマンが南獨逸から此の旅行に同行することがなければ、ひとり旅の困難に打ち碎かれたクララが、きつと父の有難味を悟つて、彼の條件をいれて歸宅するものとして考へてゐたのである。

一八三九年一月八日、クララは先づババリアにむかつて、出發した。その前夜に彼女は、遠くにゐるロバートに出發を告げる短い手紙を書いた。

「今日の私の心は重うございます。明日はただひとりで見知らぬ人と旅立たねばなりません。貴方の作品、トッカータや幻想作品を鞆に入れました。今十一時を打ちました。私は死んだやうに疲れてゐます。三日三晩の旅をしなければなりません。お休みなさい」

此の手紙を讀んだシューマンは感動に顫へた。

愛する人よ、最後のお手紙によつて僕が何んなに高められたか……どう話したらよいのかわかりません。貴女と比較する時、僕はいつたい何んでせう！ ライブチヒを去る時、僕は最大の苦しい經驗をしてみると信じたのですが、今貴女が、やさしい細やかな性格の貴女が、僕の爲に廣い危険な世界に、唯ひとりでゆくのです！ 僕の爲に今して下さつたことは、していただける最大なことだ！ 貴女にはこれが出来たのだから我々の前途には何の障害もありません。僕は益々強められることを感じます。

きつと貴女の獨立心と自信は酬はれることでせう。貴女は素晴らしい娘だ……最高の尊敬に相應しい人です。

夜半に目醒めて、雨風が窓をたたいてゐるのを聞く時、馬車に揺られつつ、藝術を思ひ、ひたすら未來の夢を描きつつあるであらう貴女を考へると、僕の心は感動し和げられます。そのやうな愛に僕が相應しい者か、わからなくなります。僕自身も變りました。僕の顔でそれがわかりませう。許婚者が、かくも勇敢であるのをみる時、倫理的な力が與へられます。

僕はいつもなら一週聞かかかる仕事を、二三日で仕上げる事が出来ました。どんどん書けるのです。御覽なさい！ クララ、貴女はこのやうな力を僕に與へた！ 英雄的な少女は、その愛人も英雄にするのです。

僕が隱蓑を着てお供出来たら、僕の翼の下で貴女を守つてあげたい。ああクララ、お互ひの爲につくし、犠牲になる時、人間は何んより深くお互ひを愛するのでせう！

馬車は最初の目的地、ニュールンベルグに向つた。

今日お便りが出来るのを、神様に感謝せねばなりません。昨日の私には思ひもよらぬことでございます。昨日は十度も、生命の危険にさらされました。ひどい大雪で、馬車は畑や溝の上を走らねばなりませんでした。「もう一度だけ、もう一度だけ」と、何度神様に、「無事に過させ給へ」と祈ったことでせう。

凡ては済んで、今はかうして……落ち着いて書くことが出来ました。ツヴィカウによつて、朝のコーヒーをテレーゼと飲みましたのよ。未來の義理の姉様に逢へて、何んなに嬉しかつたでせう。貴方の兄様もお二人とも本當によい方で、親切にして下さいました。

管絃樂團との交渉、招待状の發送、調律師を頼むこと、來客との應接等、クララは早くもひとり旅の困難を身にしみて感ずるのであつた。ニュールンベルグではやがて雪はやんだが洪水となり、演奏會の日延べをしたり、散々な目に遭つた。

それから彼女はアンスバッハを経てストウツガルトに向つた。此の期間、ヴィークからは何の音信もない上に、ロバートも巴里宛に書いてみたので、クララは孤獨を一しほ感ずるのであつた。クララは凡てをロバートに書き送る。

「私は大變に不幸でございます。家を出てから、父からもナンニーからも何の音沙汰もありません。そして長い間貴方からも……アンスバッハとニュールンベルクの音樂會は大成功でございました。けれども大變な過勞で、三晩も眠れませんでした」

「二十一日……例によつて會場が得られません。私は父の氣持がわかりません。私からは三通も届いてゐる筈なのに、まだ一通の返事もきません。父からこんな風にはふりだされて、何の音沙汰もないと、どうしてよいかわからなくなります。ひとりで巴里までゆけるかどうかもわかりません……一月末には巴里に着く筈です。私にひとり旅をする勇氣があつたので、父は氣を悪くして手紙を書かないのだと思ひます。私は勇氣をださなくてはなりませんわね」

遂にヴィークからも手紙が一通届いた。

然しそれは何んといふ手紙であつたらう。

「それはただ私を泣かせるのみでした。思つても下さいませ、私への非難ばかりが二頁も書かれてゐるのです。ひとりでやつてゆかねばならぬ事が、今はよく解りました。『お前は、お前と私がうまくゆかぬことを、もつと早く悟るべきだった』と書かれてゐました。私は何んなに傷けられたか、申し上げやうもありません、丁度宮廷に參内する仕度が出來あがつた時に、この手紙を受けとり、何んなに掻きむしられるやうな心で出かけたか、御想像下さいませ」

世の中には、己の利己的な動機を祕めて、親切に頼儀正しく振舞ひ、純眞な人々の好意を利用したり、誠實を弄んだりする人間がゐるものである。クララがストウツガルトで逢つたグスターフ・シリング博士は、此の種の人物であつた。彼はやさしい言葉と紳士らしい態度で、忽ち若いクララの信頼を贏ち得てしまつた。

「彼は私の手をとつて、凡てをよく理解して呉れました。一人では彼の雑誌の經營も出來ないから、貴方を共同經營者として迎へると云ひ、今後は私達の幸福は彼の責任だと云ひました。報酬は二人には多過ぎる程です。大變に寛大な人です。私は私達の手紙を見せましたの、お怒りになつて？ 彼はもし私達が當地にきたら、貴方に彼が私を愛することを許して貰ふ（無論彼には奥さんがあります）と云つてをります」

この手紙を讀んだロバートは、純眞なクララがこのやうに容易く、他人を信ずるのを見て驚くと共に、不安な念に驅られるのであつた。

僕のクレールヘン！ クレールヘン！ いつたい、貴女はどうしたのです？ 貴女はいつも僕の爲に、何かしなければと考へて下さる……ああ、貴女は懐しい人だ！ 貴女は又も僕の心を貴女の爲には如何なることも辭さぬ程に感動させました。然し僕は貴女の美しい夢を醒まさればならない。接吻ではなくて、貴女が本當に目を醒ますまで、貴女の卷髪を靜かに引つばつて……かういふわけです。Sはなかなか精力的な作家で、例へば作曲家ならチェルニーのやうな立揚の人なのです。次から次へ

とくだらぬ本を出版してみますが、材料も書きかけてあるし、彼の悪書への攻撃に對抗する爲にも、音楽雑誌を計畫してゐるのです。Sの如く利巧な人は、讀者の心理をよく知つてゐるし、又有名な名の効果や利用法も心得てゐるのです。

率直に云へばクレールヘン、貴女は私を少し氣を悪くさせました。私を彼の如き法螺吹き仲間とお考へになるより、もつと高く認めて下さると思つてゐました。

とシューマンはクララに警告してゐる。その後、シリング博士が、彼女の信賴を悪用して、託されたロバートへの手紙を盗み見たことが發見され、彼の好意も、結局ドン・ファン的な不純なものであつたことが、若いクララにもわかつて來た。

ストッツガルトでは、もう一人の新しい友人が出來た。クララの弟子となることを希望して現れたヘンリエッテ・ライヒマンといふ少女で、クララは此の少女を一目で好きになり、深い友情が結ばれた。ヘンリエッテの父は、娘を巴里まで、クララと同行させることにしたので、クララは彼の信賴に非常に感激した。

その後のカールスルーエの演奏會も成功し、クララは増えた旅費を懐に、獨佛國境を越えたのである。二月六日、巴里に到着したクララの一行はリスト家を訪問して、親友のエミリーと久しぶりに抱擁した。エミリーの父がライプチヒに滞在してゐた頃からの友情であつた。間もなくクララはもう一人、同年配の優れた友人を見出した。有名な歌姫マリブランの妹で、自身優れた歌ひ手であつたポーリン・ガルシアである。以前にポーリンがライプチヒを訪れた時に二人は始めて逢ひ、ひどく氣があつてゐたので、楽しい再會であつた。

クララとポーリンは同じ家に部屋を借りた。巴里に着いたクララの最初のお客は、繼母の從兄のフェヒナー氏で、早速ライプチヒに歸れと、尊大な態度でお説教を始めた。クララはフェヒナーの言葉からヴィークが早くも巴里まで妨害の手をまはしてゐることを悟つた。

クララは如何にして、彼女の巴里訪問を広告したものかと途方に暮れ、自信が次第にぐらつき始めた。有力な知人は運悪く皆巴里を留守にしてゐた。フランツ・リストは伊太利に、ショパンはマジョルカからは歸つたが、マルセーユで病床にあり、パガニニもゐなかつた。旅費が心細くなる前に、事を運ばねばならない。巴里で人の注目を惹き、演奏の機會を得る爲には、出来るだけサロンに出入りしなければならぬが、これが又内氣な彼女には相當の重荷であつた。

エラーールとプレイエルの巴里の二大洋琴會社からは、早速ピアノを提供するとの申し出を受けたが、両方ともタッチが硬く、弾き馴れる爲には三週間の練習が必要であつた。析角の好意を傷けることなく、そのうちの一つを如何にして受諾したものかと、クララはひどく困惑したが、結局エラーール・ピアノが彼女の部屋に運びこまれることとなつた。

焦ることをやめて、演奏會の機會を氣長に待つことに心を決めたクララは、若い友人達の間で互ひに教授をしたり、聲樂やフランス語を學んだり、又エミリーから英語をといふ風に、靜かな楽しい生活を巴里で始めた。

ロバートが巴里宛にだした手紙は三週間後にやつと待ちに待つてゐた彼女の手に届いた。

「貴方は私を此の上もなく幸福にして下さいました。昨日、四通の手紙を一時に受け取つたのです」

クララの巴里行は、ロバートにとって何のものにも勝る激勵となり、「アラベスク」「フロレスク」「花の曲集」「夜の曲集」等が續々と完成した。然し燦然たる技巧の花火に馴れた巴里の聽衆に、シューマンの作品が持つ詩想や、純獨逸的な心が直に理解されるとは、考へられなかつたので、

「何かもう少し、わかり易くて華麗な、長くも短くもないものを書いて下さいませんか。一般の理解を得られるもので、是非貴方の作品がほしいのです。天才にとってこんなことをお考へになるのは、恥かもしませんが、時には政策も必要なのです」

とクララは、何故巴里で彼の作品を演奏せぬか、とのシューマンの間に答へてゐる。

クララはつとめて各方面を訪問した。マイエルベールは彼女を晚餐に招き、カルクブレ

ンネルも記憶してゐて、シューマンの作品の演奏を彼女に所望した程であつたが、シューマンは結局彼には謎であつたらしい。相變らず皮肉なハイネにも再會した。或る夜會で、彼女は稀にみる程髪の濃い人に逢つた。此の人は目をいつも伏目勝ちにしてゐて、ロバート・シューマンは天才だと、暖い言葉で語るのであつた。告げられた此の人の名は、ベルリオーズであつた。クララの第一回の巴里訪問の頃には、ローマ賞を受けて、丁度伊太利滞在中であつたのである。

やがて、クララは私的な集會でしばしば演奏し、漸く人々が彼女の名を口にするやうになつたが、全世界に謳はれてゐる巴里のサロンの、音樂の趣味の低さに、彼女は失望せずにはゐられなかつた。

「これが獨逸にまできこえた、巴里のソアレなのでせうか。百人にあまる貴婦人が狭い部屋に、身動きも出来ない程につめこまれて、音樂は夜更けまで續きます。そして何んといふ音樂でせう！ 此處では好樂家達までが、バッハの遁走曲を聴かうとも致しません」とクララは書いてゐる。

クララとヘンリエットのささやかな住居の、平和を破るものは、例の氣味の悪い「フランス女」の存在であつた。用事の多い晝間は雲隠れしてゐて、夜になると不吉な物怪のやうに現れてくる。遂にクララは大決心をして此の女に暇をやつてしまつた。エミリー、ヘンリエット、クララの三人の娘達の楽しい毎日の様子は、詳しくロバートに報告される。

「私にも何んなに上手に、朝飯の仕度が出るか、是非お報せしると、昨夜泊つたエミリーもヘンリエットもすすめます。今二人は、私が調理した果物を食べてゐますの。貴方は、私にお料理が出るかと、きつと心配なすつたことがおありでせう。どうか御安心下さいませ。御一緒になれば、私は直に覺えます。今エミリーが『ピアノを弾く手が、火傷をしますよ』と云ひました。此の二人は何んとはよく喋るのでせう！」

こんな具合に、此の時代の二人の手紙は明るくて、未來への光りに満ちてゐる。一年後、即ち一八四〇年の復活祭には彼女はロバートの許にゆき、花嫁になる。新婚後暫時ライブチヒを避けて、ロバートの故郷ツヴィカウに住んでもよい。常識の發達したクララは、二人の結婚にとつて、今が一番不利な時期であることも自覺してゐた。長年のライブチヒの地盤を捨てたロバートは、維也納でまだ芽が出ないし、巴里のクララの方も未だ公開演奏の豫定もたたない。然し、

「貴方はお元氣で自信があり、私の心配を吹き飛ばして下さいました。仰せの如く二人とも、自身の中に資本を持つてゐるのですから、何事が起つても大丈夫です。ですから大膽に前進致しませう。凡てはよくなります。よくならねばなりません」

とクララは張り切つてゐる。ロバートから少々情けない調子で、近頃は弟子をとつて教へてゐると、書いてくると、

「教へていらつしやるのは結構でございますが、私がお側にいつたら、おやめになつて下さいね、私のお仕事になりませうから。たつた一度だけ、教へていらつしやる貴方の後に立つて、覗いてみたくございます」

又ロバートが將來も到底金持になれまいし、彼女と同程度の収入を得ることも出来ないであらうと、書いてよこした時には、

「貴方の優れた知性と心に恵まれた男性が、貧しい筈がありません。世界は貴方の前に道を開くでせう。私の心は貴方のもの、喜びも悲しみも貴方と共にわけあひ、私の心は永遠に變りません」

このやうにして、巴里と維也納と地理的には遠くはなれてゐたが、二人の間には直接な精神の交流が烈しく行はれてゐた。

「私は、まだほんの子供の頃から、貴方のピアノを聴くのが好きでした。貴方もそれを知つていらして、よく私だけの爲に即興して下さいましたのね。いつかシュネーベルグで、貴方のお膝に坐つてゐたロザリーの小さな女の子に『此の人を知つてゐるかい？』つて貴方がお尋ねになつた祈のことを、今でも覚えていらつしやいますかしら。『クララよ』と彼女が答へると『いや、僕のお嫁さんだよ』と貴方が仰しやいました。私は長い間そのやう

なことを子供心に考へてみたのですけれど、或日、本當にそれが實現したのです」  
シューマンにもこれに似た想ひ出があつた。

「ロザリーの話で、貴女がまだ小さい子供の頃、或時僕が貴女にキスをしようとする  
と、貴女が『今は駄目よ、大きくなつてからね！』と云つた時のことを、憶ひ出しました。  
貴女には先見の明があつたわけですね」

又ロバートから、モシュレスやベネットの作品を、曲目に加へたらとの提案に接した時  
には、

「モシュレスは無味乾燥で弾く氣にはならず、ベネットの音楽を私が嫌惡してゐるこ  
とを、貴方に隠すことは出来ません」

此の手紙に對してロバートからは、

「僕は貴女に各種のヒントを與へて、一寸主人顔がしてみたかったです」

又、或日のクララの手紙には、

「ロバート・シューマン、此の名を見ると不思議な思ひが湧いてきます。そしていつも  
それにクララと附け加へたくります。貴方の名を名乗らないで死ぬのは、何んなに悲  
しいでせう。もし死ぬのでしたら、私は死の床で貴方と結婚致しませう。

此の想ひのうちに、今日の手紙は終らせて下さいませ。何んと美しいのでせう。『お休み  
なさい、ロバート』とその時私は云ふでせう。『又お逢ひ出来ますわ』そして貴方の接吻で  
私の目は閉ぢるのです」

この手紙を讀んで、ロバートは早速返事を書いた。

「死の夢について、かくも美しく心に觸れて書かれたことは、新婚の二人があまり年寄  
りにならないやうに、一八四〇年を守るやうに、といふことを思はせます。その時まで二  
人とも、決して死なないと約束しませう」

又、ロバートは、同じ明るい調子で別な時に書いてゐる。

泣いてみたのですか、貴女の涙の一つ一つにキスをしてあげたら、又、快活になつて下さいます  
か？ さあ、先づキス、それから面白い考へがあります。

愛するクララ、ツヴィカウでの新婚の二人の、最初の夏を思ふと、世界中がまるで薔薇の花におほ  
はれたあづまやに化してしまひます。その中に花婿と花嫁が腕をくんで、饗宴と仕事に餘念がないの  
です。さあ此のことを想ひ、僕等の幸福を考へて御覽なさい。ツヴィカウがそんなに遠いことでせう  
か。

先づ第一に（もう一度キスです）若い花嫁さんは、お婿さんを満足させようと思へば、お料理と  
家事を整へることが出来なくてはなりません、貴女はテレーゼから笑つたり楽しんだりしながら、  
教はることが出来ませう。

それから第二に此の若い花嫁は、お婿さんの爲に長い間、自分を犠牲にして無理をしてきたので  
から、長い巡遊などには出かけないで、十分に静養しなければなりません。第三に僕等は退屈な質問  
好きな、お客から自分達を守らねばなりませんね。第四に僕等は盛んに歩ませう。そして少年時代に  
僕が友達と相撲をとつた場所を教へてあげませう。

第五に貴女の父上も、これ以上僕等を苦しめることはないでせう。第六と第七に、僕等は極く質素  
に暮しませう。もしもの場合は、公債の利子券を用立てればよいのです。第八に僕が作曲し、貴女は  
弾くのです。第九に維也納にゆく爲に用意をととのへませう。

さあ、クレールヘン、僕のクララ！ もう泣いてゐないでせうね。僕目をぢつと凝視めて下さい。  
何が見えるでせう！、貴女への固い固い信頼です

巴里に於けるクララの公開演奏は、いよいよ四月十六日エラール會堂で開催と決定した。  
「八時三十分から始まります。どうかその時刻に私のことを想つてみて下さい」とのクラ  
フの手紙に對して、ロバートも將來の運命を此の演奏會に賭けて、

「眞の大成功をするまで、巴里を去らない方がよいでせう。第一回の演奏會には、貴女  
の全力を集中し、僕が直ぐ傍で期待に息をのんで聽いてゐるとお思ひなさい！ どうか巴  
里の承認が確實になるまで、倫敦行は考へないで下さい」

巴里の成功といふ背景が無ければ、倫敦が動かぬこと、後援者のない獨逸娘にとつては、

その巴里での成功すら、望みの薄いものであることも、クララは先刻承知してみた。彼女としては準備の爲に全力を傾けるのが、精一杯なのであつた。

ところが演奏會の数日前に、ヴィークからエミリー・リストに手紙をよこして、「もしクララがシューマンを思ひ切らねば、娘とは認めず、彼女のこれまでの蓄財も含めて、彼女の相續人としての権利をとりあげ、二人を相手どつて訴訟を提起する」と云つてきた。巴里の演奏會が成功した暁に、二人のとり手段を見越してヴィークが、先手をうつたわけであつた。當時シューマンは兄エドアードの病の報に、四月一日故郷に急行し、兄の死を告げる悲歎に満ちた手紙が、演奏會の当日にクララの許に届いた。

演奏會の當夜、クララは少くとも外見は、常の如く落着いて演奏した。然し彼女の心は、自分が最上のコンディションではないことを、痛い様にひしひしと意識してみたのである。

「私は眞のセンセーションを捲き起しました。満員の聴衆でした。然し巴里では費用が多くかかり、何も残らないのです。名が出たこと、それで充分でございます」

ロバートの失望を恐れて、彼女の報告は、ささやかながら色づけられてゐる。結局彼女の地位は演奏會によつて別に變らないのであつた。ヘンリエtteとクララは居心地のよい、生活費もかからぬ郊外に引き移つた。そして豫算の許す限り、音樂會や歌劇には出かけたが、社交界に出入する機會を次第に制限した。華か過ぎる當時のサロンは、つつましい獨逸娘、常に眞面目な獨逸音樂のみを弾く素朴な娘が、入つてゆくにはあまりに遠い社會であつた。クララに必要なのは、後援者と企畫をする人であつた。如何に優れた才能の持主でも、それなくして巴里で成功することは不可能であつた。

エミリー・リスト宛のヴィークの第二信は、今までの冷酷な威壓的な調子が、がらりと變つて、クララのやさしい心に訴へるやうな筆致になつてゐた。度々の苦い經驗を忘れたわけではなかつたが、手紙の哀願的な弱々しい調子は、クララの心を動かした。

父様、どうか父様の御要求と、お考へをお報せ下さるやう、お願い申し上げます。けれども眞面目にお考へいただけないのでしたら、何卒おとりやめ下さい。

父さまは何んなに私共を幸福にお出來になることでせう。私の心は愛で一杯なのでございます……それをお壊しになるのでせうか。父さまは、私が我儘だ、父さまの愛を理解せぬ恩知らずだと仰しやいます。父さま、さう仰せになるのは、大きな間違ひでございます。私が父さまの非難に満ちたお手紙のあとでさへも、いつも何んなに深い愛情のうちに、父さまのことを語つてゐるか、エミリーとヘンリエtteが證人でございます。お別れしたこと、御一緒に歩調を揃へてゆけぬこと、親不孝と仰しやつたことを思つて、私はしばしば泣くのでございました。

ああ、お懐しい父様、もう少し理解していただけたら、たとへ閃光のやうな愛情でも、シューマンに對して燃やしてくだされば、あの人は決して恩知らずではないでせうし、みなが幸福になれるのでございます。申し上げるべきことを全部申し上げることができたら、もし父さまが私の前にいらしたら、きつと感動して、これ以上頑張らうとは遊ばさないでせう。それとも私を嘘つきとお思ひになるのでせうか。不正直で偽善者だと……さうお思ひではないかと、信じられるほどの氣が致します。もしさうなら私を眞に御存知ないのでございます。他人は私を善人だと思つて、愛して呉れます。父さまはさうお思ひになりませんか？ きつと思つて下さいますわね。それならどうか接吻をして下さいませ。

直にお返事をお願い致します、長い間不安な氣持ではられませんもの。私は何んなに音樂と共に生活してゐるかは、御存知でございませう。それなのに私が音樂を愛してゐないとお考へになりますの？ もし私が惱みの凡てを忘れる時があれば、それはピアノに向つてゐる時であることを、神様が御存知でございませう。

この手紙は父とシューマンを、平和的に結びつけようとする、彼女の最後の懇願であつた。彼女はもう一度まげてロバートの忍耐強い愛に縋つてみようと思つた。圓滿に解決する爲に約束の期日を、六箇月でも一年でも、延期してみてもよいのである。此度のヴィークの條件はシューマンが一千ターラーの収入を提示することが出来れば承諾する、それではなければ絶対反對を唱へて訴訟するといふのであつた。クララの長い懇願の手紙と行き違ひに、極めて樂觀的なロバートの手紙が届いた。

昨日早朝、ロイターと計算をして、我々が不必要な心配をしてゐることがわかりました。そしてもし貴女が（意地張りやさん）承知なされば明日にでも結婚出来るのです。他人と比べて僕は我々の資産に驚いてしまひました。毎日のパンの爲に働かなくとも濟むことは、何んといふ有難いことでせう。僕等のやうな簡素な藝術家には充分なのです。僕はこれで幸福になりました。

貴女の資産	四、〇〇〇ターラー
僕の資産	
一、政府の公債	一、〇〇〇ターラー
二、カールの事業投資	四、〇〇〇ターラー
三、エドアード事業投資	三、五四〇ターラー
四、エドアード遺産より	一、五〇〇ターラー
合計	一〇、〇四〇ターラー
一以上の利子	五六〇ターラー
その他の年収	
フリーゼ書肆より	六二四ターラー
楽譜 賣り上げ	一〇〇ターラー
作曲料	一〇〇ターラー
一年の収入總額	一、三八四ターラー

何んと僕は算術の名人ではありませんか、是非にと望んだら、直ぐにも来て下さいませんか？

このやうな明るい氣分であつたロバートのところに、前記の手紙が届いたのである。ロバートが不満と怒りに身を顛はせたのも當然である。たつた五日前に届いたクララの手紙に書かれた「貴方の御希望のままに致します。復活祭には私は貴方のものです」の言葉は、未だ彼の耳に鳴り響いてゐるのであつた。クララの第一通目はその場でロバートの手で破り捨てられ、ロバートがその時クララに書いた一通の返事も後に破棄されてしまつたので、彼の怒りがどのやうなものであつたか現在知る由もない。

「愛するロバート、どうか最後の頁は私が書かなかつたことにして、私を暖い心で眺め、やさしく抱擁して下さいませ。私へのやさしい氣持に目醒めていただくには、どうしたらよいかお教へ下さい。貴方に怒られてゐる間、私はやすらかではあり得ないのでございます。貴方が誤解なされた。……それがいけなかつたのです。そして私をお疑ひになつた。私は人格と愛を疑はれる程、腹が立つことはございません。そんな覚えは身にございませんもの。私だつて大變に怒ることも出来ます。私は貴方を愛し過ぎてをります。今にその證しを致します。どうぞ私におまかせ下さいませ」

この手紙によつて嵐は去り、ロバートも早速和解に同意したが、今までの手紙に見られない權威ある調子で、

「もう決して、未來について恐れてはいけません。不必要な心配は決してしないこと、僕を信じ、僕に従ふと約束して下さい、男は女の上なのですから。僕は特にヘンリエツテの手紙を喜びました。貴女の手紙全部より、よいことを短く書いて呉れましたよ。『運命は氣まぐれだ、人生は短い、決勝點に早く！』この言葉は凡てを語つてゐます。ブラヴォー！ヘンリエツテ！」

二三日後にクララはシューマンから、二通の手紙を受けとつた。一通は彼女の誕生日に際して、再びヴィークに結婚承諾を求むる手紙で、もう一通はヴィークの拒絶にあつた場合に、裁判所に送る正式の上告文で「これは我々の生涯の最も重要な手紙です。勇氣と信頼を……不滅の愛のうちに、再び幸福なロバート」との添へ書きがついてゐて、彼女の名をロバートと並べて署名するやうになつた。「愛人よ、始めて貴女の名を、僕のと並べて書くのです。悲しいうちにも喜びです」とあつた。

彼等のとるべき道は遂に確定し、平和な解決の爲に、尚何箇月か待つ心の用意は出来てはゐたが、法律の後楯を得て、決勝點は最早目の前に見えて來た。そしてクララは此の頃になつて、彼女自身は單なる演奏家に過ぎないが、やがて夫となるべき人は、永遠の生命

を持つ眞の天才であることを、ひしひしと自覺するやうになつた。五月二十三日にクララは書いてゐる。

「昨日、貴方の輝やかなしい幻想曲を受けとり、私は喜びのあまりに病氣になる程でした。一通り目を通しますと、私は窓際に引き寄せられ、そのまま美しい春の花の中に身を踊らせて、花を抱擁したいやうに感じました。幻想曲を読みながら、美しい夢を見ました。このやうに深い印象を受けたことはありません、……御一緒になりましたら、私は決して再び作曲しようとは思ひませんわ、もし思つたら私は大馬鹿者でせう」

自分への戀故に、親からも見棄てられて、か弱い乙女がたたひとり異國にある運命に、ロバートは責任を感じるのであつたが、クララはクララで、自分こそ最初にロバートを愛した故の苦難であると思つてゐた。眞にレオノーレ的精神を燃やして、つぶやくことなく、如何なる苦難にも耐へようとしてゐる健氣な乙女を見て、ロバートの心も幸福を感じた。六月三日の手紙は激勵と感謝に満ちてゐる。

貴女は此の手紙を、僕の二十九歳の誕生日に受け取るでせう。我々は過ぎ去つた年月を悔ゆることなく、回想することが出来ます。お互ひに眞實であり得たし、前進して今や決勝船に近づきました。一番困難な時代は最早過ぎ去つたやうです。然し港に入つても尚ほ用心が肝要です。我々は一寸又一寸と少しづつ戦ひとつてゆく運命となりましたが、祭壇に立つた時「然り」の答へが、このやうな未來の幸福に對する絶對の確信のもとに答へられることは、嘗つてないことだらうと信じます。

その時まで、僕は益々貴女にふさはしい者になりたい。どうか口先の言葉だととらないで下さい。僕は傲慢なる者の前には、誇りを持つてゐますが、貴女のつつましきの前には、喜んで缺點をさらけだして、改めたいと努力致します。今後もきつと僕に失望なさることもありませう。僕には男性として多くの短所があります。僕はしばしば落ち着かず、子供らしく、決斷力が缺けてゐますし、考へることなく快樂に我を忘れて致します。然し貴女が時々見せて下さつたやうな忍耐や愛情は、きつと僕に影響を與へるでせうし、貴女を近くに持つといふ事實が、僕を善人にするでせう。

然しこれは言葉に過ぎません。確實なのは二人が愛してゐることです。貴女の心には、夫を幸福にする愛が豊かにたたへられてゐることを信じます。クララ！ 貴女は素晴らしい娘だ！ 貴女の中の美しい稀なる素質、あのやうな環境の中で短い間に、どうして豊かにされたか不思議なことです。一つ僕が知つてゐるのは、僕の和やかな性格が、貴女の幼女時代に、一つの印象を與へたことです。もしも僕を知ることがなかつたら、貴女はもつと違つた娘になつてゐたことと僕は信じてゐます。

僕は貴女に愛を教へた。父上は憎惡を教へた（尤もよい意味にですよ、人間は憎むことも知らねばなりませんから）。そして僕は、夢想してゐる理想の花嫁を貴女の中に見出した！ 僕に自らを慰めさせて下さい。

「僕は昨日といふ日を決して忘れない。昔のお伽噺やさんの話をきいて下さいませんか。

朝早く、心の中で鳴つてゐる鐘の音に目覺めて、最初の想ひは貴女の許に飛んでゆきました。最初の誕生日のお祝辭は、公園に面した僕の部屋に、流れこんでくる太陽からでした。翼を擴げて直ちに飛んでゆきたいやうな朝だつたのです」

と書きだされた歎喜に満ちた長い手紙には、一八三九年のロバートの二十九歳の誕生日の幸福な一日が、幻想的な筆で細々としるされてゐる。クララが誕生日の贈り物として、巴里で描かせて送つた肖像畫は、ロイター博士の手で、その日の夕方にロバートの許に届けられた。

一方クララの許にも、ヴィークの最後の拒絶の手紙が届き、ロバートに對する徹底的な侮蔑の言葉に、一切の試みが無効に終つたことをクララも遂に悟つたのであつた。クララの心はこれではつきりと決心がついた。ロバートから正式な訴状が届くと、彼女は直ちに署名をして、書類を返送した。

「署名した瞬間は、私の一生の最も大切な時でございました。私は確信と自信をもつて署名し、限りなく幸福でございます」

一八三九年七月、シューマンはライプチヒの裁判所に、正式に結婚許可を求める訴訟を提起した。裁判所では法律的に審議する前に、關係者の合議で解決させたい意向であつたので、ロバートはクララに歸獨をうながしたのである。

### 第十三章 戦ひは終りぬ（一八三九年—一八四〇年）

巴里の街に最後の別れを告げるべく、クララは八月十三日に、パンテオンの頂上にあがって見た。幾重にも重なる家々の屋根と、にぶく光つてゐるセーヌの流れ……此の美しい大都會は再び彼女に笑顔を見せなかつたのである。此の頃巴里の政治的不安情勢は次第に逼迫し、クララの滞在中にも四五十人の市民が、軍隊に射殺されるやうな騒擾が頻發する有様であつたので、歸り行くクララにとって、今は巴里に何の未練もなかつた。然し歸りゆく故郷の有様は、七年前の第一回巴里訪問の頃と何んといふ違ひであらう。彼女の前には、最早暖く迎へてくれる我が家もないのである。

「母がこんなにも冷淡で、手紙さへよこさないのは悲しうございます。まるで私は家族の人ではないやうに、六箇月の間、家からは何の便りもありません。それなのに私の想ひは、常に彼等を離れないのです」

クララは故郷へ歸るヘンリエtteとフランクフルトまで同行した。アルテンブルクまでロバートが迎へに出てみたので、二人は十箇月ぶりに逢つてツヴィカウまで同行した。傍に坐つたロバートの苦惱にやつれた面と、熱つぽく輝く目を見ると、クララの心は複雑な感情がこもごも交りあふのを感じるのであつた。その夜の彼女の日記には、

「ツヴィカウに、ロバートと共に馬軍を走らせつつ、私は不思議な感慨にひたつてみた。ロバートの傍に坐り、彼の少年時代を想ふ時、そして今は彼を愛する肉親の者も此の世にゐないことを思ふ時、私は彼の悲哀を深く感じた。私は彼の失つたものの代りにならなければならない。これは私の野心であり、此の思ひは私を幸福にする。天よ、父との戦ひに勝ち得る勇気を與へ給へ、そして天よ、赦し給へ！ 父は四年間の巡遊で得た私の貯蓄を、奪はうとしてゐる……今は私は靴下さへ自分の金では買へないのである……この事は私を悲しませる。ロバートに何も持つてゆけないばかりか、彼に頼らねばならない……然し私は空しくピアノを學んだのではない。健康さへ恵まれれば、私はロバートに償ふつもりである。

私の最大の希望は、藝術家としてロバートの生活と美しさが害はれることなく、専心音楽に生きられることである。そして私の心配は、彼の健康である。もしも彼と死別するやうなことであれば、私は果して生きてゆく勇氣があるてあらうか」

クララはその月の三十日にライプチヒに到着し、實母バルギール夫人の妹にあたる、叔母のカールス夫人の家に落着いた。法律上、實母バルギール夫人の結婚の承認も必要としたので、シューマンが、七月にバルギール夫人に承諾を求めると、バルギール夫人からは、

「私の愛するクララの心をすつかり捉へた方を、もつとよく知りたいと切望致します」との返事があつたので、ロバートは、早速クララの肖像と「音楽新報」、彼の作品等を携へて、伯林に出かけていつた。ロバートは、クララによく似たやさしい目をもつたバルギール夫人を、一目見て好意を感じ、ロバートも亦、夫人に一目で氣に入られることが出来た。バルギール夫人は早速遠い巴里にゐる娘に、祝福の手紙を書いた。

「愛するクララ、貴女のロバートは昨日から當地に来てゐます。そして私は喜んで貴女に選擇に承諾を與へます。私は一刻一刻彼が好きになりますよ。もし貴女も當地ゐて、二人を一緒に眺められたら何んなに嬉しいことでせう、ロバートは今日彼の作品を澤山に弾いて聴かせてくれました。何んといふ美しい才能でせう！ 貴女方二人の結婚は、何んなに私を幸福にすることです。」

九月三日クララは伯林に移り、暫時バルギール家に滞在することとなつた。クララは二十歳にして始めて、肉親の母の愛情にやはらかに包まれる平安を與へられたのである。九月十三日の彼女の二十歳の誕生日には、突然ロバートが伯林に現れたので、二人は久しぶりに聯弾をしたり、秋の日の郊外散歩等を楽しむことが出来た。

九月末にはクララとヴィークの會見がライプチヒで行はれた。その様子はクララの日記に詳細に記されてゐる。

「二十六日

昨日と今日再び父上と語った。彼のロバートへの恐しい憎悪は、全く理解出来ない。父は四つの条件をだした。

第一に、七年間の巡遊による私の貯金、二千ターラーの所有権を弟に譲る事。

第二に、一千ターラーを支拂へば、私の所有品及びピアノを引き渡して貰へる事。

第三に、ロバートは八千ターラーの財産の利子の使用権を私に與へ、離婚の際は（何んといふ恐しい考へだらう）その元金の権利を私に譲る事。

そんなことをする人があるであらうか、一萬二千ターラーの財産の三分の二を妻に與へるなんて、男にとってこんな不見識なことがあり得ようか。

第四に、ロバートは私を唯一の相續人にする事。

無論我々はこんな条件を受諾出来ない。だから事件は法律によつて、解決されねばならない」

いよいよ第一回の審理が行はれる、十月二日になつた。ロバートとクララは、うら淋しい思ひに青ざめながら、ヴィークの出廷を待つてゐた。然しヴィークは書面を以つて抗議しただけで、遂に姿を現さなかつたので、第二回は十二月十八日と決定した。ヴィークはいよいよ敵性を發揮して、彼女の貯蓄を押へたばかりか、彼女に贈與されたピアノ、衣服、装身具までも渡すことを拒絶した。冬の外套をとりについたクララの召使ひは、ヴィークに荒々しく追ひ返される始末であつた。こんな有様で小遣ひにも不自由することになつたので、クララは伯林や北獨逸各市で音樂會をする決心をした。

ところがこれを聴き知つたヴィークは、彼女の成功を妨害しようと、彼女が英國式な亂暴な技術になつてゐるから、優秀なピアノを破損する恐れがあるとの馬鹿げた書面を各地に送つたり、又「高貴なるプロシヤ王は、父の命に叛くピアニストの公開演奏を禁止するだらう」と書いたりした。然しクララは無事にピアノも手に入れ、伯林の第二回演奏會は王室劇場で開かれて、プロシヤ國王自ら眞先に彼女に拍手を送られるのであつた。プレーメン、ハンブルク地方には、クララとロバートを中傷した印刷物がヴィークの手で配付されてゐた。然しヴィークの策動は、彼の品性を傷けるのみに終つたやうである。

常時女流ピアニストとして有名であつたカミラ・プレイエルがライプチヒを訪問した。非常に美しい人で、その魅力ある容姿は、演奏の缺點を補つてあまりある程であつた。シューマンも彼の雑誌で彼女を讃へてゐるし、ベルリオーズも彼女に結婚を申し込んだ程で、ローマで勉學中、ピアノ製作者のプレイエルと結婚したことをきいたベルリオーズは、殺人と自殺の幻映に悩まされながら、巴里に急行したことがあつたのである。ロイター博士からクララへの報告によると、ヴィークが此の我が娘の好敵手であるピアニストを、積極的に後援し、舞臺で譜をめくつてやつたり、感激した如く微笑しつゝ頷いたりしてゐたのは、喜劇的な光景であつたらしい。

十二月十八日が近づいたので、ライプチヒに戻ると、クララは机が両親によつて、こぢ開けられてゐるのを發見した。此度の公判には法の命令によりヴィークも出席し、固くなつて身動きもせず、聴いてゐるクララ達には目もくれず、荒々しい態度で非難を述べたのであつた。

「私は決して忘れない、私は深い同情の思ひをもつて、父を見ずにはゐられなかつた。彼が何日かの眠られぬ夜、何箇月かの苦心の結果計畫した陳情は、何んの役にも立たなかつた。あまり興奮した爲に、裁判長の命でしばしば制止され、その爲に私の心は痛んだ。

私はまるで自席に釘つけにされたやうであつた。ロバートは彼獨特の冷靜な態度で、誠によくつとめて呉れた。あのやうな激情の爆發の前では、彼として最上の態度であつた。私の故に、公の侮辱を受けねばならなかつた彼を思ひ、私は彼を益々愛す……私は涙を押へることが出来ない。今日は我々を永遠に隔離した。少くとも父と娘のしたしきは消滅した。私の心は千々に碎けたやうな氣がする」

判決は一月四日と決定したので、クララはロバートに伴はれて伯林に歸り、何年ぶりが愛する人と母と共に、靜かな降誕祭を祝ふことが出来た。

二十七日にライプチヒに歸つたロバートから、一月四日に報告が來た。ヴィークの告訴

はロバートの性格と飲酒癖の點を除いて全部却下され、ロバートはヴィークの主張に反駁する證據の提出を求められ、四十五日間の猶豫を與へられたといふのである。此の醜惡な人身攻撃は、感じ易いシューマンにとつて、堪へ難い侮辱であつた。クララが時折り揶揄つてみた如く、シューマンは陽氣な仲間達とライン・ワインの杯をあげたり、ビールを飲んだりすることがあつた。然しそれは、決して病的なものではなかつたのである。メンデルスゾーン、ダヴィット、フェルールスト、フリーゼ、ロイス伯等の友人達が、彼が病的な飲酒癖の持主でないことの、證人として出廷すると申し出て呉れた時には、ロバートの憂鬱な氣持もいくらか慰められた。

二月二十二日には、イエナの大學からロバートに哲學博士を送る報せがあつた。此度の訴訟事件で音楽家としての人格を疑はれた社會的效果を考へて、又クララの夫としての重味を加へる爲に、イエナの大學の教授會に申請してゐたのが、通過したのであつた。

彼等二人を永遠に結びつける、待望の春の氣配が、いつしか自然の中にもめぐんで來た。クララは北獨逸地方の巡遊に忙しく、シューマンはライプチヒの音樂界の中心に活動してゐた。二月の或日、伯林のクララは、ロバートから「私は六つの歌謡を作りました」との言葉と共に、思ひがけない樂譜を受けとつた。シューマンは作曲を始めて以來、主としてピアノ作品にその靈魂を打ちこんできたのであつたが、此の頃から歌謡に筆を染め、シューベルトによつて始められた、獨逸歌謡は彼に於て新しく完成した様式を見出したのである。彼は詩の生命に、音樂の鼓動を與へたばかりでなく、ピアノの部分にも單なる伴奏ではない、獨立した生命と詩を豊かに與へようと試みた。一度切つておとされた彼の歌謡への情熱は、つきることなく溢れつづけて、ハイネ、パイロン、ゲョーテ等がとりあげられた。

「此處に貴女の二通のお手紙へのつつましい御褒美があります。これを作曲してゐる時、僕は貴女への想ひに我を忘れてをりました。貴女が目がちらついてゐるのです。ロマンチックな娘さん、貴女のやうな許婚者がゐなかつたら、このやうな音樂は書けなかつたでせう。これは貴女の名譽にかけて申します」

と、最初に印刷されたハイネの歌謡集作品二十四を送る時、彼は書いてゐる。彼自ら奔流する歌謡への熱情に、驚いてゐるのであつた。

「何んと樂々とそれ等の歌が、僕の心に浮んで來たか、そして僕が何んなに楽しいか。僕はたいていピアノの前でなく、歩きながら又立つてゐて作曲します。これは指を通じてくる音樂とは、全く違ふ種類の音樂です。もつと直接な旋律的なものです」

新しい歌の作品が送られてくる度に、ロバートの天才に對する驚異と尊敬が、又新しくクララの心に深められるのであつた。

「一つ心懸りなことがある。私は何時までロバートの愛を支へることが出来るであらうか。彼の靈魂は偉大であり、理解はしてゐるものの、私には彼に充分に満足を與へる値打がない」

と、クララの日記の一節は、結婚を前に控へて、彼女の謙遜な氣持を充分に示してゐる。一八三九-四〇年のライプチヒの音樂シーズンはこれまでにない音樂活動の華やかなシーズンであつた。シューマンは、過ぐる維也納訪問中に、フランツ・シューベルトの弟フェルディナンドと知つて、此の人の好意により、自ら樂聖の遺品を整理中に發見した遺作の草稿をライプチヒに持ち歸つたが、十二月十二日ゲヴァンドハウスの定期演奏會に於て、メンデルスゾーンの助力によつて、そのハ長調の交響曲の初演が行はれた。

「フランツ・シューベルトの交響曲の練習がありました。到底形容は出來ません。凡ての樂器はまるで人間の聲のやうで、信じ難い程に表情的です。そしてそのオーケストレーション、その長さ！ 天國の如き長さなのです。丁度四巻の小説のやうに……第九交響曲よりも長いのです。僕はすっかり幸福になり、貴女が僕の妻で、僕にこんな交響曲が書けたらと、思ひました」

三月下旬にリストのライプチヒ訪問が實現した。ドレスデンで始めて逢ひ、忽ち肝膽相照した二人は、當時開通したばかりで人々の興味の中心であつた汽車で、ライプチヒに同

行した。

「僕はくたくたに疲れてゐるが、此の數日の出來ごとに興奮して落着けないのです。リストが此處にゐる間は仕事は出來ません。殆んど一日中一緒にゐます。昨日リストは『君とは二十年前から奮知のやうな氣がする』と云ひましたが、僕も同感です。我々はもうお互ひに禮儀ぬきでやつてゐます。維也納が彼を甘やかし、氣まぐれに育てたのだから當然なこととせう。

何んといふ素晴らしい弾き方をする男だらう！ 大膽で、野性的で又夢見る如き氣韻がある。然しクレールヘン、彼の世界は僕の世界ではない。貴女の弾くやうな、そして僕がピアノに向つて作曲する時のやうな藝術の、暖い親しい持ち味を、彼の壯麗さととり換へようと僕は思はない。確かにあまりに飾りが多過ぎる。もうこれ以上は云はない。貴女には僕の意味がわかるでせう」

「お手紙が來ないのは、リストの所爲だと思つて嫉妬をしてをりましたの。リストの前にはあらゆる演奏家、タールベルクさへも小さく見えます。けれども私は貴方の御意見に全く同感でございます。貴方方が禮儀ぬきでやつていらつしやると伺つて、大笑ひを致しました。リストが甘やかされてゐると仰しやいますが、貴方だつてさうでせう！ 私が甘やかしたのでございます、けれどもやがて私の夫におなりになれば、萬事よくおなりです」

リストの演奏會の切符は、ライプチヒに發達してゐる商業遲徳に反して、あまりに高價過ぎたので、市の保守派の人々は新聞でリストを叩き始めた。第一回の演奏會が濟むと、リストは第二回の豫告をしたが、その直前になつて病氣と稱して延期してしまつた。座席が多く賣れ残つてゐると知つてリストは政策上病氣になつたのである。シューマンからクララに宛てた手紙によると、リストは仮病の間、ホテルの一室に閉ぢ籠り、その間、シューマン、メンデルスゾーン、ヒルラー、ロイス伯以外の人には逢はなかつた。

「リストの病氣は僕にとって好都合でした」とシューマンが云つてゐる如く、彼等若い仲間は、毎日リストの寢室で音樂論に花を咲かせたのであつた。リストはシューマンに友情を示し、ヴィークの關係してゐる店のピアノを使用しながら、ヴィークには招待状もださなかつた。これ等のリストの態度は、商業都市であるライプチヒの有力者達に、リストが貴族的で新興ブルジョアジーの勢力を侮蔑してゐるといふ印象を與へ、問題が益々うるさくなつてきたのであつたが、圓滿な人格者のメンデルスゾーンが、ゲヴァンドハウスの演奏會にリストを出演せしめることに盡力して、無事に問題を解決することが出來た。

「ヒルラーが大晩餐會を開きました。お歴々が澤山に出席してゐました。まあ考へても下さい。リストが僕を讚美して呉れたのです。メンデルスゾーンと乾杯した後に、彼は美しいフランス語で、僕のことを言及して呉れたので、僕は嬉しくなりましたが、非常に愉快になりました」

とあるやうに、シューマンの手紙は毎日のリストの動靜を傳へ、當時既に世界的名聲を謳はれてゐたリストとの交友を喜んでゐる内氣な、謙遜なシューマンの姿が、微笑ましく彷彿としてゐる。

三月三十日のリストの告別演奏會に、是非出席するやうにと、リストとロバート連名の招待状がきたので、クララは二十九日ライプチヒの叔母の家に歸つて來た。此の演奏會でリストはシューマンの「謝肉祭」を弾いたのである。クララの日記を見ると、クララは「謝肉祭」にリストが與へた解釋をあまり好まなかつたらしい。その翌日リストは二人を訪問して、自作を澤山に演奏した。クララは、

「私も少しばかり彼の爲に弾かされた。弾いてゐる間、私は拷問されてゐるやうな氣がしてゐた。リストの態度は自然で、人の氣持を軽くしてくれる。然し私は彼と長く共にゐたいと思はない。彼のいらいらと落着かぬ様子と、絶え間なき活動力は、ともにあることを重荷に感じさせる」

と書いた。嵐の如くリストが去ると、ロバートとクララは春近いコネウィッツに、久しぶりの散策を楽しむのであつた。クララは、生命力と才氣に溢れた、華やかで美しいリストよりも、靜かな内面的な素朴なロバートの中に、彼女の理想の男性を見るのであつた。

「ロバートと共に出かけるときほど、私の心が豊かに満され、落ち着くことはない。彼とは何も語る必要がない……私は、彼が物思ひに耽つてゐる時が好きである。彼の想ひの一つ一つが聴えるやうに感じられる。

そして彼がやさしく私の手を握る時、私の心は深い満足に満される。今日は澤山の歌謡を見せて呉れた。あのやうな作品を夢にも期待してゐなかつた。彼への私の感歎は愛と共に成長する。現在生きてゐる人の中で、ロバート程音楽的才能に恵まれてゐる人は他にないと思ふ」

ロバートはクララが伯林にゐる間に、二人だけの花嫁花婿の音楽會を計畫して、プログラムを自ら選んだ。第一に當時まだ知られてゐなかつた、ベートーヴェンの作品百六のハムマークラヴィア奏鳴曲變口長調、次にロバートの歌謡曲（クララが弾き且つ歌ふ）、次にクララの諧謔曲とバッハの前奏曲と遁走曲第二巻のハ短調が選ばれた。「音楽が濟んだら、お互ひに御褒美をだませう、どんな風にするかわかるでせう」

「貴方に歌つておきかせするのが心配で、今から眞赤になつてをります。透明な發音なんて到底不可能ですわ。私の聲が何んなに嘎れてゐるか。私はもう二年間も殆んど歌ひませんもの」

かうした楽しい團樂は、四月十七日まで續いた。伯林に、ロバートに送られて歸ると、丁度メンデルスゾーンも來あはせてみたので、自然三人で音樂を楽しむ機會が多く、クララはメンデルスゾーンによつて、バッハの遁走曲の演奏について、教へられるところが多かつた。「メンデルスゾーンは私の最愛のピアニストである」と、クララは彼に傾倒してゐる。

一人ライブチヒに歸つていつたロバートから、五月十五日のバルギール夫人の誕生日には、有名な「月夜」を含むアイヘンドルフの詩の一連の新作を贈つてきた。「ママはこんな楽しい誕生日を、長らく持たなかつたに違ひない。私も嬉しい」と、クララは日記に書いてゐる。結婚の日と二人で決めてゐた復活祭もいつしか過ぎて、世は新緑の五月となつた。然し判決はまだ下らなかつた。バルギール家も、多くの子供等もあり、家計も豊かではなかつたので、クララが春の巡遊で得た金も従つて残り少なくなつた。この頃になつて、青春と忍耐をかけて戦ひぬいてきた二人は、戦ひの終る日を待つて疲れを感じるのであつた。

遂に七月七日待ちに待つた喜びの報知があつた。訴訟に破れることを悟つたヴィークが、シューマンへの告訴理由の證據の提出を求められたのを拒絶した結果、八月十二日正式の判決が下り、遂に彼等の勝訴といふことに決定したのである。結婚式はクララの満二十一歳の誕生日の前夜、九月十二日ときまつた。

「私は此の幸福を掴めないやうな氣がする」

とクララは日記に感慨を記してゐる。此の頃、ロバートはクララにヘルテルのクランドピアノを贈り物として届けた。「ピアノは花で飾られ、花の中に愛の詩が添へてあつた」とクララは記してゐる。

彼女は結婚を控へて、クララ・ヴィークとしての最彼の巡遊に、親友のエミリー・リストを伴つてチューリングゲン地方に出かけ、九月五日にはワイマールで演奏した。「クララ・ヴィークとしての最後の演奏會であつた。十二歳の初めての巡遊の、最初の訪問地ワイマール、あの時はゲーテもまだ生きてゐた。私は悲しい心地がした」とクララは日記に書いてゐる。次の日、ロバートが迎へに來たので、エミリーと別れて、二人は九月七日、相携へてライブチヒに歸つた。

結婚の前夜に、ロバートがもたらした贈り物は、如何なる花婿もその花嫁に與へることが出来ぬ程の、素晴らしい贈り物であつた。それは「我が愛する花嫁に」と献呈の辭がミルテの葉に抱かれて書かれた、「ミルテ」と題して後に出版された歌謡集であつた。有名な「蓮の花」「君は花のやうに」「胡桃の木」等、珠玉の如き作品が含まれてゐる。

〔ミルテの花は、北歐では昔から、花嫁のヴェールに飾られる習慣がある。〕

ロバート・シューマンとクララ・ヴィークの結婚式は、一八四〇年九月十二日、ライブチヒの郊外ジェーネフェルドの教會で、ささやかに行はれた。式に參列したのはただ二人

で、クララの實母のバルギール夫人と、フライブルクから馳けつけてきた、彼等の幸福の爲に献身的な盡力を捧げてくれた、エルンスト・ベッカーであつた。

「それは美しい日であつた。長い間隠れてゐた太陽さへ、やはらかな祝福の光りを、結婚式に向ふ我々の上に投げかけ、木立に圍まれた田舎の小さな教會には、シューマンの少年時代の友人、ウィルデンハーン牧師が待つてゐた」

新婚の二人がライプチヒに歸ると、叔母のカールス家には、結婚を祝すしたい友人達が待ち受けてゐた。バルキール家、カールス家、リスト家、ロイター博士等々……クララはその夜の日記に書いた。

「此の日は私の生涯の最も大切な幸福な日として記憶されるであらう。私の生涯の一つの時代がこれで終つた。私は幼い頃から多くの苦難の道を過して來たし、又大きな歡喜も知つて來た。私はそれを決して忘れない。

今ここに新しい人生が將に始まりつつある。美しい人生……凡てのものより己自身より愛する彼の中にある人生である。然し、私には重い責任も残されてゐるのだ。天よ、よき妻として忠實に盡し得るやう、力を與へ給へ。私はいつも、神への深い信頼を持つてゐる。そして、永遠に持ちつづけるであらう」

若い二人の幸福さうな様子に、暖い祝福の眼を注ぎながらも、ロバートとの結婚によつて、透明な夕空に美しく輝いてゐる金星にも似た、クララの清純な藝術が、これで終りを告げるのではないかとの杞憂が、彼女を愛する人々の心にあつたことは否定出來ない。然し彼等の嘆く一時的損失が、やがてロバートの完成によつて、豊に償はれることを誰よりもはつきりと自覺してゐたのはクララ自身であつた。そしてクララは長い一生の間、新婚の日の日記に、自ら誓つた決心、常に「愛する彼の中にある人生」、妻としても又藝術家としても、ロバートの中に己を没入する生活を忘れなかつた。

#### 第十四章 春、光りと雨（一八四〇年—一八四四年）

長い間夢見つづけてきた結婚生活が、二人の前に確かな現實となつた時、不思議な静けさと豊かさが二人の心に溢れてくるのであつた。

「よいお天気、美しい日だ！」とクララはまるでお天気のみが重大問題のやうに、日記に記してゐる。最初の一週間は、殆んど毎日を散策に過して、初秋のすがすがしい山野を、二人は嘗つて無い静かな心持で跋涉した。

インゼル街五番の彼等の新居は、ライプチヒの奮市街に近く、街の騒音の届かぬロバートの好む静寂な、薄暗い部屋を持つてゐた。ささやかな此の家こそ、ロバートの云ふ「夢の家」であり、二人にとっては「ヘルテル家の豪壯な住居も比較になりません」と云はしめる程の楽しい我家であつた。

〔ヘルテルはライプチヒ第一流の出版書肆の持主である。〕

ロバートにとつて、穏かな光線のただよふ静な部屋程に好ましい部屋ははかつた。夢想到に耽るのにふさはしいからである。友人達は此の若い夫婦がつくつてゐる、音樂と愛情に満ちた家庭の空氣を慕つて、次第に集つて來たので、クララは馴れない主婦の役目にまごつきながら、彼等を歓待するのであつた。クララは本質的には藝術家であつて、主婦の役は何か身にそぐはぬものがあつたのであるが、彼女は生れつきの忍耐強い性格と、聰明さを以つて己に課せられた役目を、喜んでなすとげる熱意を失ふことがなかつた。

「貴女は僕を通じてバッハに生きるであらう。僕は貴女を通じてベリーニに」と、嘗つてロバートが結婚後の生活について書いたことがあつたが、結婚してみるとベリーニは全く忘れられ、朝に夕にバッハが彼等の家に鳴り響くのであつた。花嫁は間もなく、夫ロバートが作曲家として嘗つてない程の旺盛な創作力に満されてゐるのを悟り、彼の藝術を守り育てる爲に、己の生涯を捧げるひそかな決心を益々強く固めてゐた。ロバートは彼の云ふ「強い娘」から今は「強い妻」となつた、クララの豊かな愛情、心遣ひのうちに、作曲に専心した。これまでも、彼の創作力は豊富ではあつたが、非常にむらがあり、ピアノ曲

と歓謡に制限されてみて、大きな形式の作品への彼の欲求は、未だ形をとるところまでゆかなかつた。維也納からライプチヒへと迫害と不安に落着く間もなかつた心が、彼を大曲への熱情から引き離してゐたのである。

心の中に浮んでは消え、組み立てられては壊された数々の樂想は、今やクララを得た自信と、彼女の純眞な愛情に刺戟され、長い間抑壓されてゐた彼の大きな作品への熱情となつて、豊に迸り出るのであつた。ロバートは大膽にも、今まで筆を染めなかつた管絃樂の世界に、入つていつたのである。クララは大きな喜びを抱きつつ、古今の名作を檢討するロバートの傍にあつて、音樂的に家庭的に彼を助けた。

「彼女は私の交響曲の、オーケストレーションを非常に助けて呉れた。彼女は時祈ゲーテの傳記を読み、必要のある時には豆の皮をむいてゐる。音樂が第一であるといふ事實は、私に歡喜を與へる」

と書かれたロバートの日記を見る時、クララの多忙で又精神的に豊かな新婚の日の日常が想像される。然し表面こよなく幸福に見える新家庭にも、多くの悩みがあつた。先づ家計の問題、對社會的な問題、藝術家としてのお互ひの共同生活に於ける妥協、かうしたものが、當面の問題であつた。

演奏會ピアニストとしてのクララの名聲を確保し、演奏によつて収益を得る爲には、彼女は當然一日のうち何時間かを練習に捧げねばならない。然し第一交響曲の創作に日夜精進を續けてゐるロバートにとつて、たとへ最愛のクララの練習であらうと、一つの家の中に、関係のない音樂が鳴り響いてゐることは、堪へ難いことに違ひない。一方彼女のピアノの音がシューマン家できこえなくなれば、それは彼等の収入に響いてくる。二人の藝術家の結婚生活には、最初からかうした悩みが置かれてゐたのである。

九月十三日、結婚式の翌日、シューマンは妻に新しい一冊の日記を贈り、その第一頁に自ら次の如く記した。

最愛の若き妻よ。

女性として、又貴女の二十一歳の最初の選ばれたこの佳き日に、やさしい接吻と共に貴女を祝福する。此の小さな本には特に深い意味がある。我々は家庭生活の感動や希望を凡てここに記し、言葉では盡し難い相互の要求や、誤稱した折の意見や調停の言葉をも書き入れる。短く云へば、此の本は我々が信じて總てを打ちあけるよき友人となるのである。日曜ごとに記録係りは父代し、内容によつて音讀され、或は默讀され、忘れた事は附記されて、一週間が價值ある充實したものであつたか、愛する藝術に向つて人格を磨き、正しい生活を建設しつつあるか、秤りにかけてみるのである。

我々が創作しつつある音樂への批判や、知り合つた音樂家達の性格のスケッチも加へよう。貴女と私の美しい希望に、神よ祝福を與へ給へ！ 様々の心懸り、結婚生活の喜びと悲しみの眞實の歴史が、此の本に記され、やかて何年かの後に、私達はそれを讀み楽しむことであらう。

我が心の妻よ、もし賛成ならば、私の名の下に署名し、呪符として此の世の幸福のもとである三つの言葉を稱へ給へ。

「勤勉 質素 節操」

ロバート・シューマン

クララはその下に「心から忠實なる君が妻クララ」と署名した。

インゼル街の家の歡迎する客の一人であつたメンデルスゾーンに、或日シューマンが此の日記のことを打ちあけると、メンデルスゾーンも妻との間に交代で日記を書いてゐたが、一年目で續かなくなつたと語つた。「我々にはそんなことがないやうに」とシューマンが當番の時に書くと、「勿論ですわ」とクララも固い決心を附記してゐる。ロバートは、此の記録係の約束を破つた者には、いづれ罰則を考へると云つてゐたが、最初に破つたのはロバート自身で、彼は三週間目の或日、

「今日は何にもない。然し、クレールヘン、わかつて貰へるだらう。今日は音樂に暮れてしまつた」

ロバートはその時既に、第一交響曲の創作に心を奪はれてゐたのである。クララは此のやうな祈には喜んで夫の代りを務めた。家庭生活が複雑になるに従ひ、病氣、巡遊その他の爲に空白が生れ、それが一月となり、一年とまでなつたこともあつたが、「我々の生活を整

理する最もよい方法」とロバートが云つた最初の決心を忘れず、日記は杜絶えては又書き續けられるのであつた。

ロバートは泉の如き創作力に溢れて、交響曲、合唱曲、歎劇の作曲と、嘗つてたい程の野心ある計畫をクララに語つた。クララは細やかな心遣ひをもつて、ともすれば動揺しやすいロバートの精神の平衡を守りながらも、彼を藝術的に刺戟し、又共に研究することによつて自らも多く學ぶのであつた。二人は日課の如く四十八のバッハの平均律ピアノ曲集を研究した。

「我々は遁走曲の研究を續けてゐる。バッハの前にはメンデルスゾーンも貧しく思はれる。彼の苦心の程が聴き手に意識されるからだ。然し私は現在、メンデルスゾーンの如く、遁走曲の書ける人が他に生存してゐるとは信じない」

とクララは日記に書いてゐる。一八四一年の春になると、バッハの代りにベートーヴェンの研究が始まつた。交響曲、序曲、奏鳴曲等々。「クララはベートーヴェンの奏鳴曲を、専心研究してゐる。そして原作の概念をいささかも傷けることなく、己に同化させてゐる。

私の爲にも非常に有難い」とロバートは日記に感謝の言葉を記すのであつた。又クララは、

「公開演奏の席で弾くことが少なくなるとともに、私は機械的な技巧を嫌惡するやうになつた。リスト、タールベルク、ヘンセルト等の演奏會用の作品は、長つづきする喜びを與へない」

此の二人の音楽研究室は、ロバートに音楽的な靈感と榮養を與へたばかりでなく、クララの音楽への認識を深め、單なる演奏會ピアニストの陥りがちな、幅のせまい視野から、彼女を引きあげるのに役立つのである。

演奏會ピアニストにとつて、生命の源泉である貴重な練習時間が、主婦としての仕事の爲に、益々狭められてきたので、クララは主として家庭に於て、夫や友人の爲に演奏することによつて、自ら満足するやうになつた。ロバートの創作熱はクララにとつて大きな喜びであると同時に、演奏家としてのクララに一抹の侘びしさを感じさせるのであつた。「薄い壁が憎らしい」と、彼女の日記にしばしば書かれてゐる。一八四一年の一月の或日には「私の演奏は退歩した。一日のうち僅かの時間さへも私の爲には残らない」とあるやうに、階下の書齋で作曲してゐるロバートの氣配を身近く感じつつ、傍にあるピアノを眺めながら、何日も觸れずに過す侘しい日が續いた。そんな時彼女は、やがて母になる日のことを、明るく、又不安のうちに考へるのであつた。父の指導のもとに物心がつく前から始め、眠ることや食事と同じやうに、最早完全に彼女の生命の一部になつたかと思はれた仕事が、犠牲にされなくてはならない。彼女の心の中の此のひそかな惱みを、敏感なロバートが感じない筈がなかつた。

「妻が作曲中の私を邪魔すまいと恐れる結果、かへつて私が彼女の勉強を邪魔することになつたことを、私はしばしば後悔してゐる。聴衆の前に現れる演奏家は絶対に一定の時間の練習から解放され得ないことを、私はよく承知してゐる。私の愛する藝術家には、この時間が與へられないことが多い。然し音楽教育のより深い方面から見ると、彼女は進歩してゐる。優れた音楽にのみ接する結果、彼女の演奏には教養と感情の豊かさが加へられた。技術的な完璧さを追求する爲の時間は、恵まれてゐないが、此の不足は私の責任なのである。然し今は對策がない。クララも、私に青春が満ちてゐる時に——今がその最高の時期である——私の能力を充分に利用すべきことを自覺してゐる」

云ふまでもなくクララは、これを當然のことに素直に受け入れてゐたので、シューマン家の生活はロバートの創作を中心として動いてゐた。

一九四〇年を「歌の年」とロバート自らが云つてゐるやうに、此の彼の心に溢れる歌謡の泉は、結婚の月も、降誕祭の季節も、盡きることなく浪々と湧き出でたのであつた。クララもロバートに激勵されて、降誕祭には三つの歌謡を作曲して「謙遜のうちに」と記して、夫に獻げた。ロバートは大喜びで、その頃彼が試みてゐたリッケルトの詩篇の作曲に、クララの協力を求めた。ロバートは一週間に九曲を作り、クララは三曲しか出来なかつたが、これはロバートの作品と一緒に出版された。彼女はいつもの如く、非妥協的な自己批

判の調子で書いてゐる。

「ロバートが選擇してくれたリッケルトの詩に、作曲を試みたが駄目であつた。私には全く作曲の才能がない」

一方ロバートはクララの創作への努力が、質に於ては進歩しつつも、子供の出産やその他家政上の雑用に追はれて、次第に顧みられなくなるのを嘆いてゐる。

「彼女は間歇的にしか、作曲に力を注ぐことが出来ない。その爲に何んなに美しい樂想が失はれたかと、私は時々悲しく思ふのである」

ロバートは終日書齋に引き籠つて、交響曲の作曲に精進をつづけてゐた。彼は未だ管絃樂曲の経験が少なかつたので、彼の努力と集中は異常な緊張を續け、最愛のクララに對してさへ多く語らず、身心を打ちこんでゐるのであつた。

二月十七日。此の週も私が當番にあたるのは約束と違ふが、交響曲を作曲してゐる人に、他の仕事は期待出来ない。交響曲は殆んど完成した。私はまた聽いてゐないが、ロバートが彼の偉大な想像力を、充分に發揮し得る分野に向つた喜びは大きい」

此の作品は「春の交響曲」と名づけられ、ピアノ・スコアーが四日四晩の勞作の彼に完成した。「私はすっかり幸福です。ああ、ここにオーケストラがあつたら！ 愛する夫よ、私は告白致します。貴方がこんなに賢い方だとは思ひませんでしたの。貴方はいつも新しい感嘆の思ひで、私の心を満して下さいませう」

一月二十七日からロバートはオーケストレーションを始めた。「来週は日記當番を貴方にまします。これからは用捨なく、お當番の順を守つていただきませう」とクララは書いたが、相變らずその後もロバートの記述は少く、二月十四日になつてロバートの筆跡で、交響曲の詳細がしるされてゐる。

「交響曲は、多くの楽しい時間を與へてくれた。然し眠り少ない夜のあとに、過勞が出てきたやうである。私は産後の若妻のやうに、幸福で明るく然し疲勞し弱つてゐる。私のクララはこれを能く理解して、二重の心遣ひを以つて私に對してくれる。此の仕事の間にクララが示して呉れた愛情を書きだしたら、到底書き終へるものではない。このやうな理解と心遣ひをもつて私を遇してくれる女は、たとへ何百萬の中からでも、唯一人として見出し難いことであらう」

三月三十一日に此の變ロ長調の、シューマンの第一交響曲は、管絃樂員の養老基金の爲にクララが主催したゲヴァンドハウスの演奏會で公開された。クララはショパン、シューマン、メンデルスゾーン、スカラッティ、タールベルグのピアノ曲を演奏し、ソフィー・シュロスがロバートの歌謡を、メンデルスゾーンが『最大の愛情と心遣ひ』を以つて、シューマンの交響曲を指揮した。交響曲は盛んな拍手を受け、クララもシューマン夫人として、昔に變らぬ聽衆の支持を受けることが出来た。

交響曲の成功に、ロバートは興奮した。彼はオーケストレーションに自信もなかつたし、練習中にメンデルスゾーンから、技術上の點で訂正されて冷汗をかいたやうなこともあつたのである。然し彼はこの成功に勵まされて、「次の交響曲は『クララ』と題する。そして彼女の面影を、フリユートとオーボエとハープで描くつもりだ」と書いてゐる、引き續き、序曲、諧謔曲と終曲、後にピアノ協奏曲の第一樂章となつた、ピアノと管絃樂の爲の幻想曲等、オーケストラの作品が作曲された。

六月になると、雲のない晴れた日には、懐しいコネウィッツに連れだつて散歩に出かけたりしたが、六月の終りの日記には、「ロバートの仕事ぶりと、遠くで烈しく鳴つてゐるニ短調の音色から、新しい作品が形づくられつつあるのが解る」と書かれてゐる、此の交響曲は他の仕事の爲に完成がおくれて、後に第四交響樂となつたのであるが、ピアノ・スコアーだけはひそかに完成されて、クララの二十二歳の誕生日にロバートから贈られた。

結婚後滿一年と一日、クララの誕生日である此の年の九月十三日は、二人にとつてさらに意味深い日であつた。此の佳き日に生後十三日目の彼等の長女が、マリエと命名されたのである。名づけ親はメンデルスゾーンであつた。九月一日、その週の記録係りの當番を引き受けたロバートは、深い感動のうちに長女の誕生を記録してゐる。

「天はクララによつて女兒を授け給うた。待つ間は心配に心重く、あの火曜の夜は忘れ難いものがある。非常な危険であつた。一瞬私は自失してしまひさうに感じたが、クララ健康と彼女の私への愛に縋つてゐた。此のやうな感慨を、如何にして形容出来ようか。十一時十分、電光と雷鳴のただ中で幼き者が生れた。最初の叫びにつづいて、もつと生々としたなき聲が、はつきりと可愛らしく聴えた。我々は類ひない祝福に幸福であつた。私は此のやうな妻、愛と藝術の他に、このやうな贈り物を與へてくれる妻をもつて、如何に誇らしいことであらう！」

そしてロバートはマリエに、早速ダヴィット結社名譽會員の姿格を與へた。「彼女がむづかる時、クララがピアノを弾いてやると、彼女は忽ち静かになり、眠りに導かれる」

いつか自然のなりゆきは、演奏家クララを主婦クララに更へてしまつた。大きな子供のやうなロバートと嬰兒のマリエをかかへては、練習の時間も公開演奏の餘地も残らなかつた。一八四一年の樂壇の話題は、ロシアから來た素晴らしい天才少年の上に集められてゐた。

「今維也納にゐる十一歳のロシア少年が、嘗つてない程の神童だと評判です。少年はルビンシュタインといふ名で、ピアニストです」とクララは、エミリー・リストへの手紙に書いてゐる。

クララが演奏家としての活動を續けることは、家計を助ける爲にも、彼等の家庭生活の設計に於て最初から豫定されてゐたのだが、一八四一年の春に計畫されてゐたロシア巡遊は、ロバートの交響曲の作曲と、東部の政情不安の爲にとりやめとなつた。

「演奏家としての能力の全盛時代に、自分の才能を用ひて貴方を經濟的に助けられないのは苦しいでございます。よくこのことを考へて下さいな。旦那様！ 此の一二年の冬をうまく利用ませう。今までの名譽に對しても演奏生活を全く棄て去るのはしのびませんし、私は貴方と自分への責任感から申し上げるのです」

ロシア、イギリス、ベルギー、オランダへの巡遊の折角の機會を拒絶することは、演奏家クララにとつては悲しいことであつた。聰明な彼女は演奏家の人氣の壽命が、如何に果敢ないものであるかをよく自覺してゐたのである。クララの演奏は従つてライプチヒとその近郊の諸都市に制限されることになつたが、前述した三月三十一日の演奏會の大成功により、ワイマール、ブレーメン、ハンブルグ等からロバートの交響曲上演とクララの演奏を求める紹介があつた。彼等はマリエの誕生後三箇月日にワイマールの旅奏會に出かけた。

十二月六日にはシューマンの二短調交響曲の初演がライプチヒで行はれたが、結果は彼等に失望を與へた。丁居フイプチヒを訪問中であつたリストが、親切にも贊助出演を申し出たので、クララはリストとリストの「ヘクサメロン二重奏」を弾いて、熱狂的な拍手喝采を得ることが出来た。然しリストの派手な演奏と態度に壓倒されてしまつた聴衆は、その後演奏された浪漫主義音樂の不滅の花であるロバートの二短調交響曲の靜かなリリズムと内面的な美しさに、不幸にも觸れることなくすんでしまつたのである。リストの折角の好意から、最愛の夫の労作が無視されたのをみて、クララは失望し悲しんだが、リストの演奏家としての稀なる素質と積極的な好意に對する讚美と感謝の心は變らなかつた。リストは又シューマン夫妻のロシア巡遊の旅を、自ら知らずして妨害することになつた。リストが同時期に聖ペテルスブルグを、訪問する豫定ときいて、クララは招聘を辞退してしまつたのである。

リストとの演奏會が原因となつて、シューマン夫妻は瞑想的な隱遁の生活から、ライプチヒの樂壇に引守りだされた形となつた。シューマン夫妻はリストを主賓として、盛大な晚餐會を催し、來客中にはリヒノウスキー公もまじつてゐた。

クララも返禮として、リストの十二月十三日の演奏會に贊助出演した。ところが押しつまつた十二月二十八日になつて、翌一八四二年の一月一日のゲヴァンドハウスの演奏會に、メンデルスゾーンの協奏曲を是非演奏するやうにと、突然の依頼を受けた。乳兒をかかへたクララにとって、僅か二三日の間に協奏曲の準備をすることは、相當の重荷であつた。しかも一月十日には再びゲヴァンドハウスに於てモツアルトの四重奏、ベートーヴェンの作品五十七へ短調奏鳴曲を弾くことになつた。

二月に入ると、ロバートも雑誌の暇を作り、クララと共に北獨逸への短い巡遊の旅にのぼった。此の旅行は音樂的には相當の成功であつたが、シューマンにとってはあまり快いものではなかつた。ピアニスト、シューマン夫人の夫として扱はれることが多く、殊にオルデンプルグに於ては、領主がクララにのみ招待状を送り、シューマンは無視されたやうな、不快な事件があつたりして、ロバートの自尊心がひどく傷けられたのである。

北歐の港町ハンブルグに滞在中、クララがコペンハーゲンから招聘された。シューマンは雑誌の仕事を、長く手離せない理由と、旅行中の不愉快な経験からおして、このデンマーク旅行に對しては氣が乗らなかつた。それでクララも一時は断念したが、折角の好機會を逃すのは、あまりに残念にも思はれ、ハンブルグまで既に来てゐるので、再考することにした。二年前にもコペンハーゲンの招待を、一度拒絶してみたり、クララは己の演奏家としての生命と、収入のこと等を冷靜に考へた結果、遂にロバートに、彼女の誠意と道理を認めさせて、彼女一人でコペンハーゲンに巡遊に向ふことを、澁々ながらも承諾させたのである。

「夫を愛する妻にとって、これは確に大きな一歩です。けれども私は彼への愛のために決行致しました」

と、クララが親友エミリー・リストに書いてゐる如く、これは非常な決心のもとに、ロバートの不満を押しきつてなされたことであつた。此の比較的好條作な巡遊の機會に、自ら演奏家としての自由を制限することは、將來をより困難なものにすると彼女は考へたのである。

「此の別居は、我々の特殊な困難な立揚を、再び僕に自覺させた。君の巡遊の道連になり、僕が自分の才能を無視してよいものかどうか、又僕が雑誌の仕事に縛られてゐるので、君の才能を犠牲にさせてよいものかどうか？ しかもお前が若く、その實力の頂點にある時に！

我々は解決法を見出した。君はお供を連れて出發する。僕は子供と仕事の許に歸る。然し人は何んと云ふであらう！僕は斯く思ひめぐらして自分を苦しめてゐる。我々二人がお互ひの才能を利用し、發展出来るよい方法を發見することが、どうしても必要である」とライプチヒに歸宅したシューマンは、妻に書くのであつた。結婚後始めてロバートと別れたクララは、キールまで行つたが、嵐の爲に次週まで船の便を待たねばならなかつた。船を待つ間、クララは物悲しい氣特に襲はれて、旅に出たことをひどく後悔するのであつた。二三年前に始めて海といふものを見た程、海にしたしみのなかつたクララは、馴れぬ航海への心細さも手傳つて、「船が陸を離れる時、私は恐ろしい思ひをした。ロバートと赤ん坊を思ってどんなに溜息をしたことであらう」と書いてゐる。

コペンハーゲンでは四週間の滞在中に、宮廷で演奏した他に三回の音樂會を開き、二度贊助出演をした。同地で知り合つた多くの人々の中で、クララは殊に童話で有名なアンデルセンを好んだ。「彼は詩的な無邪氣な性格で、未だ若いみつももない人ですが、それにも拘らず興味深い知的な顔をしてゐます」又ニールス・ガーデについては、「人のよい小さな目の、丸顔の人です、此の人も、顔だけで人を判断してはいけない證據になる人です」とクララはロバートに報告してゐる。

〔ニールス・ガーデ(1817-1890)はスカンデナヴィア派の音樂樹立に功績のあつた作曲家、後にメンデルスゾーンの後任として、ライプチヒのゲヴァンドハウスの指揮者となる。〕

デンマークの皇后は特にクララに好意を示され、お別れの爲に參内した折には、御手づから温室の薔薇の花を切つて與へられた。

一方我家に歸つたシューマンは、「作曲のことは考へられない」「君のことが心の總てを占めてゐて、歌曲一つさへも完成出来ない。いつたいどうしたのか自分にもわからない」とクララに書き送つた程落着かない日を過してゐたが、クララの歸國の報を受けると、早速ハンブルグまで出迎へに出かけた。お互ひへのいくらかの不満も、再び相見た瞬間に朝霧の如く消え去つて、「彼は花婿の如く、忽ち幸福になり、そはそはしてゐた……ロバートは腕をひろげ、私は彼の胸に飛び込んだ」

とクララは、その日の喜びを書いてゐる。歸宅した四月二十六日には、

「このやうな再會は、別居中の苦しみを償つてくれる。ロバートも幸福なやうである。彼は我家に私を導いた。凡ての物が花環で飾られ、新しい數物まで備へられてゐた。しかし私にとって一番嬉しいものは、彼の目のやさしい光りであり、再び接吻出来る私の小さな天使の、薔薇色の頬であつた」

とクララが記し、傍にロバートの手跡で、「さあ、これから又、佳き日が待つてゐる」と、しるされてゐる。

一八四三年の一月二十一日に、ドレスデンから一通の手紙が届いて、クララの心を喜びで満した。父ヴィークからクララに書かれた、最初の和解の手紙である。法の判決が若い者達の勝利に終つた一八四一年に、父と娘の間にもう一度彼女の財産に對する苦い談合が行はれたが、その時のヴィークは彼の不正な醜惡な主張を一步も譲らなかつた。然し長年にわたる父の冷酷な非人間的な行爲も、クララの心深く祕められてゐる人間的な愛情の燈火を、吹き消すことは出来なかつたし、彼の試みた惡辣な妨害も、此の愛情と藝術に忠實な健氣な若夫婦の幸福を阻止することは出来なかつた。凡てを善意に解しようとするクララの生來のやさしい心は、彼女を失ふヴィークの寂寥と不幸を、充分に理解して、いつか固くなな父の心も、溶ける日のあることを信じ望みつつ、その機會を待つてゐたのである。

クララはマリエの誕生を機會に、淡い望みを託して、ヴィークに報告の手紙をだしてみた。然し此の手紙は黙殺されたとみえて、何の反響もなかつた。

ヴィークは、シューマンの作曲家としての努力と發展に對しては常に注目してゐたので、シューマンの名が識者の間に尊敬をもつて語られるやうになり、歌謡作曲家として評判になりつつあつたことも承知してゐたし、又第一交響曲の成功や、シューマンがピアノ五重奏（作品四十四、變ホ長調）やピアノ四重奏（作品四十七、變ホ長調）を既に完成してゐることなども聴き及んでゐた。ヴィークも次第に年をとるに従つて、シューマン夫妻と和解する必要を感じたのか、かうした状況のもとにクララの許に手紙を書く氣になつたのである。ヴィークの石の如き心に、クララの眞心が暖く通じたのかもしれない。

私の音樂に對する愛情は、相變らず續いてゐる。お前の才能ある夫の作品も、私に認められずに終ることは有り得なかつた。この證據として、音樂の識者に稱讚されてゐる彼の作品の、公開演奏の機會の報告を前もつて願ひする。その爲にライブチヒに出かけてもよい。お前の夫も私も頑固な頭を持つてゐるから、各自の道を歩まねばなるまい。然し彼の創造力を私が正當に認めたとしても、別に驚くこともないであらう。近くドレスデンに出て來ないか。お前の夫の五重奏を持つて來ないか。

父の手紙に喜んだクララは、過去の事には一切觸れず、早速返事をだした。常に妻に同意するロバートの心にも、クララへの愛の爲に、いつでも過去には目をつぶる、男らしい心の用意が出来てゐたのである。そして彼はすすんでクララに、父を訪れることをすすめた。

「クララは今ドレスデンの親類の許に出かけてゐる。彼女の父は突然考へを變へた。私はクララの爲に喜んでゐる。親は親である」

久しぶりにクララに逢つたヴィークは、シューマンとの和解も希望し、機會が訪れるのを待つてゐた。

一八四三年の十二月十一日に、シューマンの「樂園と妖魔」（パラダイスとペリ）の初演がライブチヒで行はれた。これはトーマス・ムーアの「ララルーク」に取材した、獨唱と合唱及び管絃樂からなる大規模の作品で、一八四三年の春は此の作品の作曲に捧げられたのである。この曲のゲヴァンドハウスに於ける初演には、シューマンは自作の指揮者として、始めてライブチヒの聽衆の前に現れて、大成功を収め、引き続き「妖魔」はドレスデンでも上演されることになつた。

クララと世間の前に、我々はこれ以上別れてゐるべきではない。貴君も今は家庭の父となつた。これ以上の説明は無用でせう。藝術に於て我々は常に一致してゐたし——私は貴君の師でもあつた——

貴君の才能と純眞な熱意に對する、私の理解を信じて下さい。喜びと共に貴君の御來訪を待ちつつ。  
父 ヴィーク

ロバートもクララと共に「妖魔」上演の練習の爲にドレスデンを訪問し、ヴィーク家に降誕祭まで滞在した。遂に平和が再び此の父と娘の間に訪れ、無論その後長年の間には、ヴィークの例の非良心的な痼癩が、クララ達の忍耐力を脅かすこともあつたが、その後は此の二つの家庭は、重大な破綻なく終ることが出来た。これはひとへにクララの細かい心遣ひによるものであつた。自己抑制の力に優れてゐたクララは、その後彼女が耐へなくてはならなかつた、シューマンとの家庭生活に於ける一切の勞苦については、決してヴィークにきかせることをしなかつた。そして黙々として、両親や異母弟妹に對して、娘として姉としての義務を果すことに努力したのである。

ロバートの室内樂や合唱曲は、藝術品としては珠玉の如く價值あるものであつても、収入の點から見れば、誠に微々たるものであつたので、シューマン夫妻のつつましい家計にとって、一八四三年の復活祭にメンデルスゾーンの盡力により、ライプチヒに建設された有名な音樂院の開校は誠に幸運なことであつた。ロバートはピアノと作曲の教授になつた。ピアノ教師として、より適任であるクララが、その任にあたらなかつたのには、理由があつた。クララは一八四三年の四月二十五日に次女を生み、エリゼと名づけられたのである。シューマン家は此の幼い新しい家族を加へて、嘗つてない經濟問題にぶつかつた。ロバートは「我々は収入以上に支出してゐる」と、簡単に説明してゐる。問題の解決には有利な演奏旅行あるのみであつた。二人の子の親としての責任から、氣持の上の贅澤などは考へてゐられなくなつたのである。

クララは不安な思ひに悩まされながら、二人の幼兒を、シュネーベルグのシューマンの親類にあづけ、ロバートは雑誌の仕事をフェルールストに頼んで、一八四四年の一月二十五日、ロシアへの巡遊の旅にのぼつた。道順はベルリン、ケーニヒスベルグ、リガ經由で、クララは出来る限り各地で演奏會を開いた。十九世紀中期の嚴冬の聖ペテルスブルグへの旅は、相當に苦しいものであつた。主要都市の間には毎年少しづつ鐵道がひかれてゐたものの、旅行の大部分は馬車で行はれた。道は悪く馬車の旅は苦しく、宿は汚なかつた。暁に起きて一日中を馬車に乗りつづけることや、車中に夜を明すことも稀ではなかつた。ロシアの國境を越えてからは、雪のために馬轡に乗り更へて、凍結した山河を越え、飢ゑた狼が咆哮する大森林地帯をぬけてゆくのである。伯林でメンデルスゾーンの夫人から贈られた毛皮のマッフが、早速クララの役に立つた。一箇月以上も旅に費し、ロシアの首都に着いたのは三月四日のことであつた。

聖ペテルスブルグの演奏會は大成功で、旅の勞苦も十分に償はれるのであつた。クララは冬宮に於て皇帝と皇后の拝謁を給はり、メンデルスゾーンが皇帝に獻呈した「無言歌」中の「春の歌」を三度繰り返して演奏申し上げる光榮に浴した。モスコー訪問は四月となり、シーズンも終りに近づき、復活祭の爲に聴衆が少なかつたものの、彼等は美しい春のモスコー近郊の散策を楽しむことが出来た。インゼル街の靜かな書齋を出溢つてゐたシューマンのことではあつたが、學生時代の伊太利、スイス旅行以來殆んど故郷のサクソニーにゐた彼にとつて、ロシアの東洋風な風物や人間、音樂、その凡てが面白く、空想勝ちな彼の心を奪ふのであつた。然しこれ等のあわただしい經驗は、神經質なシューマンを異常に刺戟して、作曲家としてのシューマンの仕事を妨げたのである。

ライプチヒに歸宅したのは五月であつた。歸途シュネーベルグに立寄ると、エリゼはやつと満一年を迎へたばかりで、未だ頑是なかつたが、三歳にならんとするマリエは長らく會はなかつた両親の顔を見て不思議な顔をするのであつた。

「子供等はインゼル街の人達に歓迎されました。机は花や贈り物で溢れてゐます。マリエは此のやうに素直で機嫌のよいことは、今までにないことです。みんな貴下方の御親戚の結果です」と、シューマンがシュネーベルグのウールマン家への感謝状に書いてゐる。

旅行から歸るとシューマンは、雑誌の主筆の役を去つて、ヘルテル書肆にまかせること

になった。此のシューマンの發刊になる「音樂新報」はその後經營者は代つたが、百年以上の間現在まで續いてゐる。旅行中も旅行後も、シューマンの頭の具合は引き經き悪かつたのであるが、収人の關係から彼は努力して音樂院の教授を續け、八月にはクララも教鞭をとることになった。シューマンは夏中ライプチヒにあつて、ロシア旅行中に發想した「ファウスト」への音樂の作曲に精魂を傾けてゐたが、その爲に過勞に陥り、極度の興奮と疲勞から、神經の異常な過敏症状を引き起して、精神力が衰へはじめたので、仕事を中絶しなくてはならなくなつた。作曲の喜びは肉體的な苦痛となり、遂に樂音そのものが、神經に耐へがたい苦痛を喚び起す状態にまで病状が亢進した。ロバートは此の時から神經虚脱症状に悩まされ始めたのである。

クララは夫の病状に驚いて、九月にはハルツ山岳地方に、靜養の爲に彼を伴い、その後又、カールスバットの温泉療法も試みたが、何のききめもなかつたので、遂に環境をかへることに最後の望みを託して、ドレスデンに移轉することを考へたのであつた。クララの日記によると、彼は室内を横切る力さへもなく、終日椅子に坐つて憂愁な物思ひに耽けるばかりであつた。ドレスデンへの旅は短いものであつたが、衰弱してみた彼の健康には無理であつたとみえて、ドレスデンに着いてからは益々惡化する如く思はれた。

「ロバートは殆んど安眠が出来ない、彼の想像力は常に恐ろしい光景を心に描いてゐて、私は毎朝涙にぬれた彼を見出すのだ。彼は自ら己への希望を棄ててゐるのである」

此の種の病に對して、醫者は何の役にも立たなかつた。クララはメンデルスゾーンに彼女の心配を訴へてゐるが、メンデルスゾーンも慰めるより他に助けやうがなかつた。既に一八四三年にメンデルスゾーンは伯林に移つたので、ロバートはメンデルスゾーンのゐないライプチヒに寂寥を感じるやうにもなつてゐたし、メンデルスゾーンの後任として、他國人のニールズ・ガーデが選ばれたことは、個人的にニールズ・ガーデに好意を持つてゐたシューマン夫妻ではあつたが、二人の自尊心はライプチヒに住むことを、潔しとしない氣持にしたのである。ドレスデンに行けば病もよくなるかと考へたのは、かうした風の吹きまはしの結果であつた。彼等はワイゼンハウス街の家の一階に家を借りた。

クララの眞心をつくした手當の結果、やがてロバートも小康を得たので、告別演奏會の爲にライプチヒに暫時歸ることが出来た。

此の時有名な出版書肆ヘルテル氏の邸宅で、音樂の集りが一夕催され、シューマン夫妻はメンデルスゾーンが後援する、僅か十四歳のハンガリア生れの少年ヴァイオリニスト、ヨセフ・ヨアヒムの演奏を聴いた。

〔ヨセフ・ヨアヒム（1831—1907）は有名な提琴の巨匠で、殊にベートーヴェンの演奏の權威であり、指揮者としても活躍し、シューマン家に對して一生の間變らぬ友情を示した。〕

クララとメンデルスゾーンは、メンデルスゾーンの近作「眞夏の夜の夢」中の二曲を二臺のピアノで演奏した。

十二月五日にはクララはゲヴェンドハウスの演奏會で、ベートーヴェンの皇帝協奏曲を獨奏した。

「此の曲には最大の耐久力と知的な解釋が要求される。聴衆は熱狂をもつて私を迎へた。これは私の幸福を倍にした」

十二月八日の日曜日には告別の爲のマチネを催して、シューマンの變ホ長調のピアノ四重奏の初演を行つた。金曜日にはシューマン一家は家財道具と共に、この想ひ出深いライプチヒを去つたのである。

「涙と共に……しかし誕生の地といふ以外に、私の心を惹くものは少ない」

と、クララの日記は語つてゐる。

## 第十五章 ドレスデンに（一八四五年—一八四七年）

一八四〇年代に於ける獨逸、サクソニーの首都ドレスデンは八萬の人口を持つ都會で、ライプチヒとは僅に八十哩程しか離れてゐないのに拘らず、その都會としての趣きには誠

に異なるものがあつた。當時の人はドレスデンを「小さな大都會」と呼び、ライプチヒを「大なる小都會」と呼んでゐたのをみても、此の兩都會の個性の相違が理解出来る。ライプチヒは富裕な商業都市で、特に書籍出版と印刷業が榮え、歐洲最古の大學の一つであるライプチヒ大學を中心とする教育と學問に於ては、數世紀の間、全歐洲の權威と、自他共に認めてゐた。従つて市民の教養も一般に高く、音樂の理解に於ても見るべきものがあつた。一方ドレスデンはサクソニー國の王城の地として政治的都市であり、同時に文化的には芝居、歌劇、美術館等が王室の保護のもとに榮えてゐたが、主に貴族社會を中心としたもので、一般市民には音樂生活といったものもなかつたのである。ライプチヒは當時の新興階級、ブルジョアジーの市民的都會であり、ドレスデンは貴族と役人の都會であつた。

ロバート・シューマンは病人としてドレスデンに移り住んだが、一八四五年の新春の訪れと共に次第に恢復して、知人と會つたり、作曲を始めるやうになつた。丁度ドレスデンを訪問中であつたモシュレスや、クララの昔からの友人であり、ドレスデンの歌劇の主役女優となつてゐたシュレーダー・デヴリアン夫人等は、早速、シューマン夫妻を訪れて來た。ロバートは毎日散歩を缺かさず、時にはマリエとエリゼを兩手に、弱々しく歩んでゐたが、書齋にあつてはぼつぼつ又、「ファウスト」の草稿をとりだしたり、歌劇のメモをとつたりし始めてゐた。クララはこれ等の仕事が過勞になることを恐れて、一緒に對位法の勉強をしようと提案した。同じ主題をきめて、各々の部屋に引きこもり、作曲した後に二人して検討するのである。此の思ひ付きは、非常にロバートの氣に入つて、やがて對位法の作品が次から次へと書けるやうになつてきた。此の精神集中の訓練をしたことは、自然に彼の昔の創作力を取り戻す力となり、ロバートも昔の自信を取りもどし、七月にはメンデルスゾーンに宛て、

「まだお目にかけるものも出来ませんが、私の音樂は靜止してゐないといふ、心の自信だけは持つてをります。そして或時は薔薇色の光りが、昔の力が、音樂への新しい手掛りが再び私にかへつてきたことを豫感します。……太鼓と喇叭（ハ長調の喇叭です）が、數日間私の頭で響いてゐます。何が現れるかまだ解りませんが」と書いてゐる程に快方に向つた。これは一八四五年にはハ長調交響曲となり、又一八四〇年に作曲したピアノと管絃樂の幻想曲は、二つの樂章を加へて、ピアノ協奏曲イ短調の完成を見るに到つた。

「私は長らく、ロバートの作曲による華麗なピアノ曲を望んでゐた。この曲をオーケストラと弾くことを思ふと、私は王様の如く幸福である」とクララは七月に、歡喜のうちに書いてゐる。浪漫派の音樂の珠玉の如き、此の協奏曲は、その冬と次のシーズンにかけて、クララによつてドレスデン、ライプチヒ、維也納、ブラーグ、伯林等の各都市で、或時はシューマンの指揮のもとに初演された。

ドレスデンに於ける三度目の冬のシーズンは、クララにとって誠に多忙な年であつた。彼女は一八四五年八月十一日に三女ユリーをまうけたが、ユリーは生れつき、か弱い女の子であつた。クララはその後間もなく又も妊娠したに拘らず、その秋も活躍をつづけ、ゲヴァンドハウスの演奏會に出演の爲、ライプチヒを二度までも訪問してゐるし、十一月にはドレスデンに新しく設立された定期演奏會に、ヒルラーの指揮のもとに出演し、又十二月四日には、彼女の獨奏會を開いてゐる。

一八四六年二月八日に、シューマン夫妻にとつて最初の男の子である、エミールが生れた。三女のユリーが生れて十一箇月目である。母の過勞が禍ひしたかエミールは生れつき非常に弱く、醫者も手の下しやうがなかつたので、若い兩親は搖籃の傍にたつて、悲しく見守るばかりであつた。四人の子供と音樂に恵まれた彼等の家庭の明け暮れは賑やかであつた。エリゼは三歳になり、五歳になつた姉のマリエと共に、快活で丈夫であつた。家庭的なシューマンはちよこちよこ歩む二人の娘を散歩につれだしたり、數を教へたり、韻を捜すことや、唱歌を教へることに熱中するのであつた。

一八四五年の降誕祭に、シューマンが新しいハ長調の交響曲のスケッチを完成したことを記録してクララは、

「私はしばしばロバートに驚異の目を見張ると共に、心を奪はれる。彼は何處からあのやうな熱情と新鮮な想像力と、そして創造する力を得るのであらう」と感動してゐるが、ロバートの新しい創作への集中は、一方、クララの不安の種ともなつた。彼は時々仕事の最中にペンを投げて、中止しなければならないことがあつた。交響曲の労作が白熱化してきた一八四六年の五月の中旬には、最も激しい發作に襲はれたので、醫者の勸告に従つて、作曲を一切やめてマークセンに轉地した。クララはロバートが憂鬱な氣分に陥いることを恐れて、二人の女の子をつけてやつたが、田園の春の自然はロバートは勿論子供達の健康にも、よい影響を與へたので、七月には、か弱いユリーとエミールも乳母と共にマークセンに轉地させて、ロバートはクララと共にノルダニーの島に移つた。夏の海邊で靜に過した二箇月の靜養の結果、ロバートの健康も次第によくなつたので、交響曲は遂に一八四六年の十月に完成し、十一月五日にライプチヒに於て、メンデルスゾーンの指揮で初演された。此の交響曲は評判もよく、他の交響曲やピアノ協奏曲と共に、獨逸の各都市で盛んに演奏されたが、どういふわけか、ドレスデンでは一向演奏される氣配がなかつた。

ドレスデンの音樂生活の中心は王立歌劇であり、宮廷と歌劇場に關係のないシューマン夫妻は、市の音樂生活の流れの外側にあるやうなもので、クララが時々ピアノ五重奏やシューマンのピアノ曲を演奏する、半公開の演奏會にも、友人達とごく少數の識者が集るだけであつた。これ等の友人達の中で、音樂家として最も有名であつたのは、彼等の舊知のラエルディナンド・ヒルラーとリヒャルト・ワグナーである。ヒルラーは優れたピアニストであり、夫人は又歌劇の歌ひ手であつた。感じのよい愉快的な人物で、メンデルスゾーンと共にシューマンは長年にわたつて此の人を敬愛してゐた。十五年前に、未だ幼いクララが父と共に巴里に行つた頃から、ヒルラーはピアニストとして歐洲各地に知られてをり、近年は又指揮者としての名聲も高かつた。ヒルラーとシューマンは、ドレスデンに交響樂團の定期演奏會を開くことを計畫した。

ワグナーとシューマンは凡ての點に於て、將に正反對であつた。二人とも新しい時代の精神を呼吸し、新しい音樂の提唱者であり、共に獨逸的でありながら、二人の性格には根本的に一致し難いものがあつた。ワグナーはその持つて生まれた押しの強さをもつて、大膽にもドレスデンの音樂界の中心にのりこみ、歌劇「リエンツィ」の作者として、宮廷指揮者として活躍していた。此の二人はライプチヒの學生時代に既に知り合つた仲であり、ワグナーは巴里に於ける苦境時代には、「音樂新報」に原稿を送つてよこし、シューマンは喜んでこれを雑誌にのせたこともあつた。又此の二人の樂人は共通の批評家の敵を持つてもゐた。シューマンが「優れた俗物」と皮肉に云つてゐる伯林のレルシュターブである。ベートーヴェンの後期の作品を讚美する點に於て二人の意見は完全に一致してゐた。「リエンツィ」を生みだした才能を讚へながらも、此の男の持つ積極性は、シューマンにとつては不思議なものであつた。この頃のワグナーは「タンホイゼル」を完成し、恰も精力と熱の權化の如き、強烈な印象を人々に與へた。

シューマンとワグナーは、ドレスデンの街を流れてゐるエルベの河畔の道で出逢つて、散歩を共にすることがよくあつた。シューマンには物思ひに耽りながら、ふらりふらりと道を歩く習慣があつた。ワグナーの愛犬のペップは、二人の足許にまつはりながら、何處までもついてくる。こんな時、シューマンはいつもワグナーの「饒舌」に恐れをなし、ワグナーは又、此の驚くべき「無口な人」の心には、彼には觸れ難い世界があることを感じるものであつた。シューマンは、一八四五年十月二十二日附のメンデルスゾーンへの手紙に、「ワグナーは又新しい歌劇を書きました。確かに賢い男です。逞しい考案を持つてゐるし、無制限に大膽です。貴族階級の連中は今だに『リエンツィ』に騒いでゐます。然し彼は美しい旋律を、四小節と続けて書くことも考へることも出來ないでせう」と書いてゐるが、「タンホイゼル」の上演に列席したシューマンは、ワグナーの持つ演劇と音樂の調和と、一種の強烈な迫力等を認め、彼の特殊な稀なる才能に感嘆するのであつた。シューマンは又ハインリツヒ・ドルン宛に、

『タンホイゼル』を御覧になれるとよいと思ひます。何か深いものと獨創的なものをたへてみます。彼は舞臺藝術家としてたいした者になることでせう」

とあるやうに、あらゆる人の長所を見出して、尊敬することを忘れないシューマンは、ワグナーに對しても同様であつた。然し、クララは夫の意見に同感出來ず、

「私はロバートに同意出來ない。ワグナーが劇的な構威力を持つてゐることは否定しないが、彼の音樂は音樂ではない。ワグナーについては何も云はない方がよいと思ふ。私は、自分の主張を偽れないし、又此の作曲家に閃光の如き共感すら感じられないから」

シューマンが個性の強い作曲家でありながら、己の性格と共通のものにも、又反對のものにも、凡て眞に優れた音樂に對しては、敏感にその長所を感じて、大きな抱擁力と深い理解力を示してゐたに反して、女性の通有性ではあらうが、クララの見解は常に純粹ではあつたが狭く、主觀的傾向が強かつた。クララの藝術上の理想、趣味、人間性の凡ては、シューマンの人格の中に完全な調和を見出してゐた。人間としてのシューマンも、音樂家としてのシューマンも、物心がつきはじめた頃から、彼女の心を支配し、クララはそのシューマンの影響力の中で、人間としての教養も、音樂的教養も共に成育してきたのであつた。クララは一生を通して、物の好き嫌ひの感情が、常に極めてはつきりとしてゐた。彼女は少し潔癖過ぎると思はれる程に敏感で、彼女の理想とする流れにそはぬものに對しては、忽ち烈しい勢ひで反撥したのである。

一八四六年の春、クララが未だエミールの産褥にゐた或日のこと、ワイマールで有名なジェニー・リンドを聴いてきたヴィークが、口をきはめて絶讃した。ヴィークの感激ぶりに刺戟されたクララも、人々が「スエーデンの鶯」とよんでゐる歌姫に對して、好奇心を感じるやうになつた。

〔ジェニー・リンド(1820—1887)は十九世紀最大のソプラノ歌手として、その美聲を全世界に誦はれ、その聲域はdからe3までの間、完全であつたと云はれてゐる。〕

「ジェニー・リンドは、何世紀の間にも一度しか現れないやうな、聲樂の天才を持つてゐる。彼女の容姿は一瞥して魅惑的であり、顔は美人といふのではないが、その目の素晴らしい表情のために、美しく輝いてみえる。彼女の歌は彼女の心の底から生れ、その聲には聴き手を壓迫するやうな激情や、露骨な表情は見出されず、人の心に深く滲みこんでしまふやうな、一種の悲しさと哀愁がたたへられてゐる。

最初のうちは、人によつてはやや冷く聴えるかもしれないが、これは彼女の歌の持つ純粹さと素直さが與へる印象である。彼女の聲には悪い癖といふものが全くない。その聲の凡てが透明に美しく、彼女のコロラチュラは嘗つて聴いた限り、最も完璧なものである。又彼女の聲はあまり大きくはないが、如何なる廣間にもよく透る聲である」

とクララは、リンドに對する感想を記してゐる。四月十二日にライブチヒで開催された、リンドの演奏會が果ててから、リンドの爲に催された夜會にクララも招かれた。

「私は忽ち彼女を戀してしまつた。彼女には氣取つたところが少しもなく、内氣な性質だと云つてもよい。存在を人に氣づかれぬ程の静かな人である。一口に云へば彼女は聲樂家として偉大であるばかりでなく、實に個性のある人物である。此の夜の想ひ出は永遠に私の記憶に残るであらう。そしてリンドが自然なやさしい性の人であつたことは、私にとつて二重に尊い氣がする」

一方、ジェニー・リンドも彼女の演奏會に、メンデルスゾーンによつて客席から導かれて舞臺にのぼり、彼女を援助する爲に突然ながらピアノ伴奏を快く承諾した、もの静かなクララ・シューマンに、同じやうな人間的な共感を感じるのであつた。ジェニーは嘗つてアメリカ巡遊中に、

「鯡(にしん)と馬鈴薯と、清潔な木製の椅子、牛乳のスープと木製の匙、それさへあれば私は子供のやうに幸福です」

ともらした。この感想は、華やかな脚光をあびて、世界に君臨する歌姫の言葉ではなくて、健康で素朴なスエーデンの田舎娘の性格をよくだしてゐる。かうしたリンドとクララの性格の類似性と、年齢が近かつたことはお互ひの間に温い友情を生む大きな原因となつた。

一人は大聾樂家として、もう一人は大ピアニストとして、此の二人の優れた美しい女性程に、十九世紀の歐洲樂壇の第一線に長い間君臨し、凡ての人々の心に忘れ難い印象を残した女性は、他に求められないのである。

一八四六年から四七年への音樂シーズンが迫つてくると、家計に促がされてシューマン夫妻は再び巡遊を計畫した。幸にも此の冬はクララも妊娠してゐなかつたので、シューマンにとつても自作の上演の機會に恵まれぬドレスデンで、一冬を過すより、各地にその機會を求めた方が望ましいのであつた。クララは九年前に、少女として空前の光榮と大成功を牧めた維也納のことを想ひ起した。そして夫ロバートの爲にも、再び維也納で運命を試みる氣になつたのである。二人の赤ん坊ユリーとエミールは、忠實な乳母のエルヴィーネに頼んで、ドレスデンの家に留守させることになり、マリエとエリゼは兩親と同行することになつた。

一行は一八四六年十一月二十三日の朝六時に馬車で出發し、プラグからは汽車に乗り換へて、四日目の夜に維也納に到着した。三日ばかりホテルで過したが、適當な住居を見つけて引き移り、クララは四回の演奏會を計畫した。

クララにとつて嘗つて少女の日の維也納の輝しい成功は、未だ昨日の如く思はれるのであつた。それに作曲家としてのシューマンの名聲も、維也納には當然聽えてゐる筈である。クララが樂観するのは當然かもしれない。然し彼女は聽衆の記憶力の貧しさと、その節操の果敢なさをも計算に入れるべきであつた。新しく慧星の如く現れた美しい少女に對して、熱狂を惜しまなかつた大衆は、流行の華麗な作品は加へず、バッハやベートーヴェンやシューマンの地味な作品のみを、演奏しようとするシューマン夫人には、興味を持たなかつたのである。

十二月十日第一回演奏會にクララはベートーヴェンのト長調協奏曲と、他にショパン、スカラッティ、メンデルスゾーン、シューマンを弾き、五日後の第二夜には、シューマンのピアノ五重奏、二臺のピアノの爲の變奏曲等を、これはアントン・ルビンシュタインとクララが演奏した。此の二回の演奏會の結果、維也納が音樂的に、シューマン夫妻とは全く別の方向にむいてゐることが夫妻にとつても、はつきりと自覺出來た。友人達は彼女の選んだ作品が「聽衆の趣味より高尚すぎる」と云つた。もし維也納までが伊太利歌劇の影響に毒され、墮落してゐるならば、彼等夫妻が成功を求むべき土地でないことは明白であつた。かうした周圍の状況の中で、他郷の維也納で迎へた降誕祭は悲しかった。

「私達は降誕祭の樅の木に燈火をともし、子供達にささやかな贈り物をした。ロバートと私はお互ひに何の贈り物も出來なかつた。何の利益もなかつたからである。私の心は淋しかった。ロバートを喜ばせ、彼の心をまぎらせる贈り物が出來なかつたのは、今年が始めてである」

第三夜は四七年の元旦の豫定であつた。プログラムはシューマンの夕べで、第一交響曲とシューマンの指揮のもとにクララが獨奏するピアノ協奏曲で、シューマンの音樂を維也納に示す絶好の機會として夫妻の希望は偏へに此の演奏會にかけられてゐるのであつた。然し結果は美事に大失敗で、夫妻にとつて百フロリンの損失になつた。批評家のハンスリックは昔に變らぬ友情を示して、此の演奏會の意義を世界に知らしめるべく、大いに書いて呉れたし、會果てて後、多くの友人達が二人を慰めようと集つてきて呉れた。クララは聽衆の冷淡さに失望して嘆き悲しんでゐた。ロバートは彼女をやさしく抱いて「クララ、落着いたらどうだ。十年経てばみんな變つてくるよ」と忘れ難い言葉を囁やくのであつた、と、居あはせたハンスリックは記してゐる。

[エドアルト・ハンスリック (1825-1904) は樂也納音樂批評界の元老であり、音樂美學の權威であり、音樂美學の著書多く、ワグナーの反對陣營の代表者であつた。]

丁度ジェニー・リンドが大晦日の夜に維也納に到着し、元旦のシューマン夫妻の演奏會の聽衆の中には、彼女のにこやかな顔もまじつてゐたのであつたが、翌二日、シューマン夫妻を尋ねてきて、「次の演奏會には是非御主人の歌謡を歌はせて下さい」と申し出た。ジェニーはライブチヒでクララが、メンデルスゾーンの突然の申込みに驚きながらも、彼女

の演奏會に花を添へる爲に喜んで演奏して呉れた好意を忘れなかつたのである。一月六日には、リンドが歌謡の練習の爲めに訪れて來た。ロバートとクララが朝の彼歩から歸つてみると、約束の時間より早く着いたジェニーは幼いマリエとエリゼの二人を膝にのせて、昔からのおなじみのやうに賑やかにお喋りをしてゐるところであつた。ロバートは日記に、  
「私は此の日のジェニー・リンドとの練習を忘れない。初見でこのやうに完全に、音楽と歌詞に對する、明晰な理解が、自然に單純な深い感動を以つて表現されたのを、私は嘗つて見たことがない。彼女はクララに眞の愛情を感じて、色々と心の中を打ちあけてゐるし、クララも、又ジェニーに夢中である。我々はメンデルスゾーンについて多く語つた。『凡ての藝術家の中で、最も純粹で洗煉された人です』とジェニーは云ふ。そしてあのやうな人に、その生涯で逢へたことを神に感謝してゐる」

一月十日の演奏會は維也納音樂愛好家協會の會堂で開かれることとなり、切符は忽ち賣り切れてしまつた。

「我々の旅費全部を支拂つて、尚ほドレスデンに三百ターラーを持つてかへることが出來たに拘らず、此の音樂會は私の悲しい想ひ出の一つに加へられるであらう。リンドが僅か一曲の歌で、私の凡ての演奏に匹敵する程の効果をあげ得ることを、侘びしく思はずにはゐられない」

クララはロバートの「胡桃の木」の速度の點をのぞいて、ジェニーの歌つたロバートの歌謡の凡てに、心からの感嘆を覚え幻惑されるのであつた。翌朝シューマン夫妻が答禮の爲にリンドを訪問すると「もう一度演奏會をなさいませんか、そして私に是非歌はせて下さいませ」とジェニーは心から夫妻にすすめるのであつた。クララはその日の日記に

「我々は長く彼女の許にゐた。私はまるで椅子に縛られたやうに坐つてゐた。私は彼女が大好きである。彼女こそは藝術家の中で見出し得た、最も温い高貴な心情の持主である。人は彼女を知り、知ることによつて私のやうに彼女を愛すべきである。

私達はストックホルムのことや、多くの事を語つた。ストックホルムに行く時は、彼女の家に必らず泊ること、私の演奏會に彼女が出演するために、彼女の不在中には彼地に行かぬことを、ジェニーは私に約束させた。本當に親切だ。私は彼女を抱擁したく思つた」と書いてゐる。

クララもロバートもストックホルムまで行く折は、恵まれなかつたが、一八四九年にハンブルグに滞在中、突然ジェニーが伯林からわざわざ馳けつけて來て、二度までも彼等の演奏會に賛助出演して、夫妻の心と財布をともに満たしたのであつた。

ジェニーの聲に心を捉へられたのは、クララのみではなかつた。ロバートも彼女に歌はれる自作を聴く時、しばしば作曲家自身でさへも、思ひもよらなかつたやうな美しさと、情感の細やかさと情調を發見して驚くのであつた。「春の彼」「胡桃の木」「空は一粒の涙を流せり」等が歌はれた時、ロバートは物が言へぬ程に感動し、「日光」のあとには「背に暖い陽の光りを感じるやうだ」と感嘆した。

クララは又書いた。

「これ等の歌謡は永遠に私の心に鳴り響いてゐる。今彼他の何人に歌はれるのも、最早興味を持たないと云ひたい程である。ロバートも私と同様、心を奪はれたと附記する必要があるであらうか」

シューマンは維也納の、作家と藝術家俱樂部に、賓客として迎へられたし、夫妻はグリルパルツェル、アイヘンドルフ等の詩人や、昔からの友人フィショフ、ヘルメスベルガー兄弟等と、舊交を温めることが出來た。アイヘンドルフは、シューマンが彼の詩に作曲したことに、感激してゐるのであつた。

一月二十一日に、夫妻は維也納を出發して、プラーグ經由、ドレスデンに向つた。「去り行く今の維也納と、着いた折とは、何んといふ違つた感慨を與へるのであらう」と、その日の日記には書かれてゐる。

## 第十六章 ドレスデンの革命（一八四七年—一八五〇年）

維也納からの歸途、シューマン夫妻は、プラグとブリュンで演奏會を開き、熱狂的な歓迎を受けることが出来た。ドレスデンに歸り着いたのは二月四日、二箇月以上の旅であつた。長い留守をさせた二人の幼兒を、再び我胸に抱いたクララの喜びも、エミールの健康状態を見るに及んで、暗い不安に襲はれるのをどうすることも出来なかつた。ユリーの發育は遅れてはゐるものの、まづまづ順調と云へるのであつたが、か細くいたいたしいエミールは恰も生命力が次第に消えてゆくやうな印象を與へるのであつた。然し子供の許に長らくとどまる暇もなく、夫妻は「樂園と妖魔」の上演の爲に伯林に出發せねばならなかつた。

伯林の「妖魔」の上演は種々の手違ひや紛議の爲に夫妻を悩ませたが、ともかくも二月十七日に上演の運びとなり、プロシヤの國主も臨御された。此の時の伯林訪問でクララは有名なロッシー伯夫人と知り合ひ、彼女の豊かな美しい聲はクララを喜ばした。

「私はこのやうな、麗はしいピアニッシモを聴いたことがなかつた。同時に彼女は誇張することなく極めて自然に歌ふ。彼女の聲は未だ美しく彼女自身も魅力に満ちてゐる。そして彼女が歌ふ時、大きな魅力と愛らしさに満ちた彼女の眼は不思議な輝きを増してくるのであつた。私はこのやうな和やかな氣持で歌をきいたことがない。何を歌つても彼女は完全な満足感を與へてくれる」

伯林で受けた温い歓迎は、冷淡であつた維也納の直後であつただけにシューマン夫妻にとつては嬉しいものであつた。三月二十四日、夫妻は豊かな想ひ出と共に伯林を去り、歸途ライプチヒに立ち寄つてメンデルスゾーンに逢つてドレスデンに歸つたが、これは夫妻がメンデルスゾーンに逢つた最後の想ひ出となつた。

歸宅してみると、幼いエミールの衰弱は益々加はり、何んとも手當のしやうがないままに、遂に四七年の五月に、幼兒は生後十四箇月でその果敢ない一生を終つてしまつた。「彼は此の世で何の楽しみも持たなかつた。彼の笑ふのを見たのは、僅かにただ一度だけである。それは我々が維也納に向つて出發する朝別れを告げた時であつた」とシューマンは此の薄幸であつた長男について記してゐる。

拍林から歸つた夫妻の目には、ドレスデンは音樂的には恰も死んでゐるやうな、靜か過ぎる印象を與へた。音樂の中心は王室歌劇だけで、勞れを知らぬワグナーの努力によつて、優れてはゐたものの、メンデルスゾーンがゐた時代のライプチヒの、充實した音樂生活を呼吸した者には、物足りなかつた。ワグナー、シューマン、ヒルラー等を中心に集つてゐたドレスデンの文化人の一團は、その大部分が彫刻家、文學者、畫家等であつた爲に、ドレスデンの樂壇に大きな影響を與へるだけの、活潑な活動をすることは不可能であつた。此のグループは主にヒルラー邸で集まり、毎週一回、ポスト廣場の料理店「天使」で集まるやうになつた。グループの中で特にシューマン夫妻が仲よく交つてゐたのは畫家のエドワード・ベンデマン夫妻で、ベンデマンはその頃ドレスデンの王宮の大壁畫を完成したばかりであり、ベンデマンの義理の兄弟にあたる有名な畫家のユリウス・ヒュブネルもシューマンの讚美者であつた。その他にはカール・マリア・フォン・ウェーバーの記念碑の設計者であるリーチェルや、ボンのベートーヴェン像を作つた彫刻家のユリウス・ヘーネル、王室劇場を設計した建築家のゴットフリート・ゼムペル等がゐた。シューマンの唯一の歌劇「ゲノヴェヴァ」の歌詞を書いたカール・ライニックも常連の一人であつた。

一八四七年十一月の朔日に、ライプチヒからドレスデンを訪ねて來たガーデは、メンデルスゾーンが重態だとの、驚くべきニュースをもたらした。

「五日、金曜。メンデルスゾーンが腦溢血の發作を起し、再起は望み難いとの報に驚愕した。私達は少し誇大なニュースだと思つてゐたが、その直彼にロイターから手紙で、メンデルスゾーンが四日の午後九時五分、安らかに永眠したと報せてきた。二週間の間に三回にわたつて起つた發作の爲に、彼は妹のファニーと全く同じ経過をとつて死んだのである。まるで妹が彼を連れていつたやうなものだ。『私もファニーのやうに死ぬ』と彼は家族の者によく云つてゐて、信じこんでゐた様子であつた。……。我々の悲しみは大きい。彼

は藝術家としてばかりでなく、人間として、友として私達にしたい人であつた。彼を識り彼を愛した人々にとって、彼の死は大きな損失である。多くの懐しい想ひ出が浮き上つてくる。そして『天は何故彼を奪ひ給うたのか』と叫びたくなる。天は彼の力の頂點に於て、未だ壯年の彼を召し給うた……彼を失つた悲哀は、我々に一生の間残されるであらう」とクララが嘆いてゐる如く、メンデルスゾーンはシューマンにとつても、クララにとつても、なくてはならぬ大切な人であつた。メンデルスゾーンは、クララに對しては殊にやさしく、クララの幼い頃から、彼女に好意を示すあらゆる機會を決して見逃さなかつた。前述したライブチヒのジュニー・リンズの演奏會で彼自身の演奏を辞退して、クララに榮譽を譲る爲に、舞臺から客席に降りてきて、自ら彼女を舞臺のピアノの前まで導いたことや、死の一年前の或日、ドレスデンの私的な音樂の集まりでベートーヴェンの熱情奏鳴曲の演奏を所望された折に、第三樂章は記憶してゐないから、シューマン夫人があとを引き受けて下さる條件ならば演奏すると云ひだして、クララが七週間もピアノを弾いてゐないからと、辞退するのに、

「彼はアダチオの最後の和絃まで弾き、減七の和絃を解決しないまま残して、ピアノから立ちあがり、終樂章はどうしても演奏出来ないと再び云つた。私はしかたがなく弾かねばならなかつた。不安で氣が遠くなりさうであつたが、相當によく弾くことが出来た」とクララがその日の日記に書いてゐるやうに、メンデルスゾーンが折あるごとに彼女に示した數々の心遣ひに對して、クララは深い感謝と尊敬を感じずのみであつた。ロバートは、メンデルスゾーンの葬式に參列の爲にライブチヒに急行し、ベンデマンやリーチェルも彼の死顔をスケッチする爲に同伴した。クララは子供等と留守をしながら、

「ロバートにとつて何んなにか悲しいことであらう。深い深い悲哀が私の心を壓迫して、私はぬけだすことが出来ない。

……美しい朝だ。私は愛するロバートのことを思ひつづけてゐる。此の悲哀の中で彼は何んなに意氣沮喪してゐることであらう。彼のゐない時の私は、半分死んだも同然である。神よ、どうか私の最高の幸福、彼を守らせ給へ」

クララはメンデルスゾーンの死からロバートが受ける心の打撃を憂へ、同時に彼の健康への不安もいよいよ増してくるのであつた。ロバートは八日に歸宅したが、彼の受けた衝動は大きく、いつか彼にもメンデルスゾーンと同じやうな形で、死が訪れることを信じこんでしまつた。これに加へてメンデルスゾーンの葬式の五日後に、ドレスデンに於ける夫妻の理解者であつたヒルラーが、デュッセルドルフの指揮者として出發したので、ロバートは益々心細く感じたやうであつた。シューマンはヒルラーの後任として、リーダー・ターフェルの指揮者になつた。此の合唱團はワグナーによつて統率されてゐたのを、ヒルラーが受けついでたのである。合唱團を引き受けたことは、自然シューマンの作品にも影響を與へ、リッケルトの詩を作曲した作品六十五や、アイヘンドルフの詩による作品六十二等が、男聲合唱の爲に作曲された。友を失つた寂寥の中で、此の年の末には歌劇「ゲノヴェヴァ」のピアノ・スコアが完成し、ロバートは直に第一幕の管絃樂化にとりかかつた。

一八四八年の六月、維也納からの歸途ドレスデンに立寄つたリストが、突然シューマン夫妻を訪れてきた。そしてシューマンのピアノ三重奏を、是非今夜きかして貰へないかと、クララに懇願した。彼女はこの珍らしい賓客を歓迎する爲に、僅かの時間に大いに奔走して演奏者を狩り集め、ベンデマンを始め多くの友人達も招いて、リストの來訪を待つてゐたが、二時間たつてもリストが現れない、遂に痺れを切らした一同が、ベートーヴェンのニ長調の三重奏を落着かぬ氣持で演奏しはじめて、その最後の頁に達した時に、「リストが飛びこんで来た！」のであつた。ロバートの三重奏が引きつづき演奏され、リストも列席した人々と共に稱讚したのであつたが、その次に演奏された五重奏については「あまりにライブチヒ的です」とリストが云つた。一座は此の言葉に何んともなく氣まづくなり、リストのこの言葉と、その云はれた調子に心を傷けられて、青ざめて黙つて坐つてゐる夫ロバートの氣持を、敏感なクララは胸に痛い程に感じずにゐられなかつた。無論人々はリス

トに演奏を求めた。然しその場の妙な空気に禍ひされてリストも氣がのらず、彼の最近の作品が此のグループの人達のつましい趣味に訴へることが少ないのを、彼も感じずにはゐられなかつた。誰かがメンデルスゾーンのことを云ひだした。此の時、どうしたわけかリストが、シューマンのメンデルスゾーンに對する敬愛の情を、知り過ぎる程知つてゐながら、軽率にも思ひあがつた調子で、メンデルスゾーンとマイヤーベールの比較論をやりだし、メンデルスゾーンを貶して、マイヤーベールを激稱した。これには堪へられなくなつたのであらう、今まで沈黙して坐つてゐたシューマンが、ふらふらと立ちあがつた。「マイヤーベールはメンデルスゾーンと比べればピグミーだ！ メンデルスゾーンはライプチヒだけでなく、全世界の爲に偉大な功績のあつた藝術家です。それが解らぬ人は黙つてゐた方がよいでせう！」

と、ついぞ怒りを人に見せたことのない、物靜かなシューマンが、此の時ばかりは叩きつけるやうに云ふと、部屋を出てゆき、扉が荒々しく音をたてて閉された。

リストは社交馴れた人らしく、外見は落着いてシューマンの憤怒を笑ひにまぎらせようと試みたが、一座のシューマンの友人達の中には、彼の陽氣な調子に乗つてくるものがなく、暗黙のうちに彼の態度を非難してゐるのを見て、彼も早々に暇を告げて立ちあがつた。そして送つて出たクララに「私にあんなことを云つたのは、世界中で唯一人だと、御主人にお傳へ下さい」と云つてワグナーと連れ立つて歸つてしまつた。

リストの態度が少々行き過ぎたことも事實であつたが、常に穩やかで殊に主人役であつたシューマンが腹を立てたことは、一同を驚かせた。リストとワグナーはシューマンが、神經衰弱の症状に陥つてゐたことを知らなかつたのである。クララは日記に書いた。

「ロバートは深く傷けられた。忘れる日は来ないことであらう。リストとはもう終ひである」

然し心やさしいロバートは、己の短氣がゆき過ぎたことを感じたときとみえて、一年後にリストからライネッケを通じて、ワイマールのゲョーテ祭の演奏曲目として、シューマンの「ファウスト」の音樂について問ひ合せてきた時には、直接リストに手紙を書き、彼のつた態度を率直に詫びて、忘れてくれるやうにと書き、「友よ、小生のファウストは『ライプチヒ的』であり過ぎないでせうか」と書いた。リストからは、「長らく御承知の如く、貴君に對して、小生の如く深く敬愛する者は、他にないことを、此處に繰り返すことをお許し下さい」との懇切な返事が届いた。

その後シューマンの歌劇「ゲノヴェヴァ」の初演の際には、リストも列席し、その後に催された祝賀會にも出席して、シューマンの近作「ユーゲンド・アルバム」を演奏した。此の時ピアノの低音部の絃がいつもの如く切れると、リストは眞面目な顔をして「こんなことは始めてなのですが」と云つたので、一座した人々はその調子にどつと嘖きだした。氷は遂に裂けた！ 然しリストとシューマン家の間のその後の關係は、禮儀以上は出ず、昔のしたしきは失はれたのである。

一八四八年はシューマンにとつて多くの収穫があつた。八月に「ゲノヴェヴァ」の完成後、彼はバイロンの「マンフレッド」の音樂化を計畫した。クララは例年の如くライプチヒのゲヴァンドハウスやドレスデンでの演奏會に出演する他は、お産もあつたりしたので主に家庭で過し、「ゲノヴェヴァ」のピアノ總譜の編曲の仕事を引き受けてゐた。

一八四八年の二月に五番目の子供が生れたが、此度も男の子でルドウィックと名づけられた。エミールが逝つて九箇月目、夫妻の歡喜は大きかつた。三人の上の娘達は次第に成長し、長女のマリエはもうクララからピアノを學ぶやうになつてゐた。「ピアノの蓋が開いてゐると、彼女はいつも飛んでゆく」と父シューマンは御祕藏のマリエについて記してゐる。一八四八年からマリエは學校に通ひ始めた。父シューマンの回想録には、細々と子供等の日毎の動靜と成育振りが記入されてゐる。

ルドウィックは素晴しく發育して、我々を喜ばせる。母さんは「今に私達皆を、押し倒すやうになるでせうよ」と云ふ。

ユールヘンは成長しない。彼女は小さくて瘠せてゐる。然し智能は決して遅れてゐない。彼女はまるで優美な人形のやうである。私は此の娘のやうに可愛らしく、お行儀のよい子供を他に知らない。マリエの耳は音樂的に正確になつてきた。彼女が小さな歌をうたふ時、私にはそれが解る。リーシュヘンはよく肥つて、丈夫になつて来た。健全な子供である。マリエはすうりとしてゐる。神よ、お前達を守り給へ！

シューマンは益々家庭に引きこもり、社交界に出るのも稀になつてきた。精神力が衰へてゐる折には、他人と會ふことは堪へられず、外出することも敢へてしなかつた。クララの弟子のエミリー・ステファニー嬢の想ひ出によると、その頃シューマンは午前中を作曲に過し、正午にはクララと共に散歩に出かけて頭をやすめ、午後は又六時まで仕事が續けられる。それから彼は近所のレストランに出かけてゆき、ビールのカップを前に新聞を讀むのである。此の夫の留守の一二時間を充分に利用して、クララはピアノの練習にあててゐるのであつた。弟子のエミリーは歸つてきた時のシューマンの顔色で、晚餐まで残るべきか、早々に歸るべきか直感するのであつた。

「私は直に、私のあることが歓迎されるか否か、わかるやうになりました。もし彼があつた深い目で私をやさしく眺め微笑したら、歸らないでもよいのです。もし彼が静かで眞面目な顔をして、安心してゐる風だつたら、私は彼が新しい仕事に熱中してをり、ひとりそつとしておかれたい氣持であることがわかるので、口實を作つて、こつそりと失禮して行くのでした」

「凡ての人が新聞を讀んでゐる。何事が起るか、神のみが知り給ふ」とシューマン家の或日の日記に書かれたやうに、此の年は、歐洲各地に於て自由民權を要求する蜂火があげられた。先づ伊太利のロムバルディアとスイスに於ける騷擾からつづいて、維也納からメッテルニヒが辭職したとの噂が傳はつてきたが、間もなく驚くべきニュースが入つた。

「三月十三日、柏林から恐ろしいニュースが入つた。國王が承諾しないので、市民が軍隊と衝突して千人以上の死者があつたと傳へられた」とクララの日記にもある如く、これ等各地の事件は、平靜なドレスデンの市民の心をも刺戟して、人々は議論することが多くなつて来た。ドレスデンにも「祖國協會」といふ運動が起り、熱血漢のワグナーはその中心人物となつて、春には三千人の聴衆の前で、火の如き演説をやつてのけた。シューマンはワグナーの政治への異常な熱情を、理解出来ない。彼の穩かな性格は、音樂家としての自己の運命に素直であつたのであらう。王室歌劇場の指揮者でありながら、ワグナーのとつた態度は王室側の不興を買ひ、彼の新作「ローエングリン」の上演は拒否された。かうした政治的不安のうちに、世は一八四八年から四九年に移つた。

シューマンは久しぶりにピアノ曲を作曲した。六つの「即興曲」作品六十六、「森の風景」作品八十二等をはじめ、ピアノとクラリオネットの爲の作品七十三の幻想曲、作品六十七、七十三、七十四、七十五等が此の春つづきさまに完成したのである。

四九年の三月三日、春近い午後の静けさが、突然、太鼓の音と、聖アンナの鐘のあわたましい音に忽ち破られた。それがドレスデンの革命の合圖であつた。書齋にあつたシューマン夫妻は互ひに顔を、不安氣に見合せるのであつた。翌日になると銃聲がやんだので、夫妻は街の様子を見に出かけ、國王がケーニッヒシュタインに夜の間に逃避された噂をきいた。サクソン王はプロシヤ國王に先んじて、立憲君主政體を拒絶した爲に、興奮した民衆が一齊に蜂起したのである。市内の中心地に入ると、道には防塞が築かれ、武装した暴徒が見張りをしてゐた。全くの無政府状態で溝や數石ははがされて、所々に砲壘が築かれてゐる。

「市内を歩いてゐると、私達は前の日に殺された十四箇の死骸が、市民に見せる爲に病院の庭に轉がされてゐる恐ろしい光景にぶつかつた。此の恐怖は、その後に續いて起つた、もつと重大な騷亂にとつて代られるまで、私の心に、付き纏つて離れなかつた。その日も、その夜も戦闘は行はれなかつた。假の防塞は本物の砲壘になり、緊迫感は次第に加はつた。如何になりゆくか、如何なる流血の惨事が起るだらうか？」

シューマン夫妻は、ワグナーがその中で活躍してゐることを知つた。五日はクララにと

つて恐怖に満ちた一日であつた。彼等の往む街にも自衛團が組織され、男性は凡て召集された。無論ロバートも参加を求められて、二度までもシューマン家を人が訪れて來たのであるが、強制的に血なまぐさい市街戦に、参加せしめられることの、ロバートの弱い神経に與へる影響を恐れて、クララは、不在だと云つて断つた。疑惑を抱いた人々は三度目には家宅搜索をすると云つて脅迫したので、彼女は先づロバートの健康を憂へて、なんとかしてドレスデンから脱出したいと考へた。たとへ健康な時でさへ、シューマンの神経が堪へられようとも思はれないのに、その直前に肉親のうちで唯一人生き残つてゐた、兄のカールの死に、シューマンの心がびどく動搖してゐた際でもあるので、クララは咄嗟の間に避難することに思案を決めたのである。

人目につかぬやうに、恰も散歩にでも出た如く、一刻も早く關所を突破しなければならぬ。クララは恐れ慄く召使ひの者達を勵まして留守を頼み、マリエの手をひきロバートを守つて、庭の裏木戸から立ちのいた。エリゼ、ユリー、赤ん坊のルドウィックを騒亂の街に残して、立退いてゆくクララの胸は押しつぶされるやうに重い。ロバートはいつもの穏かな調子で、クララが彼を守る苦心も知らず、「夜までに歸宅出来るかもしれない」と、むしろクララを慰めるのであつた。彼等はボヘミア行の停車場に着いたが、そこにも大鎌をもつた番兵がゐて武器の有無を調べられ、やつとマークセンに最も近いミュゲルンまで汽車でゆき、それからエルベの河畔を、聞えてくるドレスデンの街の砲火に追ひ立てられるやうに歩いて、八時間もかかつて夕ぐれの七時頃に、やつとマークセンのセルン少佐邸に安着することが出来た。ドレスデンから六哩離れてゐるマークセンまでも、大砲の音は間断なく聴えてきた。クララの子供達はその中にゐるのである。クララは此の數日の日記をくはしく書いてゐる。

その日一日の私の不安は恐しいものであつた。夜私は直ぐさま子供達を迎へに、市中に引きかへさうと思つたが、時刻が遅すぎた。暴徒達は武器をとれる男を近郊からも召集して、強制的に戦闘にかはらせる、といふことであつたので、ロバートと一緒にくることは不可能であつた。

……月曜、七日。私は早暁三時に、別荘の管理人の娘を連れて出發した。恐しい旅であつた。市内から再び出られないのではあるまいかと、私は恐れた。我々は轟きわたる砲聲の中を街に入つた。突然大鎌をもつた四十人ばかりの一團が私達の方に行進して來た。始めはどうしてよいか不安であつたが、心をきめて靜かに彼等の間を通りぬけることが出来た。

やつと安全に家のある街についた。家々の窓は凡て閉されてゐる。間断なく銃聲がきこえるが、此處ばかりは死のやうな靜けさ。子供達はまだよく眠つてゐたので、早速起して着物をきせ、必要品をとりまとめて一時間の後に我々は再び外に出た。ストレーラで運よく馬車に乗ることが出来た。マークセンに着いたのは晝前であつた。やつと家族が皆一緒になれたのである。ロバートは氣の毒にも不安な幾時間を過してゐたので、彼の喜びは二重に大きい。

村々で我々は避難民に逢ひ、彼等は市中で起つた恐しい出來事の噂をしてゐた。人々の態度は立派である。私はサクソニー人に此のやうな勇氣があるとは、思ひもよらなかつた。市中には援兵が續々流れ込み、特にエルッゲビルグ地方から大勢入りこんだ由である。然し軍隊もプロシヤから新しい部隊が引き續き輸送されてゐるので、市民は極度に興奮してゐる。

氣丈なクララにとつても、三人の幼兒を連れた、此のドレスデン脱出は、並み大抵の苦勞ではなかつた。殊に彼女は既に六箇月の身重な體であり、生彼九箇月の赤ん坊のルドウィックは無論のこと、かよわいユールヘンも到底長い道程を歩くことは不可能であつた。かうした健氣なクララの姿をシューマンはいつも頼もしく、敬愛の心で感謝してゐたのであるが、クララにとつては、常にやさしい守り手を必要とするシューマンも彼女の子供の一人なのであつた。彼女は親鳥がその暖い翼の下に雛鳥をかくまふやうに、自己を没却した愛の心で、病身の夫と子供達を、その強い母の腕で守つてゐたのである。嘗つてシューマンが慰め励ました幼いクレールヘンは、今や三十歳に近く、豊かな力強い母なる女性に成長してゐたのであつた。

九日の午後になつて、市中に出來てゐた假政府も、暴徒の指導者達も、フライブルクに逃亡したので、一週間近く續いた市街戦も終りを告げた。

「このやうな事件を、目のあたりに生きながら見ることは、何んと恐ろしい事であらう。凡ての人が平等にあつかはれる時代は、何時くるのであらうか？ 貴族達の心に、彼等と市民階級とは違ふ人間であるといふ觀念が、かくも根深くおろされてゐる限り、どうして可能であり得よう！」

八日の日に、料理女がマークセンに着いて、女中のヘンリエッテが天然痘になつたと報せてきたので、クララは子供等をマークセンに残して、十日の午後、一先づ整理のために、ロバートと市中に戻つた。

「我々は騷擾の跡を見物に、主な街に行つてみた。荒廢の有様は、到底描き出せない。家々には何千の銃痕が残り、壁は破れ墮ちてゐる。歌劇場は焼失し、恐ろしい光景であつた。流彈の爲に如何に多くの生命が失はれたことであらう。聖母教會には五百人からの捕虜が收容されてゐた。ワグナーは市民側に加はり、公會堂で政府罵倒演説をやり、自分の設計で、砲壘建造の指導までした由である。市中には戒嚴令が布かれて、プロイセン人が防衛にあたつてゐる」

シューマン夫妻は新聞によつて、既に逃亡したワグナーに、逮捕命令が出てゐることを知つた。市中は急速に平靜に復し、ドレスデンには又昔の静けさが戻つてきた。

七月十六日には男の子が生まれた。健康さうな子供でフェルディナンドと名づけられた。ロバートは政治に全く興味がない、といふわけではなかつたが、音樂と彼の家庭をあまりに強く愛してゐたのであつた。毎日の些細な家庭的な出來事の一つ一つが、彼のやさしい心を刺戟して、無限の興味と愛情をそそるのであつた。

「家は至極賑やかです。五人の子供等は始終周圍にゐて、モツアルトとハイドンを喜んで聴きますし、妻はいつもの如く勵んでゐます」

とシューマンは友人に書いてゐる。その年も、例年の如くしばしば音樂の集まりが催された。火曜日の夜に開かれる音樂の集まりの招待状は、常にこんな風に書かれてゐた。

「主人は新作を完成致しましたので、葡萄酒を持つて歸る由でございます。私はパンケーキを用意致します。何卒今夜お出かけ下さいまして、私共と楽しい時をお過ごし下さいませんか。そして新しい作品と作者の爲に杯をあげていただき度う存じます」

シューマンは多くの場合、凡てをクララにまかせきりで黙し勝ちであつたが、お客の氣分が陽氣になるのを喜び、新しい彼の作品が人々の氣に入ると、彼のやさしい目は生々と輝いてくるのであつた。

一八五〇年の春には、しばしば延期されてゐた彼の歌劇「ゲノヴェヴァ」の初演が、ライプチヒで行はれた。シューマンは此のヘッベルの名作の歌劇化を、既に一八四二年から考へてゐたのである。此の初演を祝つて夫妻と親交のある人々が、獨逸各地から參集した。シュポール、ライネッケ、リスト、ヒルラー、ガーデ、モシュレス、若いヨアヒム等の他に、シューマンの少年時代の故郷の音樂教師クンチュが、わざわざ出かけて來た。その他シュネーベルグのパウリーネ・シューマンや伯林のクララの母等、親族の者達も集まつて來た。三回にわたる上演は満員で、作曲者は熱狂的な拍手に迎へられた。クララに押しだされて聽衆の前に現れたシューマンは、まるで、未知の國の停車場に着いたばかりの旅人のやうに、すさまじい拍手に壓倒され當惑するのであつた。夜會服の用意を忘れたので、彼はフロックコートを着てゐた。歌劇の主役女優が月桂冠をもつてすすみ出て、當時の習慣にならつて彼の頭にのせた。

シューマンもメンデルスゾーンと同じく、優れた歌劇を書きたいといふ切なる野心を、一生を通じて持ち續けてゐた。メンデルスゾーンはその短い一生の間、彼の心に觸れる臺本を求めつつ、遂に見あたらぬままに早逝してしまつた。メンデルスゾーンがワグナーに與へた、控へ目な穩かな非難の中には、いくらかの嫉妬が含まれてゐたかもしれない。クララのワグナーの饒舌に對する、烈しい嫌惡の情には、何かそれに似たものが感じられる。ワグナーは確に偉大な作曲家ではあつたが、彼の音樂には、素朴な純粹なものにひかれるクララには共感出來ぬものがあるやうである。

一八四九年の秋にヒルラーからデュッセルドルフの管絃樂團と合唱團の指揮者の地位を、

ロバートにすすめて來た。次第に教育盛りとなる子供の多い家庭にとつては、定収入といふものが絶対に必要になりつつあつた。ロバートは管絃樂團と合唱團を自分の統率の下におくことによつて得られる音樂上の成果に多く期待してゐたが、そこには又多くの人を統率する手腕に對する彼の性格上の不安と、氣分によつて仕事をしてゐた藝術上の貴重な自由が、制限されるといふ不安などもあつた。年に十四回の演奏會、一週一回の練習は重荷ではなかつたし、七百五十ターラーの年棒は、生活費には不足しても、家計に安全感を與へた。ライブチヒに來る前にデュッセルドルフの指揮者をしてゐたメンデルスゾーンが、嘗つてこぼしてゐた事などをロバートも記憶してゐて、ヒルラーに詳しく問ひ合はせたり、しばしば手紙の往復が行はれた。デュッセルドルフは小都會であるし、音樂の中心とは云へなかつたが、ライン地方の音樂祭がしばしば行はれた。シューマン夫妻にとつて、ドレスデンを去ることは損失にも思はれ、同時に風光明媚なライン地方の自然は、自然を愛するロバートとクララに何か明るいものを感じさせるのであつた。

「シューマンこそ現存せる唯一人の天才である。かかる人物を當市より去らしめることは、ドレスデンの恥辱である」

といつた新聞記事が現れたりしたが、既に六年以上もゐるのに、ドレスデンに於けるシューマンの社會的地位は少しも變らない。

「ドレスデンを去るなど我々は懇願される。我々は今運命の岐路に立つてゐる。一方當地の第二指揮者の地位を運動せよと、強くすすめられてゐるが、そんなことはロバートの藝術家としての地位と襟度が許さない」

とクララは記してゐるが、彼女の此の意見は正しい。彼女は常に、夫の藝術家としての名譽を第一に考へてゐたのである。

「私の妻が活動する餘地がありませうか。御承知のやうに彼女は懶けてゐられない人ですから」

と、シューマンのヒルラーへの手紙にはクララに對する心遣ひも見出される。一八五〇年の三月には夫妻揃つてハンブルグ、プレーメン地方の演奏旅行に出かけ、その歸りに伯林を訪問した。メンデルスゾーンの墓參をする爲であつた。「ロバートは墓地に植ゑられた月桂樹の葉を一枚とつて、記念に持ち歸つた」又一夕は、メンデルスゾーンの未亡人を訪ねて、彼女を慰めて過した。

「私は、メンデルスゾーンを澤山弾かねばならなかつた。『ハ短調のトリオ』や『ヴァリエーション・シリユーズ』等々。メンデルスゾーン夫人は親切な懐しい人だ。あのやうな父親を、斯くも早く失つた美しい子供達を見ると、心が悲哀に滿されてしまふ。我々は二人とも此の氣持を拂ひのけることが出来なかつた」

三月二十九日に、彼等はドレスデンに歸宅したが、三十一日の日記には、

「ロバートは、デュッセルドルフに承諾の手紙を書いた。然し彼はまだ未定だと云ふ。彼は未だに當地近くで仕事があることを望んでゐる。然し當地に留まることは、如何なる場合にも有り得ないであらう。我々は此の都に恐ろしく退屈した。凡ては囚襲的で通俗的であり、人々は平凡である」

とクララは書いてゐる。ドレスデンに移り住んで六年、此の地でロバートは多くの作品を完成し、家族の數は増え、子供等も次第に成長した。然し、シューマン一家は遂にドレスデンにとつては、他人でしか有り得なかつたのである。

## 第十七章 秋近し、ライン河畔に（一八五〇年—一八五三年）

「九月二日午後七時、デュッセルドルフ——期待に反して低い山脈の麓にあつた——に着き、ヒルラーと交響樂團の委員に迎へられた。ヒルラーはロバートに、友情に滿ちた歡迎の辭を述べて、ホテルまで私達を送つて來た。私達の爲には花で華やかに飾られた部屋が用意され、入口には月桂樹が二本置かれてゐた」

と、クララが到着の日の光景を記してゐるやうに、シューマンとクララは、デュッセルド

ルフの人達から、尊敬を以て歓迎されたのである。ロバートに伴はれて汽車を降りたクララは三十一歳の女盛り、長女のマリエは九歳になり、七歳のエリゼは姉に負けない程にしっかりとしてみた。夢の中の子供のやうに美しく可憐なユリーは五歳で、ルドウィックはちよこちよこ歩きの可愛い盛り、フェルディナンドは未だ乳母の腕に抱かれてみた。ホテルに着いた一家の者が、未だ旅装も解かぬうちに、彼等の部屋の窓下に合唱の聲が湧き起つた。合唱協會の會員達が新しい指揮者を歓迎して、セレナーデに來たのである。冷淡で官僚的なドレスデンでは見られないこの暖い意志表示はクララとロバートの心に深く觸れるものがあつた。然し間もなくシューマン夫妻は、小都會に於て市民の注目の的となることは、大都會に於て顧みられぬと同程度に、厭はしいものであることを悟つた。

ロバートは緑の岡に圍まれたライン河畔の、美しい環境に住むことによつて與へられる満足、大いに期待してゐた。作曲したり夢想したり出来る、廣い庭園のある静かな家。然し來てみるとデュッセルドルフは田園的であるより、むしろ工業都市であり、新興都市の常として、非常な住宅難で、彼等の希望するやうな住居は見つからず、ドレスデンから家具一切が到着しても、それを入れる適当な家が見あたらぬ有様であつた。大家族のホテル住居は経費もかかるので、荷物を入れる爲にも、一先づ市内の中心地の門屋敷の一部を、借り受けることにした。

到着の翌日、ヒルラーは、夫妻を伴つて市の有力者の家に挨拶廻りにゆき、次の日は公園の料理店に招いて、ベンデマン夫人の兄弟のシャドー氏に紹介した。その夜ホテルに歸つた夫妻が晚餐をしてゐると、突然隣りの部屋から、モツアルトの「ドン・ジョヴァンニ」の序曲が聴えてきた。交響樂團の會員達が新しい指揮者に、敬意を捧げての演奏であつた。ロバートもクララもその演奏を聴いて、將來性があることを認めることが出来た。水曜日には樂團の委員が禮服姿で訪れて、土曜日に二人を主賓として催される夜會に正式に招待に來た。新しい家に移つたのは土曜日であつた。

その日一日中、荷物の整理に逐はれたクララは夕の六時になつたので、あわてて夜會服に着更へて出かけた。會場に着くとロバート夫妻は喇叭の音に迎へられ、直ちに「ゲノヴェヴァ」の序曲が演奏され、續いて「妖魔」の第二部と、シューマンの歌謡數曲が演奏された。「練習が一回だつたことを考へると、演奏は相當の出来である」とクララは日記に記してゐる。

指揮者はユリウス・タウシュといつて、メンデルスゾーンの紹介で此の地に來た人であつた。「タウシュ氏はよく指揮した。人間的にもつと感じのよい人であつたらよいのと思ふ。彼には何か……彼の顔つきには私を落ち着かせぬものがある」と敏感なクララは、此の人の第一印象を既にその時記してゐる。演奏が濟むと晚餐が始まり、皿が出るごとに卓上演説や萬歳が叫ばれる、此の陽氣なライン氣質は、シューマン夫妻には珍らしく思はれるのであつた。晚餐が濟むと踊りが始まつたので、疲勞したシューマン夫妻は早めに退出した。シューマンは疲勞甚だしく、翌日曜日に計畫された彼を案内するといふ遠足にも加はることが出来なかつた。

十三日に、クララは三十一歳の誕生日を迎へた。

……十三日 金曜。私の誕生日である。悲しい誕生日ではないにしても運の悪い日であつた。海のやうな心配ごとの中で私は迷つてゐる。少々の涙ではすまない程に、色々のことが私を悩ませる。殊に此度の移轉によつて、ロバートの負擔となつた莫大な出費のことが、悩みの種である。予算をはるかに越え、私は物質上の不安に現在の如く苦しめられたことは嘗つてなかつた。それに私自身は何等の収入もないのだから。

……十七日、通う。ロバートは最初の合唱練習を行つた。彼は合唱團に満足してゐる。會員の數も多く、殊にソプラノは新鮮で愉しい。

……私の心懸りの最大なものは、街路の騒音である、馬車、子供等の喚聲等々は、ロバートを神経過敏な短氣な興奮に追ひこみ、それが日に日に悪化する。彼は殆んど仕事が出来ない。私自身のこととは別としても、此の移住はやはり犠牲だつたと考へられる……氣の毒なロバートには、居心地のよい居間すらない。我々は實に運が悪い。何故人々は前もつて住宅難を報せてくれなかつたのであらう。

十月二十四日に行はれたシューマンの指揮による、最初の定期演奏會は、此の地方では稀に見る盛況で、近接都市からわざわざ出で来た人もあつた程で、幸先がよいことを思はせた。プログラムのメンデルスゾーンのピアノ協奏曲はクララが演奏したが、彼女もロバートも、舞臺に現れる度に喇叭の吹奏に迎へられ、地方の小都會としては、期待以上の出来であつたことに氣をよくした。然しロバートの指揮が好結果であつたのは、彼の行つた練習の結果ではなくて、メンデルスゾーン、ヒルラー等の優れた指導者達の、長年の訓練によるのであつた。

クララはライン地方の人達の音樂に對する氣質について、次の如く感想を記してゐる。

「彼等が音樂への熱情に缺けてゐる、といふのは眞實ではない。然し、それは困難なものさへも抱擁しようとする、純粹な眞摯な種類の熱情ではなくて、單に愉快なものなれば満足する種類の熱情である」

一八五一年の七月に、夫妻は南獨逸とスイスの旅に出かけた。

「それは彼も楽しい旅であつた。ボンで船を下りると元氣な大學生の群、よく晴れた空、美しい緑色のライン、楽しい音樂……そして彼の機嫌もよくなつた」

南に旅ゆくに従つて、二人の幸福の鼓動は急速になる。二人はロバートの學生時代の想ひ出の土地、ハイデルベルヒを訪ねた。

「ロバートは何もかもが、昔のままだといふ。古い家は二十二年前と同じ色にぬられ、同じ美味しい白葡萄酒、ウォルフスブルンネンの同じビール、違ふものは住んでゐる人々だけである。彼の下宿の主人は未だ存命してゐたが田舎にゐるし、當時の學生仲間には世界に散らばつてしまつた。唯一の残つてゐた人は一英國婦人で、白髪になり非常に老けてしまつてゐた。人間は何故いつも新しく、芽ぐみ花咲く、自然のやうであり得ないのであらうか」

彼等はバーデン・バーデンを経てバーゼルからスイスに入つた。ジュネバではルソー通りを散歩して、「驚く程安いシャンペン」(一・五〇フラン)を飲んだ。天氣の好い日に訪れたシャモニーでは、永遠の雪におほはれたモンブランの全貌を丁度宿の窓の正面に見ることが出来た。歸途ジュネバの湖を船で渡る時は、美しい夕暮れであつた、「恰も魔法の國に運ばれて行くが如くであつた。かつてこのやうな壯麗な光景を見たことがない」

彼等はインターラケン、ベルン、フライブルグ經由でライン河畔に歸宅した。此の旅行の楽しさは、深い印象をシューマンの心に遺し、その後數年を経て精神異常の爲に病院に入つてからも、彼はしばしば此の旅を想ひ出して、自ら慰めてゐたやうである。

子供等が楽しみにしてゐた、九月一日のマリエの誕生日のパーティーは、リストと愛人のウィットゲンシュタイン公夫人の突然の來訪で、消し飛んでしまつた。

リストが訪れてくる度に、家の日課は亂れてしまふ。彼は凡ての人を永遠の興奮状態に追い込んでしまふのだ。五時頃にリストが彼の未來の夫人、プリンセス・ウィットゲンシュタインと十四歳になるリストの娘(後にハンス・フォン・ビューローとワグナーの妻となつたコジマ)と家庭教師を伴つて到着した。プリンセスが主婦型の落ち着いた婦人であつたことは驚きであつた。眞の意味の感じのよさと彼女の教養と知性が、リストを魅惑してゐると云へる。彼女は熱烈にリストを愛し讚美してゐて、自らロバートにも告げたといふ。

ただ彼の娘のことが、私に悲しいものを少し感じさせた。彼女の表情には何か壓へられた愁ひの翳がみえる。我々は澤山に音樂をした。彼はいつもの如く悪魔的な絢爛さをもつて弾いた。彼は悪魔の如くピアノを驅使する。他に云ひやうがない。然し彼の作品にはひどいものがある……氣が減入つて悲しい氣がした。我々が何も云はないので、リストも氣を悪くしたやうであつたが、不満や焦燥を感じつつ口先だけでお上手が云へるものではない。

クララは新しい住居と土地になじむまでの、家庭的な忙しさに加へて、又も妊娠をしたので、あまり社會的な活躍も出来なかつた、一八五一年の十二月に四女のオイゲニーが生れたので、再び固い決心を以て家計の爲にも、演奏家生活を續けることにした。

一八五二年の七月には、何かと不満の多かつた家から、やつとベルケル街の新しい住居に引き移ることが出来た。夫妻は結婚して十二年、お互ひに遠慮なく、思ひのままに仕事に集中出来る、二つの音楽室を持つた家を、始めて與へられたのである。眺望のないことや日あたりが悪いことなども、二人にとっては氣にならなかつた。客間は音樂會が出来る程に廣かつたし、クララは夫の黙想を妨げることなく、階上のピアノの部屋に引きこもることが出来た。この家のおかげで、二人は嘗つてない程幸福に、お互ひの音樂に没入することが許された。育児と教授と演奏との多忙な明け暮れに、長年の間、顧みる折もなかつた作曲を、此の新しい住居の静けさの中に、再びとりあげる落着きをクララは見出したのである。

「規律正しく仕事出来る時、私は再び本來の自分の姿にかへつたやうな氣がする。まるで違つた明るい自由な氣持である。そして凡てのものが輝かしくなつてくるやうだ。音樂は生活の大部分を占めてゐる。音樂から離れてゐる時、私は身心ともに力を剥奪されたやうな氣がする」

指揮者シューマンと、樂員との間に不和の萌しが、最初に起こつたのは一八五一年の三月、最初のシーズンが未だ終へない前であつた。新聞にシューマンの指揮者としての技量を疑つた、中傷的な記事が發表され、その筆者在不快にも樂員の一人であつたことが明かであつた。樂員達は次第に最初の熱を失ひ、練習を休んだり、目にあまる振舞ひが多くなり規律が亂れてきた。しかも夫妻にとつて最も腹立しかつたことは、當然ロバート側に立つて、彼を擁護すべき人々までが沈黙を守つてゐることであつた。クララは此の事件によつて、シューマンの精神の平衡を保つ上に最も重要な自信が動搖することを恐れて、能ふ限り彼を守ることに専心したのであつた。シューマンを愛し尊敬するクララは、シューマンには指揮者といふ職業が、悲しくも不適當であつたといふ明かな事實を認めることは恐ろしかつたのである。

最初の間は合唱團の人々も、シューマンの偉大な名聲に對して、尊敬の念を以て彼を迎へてみた。彼の藝術家的人格と、音樂への異常な集中は、一種不思議な印象的な迫力を持つてゐる。然しあまりに生眞面目で非實際的であり、人間の心理を掴む統率力に缺けてゐる彼は、次第に尊敬を失つてしまつた。樂員の不眞面目な態度を前に、内氣な彼はどうすることも出来ず困惑してしまふのであつた。しかもシューマンはラインランドの明るい氣質には理解が困難な、バッハのマタイ受難樂の如き作品を好んで演奏させる上に、音樂の内面的な美に没入するあまり、表現上の實際的な指導が伴はない。ロバートが尊敬されぬばかりか、嘲弄されるのをみて、クララはマタイ受難樂の練習後に書いてゐる。

「會員は些かの熱情も示さなかつた。合唱團の婦人達は、ほとんど口も開けないし、まるで着かぬ子供のやうな態度をとつた。彼等は練習中も坐つたままで私をいらいらさせた。私もロバートが辭職することを望んでゐる。ああ、それが出来たら……然し色々の事情がある」

多くの會員達は、事件が表面化するのを避けようとしてゐたのだが、シューマンに對する不満は協會側にもあつた。そして「職責に耐へざる理由で辭職を求む」との無禮な書簡が届けられたりしたので、クララは此の事件の裏にタウシュが後任となる陰謀を悟るのであつた。

ロバートは何氣ない顔をして、此等の不快に耐へてゐたが、彼の心の奥は人に知られる以上に、深く傷けられ懊惱してゐたのであらう、此の頃になつてシューマンの健康は次第に衰へて、神經衰弱の上に聽覺の異状が加はり、安眠が出来なくなつた。六月に入ると益々ひどくなつたので、クララは神經が異常に不安状態になつた夫に従つてシェヴェニンゲンに休養に出かけた。四月頃からロバートは輕微なリューマチスの徴候もあつたが、憂鬱症は次第に充進して、人間嫌惡の感情がたかぶつて、ちかしい者以外とは、一切口をきかなくなつてしまつた。此の時に現れた聽覺異常は、後にロバートの發狂の原因となつたもので、健康が衰へてくる度に腦まされるのであつた。指揮者としての仕事は、ロバートは自ら氣づかなかつたが極度の心身の過勞に彼を追ひこんでゐたのである。

此の頃シューマンは、日課の如く街をマリエやエリゼを連れて散歩しつつも、いつか忘我の状態に陥り、又突然我にかへつて、傍に不思議さうに見上げてゐる子供を、我が子と氣づいて、「ハロー、小人さん達！」とやさしく呼びかけて微笑するのであつたが、又いつか物思ひに引きこまれてゆくのが常であつたと、シューマン傳の記者ワジレフスキーは書いてゐる。然し家庭のシューマンは昔のままで、子供達とよく語り、遊び相手となり、或時などは子供等のパーティーで、自ら踊ることを申し出て、まるで氣のよい熊のやうな恰好で踊って、一同を驚かしたといふ。然し此のおどけた愛すべき家庭のシューマンを知つてゐる人は極めて少なかつた。他人の中に入つた彼は、常に沈黙して、人の話を聴いてゐるのかゝないのか、片隅で首をたれてゐた。

クララはシューマンの公生活の失敗と破綻を不安に思ひつつも、彼の作曲家としてのやむことなきその頃の活動を心から喜び、満足のうちに見守つてゐた。序曲、ライン交響曲、セロ協奏曲、合唱曲、室内樂等が續々と完成した。これ等が出来あがる度に、クララはただ感嘆と喜びの言葉を書きつらねてゐる。彼女の純粋な信頼と稱讃が、如何にロバートの創作慾を刺戟し、力づけたことであらう！ 彼女はロバートの創作力が絶えないことは、彼の輝かしい才能と頭腦が尚ほ健全に活動してゐる證據だと考へて、それに縋つてゐたのである。

「あのやうに絶え間なく、創作活動が續けられる彼の頭腦は、何んと素晴らしいものであらう！ 彼の精神と人格を理解する知性と感性を、天が私に恵み給うたことは、何んといふ幸福なことであらうか。何百萬の女性達と比べて、如何に私が祝福されてゐるかを思ひ、又幸福過ぎるのではないかと天に訊く時、私はしばしば恐ろしい不安に襲はれる。ロバートの愛と音楽によつて與へられる、至福と歡喜の時を思ふ時、日常生活にかぶさつてくる翳が何んであらうか！」

ロバートの生活の本流は、指揮者としての對社會的活動にはなくして、作曲そのものにあつた。従つて彼の關心は、自他を問はず優れた作品に對して豊かに注がれるのであつた。フロレスタン、ユーセビュースの名で、浪漫主義音樂擁護の陣營にたてこもつて、熱筆を振つた頃から、評論のペンをとることが稀になつたその頃になつても、新しい生命ある音樂への彼の憧憬と理想は消えることがなかつた。既にメンデルスゾーンとショパンは、若くして此の世を去り、ワグナーとリストは豊かな音樂の色彩と煽情的な感覺的な効果をねらつて、「新獨逸派」と自ら稱する華やかな音樂運動に熱中してゐた。殘されたシューマンは今や唯一人、獨逸浪漫主義音樂の本道を、歩いてゐるのであつた。

ガーデやベネットは、シューマンの跡につづくにはあまりに小さい。ハイドン、ベートーヴェンの偉大な傳統を嗣ぐべき、音樂詩人、交響曲作曲者が、是非とも現れねばならぬ。シューマンの許には 彼が評論の筆をとつてゐた頃から、多くの無名の作曲家から、批評を求める草稿が送られてきた。彼はそれ等の作品の中に、新しいショパン、メンデルスゾーンを求めて、健康と時間の許す限り、懇切な忠告の手紙を書くのであつた。

ドレスデン時代に、輝かしい將來を約束された二人の少年が水平線上に現れた。ヨセフ・ヨアヒムとハンス・フォン・ビュローである。然し此の二人は、創作よりも演奏家的才能に恵まれてゐた。フォン・ビュローはリストの門弟であり、常に諧謔が唇をついて出るやうな、俊鋭な少年であつた。メンデルスゾーンの後援で獨逸樂壇に現れたハンガリア生れのヨアヒムは、眞面目な好ましい少年であつたが、既に幾分甘やかされた印象を、初封面のクララに與へたのであつた。

然し一八五三年の五月に、ライン音樂祭に出演の爲に、デュッセルドルフのシューマン夫妻の前に現れた二十三歳の青年ヨアヒムは、既に完成した靈感に満ちた演奏家となつてゐた。彼は當時一般には未だあまり知られてゐなかつたベートーヴェンのヴァイオリン協奏曲を演奏したのである。

「ヨアヒムはその夜の壓巻であつた。彼は完璧な技巧と深い詩的情調のうちに、演奏した。一音一音に彼の魂が息づき、私は嘗つて此の様に理想に近いヴァイオリンの演奏を聴いたこともないし、又如何なる巨匠からも、此のやうな忘れ難い印象を受けたこともない。

靈感に満ちた此の作品が又如何に素晴らしく、伴奏されたことであらう。管絃樂は恰も聖なる畏敬を感じてゐるかの如く思はれた」

此のライン音樂祭はロバートにとつても、相當の成功で、一八五一年の十二月に修正された二短調の交響曲は大成功を収め、又ヨアヒムの弾いたベートーヴェンの提琴協奏曲は、作品そのものの藝術性と、獨奏者の手腕が、シューマンの指揮者としての缺點を補つたのであつた。然し會員の動搖と新聞紙上に現はれるシューマン攻撃の火の手は、益々烈しくなるのみであつた。

ヨアヒムがシューマン夫妻から心から歓迎されたことは、記す必要もないことであらう。翌日シューマン家を訪れたヨアヒムは、ロバートのイ短調ヴァイオリン奏鳴曲を、クララと共に演奏して、作曲者を非常に喜ばせた。シューマンの満足に輝やく、楽し氣な顔を見て、クララの心にも此の若者への感謝の心持が、湧いてくるのであつた。シューマンを愛する人、又シューマンが愛する人を、クララも又常に愛したのである。

「此の曲がきつと與へるであらうと、長い間私が感じてゐたそのままの強い印象を、私は始めて感ずることが出來た。今は他のヴァイオリニストは考へることも出來ない。我々はヨアヒムを藝術家としてばかりでなく、人間として愛すべき謙遜な人と知ることが出來た。彼の性格は長い間交つた後に、始めて理解し得る種類のものである。これはおそらく凡て非凡なる人間の、通有性かもしれない」

この年の六月八日のシューマンの誕生日は、ロバートが子供達やクララと迎へた最後の誕生日であつた。その日は一家揃つてベンラートに遠足して、美しい初夏の森を逍遙した。

「それは恰も神様がロバートの爲に、セレナーデをして下さつたやうなものである。森の中にはささやかな音樂會が催されてゐた。夜は居心地よく家で過した。私はロバートが此の一日を、氣分よく過すことが出來たことを思つて、心が明るくなつた、去年はこんなにはゆかなかつた。身心ともに健かである時は、常に心から神に感謝してゐるが、今日のやうな祝ひの日には、二重の感謝を感じる……將來のことは神の御旨にまかせ奉らねばならない」

七月三十日の夜に軽い發作が起り、シューマン自身は軽い福溢血ではないかと、氣にやんでゐたらしいが、これは一種のリューマチスであつた。八月三十日には又過度の疲勞から、突然聲が出なくなつた。然しクララの日記を見ると、此の夏を通じて幸福な明るい調子が溢れてゐる。

此の年の彼等の十四回目の結婚記念日と、續く彼女の誕生日は、クララ・シューマンの長い人生に於て、或は最も幸福な一日ではなかつたかと思はれる。

「愛し愛される夫と共に、六人の健やかな愛らしい子供達に圍まれた、これ以上に幸福な結婚記念日が有り得ようか。この豊かな祝福に、私の心は感謝に満ちてゐる。天よ、我等を守り給へ」

一家のお祝ひの最高調は、翌日のクララの誕生日であつた。何かの手違ひの爲に、ロバートのクララへの贈り物が、午後にしか届かないので、どうか待つて呉れとロバートが云つた。

九月十三日。輝しい朝だ。素晴らしい上天氣である。ロバートの楽しさうな顔は、輝いてゐる。彼が何を準備してゐるのか、私には想像がつかかなかつた。ディートリッヒと彼は何かこそ話してゐたが、やがて一寸外出して、又歸つて來た。これで私が好奇心を持たなかつたとしたら不思議である。

十二時に我々は馬車でベンラートに出かけ、心は満足に満された。彼の顔は、私の言葉が彼の計畫に疑問を持ってゐるやうだと、思はれた折にだけ、少々曇るのであつた。五時頃に家に歸つた時、私は全く驚かされた。

花に飾られたグランド・ピアノが、部屋の中央に置いてあり、二人の紳士と婦人が立つてゐた。私が部屋に入つていつた瞬間、彼等が唱ひ出した。その歌は……十三年前にロバートがヘルテルのピアノを私に贈つてくれた折に、私の爲に書かれた詩が、そのままに唱はれたのである。それでも私はまだ彼の贈り物のことが、充分に呑みこめなかつた。ピアノは歌の爲に一時的に持つてきたものと思つてゐたのであつた。ロバートがピアノは私の爲に與れるのだと云つた時、私は大きな悦びと不安に壓倒

されてしまった。……あまりに立派な贈り物であつたから……私達の生計にはあまりに高價であつたから……然し私が心から切望してみたものであつた。さう告げた時のロバートの様子は、眞に幸福さうであつた。遂に不安は幸福感に征服されてしまつた。そして私は又ピアノの上に置かれてみたものを見て、再び同じ哀しい氣持に襲はれてしまつた。あまりに嬉し過ぎたのである。そこには彼のやむことなき刻苦の結晶である新作品が置かれてゐた。私の爲に作曲して呉れた、管絃樂伴奏附の「コンチェルト・アレグロ、作品百三十四」とヨアヒムの爲に作曲したヴァイオリンと管絃樂用の「幻想曲、作品百三十一」それにファウストの序曲の總譜とピアノ獨奏及び二重奏用の編曲とであつた。

私は私の感動を、到底書き記すことは出来ないが、心はロバートへの愛と尊敬に溢れ、此の大きな幸福を與へ給うた天への、感謝に満ち満ちてくるのであつた。世界中で私は一番幸福な妻だ、と云つたら私はあまりに、自惚れが強過ぎるであらうか……

新しい作品は、新しいピアノによつて全部演奏され、來客が去つてからも、二人は長い間靜かに坐つて、幸福な想ひにひたつてゐた。しかしそれは朝暁の如く、短く果敢ない故に、いみじくも美しい夫と妻の團樂であつた。クララがやがて踏み越えて生きてゆかねばならなかつた、最愛なる者との別離の日が、一刻一刻と近づきつつあつたのである。

ロバートがヴァイオリン曲を書いたのは、ヨアヒムへの大きな好意の現れであつた。ヨアヒムは八月末に、休暇の最後の日をシューマン家の人々と過しに訪ねて來た。「ヨアヒムは素晴らしい」「ヨアヒムは凡ての人を魅惑する」「朝もヨアヒムと音樂を楽しんでゐる」とシューマンは彼の訪問を記録してゐる。ヨアヒムは九月末にも又突然シューマン家に現れた。そして此の時はシューマンとクララにとつて、思ひがけない、何よりも尊い美しい贈り物をもたらしたのであつた。

十九歳の青年、ヨハネス・ブラームスである。

## 第十八章 ヨハネス・ブラームス (一八五三年—一八五四年)

一八五三年の九月三十日、玄關の呼鈴に答へて、十二歳になつたばかりのシューマンの娘マリエが扉をあけると、ルックサックを肩に、長靴を泥まみれにした青年が、まぶしさうに階段の上に立つてゐた。青年はやや、癩高い聲で「シューマン博士は御在宅ですか？」と云つた。これがヨアヒムの紹介状をもつて、始めてシューマン家を訪れたヨハネス・ブラームスであつた。

その年の春にヨハネスは、既に歐洲樂壇の寵兒となつてゐたヨアヒムと知りあつて、忽ち無二の親友となつた。ヨアヒムは未だ無名の此の青年の天才を世にだす爲に、力になりたいと思つて、當時彼が心酔してゐたワイマールのリストに紹介した。ヨハネスはヨアヒムのすすめに素直に従つて、ワイマールに出かけて行つたが、ハンブルグ生れの此の素朴な青年は、大リストを圍んでゐる貴族的な豪華な、社交的な空氣になじむことが出来なかつた。音樂が最も私的な内的生活の叫びであり、夢であり、同時に生活の手段であつたブラームスにとつて、音樂が社交と結びついてゐるワイマールの雰圍氣が理解出来なかつたのは、當然かもしれない。

リストは生れつきの寛大さを以つて、快くヨハネスに會ひ、彼の作品を初見で演奏して彼を激勵した。田舎者のブラームスは、あたりの光景にすつかりのぼせあがつて、口もきけない有様であつた。

ブラームスがワイマールを去つた理由については、色々取り沙汰されてゐるが、その場に居合せた米國人のリストの弟子、ウィリアム・メーソンの話によると、リストが自作の變イ短調の奏鳴曲を演奏中に、ふと見るとブラームスが居眠りしてゐたので、リストは弾き終ると一言の口もきかず、部屋を出ていつてしまつた。ブラームスがワイマールを去つたのもその日であつたと云ふ。

その夏をギョッティンゲンでヨアヒムと共に過したヨハネスは、ヨアヒムの伴奏をして得た僅かばかりの金を持つてライン谿谷地方に徒歩旅行に出かけた。彼の懷にはデュッセルドルフのロバート・シューマンへのヨアヒムの紹介状が入つてゐた。然しワイマールに

すつかり懲りてみたブラームスは、此の紹介状を利用することを、全く考へてゐなかつた。内氣な心の貧しいブラームスにとって、世に謳はれてゐる大作曲家等は、違ふ天體の人間の如くはるか遠い存在に思はれたのである。ブラームスの旅は尊敬するベートーヴェンの誕生の地、ボンにまで達した。そして彼は此處で指揮者のワジレフスキーと逢つたのである。

〔ヨーゼフ・フォン・ワジレフスキー（1822—1896）はダヴィットの門下のヴァイオリニストで又指揮者であり、最初のシューマン傳の著者として知られてゐる。〕

一八五二年までデュッセルドルフの交響樂團の第一ヴァイオリンをつとめてをり、シューマン家にも出入りしてみたワジレフスキーは、ブラームスに、是非ともシューマンを訪問するとよいとすすめて、彼の所有するシューマンの作品を見せて呉れた。不思議なことではあるが、貧しく育つた上に殆んど正規の音楽教育も受けてゐないブラームスは、未だショパンやシューマン等の作品を、詳しくは知らなかつたのである。ワジレフスキーの紹介で、メーメルMeermeerの富豪ダイヒマン家を訪れたブラームスは音楽室に所蔵されたシューマンの楽譜を引きだして貧るやうに見てみた。それ等の音楽は何か若いブラームスの、共感を呼び覺ますやうな力を持つてゐて、彼の心は不思議な高揚を感じるのであつた。内氣な朴訥なブラームスが、遂にシューマンを訪れる決心をした眞の原因は、ヨアヒムやワジレフスキーの勧めではなくて、シューマンの音楽が彼に與へた感動によるものではないだらうか。

マリエはブラームスを客間に通すと、書齋にゐた父を呼びにいつた。シューマンはそそくさと出て来て、口がきけない程にのぼせあがってゐる青年を快く迎へて、やさしく手をさしだすのであつた。若いヨハネスの房々とした金髪は、肩のところまで豊かに垂れさがり、明るい忘れ名草色の眸は、ひたむきな熱情と烈々たる氣魄に光り輝いてゐた。部屋着をきて、フェルトの室内靴をはいたシューマンは、ブラームスに物靜かな慕はしい印象を與へた。シューマンの聲は殆んど聴きとり難い程に低く、彼のまなざしははつきりとブラームスに視線をむけられない程に、内氣で控へ目であつた。シューマンはブラームスをピアノの前に導いて、彼の作品について親切に尋ねた。ブラームスは彼の最初の奏鳴曲ハ長調の草稿をピアノの上に置いた。はにかみやのブラームスも穏やかなシューマンの前ではやすらかな氣持に落ち着いてくるのを感じるのであつた。彼は靜かに第一樂章の香り豊かな最初の和絃を弾き始めた。始めの頁を未だ弾き終らぬうちに、後に立つてゐたシューマンの手が柔らかく彼の肩に觸れて、「クララにも聴かせたいから」と囁くやうに云つた。

クララが部屋に入つてくるとロバートは、「まだ聴いたこともないやうな音楽がきかれるよ。さあもう一度貴方の奏鳴曲を始めて下さい」と云つた。實に此の瞬間に、十九世紀の音楽文化の中心に立つ三人の藝術家の心に、彼等の生涯を通じて奇しくも燃えつづけた、美しい友情の燈が點じられたのである。そして此の燈はロバート・シューマンの死後も絶えることなく、一八九六年のクララの死に到るまで、半世紀に近い間ひそかに燃えつづけた。ブラームスとシューマン夫妻との清い美しい友情は、シューマンとブラームスの作品を愛する後世の我々にとって興味が深いばかりでなく、人間性に對する一つの大きな信頼と感動を與へてくれる。

シューマン夫妻は一目で、純眞な若いブラームスを愛し、天才のみが天才を知る直観と洞察力を以つて、未だ逢ひ見たばかりの青年の稀なる素質を、感知したのであつた。實に彼等は翼を持てる人々であつたのである。ブラームスの人懐こい眞摯な性格は忽ち夫妻に氣に入られて、一家の息子の如き愛情と信頼に包まれたのである。奔放な熱情と、ひたむきな迫力を持つた若々しい音楽が、シューマンの家に鳴り響いた。シューマン夫妻は深く椅子に坐したまま魅せられたやうに此の新しい音楽の個性に捉へられてゐた。そこには若さからくる誇張やあまりに不自然な轉調があつた。然しそれ等の缺陷も此の音楽の中に燃えてゐる、純粹な焰をおほひかくすことは出来なかつた。遂にシューマンが沈黙から立ちあがつた。彼は巨匠の言葉を待つてゐるブラームスの肩をやさしく抱くと、靜かに言つた。「君と私はお互ひによく理解してゐる」

音楽史を繙いてみても、二人の偉大なる作曲家が最初の會見に於て、お互ひの内的生活

に於ける音楽の理想と祕密に、直ちに觸れあつた瞬間といふものは誠に稀である。ワグナーとリスト及びシューマンとブラームスの場合は、此の不思議な人間の心の交流が行はれた稀なる瞬間と云へるであらう。

シューマンはブラームスの本質を、ブラームス自身よりも適確に把握したのである。そしてヨアヒムが嘗つてブラームスについて「眞にベートーヴェンのだ」と云つた言葉が、ブラームスの演奏をしたしく聴くに及んでシューマンの頭の中で、新しい意義をもつて甦つて來た。ロバートは九月三十日の日記に「ハンブルグからブラームスが來た」と記し、その後の日記は此の新しい若者の名前で満されてゐる。クララの日記も、劣らず感動的である。

「今日ハンブルグから素暗しい人物、作曲家のブラームスが來た……彼は二十歳だ。彼も又神から直接遣はされた人である。自作の奏鳴曲、諧謔曲を弾いたが、その凡てが溢るばかりの幻想と深い感動と、そして優れた様式を持つてゐる。ロバートは彼には加へるものも、とり去るべきものも無いと云つた。彼がピアノの前に坐つてゐるのを見るのは、誠に感動的であつた。若々しく好ましい顔の表情が、次第に神々しくなり、彼の美しい手は技巧的に至難な部分を、らくらくと演奏する……彼の作品は技巧的に相當困難である……彼の作品は完成せる作品であつて、神が既製品として此の世に贈り給うたとしか思はれない。彼の前には輝しい未來が拡がり、管絃樂の作品を書く時、彼の天才はその眞の活動分野を發見することであらう。ロバートは天に彼の健康を祈る他には、何も望むものはないと云つてゐる」

シューマン夫妻は翌日の午餐に、ブラームスを招待したが、はにかみやのブラームスはその時刻になつても現れなかつたので、クララはわざわざ心あたりの宿屋をさがし歩いて、やつと彼を見つけだして我家に伴つて來た。ブラームスは此の家の眞實と愛情に満ちた空氣と、率直でつましい生活に觸れるに従つて、いつか我家のやうなしたしみと平和を、此の家庭に感じるのであつた。

シューマンは十月五日に「來るべき者が來たのだ！」との有名な手紙をヨアヒム宛に書いた。ヨアヒムからは「私はブラームスを嫉妬する以上に、彼を愛してゐますから」といふ返事が來た。夫の愛する音楽を愛し、夫の愛する人を愛さずにはゐられなかつたクララは、ヨハネスに對してもあらゆる助力を惜しまなかつた。彼女がヨハネスに示した最初の好意は、彼にピアノの教授をすることであつた。ブラームスは生れつきの優れた音樂的感覚を以つて、巧みに演奏はしたが、彼のピアノは獨學であつたので、演奏としてみる場合、技巧的にはまだまだ訓練の餘地が残されてゐたのである。クララの與へた一寸した注意や組織的な練習は、短時間に大きな進歩を、彼の演奏にもたらすことが出來た。

「ヨハネスは熱心に勉強をしてゐる様子です。此の三日間といふもの、彼はピアノの技術を磨くのに一生懸命です。きつと妻がその陰にゐるのでせう。昨日私は彼の演奏を聴いて驚きました。まるで違つてきたのです。彼は四十分間で地球の周りに輪を描ける男です」とシューマンはヨアヒムに報告する。夫妻揃つて金髪と青い瞳をもつた青年ブラームスに、夢中になつてゐる様子が當時の日記には、生々と描かれてゐる。別に豫定も仕事もないブラームスは、シューマン夫妻の好意に甘えて、彼等の家に滞在することになつた。ヨハネスを中心に音樂家の友人達も集つて、初秋の夜を楽しい音樂の集りが續けられた。ブラームスが訪れて三日目に招かれてきたディートリッヒは、その場でブラームスの一生の知己となつた。

〔アルバート・ディートリッヒ（1829-1908）はシューマンの弟子。作曲家、指揮者。〕

その頃のロバートの精神は、新しい若々しい友人達に刺戟されて、絶えず高揚し興奮してゐた。彼は健康と時間の許す限り、ひたむきに作曲に身を打ちこんで、ヨアヒムの爲のヴァイオリンの幻想曲の作曲に精進してゐた。當時のシューマンは作曲のことと、ブラームスとヨアヒムのことで心が一杯に満たされてゐて、事態は一路破局に向つて、すすんでゐたのではあつたが、音樂協會の演奏會のことなどは、彼にとつてどうでもよいのであつた。彼のブラームスに對する愛情は烈しいもので、一刻も別れてはゐられない程に彼を愛

したので、クララは「ロバートのヨハネス」と云って、彼を揶揄つてゐた。ロバートは未だ無名のブラームスの作品を、出版してやりたいものと考えて、自らライプチヒの書肆と交渉さへ始めてゐたのである。

月末にヨアヒムが再び來るといふので、ロバートとヨハネスはディートリッヒを加へて三人で、ヨアヒムの爲にヴィオラの爲の奏鳴曲を合作した。、ディートリッヒとヨハネスが一樂章を書き、二、三樂章をシューマンが作つて、表紙には、

敬愛する友の到着を待ちつつ

ロバート・シューマン、アルバート・ディートリッヒ、ヨハネス・ブラームスと書かれてゐた。月末にはヨアヒムが訪れて、シューマン家に滞在した。ヨアヒムの「ハムレットの序曲」が、シューマンの推薦で音樂協會の定期演奏會で上演されたからである。二十九日にはヨアヒムとクララが合同で演奏會を催したが、此の演奏會には有名な女流作家のベッティナー・フォン・アルニムが令嬢のギッセラを伴つて、わざわざデュッセルドルフまで聴きに出かけて來た。クララは浪漫主義獨逸文學の生んだ此の女性が彼女に示した好意に驚いて「二十八日の朝、ベッティナー・フォン・アルニムの訪問を受けた。彼女の心は、ヨアヒムの爲に特にやはらかい場所を持つてゐるらしい」

と記してゐる。ブラームスも此の大ゲヨーテと深い親交を持つてゐた、才氣に溢れる婦人を目のあたりに見てひどく感動した。

演奏會の翌日は、人々に深い印象を與へた此の老いたる偉大なる婦人も去り、ヨアヒムも任地のハンノーバーに歸宅し、三日後にはブラームスも又ハンノーバーへと旅立って、シューマン一家は急に淋しくなつた。

ロバートはヨハネスの稀なる天才を、樂壇に紹介する爲に、十年間とらなかつた筆をとつて、二十数年前にショパンについて感勵的な文字をつらねたやうに、ブラームスを紹介する一文を書いて發表した。「新しき道」と題された此の推薦文は正しく豫言者の言葉であつた。「新しき道」は獨逸全國の識者の讀むところとなり、非常な反響を巻き起した。然しブラームス自身はそれ等世間の騒音を他にシューマンの大きな期待に添ふべく、一心不亂にひたむきな精進をつづけたのであつた。

シューマンはブラームスに、彼自ら出かけていつてライプチヒの出版書肆と直接交渉するやうにすすめた。シューマンの「新しき道」があまりに世界の好奇心を刺戟したので、ヘルテルではかへつてブラームスの音樂の出版に二の足を踏んでゐるのであつた。

ブラームスの作品第一の奏鳴曲はヨアヒムに、第二の嬰へ短調の奏鳴曲はクララ・シューマンに捧げられた。クララ・シューマンを通じて三度、輝しき將來を持つ作品二が世に現れたわけであつた。嘗つてうら若い少女の頃にクララが獨逸の樂壇に紹介したショパンの作品二の變奏曲も、同じくシューマンの作品二である變奏曲「胡蝶」も、共に作者が未だ無名時代の作品で、クララの演奏によつてその獨創的な個性を發見される機運となつた。

シューマンが「新しい道」で「救世主」と讃へた青年に對して、ライプチヒは常の如く懷疑的であつた。シューマンの意見は彼等に重壓を加へ、かへつて反感を起さしめたのである。然しブラームス自身がシューマンの紹介状をもつて出かけてゆくと、彼の人は好ましい印象を彼等に與へることが出來た。彼の控へ目な然し自信ある態度、靜かな率直なまなざし、そして何よりも彼の特異な香氣に香つてゐる音樂は、各方面の理解を少しづつではあつたが集めることが出來た。モシュレス、ピーター・コルネリウス、フリードリッヒ・ヴィーク等に彼は紹介され、ダヴィットは、室内樂の演奏會にブラームスの出演を求めた。寛大なリストはブラームスに「近く貴方の新しき道が、ワイマールにも通じるやうに希望します」と書き、彼の演奏を聴いたベルリオーズは、演奏後ブラームスを抱擁して、彼の横顔に若き日のシルレルとの類似を發見するのであつた。

青年時代のブラームスは、現在多く見られる肥滿した、まるでジュピター神を髣髴とする晩年の寫眞とは凡そ違つてゐて、ふさふさとした美しい金髪と、忘れ名草色の瞳から受ける印象から、人は彼を「ラファエル型の頭」とか「洗禮のヨハネ」とか呼んでゐたのであつた。

「美しい金髪、デリケートな表情、静な端麗な容貌、そして清浄さ、自然さ、純眞さ、力と深さ、これ等の凡ての言葉が、彼を物語つてゐる。しかも彼は少年の如き澄んだ聲を持つてゐて、如何なる少女も頬を赤らめることなく、接吻出来るやうなあどけない顔をしてゐる。俗世間も彼の清純さを穢すことは出来ない。そしてそれは彼が無名の作曲家から、世の憧憬的となつて後にも、つつましさと素朴さを決して失はなかつたことで證明されるのである」

これはブラームスについて、ヘレーネ・フォン・ヴェスクが云つた言葉である。

その年の降誕祭の頃に、ヨハネスはハンブルグの両親の許に歸つた。質朴な善良な彼の両親には、彼等のヨハネスが此の数箇月の旅行で、突然有名人になつたことは、到底考へられない程の驚きであつた。ヨアヒムとシューマンから両親に宛てて懇切な手紙が送られてゐたのである。

ヨハネスとヨアヒムの出發を境として、シューマン家の幸福な、のどかな明け暮れにも幕がおろされることになつた。十一月に入ると、長らくクララが心を痛めてゐたことが、遂に現實となつて現れて來た。十一月七日に音樂協會の代表者がクララに面會を求めて、委員會の決議を報告した。タウシュが、管絃樂の練習に骨を折つても演奏會當日のシューマンの指揮によつて、折角の努力が水泡に歸すのは遺憾であるから、今後はシューマン博士には自作の指揮だけ願ふことにして、その他はタウシュが指揮するといふのである。

この申出に對して、クララはそのやうな非禮な侮辱的な條作を受諾することは出来ぬ、と夫に代つて答へて、最初の契約の條件から云つても、斯くの如き決定を、シューマンに強制する権利が彼等に殘されてゐないことを、指摘したのであつた。度々文書の往復があつたが、敏感なクララは、此のシューマン追ひ出し運動の黒幕として、事件を操つてゐたのが、實はタウシュであつたことを、見破つてしまつた。ロバートとクララは既に長らく心の中で、莫然と考へてゐた移轉のことを、此の頃から眞剣に考へるやうになつた。伯林と維也納が候補にのぼつてゐた。が、感情的には二人とも、維也納に心がひかれてゐたやうである。

十月二十四日に、夫妻揃つて、オランダ地方への巡遊に出發した。ウトレヒト、ハーグ、ロッテルダム、アムステルダム等の各都市で受けた盛大な歓迎は夫妻にとつて好ましいもので、シューマンの作曲家としての名聲も、又彼の音樂への一般の理解も、年毎に成長してゆくことは、クララを喜ばすのであつた。第二と第三の交響曲及びピアノ協奏曲は、常に喝采の對象となつた。練習は豫め出来てゐて、ロバートは當日の指揮をするだけであつたが、ロバートに自信が與へられることが、クララにとつては何よりも嬉しく感謝であつた。ロッテルダムでは、演奏會の夜二人がホテルに歸ると、群集が手に手に松明をもつて、窓下に集つてきて、シューマンの「薔薇の巡禮」の中の合唱を歌つたやうな、嬉しい出來事もあつた。十二月六日ハーグで行はれた演奏會の夜、クララは日記に、

「ロバートが私の演奏に對して、常に大きな關心を抱いてくれるのは喜びである。彼が満足してくれた時には、全聴衆が私の足許にひれ伏して呉れる以上に、私が悦ぶことを、ロバートは知つてゐる」

と書いてゐるが、クララは、長らく繁雜な家事に追はれて、思ふがままに練習さへ出来なかつたものの、ロバートを喜ばすことを唯一の希望に、此の旅行で演奏の機會に恵まれたことを感謝してゐるのであつた。降誕祭には再び懐しい我家に歸つて、六人の子供を中心に、楽しい一家團樂の時を持つことが出来た。對社會的な不愉快な事情もあつたが、可愛い子供等と愉しげな夫の様子を見て、クララの心は感謝に滿されるのであつた。此の降誕祭が一家揃つて祝はれた最後の想ひ出にならうとは、クララは夢にも思はなかつたのである。

一八五三年の最後の日に、クララは、

「過ぎ去つた年に對して、神に感謝せねばならない。神は夫と子供等の健康を守り給うた。人生の僅かな不幸は、人生が與へる豊かな恩恵と比較する時、問題にならないと思ふ」と、夫の病の恐怖に絶え間なく直面しつつも、クララは此の精神的に豊かな實りの年に、

深い感謝を捧げてゐる。一八五四年の新年になると、夫妻はハンノーバーに旅することになつた。此の時クララは又も妊娠してゐたので、聴衆の前で演奏することは、相當の重荷に感じられるのであつたが、ヨアヒムやヨハネスと再會出来ること、不愉快なデュッセルドルフを暫時なりと離れ得ることを考へて、出かけたのである。演奏會の曲目はシューマンの第四交響曲とヨアヒムの獨奏するヴァイオリン幻想曲、クララが獨奏するベートーヴェンの第五ピアノ協奏曲で、指揮はヨアヒムであつた。ヨアヒムの優れた指揮によつて、シューマンの音樂の演奏は上出来であつた。又クララはヨアヒムの紹介により、ハンノーバーの宮廷で、二回までも夫ロバートのピアノ曲を御前演奏する光榮に浴した。

然しクララとロバートのハンノーバー滞在をより楽しくしたものは、三人の若い音樂家達との交友であつた。ヨアヒムとヨハネスの二人は暇さへあれば、物靜かで瞑想的なシューマンと、快活なクララの作るなごやかな空氣をしたつて夫妻のホテルを訪ね、その時にはヨハネスの親友ユリウス・オットー・グリムを連れてくるのであつた。

[ユリウス・オットー・グリム (1827-1903) は有名な童話作家グリムの弟で、音樂家である。]

グリムはヨハネスの如き、創作的才能に恵まれた音樂家ではなかつたが、感じのよい人で、ヨハネスとは氣がよくあつてゐた。ヨアヒムは生眞面目で戯談等は云へる性ではなかつたが、ヨハネスの方は無口ではあつたが、時によると滑稽なことなどを云つて人を面白がらせる折もあり、同時に又、その頃から非常に氣が短くて、扱ひにくいところがあつた。

「我々には、ヨハネスが黙り勝ちなのが不思議に思はれた。彼は殆んど口をきかないし、きいても聴きとれない程に低い聲である。彼には彼だけの祕密の世界があるのかもしれない。彼は凡ての美しいものに熱中して、心の中だけでそのものに生きてゐる」

とクララの日記には見出される。然し此の二人の青年は、敬愛するシューマンが何んとなく氣が沈んで見える時には、忽ち云ひあはしたやうに、陽氣に振舞ふのであつた。最後の夜にはクララがブラームスの嬰へ短調の奏鳴曲を弾き、ヨアヒムと二人でシューマンの二短調のヴァイオリン奏鳴曲を合奏した。翌日夫妻はハンノーバーを去つた。彼等が急速にしたしくなつてから僅か半歳、恰も限られた時に追ひたてられるやうに、互に相まみえるあらゆる機會を捉へてきたのであつたが、その日シューマンの汽車を見送つた三人の青年はそれが最後の別れであつたことを誰一人悟らなかつたのである。

歸りゆくデュッセルドルフは、彼等にとつて楽しい土地ではなかつた。然し其處には何んな旅から歸宅する折でも、「あの人は何んなに待つてゐて呉れるだらう」と、靜かに心に思ひ浮べられる一人の友がゐるのであつた。それはロザリー・レーザーと呼ぶ盲目の婦人で、一八五〇年にお互ひを知りあつて以來、此の人とクララの間には美しい友情が育くまれ、その後の長い一生を通じて、お互ひに人生の不幸に堪へつつ、互ひに勵まし、力になりあつたのであつた。クララのデュッセルドルフ時代の日記を見ると、ロザリーの名が何か光りの如く、彼女の魂のよりどころの如く、書かれてゐる。

此の高い教養と美しい心を持った盲目の女性は、世に謳はれる華やかなクララ・シューマンでなく、一人の女としてのクララを愛してゐたのであつた。

お別れして一週間もたつたのに、未だ貴君にも、貴君のお仲間にも便りをしませんでした。然し心の中では度々書き、此の手紙の中にも、今にお解りでせうが、目には見えぬ文字が書かれてゐるので

す。愛するヨアヒム、私は貴君の夢を見た。私達と一緒にゐて、貴君が蒼鷺の鷺ペンを手に持つてゐると、そこからシャンペンが流れ出たのです。平凡だが眞實らしい夢ではありませんか。

我々は過ぎた日のことを考へてゐる。そして飛び跳ねてゐた二人の惡魔の化身を忘れない。今音樂は沈黙してゐます、少くとも外見は。貴君の方は如何ですか？

ライプチヒの人間は貴君の幻想作品を、凡俗で鈍なライン地方の人々よりも、理解したやうですね。毛蟲のやうな作曲家の横行する時代は廢れて、本物の蝶々が今に飛び立つ時代がくると思ひます、然しあまり喪服色ばかりでなく、明るい色彩のものにしてほしいものです。

シガーは私を大變に喜ばせます。ブラームス風の味がします。といふのは、相當に強いが香氣があるのです。彼の顔に漂つて、ゐる微笑が見えるやうです。もう筆をおきます、暗くなりましたから。

ヨアヒム宛に書かれた、二月六日附の此の手紙は明るい調子に満ちてをり、ロバートの精神状態に対しては、相當神経質になつてみたクララ自身でさへも、シューマンの元氣なその頃の様子に欺かれてみたのであつた。新しい時代を擔ふ希望に満ちた青年達を、目のあたりに見て、シューマンの心は温く慰められ、喜びと期待に満されて、長らくなかつた程にひたむきに、音樂の世界に没入してゆくのであつた。その樂しげな様子を見てクララは、長年ひそかに持ちつづけてみたロバートへの不安が消えて、遂に彼が不健康時代を克服したのではないかとさへ、自ら云ひきかした程であつた。

然し悲しいことに、現實はむしろその正反對であつた。その頃ロバートから溢れてみた力は、衰へゆく肉體に最後に残された餘熱であり、燈火の最後のまたたきの如く果敢ないものであつた。彼のやさしい心は、時折り翳のやうに忍びよつてくる不安に脅えつつも、必死の力を振りしぼつて、忍耐深く愛する人々の前に凡てを祕めて、元氣に振舞つてみたのである。

## 第十九章 斜 陽

ヨアヒムへの手紙に「私の音樂は沈黙した」と書いたやうに、一八五四年の二月に入るとシューマンは全く作曲をやめてしまつた。オランダ旅行の途中で再發した聴覺異状が、日に日に烈しくなつて、長年の間彼の心を慰めた樂音さへ、今は反對に彼の神経を拷問の如く悩ますのであつた。彼は音樂を忘れ、音樂から逃れる爲に、長らくはなれてみた蔵書に興味を集中しようと試みた。大詩人達が音樂について述べた言葉を、一卷の本に纏めたい計畫を、昔から持つてみたので、クララに送り迎へをして貰ひながら、圖書館通ひを始めたのもこの頃であつた。

クララは己の凡ての時間を家事と、夫の看病に捧げたのであつたが、ロバートの容體は日毎に、新しい不安を増すのみであつた。彼の感受性は益々病的に敏感になり、些細な精神的努力も彼の身心を極度に疲勞させるのであつた。二月十日の夜は一睡も出來ず、一晚中一定の高さの音符が頭の中で鳴り響いてゐて、どうしてもそれから逃れ去ることが出來なかつた。そしてその音は三日後になつても、午前中に二時間の間止つただけで、同じ状態をつづけてみた。かうして神経の安まる時がないので、ロバートは目に見えて憔悴していつた。

「哀れなロバートはひどく苦しんでゐる、凡ての物音が音樂に聞えるらしい。未だ嘗つて此の世でできたことがないやうな豊かな色彩をもつた樂器編成による音樂が聽えるといふ。然し彼はその爲によけいに疲勞する。次の夜はもつとひどかつた。我々は殆んど眠らなかつた。……彼の聴覺は極度に鋭敏になり、一曲が始めから終わりまでフル・オーケストラで弾かれるやうに聞こえる上に、最後の和絃は彼が他の曲を思ひつくまで、耳の中でずつと鳴り響いてゐるのだ。……ああ、しかも誰も彼をやすらかにすることが出來ない」

とクララが嘆くやうに、彼を慰め導いた樂音は、今や彼を苦しめる悪魔の囁きと化した。クララは、ロバートの聴覺異状も、奇怪な幻想も、單なる強度の神経衰弱と信じこんでゐて、精神病の症状であるとは、夢にも疑はなかつたのである。彼の憂鬱症それまでもしばしば起こつてみたが、藝術家としての彼の健全さを害ふやうなことは嘗つて一度もなかつたのであつた。

「十七日、金曜。床に就いて間もなくロバートは主題を一つ書きつけた。天使が彼に歌つてきかせたと云う。書き終へると再び横になつて、一晚中何かを幻想しつづけてみた。目を大きく見開いて天の方を見上げながら、天使が彼の周りを飛びまはつて榮光に満ちた音樂を奏して呉れてゐると、固く信じてゐるのであつた。もうあと一年もたたぬうちに、我々二人も彼等天使と一緒にゐるのだ、我々を迎へに來たのだと云う。朝になると共に恐しい變化が起つた。天使の聲は悪魔の聲に變り、恐しい音樂の中で、彼を罪人だ、地獄に投げ込むと云つてゐると云ふ。夜中に彼は時折私に向つて、どうか側を離れていて呉れ、

そうでないと私を傷めるかもしれないと懇願する。彼の氣持を落ち着かせる爲に、數分間立ち去つて歸つてみると彼は再び氣が靜まつてゐるのであつた」

引き續き同じやうな状態が毎日續いて、ロバートは善と惡との生魂に憑きまとはれて、音樂ばかりでなく言葉まで聽くやうになつてゐたが、同時に頭腦は透明に澄み切つてゐて、もう生命も長くないからと云つて、驚くほどに美しい、平和な主題を持つた、心に深く觸れてくる變奏曲（遺作集中の第九嬰ホ長調）を作つたりした。二月二十六日には訪れて來たディートリッヒに、ピアノを弾いてきかせる程に、氣分がよささうに見えた。然し、

「彼はあまりに悦び興奮したので、汗が額から流れてゐた。晚餐の時にはよく食べたが、九時半頃になると突然立ち上がつて、着物を出せ、もう自分の精神を自制する力がないから、これから精神病院に行く」と云ひだした。そして持つてゆく必需品、時計、お金、帳面、ペン、シガー等をはつきりとした頭で揃へだした。私が『ロバート、貴方は妻や子供を残していらつしやるお積り？』と尋ねると、『長くはないよ、治つて直きに歸つてくる』と答へた」

醫者はどうすることも出來ず、ただ一刻も目を離さないやうに注意するのみであつた。忠實なディートリッヒとレーザー嬢は、影になり日向になつてクララの力になつたし、殊にレーザー嬢がよこしてくれた彼女の附添婦であるエリゼ・ユンゲという婦人は、クララと共に夜もやすまずロバートの世話を看てくれた。女中のベルタは責任を以つて家事を引き受け、年にしてはしつかり者のマリエは小さい胸を痛めながら、幼さい弟妹達を仲良く遊ばせたり、又、母に代つて、父の具合のよい折等は、父の寢臺の横にちつと坐つてゐるのであつた。マリエは長女でもあり、ロバートが最も愛した子供であつた。

「恐しい夜は明けた。ロバートは起きあがつたが、言葉では云へない程の憂鬱に沈んでゐた。彼は『ああクララ、私はお前の愛を受ける資格がない』と云つた。ああ私が最大のそして最も深い尊敬を捧げてやまないロバートが、そんなことを云ふのだ……反對して何を云つたところでしかたがない。彼は變奏曲（奇怪な複雑な主題による）を綺麗に淨書したが、それが終ると突然に立ちあがつて、溜息をつきながら寢室の方に行つた。私は醫者と用談する爲に、マリエに部屋にゐるやうに云ひつけて、一寸の間室をはづした。十日間の間に、彼を一人残して側を離れたのは、この時が最初であつた」

次に起つた出來事を目撃したのは、十三歳のマリエだけである。幼くはあつたが彼女の人生の最初の悲劇は、彼女の心にはつきりとその時、刻みつけられたのであつた。

母は醫者と話したく思つて私を招び、氣をつけて父の室に續く控室にゐるやうにと云つた。私がしばらくの間母の机の前に坐つてゐると、隣室との扉が開いて、長い緑色の部屋着を着た父が戸口に立つてゐた。父の顔色は蒼白であつた。父は私を見ると顔の前に手をあて、「おや！」と云つて、又部屋の中に入つてしまつた。私はまるで全身麻痺した如く、一寸の間坐つたままでゐたが、母が私をその部屋に居させた理由を思ひだしたので、父の部屋に入つてみた。部屋は空で、續く両親の寢室から庭園にむかつた正面の扉が、大きく開かれたままになつてゐた。

私は未だ醫者と話してゐた母の許に、駈けだしていつた。家捜しが行はれ、それから人々は外に父を捜しに出かけた。私は母にレーザーさんの處に報せに行けと、言付けられたので、外に出てみると、遠くから一群の人々が、何か騒ぎながら私の方に向つてくるのが見えた。近づいてくるとそれが父であることが解つた。

父は二人の男に擔がれてゐたが、両手で顔を蔽つてゐた。私はすつかり驚いて泣きながらレーザーさんの家に駈けだしていつた。私が話すとレーザーさんはユンゲさんに私と一緒に直ぐに行くやうに云ひ付けた。

家に歸つてみると、母は悲歎にくれ、興奮してゐた。母は歸つて來た父の姿を見たのであつた。醫者とレーザーさんが、母を慰め、醫者は、母にしばらくレーザーさんの家に行くやうに云つた。

とマリエ・シューマンは、子供心にうつつた、その場の恐しい光景を記述してゐる。此の事件の眞相は醫者の注意で、クララには告げられなかつた。彼女は妊娠六箇月の身晝な體

であつた上に、十日にあまる晝夜をついでの看護に身心ともに極度の過勞に陥いつてみたのであつた。クララに逢ふことによつて、折角少し落ち着いたロバートを刺戟することを恐れた醫者は、クララに逢はすことを承知しなかつたので、その日クララはレーザー嬢の家で過した。同じ家においてロバートを看護せずにおゐることなど、到底クララには堪へられないことであつた。彼女が事件の眞相をきいたのはずつと後のことである。

ロバートは雨の中を、帽子もかぶらず、ずぶ濡れになりながら、ライン河畔まで歩いて行き、ラインの橋を渡らうとした。橋守りが通行税を要求すると、彼は前に巻いてみた絹のハンカチを投げ與へて、橋の中央にむかつて小走りに駆けだしていつたが、そこから激流の中に身を躍らせたのである。凡ては瞬間の出來事で、丁度その近くに居あはせた小蒸汽の人々が、直に彼を救助したのであつた。岸邊に集つて來た人々は、投身者が彼等の指揮者シューマン博士であることを發見した。その日は丁度謝肉祭で、雨の日にも拘らず多くの假裝の群が、笑ひさざめきながらラインの河畔を、ねり歩いてゐたのであつた。綠色の部屋着をきて、髪を振り亂したシューマンの異様な風態も、その爲に人々の注意を惹かなかつたのである。クララは二年後のシューマンの死後、彼の指に結婚以來はめられてゐた、結婚の指輪が紛失してゐるのを發見した。クララは此の日の出來事について、シューマンの死後、子供達の爲に書き記してゐる。

結婚指輪が紛失してゐるのは、私の心をひどく苦しめた。彼がラインに身を投ぐる前に、私の一つになることを夢想しつつ、自ら指輪を川底に投げ入れたことと想像する。

愛する子供達よ、お前達が此の事實を疑はないやうに、私は眞相を記しておく、私がデュッセルドルフで彼と最後に會つたのは、二月二十六日であつた。彼は熱に浮かされた精神錯亂の状態で、ライン河に投身したが幸にも印刻救助された。その後私は彼の部屋の書類の中に、『愛するクララ、私は結婚指輪をラインに投じようと思ふ。お前もさうしてお呉れ、二人の指輪が一つになれるのだ』と記した紙片を發見した。その時私は書かれたことを別に問題にしなかつたのだが、エンデニッヒの病院から、彼の指に指輪を見たことがないと云つてきた時に、私は直にこのことを想ひ出した。そして今それが確證されたのです。

二月の末から三月にかけてのクララの日訂は、その頃の不安な彼女の心をそのまま傳へてくれる。

……二十七日。何んといふ恐い毎日を過してゐることであらう。彼には逢はないが、一時間ごとに容體の報告を受けてゐる。私がレーザーさんと一緒にゐると傳へると、彼は非常に安堵した様子であつたといふ。

……二十八日。彼は一日起きてみて、机にむかつて書きものをしてゐた由。醫者は二人の看護人をつけた。彼もそれを喜んでゐる様子である。彼は他人に對して常にやさしい。今日彼は變奏曲を美しく淨書して、レーザーさんに弾いて聴かせるやうにと傳言を添へて、届けてよこした。

……三月一日。すみれの花束とオレンジを彼に届けさせた。彼は朝大變に快くなつたと私に云つてよこしたが、その直後に又烈しい興奮状態に陥り、醫者から今後彼を知る者は一切近づかないやうにと嚴禁されてしまつた。彼は精神病院に是非送つて呉れるやうにと、醫者を説得してゐる。病院にゆけば全快出來るといふのである。ハーゼンクレーヴェル博士は、ボンから三十分程郊外のエンデニッヒの私立脳病院に、彼を伴ふと私に告げた。……彼が、あの榮光に満ちた私のロバートが、精神病院に、そんなことが堪へられようか？　そして、彼をもう一度胸に抱きしめることすら、許されないのだ……

衰れたロバートの此の苦しみの時に、自ら傍にあつて看病出來ないことは、クララにとつて死にたい程の物足りなさであつた。然し云ひつくし難い愛情でクララを愛してゐたロバートにとつても、己のみじめな姿を最愛のクララに見せることは、何よりも堪へ難いことであつたのである。かくも愛しあふ二人が逢ふことは、彼の精神を刺戟して、病勢を悪化さすことは必定であつた。

ロバートが病院に出發する三月四日は、春らしい陽翳の明るい日であつた。迎への馬車がくると、ロバートはあわてて衣服を着更へて、ハーゼンクレーヴェル博士等と其に馬車

に乗りこんだ。クララは別れを告げることも禁じられていたので、近所のレーザー一家でぼんやりと放心したやうに坐つてみた。あまりの悲しさと疲労に、彼女は涙も出ないのであつた。ロバートは住み馴れた家を立ち去るにあたつて、彼女のことに子供のことにも一言も觸れず、後を振りかへることすらしなかつた。子供達は、父の馬車が走り去るのを、二階の窓に集つて見送つてみた。ベルタは子供等に「父さまは、ほんのしばらくお出かけですよ」と云つてきかして見たが、さういふ彼女の眼は、押へきれない涙に濡れてみたので、子供等も小さい胸を痛めるのであつた。クララは溢るる想ひを花束に託して、ハーゼンクレーヴェル博士から夫にわたしてもらつた。

「彼は長い間氣がつかぬやうに、花束を手を持つてみたが、やがて花の香りをかいで、ハーゼンクレーヴェルの手を握つて微笑した。それから車の中にみた人達に、その花をわけ與へた。ハーゼンクレーヴェルは彼に貰つた分を、私の爲に持つて來た。血の流るるやうな思ひで、私はそれを受けたのである」

ロバートの發病の報に、直ちに伯林から駈けつけてくれたクララの實母のバルギール夫人がゐてくれることが、クララにとつて唯一の心頼りであつた。シューマン家の友人達は、ロバートの發病以來、クララの爲に獻身的につくして呉れた。よりどころのない悲哀に打ちひしがれてみたクララの前に、ハンノーバーから突然ブラームスが現れたことは、彼女にとつて大きな慰めと勵しを與へた。ブラームスは自らすすんで、主人が去つて男手のないシューマン家に同居して多忙なクララを助けたばかりでなく、シューマンが恢復した暁には、附添人の役を引き受けると申し出た。「彼の友情には心をうつものがある」と氣丈なクララも、若い友の純眞な友情に深く感謝してゐる。その夜はクララの氣持をまぎらす爲にディートリッヒとブラームスが訪れ、レーザー嬢も不自由な身をわざわざ運んで來た。

「親切なレーザーさんも來て呉れた。彼女については何んと云つたらよいであらうか。彼女の示して呉れた獻身的な友情！ 不幸な彼女が己を忘れて、私と共に悲しみ惱んでくれる。神は、與へ給うた最大の苦難の中で、これ等の友人を私に恵み給うた。ロバートを全治さす爲に、エリゼ（レーザー嬢の附添婦）も彼女の血の最後の一滴たりとも惜しまない程に、獻身的であてくれる」

翌日にはもう一人の友人が、急を聞いて夜行で駈けつけてきた。ヨアヒムである。

「懐しい人！ 私は何んなに感動したことか。午前中は最愛のロバートのことばかり話してみた。午後と夜は、決心して彼と音楽をすることにした」

數日後にはハンノーバーからオットー・グリムも見舞に來たし、十八日には伯林のパウル・メンデルスゾーン（フェリックスの弟）から「亡きフェリックスに代つて、お役に立つことが許されれば感謝にたへない、故人が私に命じるのです」との手紙に添へて、四〇〇ターラーの小切手が封入されて來た。此の手紙はクララの心を深く感動させ、彼女は本來ならば辭退するところであつたが、折角の好意を傷けることを恐れて、ひと先づ預かることにした。

クララは悲しみの中にも月曜日の朝から教授をはじめた。エンデニツヒからの報告は、よくなつたり悪かつたりした。病院には美しい廣い庭園があり、ロバートは部屋の窓から遠くのライン河とジーベンゲビルゲの遠景を倦かずに眺めてゐるとのことであつた。静かな自然に包まれた新しい環境の中で、ロバートは日が経るに従つて徐々にではあつたが、再び己をとり戻し、物ごとに興味を示し、音楽について尋ねたりするやうになつて來た、春が近づいて來たのでクララも彼女の健康を案ずる人々にすすめられて、時折、散歩に出かけるのであつたが、足はいつしか、日毎にロバートと歩いた散歩道に向つてしまふ。

「私はひとりで散歩した。彼と二人だけになりたかつたから。太陽は素晴しく輝いてゐた。彼も此の太陽を見てゐるかしら、そして私を想ひ出してはゐないかと、私はずつと思ひ迷つてみた。そして彼は私を感じるに違ひないと考へ、歩きながら涙をこぼしてみた」

四月三日にクララは美しい花束を、シューマンに届けさせたが、彼は何の興味も示さなかつた。クララや子供達がなくては、一日も幸福で有り得なかつたシューマンが、家族について一言の質問もしないことが、クララを苦しめ悲しませたのだつたが、彼女への思慕

の情を、つとめて心に秘めてあるであろうロバートの心情に思い到る時、堪へ難い程に、彼の氣持が哀れになつてくるのであつた。ロバートは最も心にちかしい想いは、人に語らず、ひそかに心に温めてゐるのを常に好んでゐた。

「主治醫から、私が送つた植木を彼が悦んで見てゐると報せてきた。頷き微笑したが、一言も口をきかなかつた由。ロバート！ 貴方のクララを思い出してもしないことがお出来になるの……昨日の朝は窓近くで鳴いた鶯の聲に大變に悦んだ由である」

と、クララの心は朝に夕に、エンデニッヒのロバートのもとを離れない。愛する夫の傍にあつて看病出来ないもどかしさは、二重の不安を彼女に與へ、その上に出産を間近に控へて、六人の子供等の養育の全責任と、家計の心配が彼女の上にかかつて來た。ロバートの病氣による支出は増す一方であつた。かうした事情にあるクララを慰めるものは、唯音樂、殊にロバートの音樂のみであり、ブラームスやディートリッヒは機會あるごとに、彼女を暗い物思ひから救ふ爲に、音樂に誘ひだし、多忙なヨアヒムさへ巡遊中の寸暇をさいて彼女を見舞ひにやつてくるのであつた。若い人達にすすめられて、暫くは音樂の中へ没入し、楽しむことが出来る。然しその美しい心にせまる音樂を書いた愛しい人を、ふと想ひ起す時に、彼女はより深い悲しみに襲はれて、涙にむせぶのであつた。然し、彼女の受難の日々は、ロバートの音樂を通じて彼の心に支へられて、生きぬいてゆけたといつてもよかつたのである。

四月二十五日には全快の見込みなしとの報告があり、長くかかつて必らず全快すると信じて疑はなかつたクララは、精も魂も盡き果てた如く落膽して、自室に閉じ籠つてしまつた。ブラームスに逢ふことさへ堪へ難い思ひで、懊惱してゐたことが日記からうかがへる。然し彼女は悲しみに打ちひしがれてばかりはゐなかつた。ロバート・シューマンの妻としての自尊心と、責任感を以つて、彼の名譽と幼い者を守りぬくことを、彼女は心ひそかに固く決心してゐたのである。さうした彼女の烈々たる意氣は、その頃の彼女の行動につつましくはあるが閃いてゐる。ケルンの指揮者になつてゐたヒルラーから、ケルンは都會としても大きく音樂も盛んなので、収入も多いから移轉してはとすすめてきた。クララは移轉によつて、世間がロバート・シューマンともあらう大作曲家が、妻子の生活の保證さへ出来なかつたと、誤解されるやうでもと考へて、拒絶したのであつた。又メンデルスゾーン以外の各方面から、贈られた見舞金は全部丁寧な感謝状と共に辭退してゐるし、ロバートの樂譜の出版元であつたライプチヒのヘルテル博士から、クララとシューマンの子供達の爲に音樂會を開催するとの報告を受けた時には、「無論私は断然拒絶した。私の爲の義損音樂會等は誰にもさせない。必要になれば自らやる決心である。然しこれ等の友情には感激させられるし、友情そのものが祝福であることは感じずにはゐられない」と日記に書いてゐる。

ロバート・シューマンの妻であるといふ誇りは、一生を通じて彼女の行動を規定する原動力となつてゐた。

ブラームスは残されたクララや、子供達の爲に最善をつくすことが、尊敬する巨匠への感謝を示す唯一の道であると考えたので、彼の愛情も心遣ひもそして興味も、シューマン夫人を幸福にする努力に集中された。敬愛してやまないシューマン夫妻の苦難を、共に身を以つて悩み苦しむことによつて、此の若い天才の心には、人生に對するより深い豊かな理解が生れ、それ等は又間接に彼の作品に影響を與へたのである。殊に日毎に接するクララの、稀にみる豊かな才能と、圓滿な女性の心の豊かさは、純眞な彼の心に女性に對する最初の信頼と憧憬の思ひを育まないではおかなかつた。シューマン夫人に對するブラームスの親愛の情は、やがて少年らしいほのかな戀心となり、それは日毎に成長して、遂には一日たりとも彼女を見ずに過すことが堪へ難いまでに烈しくなつていつた。

一方物心がつき初めて以來、身近く感じてゐたシューマンと離れて過すクララの心の隙間は、ブラームスを中心とする音樂に唯一の慰めを見出した。浪漫主義運動のルネサンスの榮光を、双肩に擔ふ青年の創作を、シューマンと共に楽しめないことが、クララには残念に思はれた。誰よりもシューマンがブラームスの發展を切望してゐることを、クララは

よく知つてゐた。嘗てロバートが「知性は誤ることがある。然し感性は偽らない」と書いたことがあつたが、ロバートはその稀にみる鋭敏な感性を以つて現在は單なる音樂的才能に恵まれた、奔放な夢想家に過ぎない青年ブラームスの中に、彼が一生の間營々として精進してきたものへの後嗣者となり得る素質を豫知したのであつた。

ブラームスの性格には、一種の内氣さと不屈な氣魄とが隣りあつてゐる結果、彼の行動には矛盾が多く、親友でさへ彼の眞意を理解し難い場合がある程で、非常に交りにくいところがある。然し、クララの女らしい感受性は、それ等の硬い殻の中に隠れてゐるブラームスの、純眞なやさしい心に直接に觸れることが出來た。

「彼は口數が少ない。尊敬するロバートへの私の惱みを、如何に彼が私と共に負つて呉れてゐるか、私は彼のまなざしから理解出来る。此の美しい彼の心が人に理解される折があらうか。或は一生の間理解されることなく過ぎるのではなからうか。私はそれを恐れる。然し愛するロバートが、彼を初対面で愛したやうに、彼を愛し理解する少數の人があることと思ふ」

このやうにブラームスの氣心を熟知してゐたクララでさへも、時には重荷に感ずる程の粗暴さと氣まぐれさを、ブラームスは持つてゐたらしい。ブラームスのピアノ演奏は缺點が多く、殊に速度の點は正確でなかつたので、三重奏の場合等他人がついてゆけぬことがあつた。クララは演奏に關する限りは用捨なく注意を與へたが、作曲に對しては彼の意志を尊重して沈黙を守つてゐた。レーザー嬢は盲人の敏感さを以つて、ブラームスの態度に「不遜さ」を感じて、クララの寛大さは間違つてゐると、しばしばお説教をするのであつた。レーザー嬢はクララがピアニストとしての自己の能力に、あまりに謙遜過ぎることと、彼女は激情的な藝術家に威壓されやすい弱點があるから、演奏家としての立場にはつきり立つて、僭越な若僧を黙らさねばいけないといふのである。

「或はレーザーさんが正しいかもしれない。然し彼の音樂に滿される時、彼の創造力を私は如何なるヴィルテュオジティーより上におかずにはゐられない。彼女は、私が必要以上に彼の前に己を小さくしてゐると責めるが、ブラームスは私の眞價を確實に知つてゐることと思ふ。私は藝術家は年齢の若さよりも、その人の能力で判断すべきだと考へる。ブラームスと共にある時、私は彼の若さを考へることなく、彼の天才に刺戟され教へられることを感じる。彼は驚くべき人物である。此のやうな最大な不幸な時に、天が私の精神を引きあげ、最愛の夫と共に尊敬し私の悲哀を共に感じて呉れる友を、與へ給うたことは感謝である」

或日ふとした事から、ブラームスが無一文でゐたことを知り、クララがそれとなく融通しようとする時、「無一文である時程、心氣が高揚する時はない」と云つて、彼は受けなかつた。ブラームスにはそんな潔癖なところがあつたのである。

出産の日が近づくと、クララの心は落ち着かなくなつた。六月十一日、悲しみの中に、ロバート・シューマンの末子が生れた。健やかな美しい男の子であつた。夫妻の前からの希望で、メンデルスゾーンに因んで名はフェリックスと決まつてゐたが、命名式はロバートの歸宅後といふことになつた。

「火曜には、私も起きられることと思ひます。午後四時頃にいらして下さいませんか。

愛するロバートの今日の消息は、非常に悲しいものでした。あまり危険でない軽い錯亂があつた由です。折角今まで落ち着いてゐましたのに。ともすれば望みもちやすい心にとつて、あまりに報はれない報せでございました。今私は全く苦しい日々を生きぬいてをります。此の可愛らしい幼子を見、愛する凡ての者から遠く離れて、病んでゐる此の子の大切な父を想ひ、此の子の存在すら未だ知ることもないことを思ひますと、私の心は悲しみと痛みに、破れるばかりでございます」

とクララは産褥から、ブラームスに書いてゐる。ブラームスは彼女を慰める爲に、シューマンのアルバム・ブレッターの中から主題をとつて變奏曲（作品四十九）を作り、産褥にゐるクララに捧げた。

「彼の主題による變奏曲を貴女に捧ぐ」と表紙に書かれてゐた。若いブラームスの眞心を

こめた此の贈り物に、クララは心が久しぶりに温く慰められるのを感じた。床をあげると間もなく、クララはヨアヒムと共に伯林に出かけた。三番目の娘ユリーを實母バルギール夫人に預ける爲である。クララは産後のことでもあり、引き續く心勞に、心身共に疲勞してゐたので、醫者の指圖でオステン島の海岸に三週間ばかり静養に出かけることになつたが、子供達から離れた一人旅では、クララの心は樂しまない。ブラームスも此の期間を利用して、黒森地方に放浪の旅にのぼつたのであるが、彼も亦寂寥に堪へかねて勿々にきりあげてしまつた。デュッセルドルフに歸つたブラームスは早速エンデニヒにシューマンの様子を見に出かけ、オステン島のクララに、様子をこと細かく書き送るのであつた。

「それからシューマン氏が花を眺め、庭園の奥深くに歩まれ、美しい遠景に消えてゆかれるのを眺めてをりました。黄昏の陽光が彼の周りに明るく映えてみました。此の折の感想を書くことは到底出来ません。強く顫へながら、呼びかけ、走り寄りたい思ひを、あらん限りの力でこらへてをりました。……醫師達は貴女を知らないのです。此の僕でさへ貴女を知る以前には、貴女方のやうな人間や御夫婦はただ最も美しい幻想の中のみ存在すると、考へてみたくらゐですから……」

此の頃のブラームスは「尊敬する奥様」といふ書きだして始まる手紙を、週に何通となくクララに書いて憧憬の心を僅に満してゐるのであつた。クララに對する彼の尊敬と思慕の中には、彼自身すら未だ自覺せぬ満されぬ愛情が、次第に育つてゐたのである。若い天才の高貴な魂は、尊敬するクララに對して夢にだにそのやうな愛情を抱くことを恐れて、ひたすら熱情を押へて音樂にむかふのであつた。自由に奔放に、はばかりことなく心を傾け得る音樂の世界に……

クララは結婚記念日の九月十二日の近づくのを恐れてゐた。彼等二人にとつて神聖な此の日を、ロバートが見過すとは到底信じられなかつたし、結婚以來別れて過すのは最初のことであつた。十二日の朝を迎へた彼女の心は重かつたが、エンデニヒの主治醫から、ロバートが彼女や子供達の様子を尋ねたので、如何なる反響があるか、短い便りを書くやうにと提案して來た。

「十四年前の今日、私はロバートと一緒になつた。別れて過すのは今日始めてであるが、私の魂は今日も彼と共にあつた。そして何んといふ悦びを今日はもたらしたのか……始め私には到底書けないと思はれた。六箇月の間云ふに云はれぬ程に、悩みぬいた心にとつて、それはあまりに苦しいことであつた。私は書いた、顫へながら……私の最初の手紙が、十三日に彼の手に届くといふ想ひは、私を幸福にして呉れる」

翌日の彼女の誕生日は、彼女が恐れてゐた程に惨めなものではなかつた。

「朝起きた時、私の心は重く沈んでゐた。然しそれは長くはなかつた。ブラームスが……私はあの人を息子のやうに愛してゐる……私の爲に贈り物を用意して呉れて、私の心は非常に動かされた。ロバートの五重奏を聯弾用に、そしてシュケルツオをピアノ曲に編曲して呉れたのである。その上にもう一つ大きな驚きが待つてゐた。マリエとエリゼが『東方の繪畫』からの四曲を立派に弾いたのである留守中にブラームスが教へこんだのだ。ああ彼が此の悦びを共にすることが出来たら……彼が私の手紙を受けとつたかどうか、思ひ迷つてゐた」

九月十五日の晝頃、主治醫ジヒアーズ博士の手跡の手紙が届いた。ブラームスが受け取つてクララの許に持つていつた。封を切る彼女の手はわなわなと顫へてゐたが、中から出て來た手紙に、シューマンの懐しいペンの跡を見ると、忽ち彼女の目から涙が溢れ出て、聲がつまつてしまつた。その時の有様についてブラームスは、親友のヨアヒムに

「『夫からですの』といつて、しばらく彼女は先が讀めませんでした。そしてその云ひつくし難い彼女の悦び！ 僕は『フィデリオ』のへ長調の終曲を想ひ浮べるのみだつた、と云ふより形容出来ない。それは人の心を深い悦ばしい畏懼の念に満すものでした」

と書いてゐる。彼女の日記には、

ロバートから手紙が來た。何んと云つたらよいであらうか……かうして書かうとする私の手はまだ額へてゐる。あまりに深い感動に暫くは讀めない程であつた。彼の懐しい筆跡、

凡ての言葉に満ちてゐる彼の高貴な精神、私や子供等のことをやさしく温く尋ねてゐる。私のピアノについても親切に語られてゐる。此のやうな手紙が頭の病人に書ける筈がないと、私は心に云ひつづけてゐた。

「お前に逢つて話すことが出来たら！ 私は色々な事が知りたい。お前が何んなに暮してゐるか、何處に住んでゐるか、今も昔のやうに素晴らしく演奏してゐるか。ああ、お前の美しいピアノをもう一度何んなに聴きたいことだらう」

こんな風に手紙は始まつてゐる。彼は再び私を求め始めた。きつと間もなく恢復するに違ひない。今日私はまるで何の不幸もなかつたやうに感じてゐる。彼の手紙のもたらした幸福の前に、過去の苦しみは消え去るのであつた。

シューマンは彼女と過した多くの楽しい旅の想ひ出、殊にスイスの旅や、輝しい成功を収めた一年前のオランダ旅行の想ひ出を記し、昔書いた手紙や、草稿などについて尋ねてゐる。又フェリックスの誕生については大變に喜んで、忘れ難き人（メンデルスゾーン）に因んで命名するやうにと、書いてきた。クララとブラームスはシューマンの手紙の寫しを作つて、ヨアヒムにも送つた。それに添へて

「望むことすら恐れてゐた悦びが、訪れてきました。けれどもそれは又堪へ難い程に苦しいことでもありました。心のありつたけを彼に注ぎ、彼のみが私の心も思ひも占めてゐることを告げたくも、彼への手紙では凡て自制せねばならず、私の心の大きな鼓動を隠さねばならないのです。今のところ私と逢ふことについては何も書いてありませんから、きつと醫師達が未だ反對してゐるのでせう。既に私が體驗し將來も私を待つてゐるであらう恐しい衝撃に堪へ得るやう、私は神に祈るばかりでございます。

懐しいヨアヒム、藝術家であることが何んなに素晴らしいことであるか、私も識つてゐる積りでしたが、此の頃になつて私も、哀しみも悦びも凡て、聖なる音樂に傾けて慰めを與へられることを、本當に悟るやうになりました」

九月になるとクララの蓄財は遂につき果てた。彼女の教授による収入と、デュッセルドルフの音樂協會が後任指揮者が決定するまで届けて呉れてゐるロバートの俸給では、家計の他にロバートの療養にかかる莫大な出費は、到底まかなへなかつた。當時シューマンの財産は五千ターラー程になつてゐたが、氣丈なクララは彼や、又子供等の將來を考へて、生活費の爲にそれに手を觸れる氣持にはなれなかつたので、彼女は演奏によつて一家の經濟を支へる覺悟を決めたのである。ロバートの病むエンデニッヒから遠く離れ、幼い子供達を他人の手にゆだねて、巡遊の旅に出ることは母として非常な犠牲ではあつたが、此の決心を彼女に強ひたもう一つの原因があつた。創造者としてのロバート・シューマンのよき伴侶となれなくなつた今、彼女は彼の音樂を世に擴める爲に、一身を捧げたいと考へたのである。

クララは先づ手はじめに想ひ出深いライプチヒのゲヴァンドハウスに、十月十九日に出演した。若い音樂院の學生達は松明をもつて彼女の宿舎にセレナーデをしに集つてきたことは、彼女にロバートとの若き日を想ひ起さしめて、ひそかな涙の種となつた。ワイマール、フランクフルト、ハンブルグ、ブレーメン、ブレスラウ、伯林と彼女は雄々しくもひとり旅を續けた。嘗つて美しい天才少女として謳はれたクララは、今やしつとりと落着いた三十五歳の女盛りの年頃となり、その氣品と豊かさに、人格の深みを加へて再び聴衆の前に現れたのである。演奏會向きな派手な曲目は凡て姿を消し、彼女はバッハ、ベートーヴェン、シューベルト、シューマン等をひつさげて、助演者もなく演奏會を開くことを恐れなかつた。リストは此の頃のクララについて、「音樂新報」の第六十一巻に次のやうに書いてゐる。

「天上の空氣を息づきつつ、涙もて地上につながれる、惱めるやさきき尼僧、嘗つてはミューズの神の相手となり、今は聖女の如き豫言者となつて、使命に強く生きてゐる。悲哀に溢れ、心に迫るそのまなざし、聖なる光りに彼女の眉は深く刻まれる」

此のリストの言葉は誇張に過ぎるとしても、深い悲哀の中にしづかに立ちあがつたクララを、印象的に捉へている。

## 第二十章 夕翳りつつ (一八五四年—一八五五年)

結婚以來十四年間、殆んどロバートと別れ住んだことがなかつたクララにとつて、ひとり旅は誠に侘びしく、ことに他郷の聴衆の前で日夜演奏してゐる彼女の勞苦を、ロバートが知ることもないと思ふ時、心はしめり勝ちになるのであつた。そんな時にエンデニツヒからの報告や、子供等の様子をまめまめしく書いてよこすブラームスの手紙は、何か明るいものを彼女の心にもたらすのであつた。二十一歳の青年には望めないやうな、やさしい心遣ひと愛情に溢れてゐるヨハネスの手紙は、此の時代のクララの唯一の光りであつた。

故郷のハンブルグでクララが演奏會を開くことになると、ブラームスもたまりかねて十一月七日に久しぶりに歸省した。彼は兩親に恩人の夫人を逢はせることに青年らしい喜びを感じてゐた。北歐の港町の貧しい住居に住んでゐたブラームスの兩親は、恰も天國から來た賓客を迎へるやうに、彼女を恭しく迎へるのであつた。ブラームスの母は父のヤコブよりも十七歳も年上で、既にかかなりの老婆であつたが、最愛のヨハネスを有名にして呉れたクララを、何んとかしてもてなしたいものと心をくゞくのであつた。

「彼の母は素晴らしい。彼女はその持てるものを、率直に快く表現する。騒々しさも饒舌もない。それが彼女を懐かしい人に思はせる」とクララが書いてゐるやうに、クララは此の素朴なブラームスの母に好意を感じた。「もし人間が何か云はなくてはならない、と感ずることをやめれば何んなによいであらう！ よい音樂を聴いた後にも、意味深き感想がなければ、沈黙してゐる方がずつとよい」と思ふクララは、此の家に来てみてヨハネスの稀にみる寡黙さが、始めて諒解されるのであつた。コントラバス奏者の父から、ヨハネスは頑健な體軀を譲り受け、青い眼と、美しいものを愛する心を母から受け嗣いだのであつた。

然しブラームスの母親としたしく逢つたクララは、如何に肉親の愛情に細やかに結ばれてゐたにしても、此の母と子の住む世界の間には、越え難い溝があることを感じた。

「その人の息子が、私にとつてこんなにもしたしくなつた老婦人と、別れを告げるのは悲しかつた。此の女が何時まで生きてゐるか、いつかは彼の母親としての役目が、自分に廻つてくるかもしれない、と思ひめぐらさずにはゐられなかつた」とクララは日記に書いてゐる。

クララはそれまで、ブラームスの母としての自分を考へてみたこともなかつた。彼は既に完成せる藝術家として、ロバートと彼女の人生に現れたのである。作曲家としてのブラームスは彼女の上に立つてゐた。ピアノの前に坐る時ですら、新しい作品の輪郭を大膽に奔放に彼が演奏する時、彼女は彼の天才の前に感嘆するのみであつた。然し今兩親の家にゐるブラームス、音樂を別としたヨハネスは單なる二十一歳の夢多き若者に過ぎず、彼女を自室に導いて、幼い頃の兵隊の玩具等を見せる彼の純眞なまなざしには、幼さが溢れてゐるのであつた。クララは突然ヨハネスに對して、幼い者に常に彼女を感じる母親らしい愛情が波うつてくるのを感じた。そしてヨハネスの肉親の母が彼に與へ得ないものを、彼女のみが彼に與へ得ることをひそかに悟つたのである。

クララがハンブルグを去るに臨んで、ヨハネスは今後手紙にはしたい Du を用ひて呼びかけて呉れと懇願した。「ヨハネスが頼んだので、私はそれを拒絶出来なかつた。私は彼を息子の如く衷心から愛してゐる」と彼女の日記にはしるされてゐる。ヨハネスの方は彼女に對する尊敬の心から、その後長い間「尊敬する奥様！」をやめなかつた。

その頃のブラームスの心はひたむきに、クララにむかつてゐた。クララは彼にとつて藝術の女神であり永遠の女性であつた。同年配の若い女性に要求出来ない、豊かな美しいものをクララからは受けることが出来たのである。若いヨハネスのロマンチックな心には、十四歳といふ年齢のひらきは何の障害にもならなかつた。事實、クララはシューマンの如き夫と幸福な家庭生活を持ち、絶えず藝術的刺戟を豊かに受け、健康でもあつたので、精神的な若さと水々しい情感を持ちつづけたばかりでなく、肉體的にもまだまだ若く美しか

った。十四歳といふ年齢の差は、母と子といふやうな關係で考へるには、少くともヨハネスの側では不自然であつたのである。

デュッセルドルフの子供達の許に長い巡遊の旅からクララが歸宅したのは、一八五四年の降誕祭の僅か二日前であつた。彼女の必死の努力は遂に實を結んで、彼女は嘗つて考へられなかつた程の輝かしいカムバックを獨逸樂壇にした上に、經濟的にも相當な収穫を得て、愛する子供等の健やかな笑顔に迎へられることが出来た。子供等と寂しく迎へる最初の降誕祭を想つて、クララの胸はとうから痛んでゐたのであつたが、久々に歸宅する彼女を幸福にしたのは、ロバートの病状のよい報せで、彼女はヨハネスとヨアヒムの二人から、伯林滞在中にロバートの手紙を封入した便りを受けとつてゐた。殊に尊敬するロバートから始めて貰ひ、ブラームスが感動した手紙は、ロバートの頭腦が再び明晰に澄み切つて、健康が恢復したことを、何處からみても感じさせる手紙であつた。

クララは、降誕祭にロバートに逢ひたいものと考へてゐたが、主治醫は彼女の切なる望みを拒絶したばかりか、祝日の数日を附添人としてロバートを慰めようといふ、ヨハネスの計畫まで退けられた。ヨアヒムは降誕祭の夜病院を訪れて、ロバートと逢ふことを幸ひにも許された。入院して十箇月、ヨアヒムはロバートと語り得た最初の人であつた。その折にヨアヒムが託されてきたヨハネス宛の手紙は、より希望に輝いてみえた。ロバートが此の手紙を、したい Du の形式で書いてゐたことは、クララの胸をうつものがあつた。

「先生が先日の御書簡にお使ひになりました美しい言葉 Du に對して感謝致します。それは私が、先生の御信頼をいただいてゐる大きな證據であります。私はそれに適はしき者になる爲に努力する決心です」

とブラームスはシューマンへの返事の中で云つてゐる。

一八五五年の一月元旦には、クララが「悲哀の子」とよんでゐたフェリックスが、ブラームスを教父として命名された、何時、父ロバートに抱かれる日が来るかと、もう笑つたりする此の子を見る度に彼女はひそかに涙を拭くのであつた。一月十一日にブラームスは、エンデニヒの頑固な醫師達を口説いて、やつとシューマンと會ふことが出来た。彼は新しいバラードと變奏曲を弾いて、ロバートを慰めた。二月二十三日にも再び出かけてゆき、こんどはゆつくりとロバートと語ることが出来た。演奏旅行に出かけてゐるクララに、ブラームスはその日のシューマンの様子を細かく報告してゐる。

今夜は多くのよい御報告があるので、何から始めてよいかわかりません。二時から六時まで貴女の愛する御主人のお側にゐたのです。僕の悦びに満ちた顔を御覧になれば、僕の手紙よりもよくお解りになるでせう。……それから貴女のお寫眞をお渡し致しました。ああ貴女があの方の深い感勵を御覧になつたら！ お眼には涙が溢れ、胸にひきよせられて「何んなに長い間、望んでゐたらう！」と云はれ、置かれる手も顫へてゐました。その後は絶えず寫眞を眺められ、時々は近づいてよく見る爲に、わざわざ席をお立ちになるのです。インキ壺や煙草は大變に喜ばれ、殊に煙草はヨアヒムの以來切れてゐた由です。醫者に自分から請求するのは好まぬと仰しやいました。

貴女にもつとお便りなさらぬかとお尋ねしますと、「紙さへあれば毎日でも喜んで」と云はれました。本當に書簡箋をお持ちでないのです。何ごとも醫者に頼むのを遠慮されてゐますし、醫者の方は、請求がないと行き届かないのです。書簡箋をお届けしましたら、今日は興奮してゐるから、明日書かうと云はれました。

それから私共は聯彈を致しました。「私は低音だよ」と仰しやつて、高音部は弾かれませんでした。あまりうまくゆきませんでした。随分長く聯彈さへなさらぬのでせう。ピアノはひどく調子が狂つてゐたので、調律を命じておきました。……

おいとましようとする、停車場までは是非送りたいと望まれましたので、外套をとりに行くと云つて、醫者にききにゆきますと、幸ひに許しを得ることが出来ました。附添人がずつと、我々のあとをついてきました。あの方と、あの尊い方と、長い間愉快に歩いた僕の歡喜を御想像下さい。時計を見ずに、まだまだ大丈夫ですとお答へしながら、ベートーヴェンの銅像のところまでゆき、又、エンデニヒの路までひきかへしました……エンデニヒの路でお別れた時には、僕を抱擁してやさしく接吻していただきました……ああ、僕は簡単に無味乾燥にしか書けません。素晴しかったこと、彼の美しい静かなまなざし、貴女のことを語られる折の温かさ、貴女の寫眞へのお喜びのの様子、それ等は到底僕には書けません。どうか御想像下さい。

クララは此處に譯出した三倍以上にもわたる、長いブラームスの手紙を、貪るやうに讀んだ。微かな希望の光りさへも、次第に色褪せてくる不安の中に生きるクララの心の中に、ヨハネスは次第に大きな位置を占めるやうになつてきた。「私は何んなにヨハネスを戀しく思つてゐることだらう。ヨアヒムも眞實な懐かしい友である。然しヨハネスは彼以上である」と、彼女はヨハネスに頼つてゐる自分を發見する。

僕は夢想し、心に想ひつづけます。僕が考へてゐるのは貴女方お二人と、御一緒に生活出来る輝かしい日のことです。その約束の土地につづくことを慰めに、現在は生きてゐるわけです。僕は貴女の愛する御主人に、貴女のことばかり書きたい。貴女が何んなに雄々しく立派に、哀しみに堪へておいでだか書きたい！ さうすれば、きつと彼の戀心が、燃ゆるやうな楽しい戀心が、彼の心の中に萌え出るでせう。

僕は目の前に貴女が彷彿と現れるのを、しばしば感じます。例へばハ長調の交響曲のアンダンテの顫音の樂句や、終曲の遁走曲になつてゐるところでは、貴女がまるで精靈のやうに……聖ツェチリアの幻想のやうに浮んでくる。……もし僕の中から優れたものが、生れ出るとすれば、貴女方お二人と、お二人の愛に感謝するばかりです。

僕はしばしば驚の如き翼が欲しいと思ひ、持つてゐるとさへ夢想する。それから音楽や書物に溺れて、飛ぶことすら忘れてしまふ……もし貴女を知らなかつたとしたら、僕は何んなに不幸だらう。……貴女は日毎に新しく、生命ある創作力といふものは書物にあるのではなく、己の心の中にあることを教へて呉れる。どうか永遠に僕の側にやさしい天使のやうにゐて下さい……さうすれば僕も成り得る程度の人間に、なることが出来ませう。此の混亂した手紙は、讀み返さぬことにします。どうかお許し下さい。そして、貴女のヨハネスに抱擁させて下さい。

愛するクララ、貴女のお便りのくる間が、何んなに待ち遠しく思へることせう。日毎に貴女を想ひ焦がれ、今日こそは来るものと信じ、来ないとみじめな氣持になります。僕が書くよもやまのことは貴女に想ひ到る時、遠いことのやうな氣がします。僕はただ僕の愛について語りたい！ 美しい挨拶だけ送りたい！ けれど僕には、それを言葉にすることが出来ないのです。だから僕の手紙を御覧になる時には、陰に隠されてゐる美しい表現を、想像して満足して下さい。僕は僕が書く愛を物語らない言葉の一つ一つを、悔います。貴女は日毎に愛の力の不思議さ、清淨さや犠牲の心を、はつきりと僕に教へて下さいます。ひとりある時に、稀に感情を一杯に意識することがありますが、言葉にしようとする、忽ち消え去つてしまひます。僕の心自身が直接貴女に書けるとよい！ 貴女への僕の愛はそれ程に深いことを、どうか信じて下さい。

クララ！ 愛するクララ、遂に今日はお手紙がきました。長い間待ち望んでゐたのです。僕は貴女の愛の中で、益々喜び平和です。日毎に前よりも貴女を戀ひ焦がれてゐますが、貴女への満されぬ渴望の中には歡喜さへあるのです。以前にもそんな風に感じたこともありますが、今のやうに強く感じたことはありません。

此等の息苦しいまでの手紙が示してゐるやうに、ヨハネスの當時の手紙は熱情に我を忘れ勝である。クララ・シューマンとヨハネス・ブラームスの關係については、既にあまりに多くのことが云はれ書かれ過ぎてゐる。シューマンやブラームスの音楽を愛し理解する者も、又彼等の音楽には路傍の人に過ぎない人々までが、一様に好奇心に満ちた疑問を投げかけてゐる。然しその答へをクララとブラームスは四十何年かの長い間、彼等二人がとりかはした何百通の手紙の中で、はつきりと率直に彼等自身の言葉で記録してゐる。一加へる一は二といふやうな、答へのみを要求する人達にとつて、その答へはあまりに浪漫的で物足りなく、何度讀んでも莫然としてゐるかもしれない。然しそれは二人の心が、此の世のものとも思はれない程に美しく純粹だからで、彼等に等しい純粹さと透明さを持つた人の心には、彼等の眞の姿が自ら鏡の如く明らかに映るのではないであらうか。

ブラームスは率直に誰に憚ることなく、クララに對する思慕の情を、戀と名づけてゐるが、二人の熱情に満ちた書簡を讀む時、彼等が十九世紀の浪漫主義時代の潮流の、ただ中に息づいてゐたこと、しかも二人とも多感な、表現力の旺盛な藝術家であつたことを記憶すべきである。彼等の言葉を現代の常識で判斷し、結論をひきだすことは危険である。ロ

ロバートの病氣が動機となり、たかまつた二人の愛情に、ロバートの病勢の悪化は火を燃やすやうな作用を與へた。かうした心の状態に二人の男女の心が置かれた場合、遅かれ早かれ一つの結末にまで、當事者の意志に拘りなく、押し流されてしまふのが世の常であらう。然し此の二人には結末は遂に訪れなかつたのである。彼等二人はお互の愛情と信頼が持つ調和と耐久力を、心ない感情の刺戟で傷けようとは思はなかつたし、ロバート・シューマンに對するクララの聖なる愛は、一瞬の不安な氣持さへ、彼女に許さなかつた程に、彼女の人格の中に根強い位置を占めてゐた。

ヨハネスも又そのことを誰よりも能く知つてゐた。彼は嘗つてクララに書いた、「滿されない思慕の中には甘い悦びがあります」と。クララとヨハネスの間の愛情が、世の常のものでないこと、純粹で美しい故に、人々の誹毀の對象となりやすいことは、彼等二人が誰よりも一番よく知つてゐた。聰明な母であるクララは、先づロバートの子供達を此の世の悲しい疑惑から守らねばならぬと考へた。一八五六年に、クララは己の死後、子供等に讀ませる意圖のもとに、日記の中に、子供達に彼女の思ひを訴へてゐる。

子供達よ。お前達の父はヨハネス・ブラームスを愛し、尊敬してゐた。彼は悲しみをわかつ親友として私の前に現れ、私の心が將に破れんとする時に、力づけて呉れた。私の心を明るく支へ、力の限り勵まして呉れた。短く云へば、彼は眞の意味での私の親友であつた。彼とヨアヒムはお前達の父が、病中に會つた唯二人の友人で、意識のはつきりとしてゐた間には、常に彼等の來訪を悦んで迎へた。子供達よ、私は嘗つて彼の如く愛した友は、他にないと云ふことが出来る。それは二つの魂の最も美しい調和である。私の愛したのは彼の若さではない。私の愛情には虚榮も諂ひもない。彼の精神の新鮮さ、驚くべき才能、高貴な魂を愛したのである。私は彼の美質を長い年月の間に識つた。彼は時に粗暴であり、人々は彼に壓迫感を感じる故に彼を好まない。ヨアヒムのみが卒直に彼に對する感嘆を表明する。ヨアヒムも又優れた藝術家だから理解出来るのである。彼等二人はお互ひに尊敬し、世に稀な美しい、友情に生きてゐる。

ヨアヒムもお前達が知つてゐるやうに、私の眞の友であつた。然しヨハネスの如く近くに住んでゐなかつたので、大切な時に私を支へて呉れたのはヨハネスだけであつた。愛する子供達よ。どうか此の事實を決して忘れないでほしい。そして彼の友情を感謝の心で大切にしてほしい。彼はお前達に對しても、必ずやよい友となるであらう。どうかこの事を信じてほしい。母の言葉を信じて、母の愛情を軽々しく誹謗し、我々の美しい關係を問題化しようとする、人々の嫉妬心に耳を傾けないで貰ひたい。彼等は到底理解も出來ず、又しようもしない路傍の人々なのである。

二年前の冬、ロバートと共に訪れて盛んな歓迎を受けたオランダに、一八五五年の一月にクララは重い心を抱いて、ただ一人巡遊に出かけた。ブラームスは途中までラインを下る汽船で送り、一旦別れたが、寂し氣なクララの様子が氣に懸り、數日後に突然ロッテルダムで再び彼女の前に現れ、やうやく安心して歸つていつた。その頃ロバートから届いた手紙に、一層暗い氣持に沈んでゐたクララは、彼のやさしい心遣ひを深く感謝した。

「私のクララ、何か恐ろしいことが待つてゐるやうに思はれる。お前や、子供達に再び逢へないとしたら何んと不幸なことであらう」

クララは、「私は此の手紙に心惹かれて、一晚中涙で過した」と日記に書き、ウトレヒトでの演奏會は、重い心で行はれた。「心が悲哀に裂けてゐる時、公衆の前で演奏するのは、信じ難い程に苦しい」とその夜の日記に見出される。クララは二月に一寸歸宅して近く又巡遊に出かけたが、ブラームスの作品中一般が理解しやすい速度のおそい曲を選んで曲目に加へた。「これ以上詩的で、情調の豊かな音樂はない。ロバートの音樂は常に耳に快く、内容も穩かであるが、ブラームスのは、しばしば唐突で烈しいので、巧みにもつてゆかないと聴き手の反感を買ふ恐れがある」とクララが云つてゐるやうに、ブラームスの音樂も、彼の性格と同様に、その荒々しい肌ざはりの故に、内心の豊かさ美しさに觸れずにすまされるが多かつた。音樂的教養の高いクララの友人達ですら、理解し得ないのをみては、一般の反響を望み難いとクララは思つてゐた。ジェニー・リンドの如き人さへも「誤れる傾向」を持つた作曲家の爲に、精力を浪費しないやうにと、忠告してくる有様であつた。此のジェニーの言葉は、したしい者に對する他人の冷淡に我慢出來ない性質のクララには、

ひどく不快に思はれ、永年の二人の友情の間に、一つの蟠りが出来てしまった。

ジェニーは五月にデュッセルドルフで行はれたライン音楽祭に、シューマンの「樂園と妖魔」を歌ったが、世界第一のプリマドンナとしての彼女の名聲は、非常な人気をよび、各地から大勢の人が列席した。その中にはリストもゐた。リストのクララに対する昔ながらの好意は、此の度も運悪くクララにとっては重荷になるやうな結果となつた。

音楽祭後にクララの家で音楽の集りが催された時に、クララはヨアヒムとロバートの二短調のヴァイオリン奏鳴曲でプログラムを始めた。リストがその後で「ゲノヴェヴァ」の序曲を、彼女と二つのピアノで弾くことを主張した。「それは恐ろしいもので、私は涙に救ひを求むるより他はなかった。何んと彼は亂暴にピアノをたたきつけたことか？……そして何んといふ速い速度で……その後リストはバッハの半音階的幻想曲を弾いたが、これもひどい演奏であつた。彼は音楽の歓びを、今日私から奪つてしまった。私はもつと透明な澄み切つた音を聴き度い切望にかられて、ロバートの『エチュード・サンフォニック』を弾き、豊かな靈感を受けることが出来た」

「妖魔」の上演は、彼女に深い感動をもたらした。

リンドは驚くばかりに詩的に歌つた。想像し得る限りの素晴らしい『妖魔』であつた。彼女の聲の色影を變化さす技巧には、如何なる魔法が、ひそんでゐるのであらう。ああ、もし、此の作品の創造者、ロバート！ 貴方がお聴きになることが出来たら……」

クララは賑やかな音楽祭に列席し、三年前のロバートが指揮をした音楽祭を想ひ起して、ひとり涙を拭くのであつた。

クララは追はれる者のやうに巡遊をつづけた。安心して旅が出来るのも、ブラームスがデュッセルドルフの家におゐて、留守宅を守つてゐて呉れたおかげであつた。彼はクララの弟子達の代稽古をつとめ、エンデニッヒの病院と連絡をとり、子供等のめんどうをみ、二十一歳の青年とは思へぬ忍耐力を持つて、蔭に日向にクララを助けることを、我が喜びとしてゐたのである。

オイゲニーは風邪を引いたのか、食欲がありません。赤い顔をしてよく眠ります。男の子達は元氣です。フェリックスも……角砂糖は澤山なくなりますが、アルファベットの勉強は一向にはかどりません。

先日の日曜日にはマリエとエリゼを連れて、ベルタを伴ひグラーフェンベルグに出かけて、お晝から夜の八時頃まで過しました。一同大變に陽氣で、駆けめぐつたり、繁みの中におけ入つたりしてはしやぎました。皆は寒いと云つてゐましたが、僕は帽子なしで暑く、時々草の上に身を投げだして、起きあがるのが出来ない程でした。素晴らしい上天氣で、陽は暖く沈んでゆきました。

昨夜はどうしたとお思ひになりますか、ルドウィックが僕の寢床で眠つたのです。彼を寢床に入れると、僕はよい夢を見るやうに貴女のお寫眞を見せました。僕の方は目覺めつつ夢見つつ、あまりよく眠りませんでした。おちびさんが朝早く目を覺したので、僕等は床の中で取つ組みあひをやりました。

子供等についてはよい御報告ばかりです。僕の觀察では、日一日と元氣に丈夫になつてゆきます。ハルトマン嬢から貰つた大きなお菓子の袋がとつてあるので、それを一つづつ貰ふために一日一生懸命です。三度勝てば一つお菓子が御褒美に貰へるのです。成功するまでに三十回も勝負をすることもあります。

二人の女の子達は、次の日曜日に自分達を招いて御馳走すると大喜びです。その理由は長い間、じゃが薯のサラダを食べなかつたからの由です。

以上の如きブラームスの手紙が、巡遊の旅の宿にひとりあるクララのしめりがちな心に、何んなに明るい光りを投げかけたか、想像にあまるものがある。音楽の季節が終つてクララはデュッセルドルフに歸るのを楽しみに待つてゐた。「お休みだ！ ヨハネスと理論の勉強を始めようと思ふ」と日記に書かれた頃には、ヨアヒムからも、「部屋を用意せよ」との手紙がヨハネスの許に舞ひこんで来た。クララは久しぶりで我が家で憩ひの時を持たうとしてゐた。然し彼女のささやかな望みも、エンデニッヒからの悲しい報告で、忽ち色褪せてしまふのであつた。

## 第二十一章 終焉（一八五六年）

病院からのよい報せを、今日は明日はと待ち兼ねてゐる生活には、堪へ難いものがあつた。ロバートが肉體的な苦痛に、精神的な懊惱と寂寥に苦しんでゐるのではないかといふ不安に驅られながら、逢ふことすら許されぬ状態に一年以上も甘んじてゐる苦しさ、クララは、自分の氣が狂はないのが不思議に思はれるのであつた。満されない思ひに落着かなくなつてくると、クララは追はれるやうに演奏旅行に出かけた、まるで旅行によつて悲哀が軽くでもされるやうに。然し結果はむしろ反對であつた。見知らぬ土地の旅の宿で彼女は行末を思つて、ひとり如何に涙を流したことであらう。一人旅の困難の中に荒々しく身を投げだすことによつて、自分も戦つてゐると考へることによつて、彼女は僅かの慰めを心に感じるのであつた。

かうした状態のうちに、五月七日ブラームスの二十二歳の誕生日が、シューマンの家でささやかに祝はれた。午後にはヨアヒムも訪れて來たので、若いブラームスの頬が幸福の絶頂にあるやうに輝いてゐるのを喜びつつも、クララの心にはその朝受けとつたロバートの手紙を蔽つてゐた暗い翳が、一日中悲しく燻つてゐたのであつた。

愛するクララ、私は五月一日にお前に春の便りをした。その後の日々は不安であつた。明後日届く手紙でもっと詳しくお前にもわかるであらう。その手紙には一つの翳がゆらめいてゐるが、その他はお前を悦ばすことと思ふ。

愛するひとよ、明日は我々のしたい友の誕生日であつたことを私は知らなかつた。手紙が楽譜と共に届くやうに、翼をつけてやりたい。

フェリックス・メンデルスゾーンの素描を同封した。アルバムに加へるとよい、貴い記念だから。さよなら、愛する者よ。

五月五日

ロバート

その翌日のエンデニツヒからの報告によれば、ロバートの病勢は急に悪化し、此の手紙はシューマンの絶筆となつてしまつた。何んとかしてクララの心を慰めたいと考へてゐたブラームスは、ライン河畔の徒歩旅行を提案した。クララは血氣盛りの若者とさうした旅が出来るかと危ぶんでゐたが、期待に心を踊らせてゐる若い友の眞心に對しても断り切れなくなつたので、七月二十二日のジェニー・リンドとのエムスの共同演奏會をすませてから、出發することにした。旅の間は音樂も他の心の煩ひも、一切忘れて自然美にひたる約束であつた。

曲目の選擇にあつて、ジェニーから「美を愛する人々が理解出来る單純な音樂を」と云つてきたので、クララは彼女がブラームスを暗に非難してゐることを感じ、此の音樂會は二人の仲を氣まづくする原因となつた。「自分の所信と矛盾しない範圍で、私は一般の要求に應じます」とクララは藝術家としての權利を保留してゐる。ライン地方の小都會エムスは、世紀の歌姫ジェニー・リンドを聴かんものと集まつた人々に溢れてゐた。街中の騒ぎの凡てがクララとは何の関係もないのであつた。二人はいつもの如く抱擁したのであつたが、お互ひに何か不自然なものを感じずにはゐられなかつた。ヨハネスは遂に現れなかつた。五月の音樂祭に「妖魔」を上演した際の、ブラームスの露骨な洒落が、ジェニーには氣に入らず、彼もそれを充分に承知してゐたのである。ブラームスは社交性に缺けてゐたので、人が禮儀をつくしたから、自分もつくさねばならぬ、といふやうなことには全く氣を遣はないのであつた。演奏會後、クララはベルタをお供にコブレンツに着き、ブラームスと落合つた。

ブラームスは二人の婦人の荷物まで引き受けて、大きなルックサックを背負つても平氣な顔をしてゐた。一行はストルツェンフェルスから出發して、七月の太陽をあびながら五日間の間ラインの谷を放浪した。或時は葡萄畑をぬけ、森の中をさまよひ、丘の上の古城を訪ひ、絶壁の上から青く流れる河を見下し、ライン河の左岸に右岸に呑氣な旅を續けて

ある間に、クララは此の旅を心から悦んで楽しんでゐる自分を發見した。彼女と共にあることに幸福を感じてゐるヨハネスを見るのが、彼女にとつても楽しかつたのであつた。

「彼と共にゐると、私も若くなる。私が時折にもの悲しい氣持になるので、それが彼を失望させた。自然美と旅の仲間を十分に喜びつつも、私は最愛の夫が孤獨で苦しんでゐることを思はずにはゐられなかつた」

とクララは日記に書いてゐる。クララは、所謂、青春時代の無責任な快活さ、といふものを味ふ折がなかつた。物心がつき初めて以來、彼女の生活には仕事と厳しい義務感がつきまどつてゐた。少女ピアニストとして早く大人の世界に入り、十五六歳の頃から非凡なる許婚者との戀愛に悩み、若くして妻となると共に、次から次へと生れる子供達と家の雑用、演奏會と教授、弱い夫の看護とあわただしい生活を續けてきた彼女は、三十五歳の生涯に於て、若さといふものを楽しんだ記憶がないやうな氣がするのであつた。輝かしい七月の太陽と、土の香りは彼女に青春を感じさせた。「山の麓でとりたての果實を食べて満足した。ヨハネスの眼が幸福に輝いてゐるのを見るだけで充分である」

華麗な客間では何か不自然なヨハネスも、大自然の中にある時は、力強く生々としてゐて頼もしかつた。荒々しく山を駈けあがり、木に登り、子供のやうにヨハネスははしやくのであつた。非常に似た點もあつたが、或點でヨハネスはロバートとは正反對であつた。貧困はヨハネスをリアリストに育て、鋼鐵の如き意志を與へた。音樂と詩心とリアリズムとそして感傷が、彼の性格の奥深くに秘められてゐたことは、僅かな人にしか感知出來ないのであつた。

又悲しい秋が訪れてきた。クララは四箇月も何の便りもないロバートに、「一言でもよいから書いて下さい」と、九月四日に手紙を書いたが、折り返し届いたのは、愛する夫の手紙ではなくて「全快の見込みなし」との主治醫の決定的な宣告であつた。

不安と焦噪のうちにも、冬のシーズンを控へて、何時全快するともわからぬ夫と、子供達の生活を守る爲に、クララは心に鞭うって巡遊に出る準備を始めた。今は仕事のみが唯一の慰めであつた。十月になるとブラームスも、ピアニストとして再び運を試みる決心を固めた。彼の作品の出版も反響がなく、心ひそかに希望してゐたシューマンの後任としてのデュッセルドルフの指揮者の地位もクウシュと決定してみれば、生活の爲にも安閑としてゐられないのであつた。ピアニストとしてのブラームスは、舞臺の上で彼の最高の技倆を發揮することがどうしても出來なかつた。生れつき演奏家ではなかつたのである。クララもヨアヒムも此の缺點を能く知つてはゐたが、ブラームスの爲に援助を惜しまず、先づダンチヒに於いて、二人の合同演奏會にブラームスを、賛助出演せしめることにした。その後、ブラームスは管絃樂の獨奏者として、ハンブルグ、ブレーメン等にベートーヴェンの第五協奏曲の演奏に出かけ、クララはヨアヒムと共同で演奏旅行を十二月末まで續けた。ベートーヴェンの作品一〇六の變口長調の奏鳴曲（ハムマークラヴィア）を、多くの人々の反對を押し切つて曲目に加へ、聴衆の支持を受けることに成功したことは、クララにとつて大きな満足であつた。此の難解な歴大な奏鳴曲は、公開の席で演奏されることは、それまでなかつたのである。

降誕祭の一週間前にクララは懐かしい子供等の許に歸つて來た。ブラームスもシューマンの子供等の降誕祭を賑やかにする爲に、大きな荷物を抱へこんでデュッセルドルフに歸つて來た。演奏會によつて自ら得た収入をもつて、ヨハネスは十一月の初め頃から故郷のハンブルグの街を歩いては、マリエに、ユリーに、幼いフェリックスにと、それぞれに適はしい贈り物を買ふのを、心から楽しんでゐたのであつた。さうしたことに幸福を感じる彼自身が、實は一番大きな子供であつたのである。その頃の手紙に、

「僕は非常に可愛らしい兵隊の玩具を賣つてゐる飾り窓の前を、しばしば通ります。昨日はその店に入つてフェリックスに、輕業師の玩具を買つて、その兵隊をよく見ました。全く氣持のよい兵隊さんは貴女にもお氣に入るでせう。買ひたい氣持で一杯になりながら、僕は店を出ました。しかし考へなほして今日は兵隊の玩具一組を買つて、大喜びをしてみます。降誕祭には僕の部隊全員を美しく並べてお目にかけます」

大きいお兄さんのやうなブラームスを迎へて、シューマンの子供達は淋しい中にも楽しい降誕祭を祝ふことが出来た。上の二人の娘達は父のみない二年の間に、目立つて豊かに成長してゐた。楽しい休暇のあとには又長い母と子の別れが待つてゐた。悲しかった一八五五年の除夜の鐘を待つ間もなくクララは彼女と夫を最も魅惑した都、維也納とブダペスト地方の巡遊に出發しなければならなかつた。

嘗つてロバートに背をむけた維也納の苦々しい記憶は未だ彼女の心に疼いてはゐたが、此の二年間の演奏生活はクララに新しい自信と力を與へて、敢て彼地に乗り込んでゆく氣持にさせたのである。彼女が最後に訪れて以來、九年の星霜は、維也納の音樂的潮流に一大變化を與へてゐた。ベートーヴェンの音樂は彼等のものとなり、浪漫派の音樂は受入れられるばかりか愛せられるやうになつてゐたことを、クララは發見した。ロバート・シューマンの音樂は最早不可解な退屈極まるものではなくて、彼の音樂の獨特な繊麗な美は遂に人々の心深く滲みこんでゆくことが出来たのである。それはクララにとって夢のやうな魔法のやうな不思議さであつた。維也納はロバート・シューマンの妻を歓呼して迎へ、彼女の優美な魅力ある人柄と、その眞摯な音樂への熱情に拍手と聲援を借しまなかつた。

九年前の訪問に於ても、クララは演奏家としての尊敬を受けた。然しそれは古典音樂の演奏家としてであつた。九年後の彼女の演奏が聽衆の熱狂的な支持を贏ち得たのは、彼女の演奏が進歩した爲か、ロバート・シューマンの音樂がクララ・シューマンによつて演奏される興味の爲か、決定するのは困難である。第一回の演奏會は十五回も舞臺に呼び出される程の歓迎を受け、引き續き五回の演奏會が催された。クララは恐るることなく挑戦的なプログラムを選んだ。例へばシューマンの「謝肉祭」の初演、ベートーヴェンの告別奏鳴曲、作品三一の二短調、作品一〇一のイ長調、そして作品一〇六のハムマークラヴィア奏鳴曲等が曲目に加へられた。此の二つのベートーヴェンの後期の奏鳴曲の演奏には、知的な解釋と集中した心遣ひが必要である。例へば作品一〇六の崇高なるアダデオの如く、涙さへなき深い悲哀に生れた音樂は、クララの心にたたへられた悲哀の中に、始めて静けさと救ひを見出したかの如く、彼女の演奏によつて甦へるのであつた。リストが云つた「惱めるやさしき尼僧」であつた當時のクララ、ロバートの音樂の理想に自らを燃やしつくす決心であつた彼女にとって、華美な貴婦人達の客間が、厭はしいものであつたことは當然であつた。

リストの友人でハンガリア人のバンクィー伯夫人邸の出來ごとをクララは日記に記してゐる。モツアルト音樂祭の爲にリストも維也納滞在中で、同席してゐた。

「せまい室内には客が溢れ、息苦しい程の暑さの中に、鯨の骨をいれた大きなスカートの流行衣裳を着て、髻をいれて頭の二倍程に大きな結髪をした貴婦人達が、温氣に溶けないやうに扇を動かしてゐた。そこで、私は弾かねばならないのであつた。このやうな人々には、私の美しい音樂は勿體ないと私はひそかに思った。私の曲目が場所柄に適當でないと思ふと、リストが尊大ぶつて『では何故リストの駄作をお弾きにならぬのです。丁度相當してをりませう』と云つた。私は『仰しやる通りでございますが私には出来ませんの』と靜かに答へた」

此の度の訪問でも、彼女は少女時代からの理解者であつた詩人のグリルパルツェルやロバートの歌劇「ゲノヴェヴァ」の原作者ヘッベルに逢つた。又その頃ブルグ劇場で「ケーチュヘン・フォン・ハイルブロン」を演じて人氣があつた若い女優マリア・ゼーバッハの演技には非常に感動し、マリアはクララの演奏會でシューマンのバラードを吟誦して、多大の感銘を與へた。維也納からハンガリアの首都を訪れたクララは、

「自然兒であるジプシー達の奏する音樂を聽き、彼等の目や筋肉が生々と動くのを見るのは、非常に感動的である。彼等の素晴らしい即興演奏の才能は、同時に常に他と協はせてゆく……。私はヨハネスを思はずにはゐられなかつた。彼は何んなに興味を持つたことであらう」

再び維也納、プラーグ、ライプチヒ、ハンノーバー等を巡遊して、三月に我家に歸宅したクララの心には、ブラームスの反對を押し切つてまでも英國への演奏旅行を試みる決心

が、既に出来あがつてゐた。倫敦のフィルハーモニー演奏會出演の招待と共に、スターンデール・ベネットから英國訪問を懇請して來たのは一月のことであつた。英國旅行は三箇月の留守を意味してゐた。マリエとエリゼの二人は、その年の春からライプチヒの學校に轉校してクララの友人プロイサー夫人の宅に寄宿してゐた。ブラームスもクララの旅行中にライプチヒを訪問して、シューマン支持者達から重大な提案を受けた。

重大なお話があります。度々御報告しなくてはと思ひ、一度は書いてみたのですが、貴女を必要以上に刺戟するかと思つて、破いてしまいました。どうか出来るだけ冷評に御考慮下さい。

實はライプチヒの貴女の御友人方が、貴女が愛する方の御療養費の爲に、苦しんで働いておいでになるのを、捨ててはおけぬと云つてゐるのです。ダヴィット、ヘルテル、グォイグト氏等が、是非毎年（昨年もこめて）御療養費に七—八〇〇グルデンづつ贈呈したいと希望してゐます。貴女への贈り物ではなく、尊敬する大藝術家への感謝であり、彼等の愛情の捧げ物なのです。

人々は此の計實を立派に禮を以つて果し得る方法を求めて、もう一年も前から討議してきたのですが、かうして年に七—八〇〇グルデン得られれば（拒絶はお出来になれません）生命の危険を冒してまで、英國旅行をなさる必要があるでせうか。ライプチヒの御友人と彼等の事情はよく御承知なので、どうか僕まで御意見をおきかせ下さい。何卒あまり興奮なさらないやうに。貴女のお役に立つかどうか、先づ問題なのです。英國旅行の成果と同じく、未だ課題中の試案として、御考察願ひます。

クララは四月八日、重い心を抱いてカレー行の汽車に乗つた。薄ら寒い雨の夜であつた。倫敦の日記は祖国への思慕の情で満されてゐる。倫敦でクララはロバートの病状について最悪の報知を受けとつた。経過は春になつて一路悪化してゐたので、ブラームスも、クララへの手紙に詳しい事は書けなかつた。ロバートはブラームスを見て、淡く微笑んだが、何か云ひたげに見えた口許は、もつれてしまふのであつた。その頃の彼は地圖を求めて、地名をアルファベット順に並べることに集中してゐた。

ブラームスの手紙は倫敦に於ける第一回演奏會の朝届き、彼の心遣ひにも拘らず、クララはその文面から最後の望みも失はれたといふ印象を受けた。その日一日彼女はピアノに觸れることすら出来ず「私は朝から夜まで、聲をだして泣いてゐた」と日記に記されてゐる。その夜彼女はベートーヴェンの協奏曲「皇帝」を弾きながら、彼女の心に最も近い人、人類の寶玉の如き存在であつた人が、精神分裂によつて將に死に直面しつつあることを知らずして、彼女の演奏に拍手喝采する聴衆達を、何か遠い別の世界のもののやうに感じずにはゐられなかつた。「私の毎日は涙にぬれてゐる」とも彼女は書いてゐる。

五月十六日に書かれた手紙から、ブラームスはクララをしたしい Du の形式でよびかけてゐて、此の手紙は異國にあるクララを想ふ、不安と切ない心情に溢れてゐる。彼はクララに契約半ばでも早く引きあげるやうにすすめ、誤解を避ける爲にクララの弟のバルギールを伴つて、自ら迎へにゆくまで提案してゐる。

愛するクララ、貴女を何んなに愛してゐるか、貴女の爲に愛情に満ちた行ひが何んなにしたいか、心をこめて書き現はせたらと思ひます。云ひつくし難い程に貴女を限りなく愛して、貴女に媚びる爲に、一日中戀人とも、何とでも倦きることなく呼びたい。こんな風に續いてゆくと、終ひには貴女を硝子張りの箱に入れるか黄金ぐるみにしてしまつておきたくなるでせう。

僕のクララ、貴女を慰められたらと熱望する他に、僕は何も望まない。どうしたらよいのか！ 貴女が悩んでいらつしやることは、實際消え失せてしまひたい程に堪へ難いことに思はれます。僕が何んな愛情で貴女をしばしば想つてゐるか、お感じになれば、きつと貴女も慰められるでせう。僕は貴女を僕のクララと云ひたい程、能ふ限り愛してゐます。何んと多くのものを貴女は私の心から奪つたのでせう。そして今もさうです。私達が逢ふ度に、貴女がより全體的に私を掴んでゆくことが、貴女の慰めになるやうに。

此の時代からブラームスの手紙は烈しい熱情を率直に示すやうになつた。一方、クララは黙々と悲劇を背負つて、責任を果してゐた。メンデルスゾーンのみを崇拜して、彼以外の新しい作曲家を顧みようとしない英國の聴衆は彼女にとって理解し難いものであつた。

ロバートがベネットに好意を持つてゐたのを知つてゐたので努力はしてみたが、クララは彼を音楽家として尊敬出来なかつた。朝の七時から夜の九時まで富裕な生徒を教へ、指揮の準備に楽譜を讀んだり、作曲をするのは、出稽古から出稽古への馬車の中でするといつた多忙な生活に堪へてゐるベネットは、典型的な當時の英國音楽家であつた。英國では音楽さへも、絹布や紅茶や砂糖と同じやうに、商品なのであつた。最小の労力で最大の利益をあげようといふのであつた。常に音楽第一に考へることに、一生馴らされてきたクララには、商業主義が音楽にまで及んでゐることは非常な驚きであり、嫌惡の種であつた。

シューマンの「妖魔」がベネットによつて上演され、ジェニー・リンドが主役を歌つた時、クララは獨逸の合唱協會の風習にならつて合唱團に加はつて共に歌つた。しかし、これは心のない聽衆の冷笑を買つたのみであつた。彼女の演奏中にヴィクトリア女王が席につかれたことがあつた。聽衆の視線は忽ち女王一身に集まり、女王の存在は聽衆の音楽に浸たる心の静けさを奪つてしまつた。オヴァーストーン夫人邸の夜會で彼女の演奏中、貴婦人達がひつきりなしに喋りつづけてゐたので、クララは突然演奏をやめ、驚いてゐる來客一同にむかつて、靜かに「皆様のお話中に演奏することは馴れてをりませんから」と云つた。

「私は膝に手をおいて音楽への完全な集中が行はれるまで弾かうとはしなかつた。他の音楽家達もこれを実行すれば、もつと尊敬されるやうになるであらう。私の場合は將にその通りであつた。翌日私は夫人から丁寧なお詫びの手紙を受け取つた」

三箇月の滞在の間にクララは、英國の地方都市で二十六回の演奏會を開いた。ヴィクトリア女王のお招きで御前演奏もし、彼女の英國人觀も次第に變化してきた。「最初英國人は冷淡で近づき難い。然し一度したしくなると、變ることがなく眞の友情に堪へることが出来る。私は多くの人々を好きになることが出来た」と英國を去る頃の日記にはしるされてゐる。

三箇月ぶりに七月二日に我家に歸つたクララは、夫の終焉がかくも近づいてゐることを、夢想だにしてゐなかつた。十四日にはボンに行き、主治醫のリピアーズ博士に面會した。「御主人は來年まではもちますまい」といふ運命そのものの如く冷たい彼の言葉は、電光の如く彼女の心に衝撃を與へた。死の天使が既に戸口にまで來てゐたのである。

二十三日にエンデニツヒから危篤の電報があり、クララはブラームスとエリゼ・ユングを伴つて、直に病院に駆けつけた。「ヨハネスが彼に逢つた。ヨハネスと醫者は私に彼と逢はぬやうにと懇願した。そのやうな衝撃の對象とならぬことが子供達に對する私の義務だと云ふのである」クララは説得されて一度歸宅したが、二十七日には再びエンデニツヒに戻り、二箇年半ぶりに死の床にある最愛の夫と相見たのであつた。何んなにあつて心をもつて、彼女は再會の日を待ち、夢見てゐたことであらう！ それがこのやうな状態において實現することを、如何に恐れてゐたことであらう！ ロバートは病に寢れ果て、昔の面影もない程に變つてゐた。

夕暮の五時から六時の間に、私は彼に逢つた。彼は私を見上げて微笑した。そして手足の自由が失はれてゐたので、非常な努力の後に私を抱擁して呉れた。私は永遠にそれを忘れない。私にとつて此の彼の抱擁は、世界中の寶にもかへられない。

ああ私のロバート！ 私は何んなに痛み多き努力を以つて、貴方の懐しい顔を眺めたでせう。何んといふ悲しい光景であつたでせう！ 二年半前に貴方は別れも告げず、私から連れ去られてしまつた。今私は貴方の足許に、息さへひそめて靜かに坐つてゐる。そして貴方の曇つてはゐるが、云ひつくし難い程にやさしい視線を、時折受けてゐる。彼の周圍にある凡ての物、最愛の夫の呼吸する空気までもが、私には神聖に思はれた。彼の魂は常に語り續けてゐるやうであつた。

彼は人が近くに長くゐると落ち着かぬ様子であつたが、彼の氣持を理解することは最早不可能に思はれた。ただ一度聴きたれた言葉は、「私の……」多分「クララ」と云ひたかつたのであらう。それから「わかるよ… Ich kenne」と云つた。

翌二十八日は時々許されて室内に入つたが、多くは窓の外から彼の様子を眺めて過した。手足が絶えず痙攣してゐて、時々烈しい叫び聲をあげた。何週間も前から彼は葡萄海とヂェリーしか採らなかつた。私が彼に與へると、彼は嬉しさに貪り飲んだ。そして私の指についた葡萄酒をしゃぶるので

あつた。ああ、彼は私だといふことを知つてゐたのである。

二十九日の火曜日に、彼はその長い苦惱から遂に解放された。午後四時に彼はおだやかに眠りについた。最後は誠に静であつた。眠る間に彼は召されたのである。私は死後三十分後に彼と逢つた。

彼の死顔は美しかつた。額は澄んでゐて弓形になつてゐた。熱烈に愛してゐた夫の遺骸の横に立つた私の心は不思議に静であつた。遂に彼の苦痛をのぞき給うた神への感謝に私の心は満されてゐた。彼の寝臺に膝まづいてゐる私の心は畏敬の念ひに満されるのであつた。まるで彼の聖なる靈魂が私の上を飛んでゐるかのやうに……ああ彼が私を伴つていつて呉れたら……

今日私は彼を最後に眺めた。そして彼の頭を花で飾つた。彼は私の愛情を彼と共に持ち去つていつた。

その翌日ロバートの遺品を整理すると、クララの手紙は彼女や子供達の手紙と共に纏められて、ピンク色のリボンでロバートの手で結ばれてあつた。書類は凡て整理され、パガニニの練習曲への伴奏が、美しく淨書されてゐた。

葬儀は三十一日の午後七時に行はれ、近くの墓地に埋葬されることとなつた。クララの希望によつてヨハネス、ヨアヒム、ヒルラー等、生前巨匠と極めてしたしかつた者達の手でしめやかに式が行はれた。

ヨハネス、ヨアヒム、ディートリッヒが柩の前に進み、月桂冠で飾られたつつましい柩は、デュッセルドルフのコンコルディア合唱團の人々の手によつて搬ばれた。

「埋葬の音楽が聴えた。彼の遺骸は埋葬される。私には、はつきりと、それは彼の肉體のみで、靈魂は私と共にあるといふ確信があつた。此の時程、ひとりで生き得る力を與へ給へと、神にひたむきに祈つたことはない。私の幸福は彼と共に去つた。新しい人生が既に始まつてゐる」

と、その夜の日記に記してゐる如く、クララは溢れる涙を拭いて雄々しくも悲しみの中に立ちあがる決心をしてゐるのであつた。

## 第二十二章 放浪の年（一八五七年—一八六二年）

夫の埋葬式の二三日後に、クララは子供達の爲に、彼等の父について書いてゐる。

お前達の愛する父について、何をこれ以上語り得ようか、ああお前達がもう少し成人してゐて彼を理解することが出来たら……そのみが残念である。彼は神の如き資質を持った、稀にみる人格であつた。如何に神の如き慈愛のうち人間を眺め、些の嫉みもない心で若い藝術家達に擁護の手を差しのべ、如何に私やお前達を愛してゐたことだらう。お前達は今や此の父を失つた。全獨逸は彼の死を哀悼してゐる。ボン市は彼に敬意を表する爲に、新しい墓地を擴張して捧げた。十年経てば其處は墓地の中心となり、五本の鈴懸の木が、美しい木蔭を作ることであらう。

墓地の傍にはささやかな禮拜堂がある。愛する者が埋葬される間、私はひとり其處で祈りつづけてゐた……その時突然、お前達の父が私に、お前達の爲に生きよ、と云つてゐるのが聴えるやうな氣がした。これが私を力づけた。彼の聲が心にのこつてゐる限り、彼の志をついで私はお前達の爲に生き、お前達を愛する。

此の時クララは未だ三十六歳であつた。彼女の手に残された七人の子供達、長女マリエは十五歳、此の世で父に逢ふことすら出来なかつた末子のフェリックスは、僅に二歳であつた。今や子供等の教育の責任も、家計の心配も、凡てがクララの双肩にかかつてくることになつた。

一時は達方に暮れてゐたクララは、健氣にもシューマンの遺産には手を觸れず、以後演奏によつて一家の生計をたててゆく決心を固めてゐた。マリエとエリゼは引き續きライブチヒのブロイサー夫人の許から學校へ、病弱な三女のユリーは伯林の祖母バルギール夫人にあづけられることになり、八歳のルドウィック、六歳のフェルディナンド、五歳のオイゲニー、それに赤ん坊のフェリックスの四人が、今は永達に父を迎へる事も出来ないデュッセルドルフの家に旅行勝ちな母と暮すことになつた。

「八月一日。デュッセルドルフに歸つた。父のない子供達、しかも樂しげな子供達に再び逢つた時の想ひは到底筆にはつくせない。私は何んなにマリエを戀しく思つたことか。長女、我々の最初の子供、彼女は常に父の寵兒であつた。母の心は長女の中に友を見出して慰められる……あの娘がもう少し成人してゐたら……」

とクララも認めてゐるやうに、もの靜かな長女のマリエは母の勞苦を早くから察して、幼いなりに若い母の相談相手となつた。そして心やさしいマリエは達はその母の爲に、弟妹の爲に、その一生を捧げたのであつた。

「一生を振り返つてみる時、私の少女時代はまるで光り輝いてゐる如く想ひ出される。兩親と共にある幸福、兩親にとつて我々子供達が、世の中で最も大切なものであるといふ自覺は、彼等の庇護に對して、安定感と確信を私に與へるのであつた。あの不幸な運命が我々の前に訪れた時、それは失はれて、昔の如くは二度と返つて來なかつた」

とマリエ・シューマンは書いてゐるが、シューマンが子供等の爲に自ら丹念に書き残した子供達への種々の心遣ひと、愛情の細やかさを思ふ時、彼の如き父を失ふことが、子供等にとって如何に最大な不幸か、しみじみと納得される。父への憶ひ出は、母の人格を通じて、シューマンの子供達の心深く温められて、彼等を常に支へたばかりでなく、母を理解し、すすんで母と協力する力となつたのであつた。

ロバートを失つた悲しみにともしれば沈んでゐるクララの健康を愁へて、ヨハネスは妹のエリゼを誘つて、クララと二人の男の子を初秋のスイスに靜養に伴つた。最愛の人から託された七人の子供を育て、シューマン家の誇りを守る爲に、今後何十年續くかわからぬ鬭争の人生に旅立つ前に、クララには身心共に靜かな憩ひが必要であつたのである。美しいスイスの自然も、今は亡き人との過ぎし旅の日の想ひ出をそそるばかりで、自然が美しいければ美しい程、心が痛むのをクララはどうすることも出来なかつた。此の旅行中に幼児から少年期に達しかけてゐる二人の男の子の爲に、どうしても男性の指導者が必要なことを痛感したクララは、歸宅後、上の二人の男の子をヘルヘンバッハの寄宿學校に入學させた。

その頃ワジレフスキーからシューマン傳を書きたいからと、援助を求めて來た。デュッセルドルフの管絃樂團の第一ヴァイオリンを弾いてゐた頃からワジレフスキーを快く思はず、信用出来なかつたクララは、彼の好意は謝したものの、故人の妻として積極的な援助は出来ないと斷つた。ワジレフスキーのシューマン傳は、その後ダヴィットの後援で完成した。ブラームスは此の傳記について次の如き感想をクララに告げてゐる。

「最初の考へ通り、僕は買はないつもりです。何の興味を惹くものもなく、一般讀者にとつてもきつとさうでせう。私の考へでは傳記といふものは、故人の眞の友人で心酔者が書くべきです。公平であることはよろしいが（實は誠に困難ながら）冷淡であつてはなりません。費女のロバートの傳記を書くことも讀むことも、萬人にとつて歡喜であるべき筈です」

ワジレフスキーの書きぶりが不満であつたクララは、その後シューマン傳の執筆をヨハネスに相談したが、「立派な傳記を書くためには、心と同時に文才も殘念ながら必要ですから、ヨアヒムにもむづかしいし、僕の協力などはお話になりません」と述べてゐる。

クララは悲しみの年の降誕祭を、ヨハネスと子供等と共に過し、一八五七年の最初の日と共に、想ひ出多いライプチヒのゲヴァンドハウスに、シューマン未亡人としての最初の舞臺を踏んだ。

「一八五七年一月一日、今夜生れて始めてモツアルトの二短調ピアノ協奏曲と、ベートーヴェンのエロイカ變奏曲を弾いた。非常に不安であつたが、聽衆が温く迎へてくれた時、彼等の心が私と共に悲しんで呉れるのを感じ、そのお禮に私の心の苦しみを語らねばならないやうな氣がした」

クララ・シューマンのその後四十年にわたる長い演奏家生活は、このやうにして始められたのである。毎年十月から翌年の五月頃まで、彼女は歐洲各地を、海を渡つて英國まで、倦むことなく巡遊した。夫シューマンの音樂に對するひたむきな熱情と、遺された者への

責任感が、シューマンの未亡人に對する世間の同情に支へられて、困難なひとり旅を彼女に勇敢に続けさせたのである。シューマンの音楽への一般の理解が深まることは、クララにとって何よりの慰安であり激励であつた。彼女のひたむきな努力と、眞摯な態度はいつか彼女をピアノ演奏界のユニークな存在として素晴らしい榮光に包ませることになつた。偉大なる大ピアニストが續出した十九世紀の後半の時代に、彼女が歐洲の演奏史に占めていた地位は、シューマンの未亡人としての一般の同情だけでは到底理解出来ない程に輝しいものであつた。ダルベール、ルビンシュタイン、ハンス・フォン・ビュロー、タウジツヒ等の絢爛たる技巧家群の中にまじつて、彼女の演奏は、つつましくもその独自の存在を主張し得る、馥郁たる香氣を持つてゐた。ピアノの前に坐つた彼女の優美な容姿は、浪漫主義音楽の化身の花の如き感じを費へた。

ヨアヒムは演奏會の収入にのみよる、彼女の生活の不安を案じて、定収入を得られる地位を彼女の爲にしばしば心配したり、積極的に彼女の演奏會にストックハウゼンと共に協力したりした。時には夏の休暇中の費用が、支へられない程逼迫した折もあつたが、クララは愛するロバートの音楽を擴める爲に、肉體の力の續く限り演奏家生活をやめようとはしなかつた。ロバートの作品を演奏することのみが彼女に生命力を與へたのである。演奏家生活を止めることは彼女の生命も亦終ることを意味することを、彼女は誰よりも知つてゐた。子供達は、父の意志をついで音楽に身を捧げる母、幼い彼等の爲に大きな翼を擴げて、世の荒波から守つて呉れる母に對して、恰も守り天使を憧れるやうな想ひで、旅行の寸暇を借んで彼等を抱擁する爲に歸つてくるのを待つてゐるのであつた。夏の數箇月は子供等が母を専有する時でもあり、クララにとつても楽しい憩ひの時であつた。レーザー嬢をはじめブラームス、グリム、ヨアヒム等もクララを慕つて彼女の近くに集つてくる。

一八五七年から五八年へのシーズンに彼女はババリアとスイスに巡遊することになり、當時ミュンヘンに住んでゐた幼な友達のエミリー・リストの家近くに宿をとつた。ところが寒氣と過勞の爲に激烈な神経痛とリウマチスが起つて、巡遊の豫定が狂つてしまふ程に悩まされた。その後一生を通じて、當にクララを苦しめたリウマチスの痛みは此の時に始まつたのである。十二月一日のヨアヒムの手紙には、

「ドレスデンとライプチヒの演奏會の御収入に手をおつけになつたことと思ひます。然し貴女はお忘れにならないでせうね、ヨハネスと私を最も頼りになる友だと、御自身で云はれたことを……貴女の聰明な御忠告に従つて貯蓄してゐる、私の少しばかりの貯金がお役にたてば、私はまるで子供のやうな喜びに満されます。貯金が友の役にたつならば、貴女のおかげによる私の貯蓄心にも効果がありませう。私は貴女に用立てていただく權利を持つてゐるのです」

と彼の心遣ひが示されてゐる。然し彼女の腕の苦痛も間もなく癒えて、スイスの巡遊は藝術的にも經濟的にも成功であつた。

その年の陽春四月に、クララは久しぶりにウィルヘルミネ・シュレーダー・デヴリアンに逢つた。彼女は既にすっかり老いて、力強かつた昔の輝しい聲も失はれてゐた。クララは、少女時代の憧れの的であつた此の大聲樂家の凋落を目のあたりに見て、心淋しかつたが、再び演奏界に返り咲きたいといふウィルヘルミネの決心をきいたので、大先輩である此の婦人を心から愛し尊敬する故に、思ひ切つて忠告の手紙を書いた。手紙を書きながらクララは、一生の間にこれ程骨が折れた手紙は書いたことがないやうな氣がするのであつた。

一八五九年一月二十八日 維也納  
愛し尊敬するウィルヘルミネ

これは、私にとって最も書きにくい手紙でございます。最愛のウィルヘルミネ、もしも御決心を變へてくださる氣持が、まだ残つていらつしやるならば、どうかさうして下さいませんか。不幸な經驗を招かうとしていらつしやるやうな氣がする私の氣持を、お信じいただけないでせうか。貴女のやうな偉大な高貴な藝術家に、そんなことが起つてよいものでせうか。嘗つて貴女は藝術の一つの理想として、近づき難い高いところに立つていらした。それをただ若い美しい聲のみに騒ぎまはる、浮氣な

群集の中に、何故降りてゆかうとなさるのでせう！ 貴女が全身全霊を傾けて歌はれても、彼等は何の注目も拂はないでせう。彼等の望むのは、ただ若い新鮮な聲だけなのですから。

何故そのかほりに、才能のある少女達を訓練なさつて、濁逸聲樂の秘訣をおさづけになりませんか？ 世界に眞のドラマチック・ソプラノのを贈ることがお出来になるのは、貴女だけでございます。そのことによつて貴女の前に新しい分野が開け、貴女のお名が門下の人達の中に生き續けることを、どうかお考へになつてみて下さい。

私の演奏會でお歌ひ下さるお志を、お受けしなかつたのは、こんな理由からでございます。貴女は一生を通じて私の偶像でいらつしやいました。貴女をお怒らせする危険を冒しても、私はさうした方法で貴女をお助けしたくはないのでございます。出来れば思ひとどまつていただくのが、私の義務だとさへ感じてゐるからでございます。けれども、當地でどうしても演奏會を遊すと仰しやるのでしたら、出来る限り御援助申しあげるつもりでございます。準備なり演奏なり、何んでも致します。最後に私が申し上げましたことの凡てが、貴女への最高の尊敬に他ならないことを、お信じいただき度く、顛へながら私はお返事を待つてをります。

クララの此の手紙に對して、ウィルヘルミネは何の返事もよこさなかつた。彼女は榮光に包まれた過去の幻影に憑かれてゐたのであらう。然しショパンを感動させワグナーに靈感を與へた此の偉大なるドラマチック・ソプラノの歌姫も、その二年後には此の世を去つてしまつた。巡遊の途中ドレスデンで彼女の墓參りをしたクララは、演奏家の生命の果敢なさを痛感して目頭があつくなるのであつた。

遠い昔、巴巴で未だ十二歳の少女であつたクララを、抱きかかへるやうにして温い手をさしのべてくれた彼女、ロバートとの今は夢のやうに思へる新婚の家を訪れて、ロバートの歌謡を歌つてくれた彼女、彼女の張りのある聲によつて歌に生命があたへられるのを、ロバートは何んなに喜んで聽いてゐたことか、あまりに寛大で派手な性格が、聲を失つた晩年の彼女を不幸にしたのであつた。

「シュレーダー・デヴリアンの死は、私をひどく動かした。彼女は力を使ひ果した後も、そのことを自覺することが出来なかつた。音樂に對して力一杯に能力を發揮出来なくなつたら、何んなに云ひつくし難い程に惨めなことであらう。

どうか年をとらないやうに……私には、その人の爲に早く老いたいと思ふ人が一人ある。それは彼（ロバート）である。彼の爲なら演奏生活の凡てを捨てても借しくない。然しその彼は、最早此の世にはゐないのである。人々はまだ子供があるではないかと云ふ。私は他の母親達にも敗けない程、私を地上につなぐこの絆に對して良心的であるけれど、それは彼等が成人するまでのこと、私の助力なく各自の生活を持つやうになるまでのことである。その時がくれば私は一人になつて老齡と向きあふことであらう。私には堪へられない！ 私は毎日の生活を美化する愛がほしい。それが失はれる時、私の生命とともに消失することであらう」

一八五七年と五九年の春には英國巡遊に旅立つた。その折の日記には、當時歐洲の樂壇に彗星の如く現れて、忽ち寵兒となつたルビンシュタインに對する感想が書かれてゐる。

「一八五七年六月十八日、ルビンシュタインが逢ひにきて呉れた。そして自作を澤山に弾いた。或物は才能の閃きがあつて興味が持てたが、彼の作品にも演奏にも優美さが缺けてゐる。彼が弾き始める時、その最初の音の荒々しいタッチで私は驚かされる。彼の前奏曲を私は好まない。非藝術的な六度や三度音程で、何の爲にピアノの上にな下に指が動いてゐるのかわけが解らない。然しテクニックは偉大である。ヨアヒムとヨハネスについて語りあつたが、ルビンシュタインは二人のことを『高德の名僧達』といふ。彼等が互ひにうまくあはぬことはよく理解出来る」

一八五八年と六〇年の冬のシーズンに、クララは維也納を訪問したが、此の頃から長期の旅行には學校を卒業したマリエを伴ふやうになつたので、不自由な旅も以前よりはるかに楽しいものになつてきた。歐洲の音樂の盛んな大都會で、クララを迎へないのは今は巴里をあますのみとなつた。十二歳と十九歳の折の苦い經驗を忘れず、クララの心は容易に巴里に向はなかつたのである。一八六二年に彼女は巴里のエラール・ピアノの社長夫人から懇切な招聘状を受けとつた。巴里でもシューマンの音樂が求められてゐること、準備は

凡て引き受けるといふ好条件であつたものの、クララの心は未だ不安であつた。然しヒルラーも熱心にすすめたので、決心して僅か一週間のうちに巴里に向つた。

クララは「自分でも巴里にゐるのが不思議でございます、貴方もお驚きでせう」と、ヨアヒム宛の手紙に書いてゐる。嘗つての苦しい馬車の旅を、彼女は思ひ起して感慨無量であつた。違つたのは馬車と汽車ではなかつた。彼女を迎へた巴里は、不滅の音詩人ロバート・シューマンに敬意を表する爲に、多くの音楽家達がすすんでクララの許に挨拶にくる程、様子が變つてゐたのである。

五月七日……午後九時巴里に安着、エラール夫人から出迎への人がきてゐて、用意されたホテルに案内された。

十日……ストックハウゼンが突然訪ねてくれたので、びっくりする。演奏効果ばかりねらつてゐる佛蘭西の音楽家の中で、彼がともかくも自分を守つてゐるのは、素晴しく又驚くべきことである。オペラコミックで一年働き、佛獨の混血兒であるのに、獨逸聲樂家であることを續けてゐる。

十八日……ロッシニが訪ねて來た。教養のある人物、大變に親切にして呉れた。音楽院で演奏することを依頼された。當地では非常な榮譽の由。

二十四日……ヴィアルドーと食事をした。ポーリンの子供達は、稀にみる才觸に恵まれてゐる。

二十五日……マリエを伴つてロッシニを訪問した、來客が多く居心地が悪かつた。ロッシニは衣囊からかぎ煙草や錠剤入れの小箱を絶えず交互にだしては、自分ばかりでなく、私の手にもおしつけて呉れるのであつた。その他の點では、世界的人物といふ感じがした。

クララは引き續いて四回の演奏會を開催して、ロバート・シューマンの音楽が期待以上に巴里でも識られてゐることを知つた。音楽院ではベートーヴェンの協奏曲「皇帝」を演奏して、嘗つて経験したことがなかつた程の、嵐の如き聲援にむくはれた。有名な音楽院の交響樂團についてにブラームスへの手紙に、次のやうに書いてゐる。

技巧上の見地から云へば、私の知る限りの完璧さを備へてゐますが、冷たい演奏です。演奏効果は計算され、時としては作品までが、平氣でその爲に犠牲にされてゐるのです。立派な主題を明暗の蔭も温みもなく演奏するかと思ふと、突然あまりに明確なアクセントをつけたりするので、聴衆は電氣に觸れたやうに驚かされます。然し此の管絃樂團程に美事なフォルティシモ、ディミニユエンド、クレッシェンド等は到底他ではきかれません。何んといふ完璧さでせう！

早い速度の樂章は、いつたいに少し早過ぎるそうです。ヴァイオリン全體がまるで一人で弾いてゐるやうな、技巧的な華麗さを發揮出来るためなのです。一方作曲家の眞の意圖は無視されてしまひます。一人一人の絃樂器の演奏音が、恰もただの四つの樂器の如く聽かれました。此のやうな管絃樂團に熱情が與へられた時に、何んなことが成就するか御想像下さいませ。巴里音楽院はまるで聖地のやうで、聴衆は寺院にゐるやうな絶對的な畏敬のうちに坐つてをります。

クララは一夕巴里の音楽家を招待して、ブラームスの作品を紹介したが、獨逸に於ても未だ支持者の少ない彼の音楽は、儀禮的な拍手を受けたのみで、反響を期待することは出来なかつた。

一八六〇年代に入ると、クララは毎年春のシーズンごとに倫敦を訪問するやうになつた。彼女の藝術は次第に英國人の心を捉へ、又彼女の方でも英國氣質を次第に理解するやうになつた。殊に常に四、五月の新緑の季節であつたので、英國の田園の豊かな自然は、彼女を楽しませたのである。

「四方八方に、一杯に枝を擴げた大木を、何時間も倦かず眺めながら、私は詩の世界を發見致します。それは本當に不思議な程の豊かさです。そして輝くばかりの新緑！ 何時間歩いてもこんな樹木が續いてゐる公園を考へて頂戴！ 一昨日はウィンザーの森に始めてゆきました。それからウィンザーのお城も。私にはうまく描寫出来なないけれど、貴方が御覽になつたら、きつとシェクスピアの世界を體驗なさるでせう。貴方なら一日中ゐても倦まない……お金がお入りになつたら、英國見物は如何ですか？」

と、クララがブラームスを誘つたのに對して、ブラームスからは、  
「今英國に行く氣持はありません。少くとも先づシュワビアのゲルマンの森林を探検し、それからティロール、スイス、伊太利、ギリシヤ、エジプト、印度を見てからのことです」と、ブラームスらしい返事をだしてゐる。

クララの毎年の倫敦訪問を、楽しいものにしたもう一つの理由は、ヨアヒムとストックハウゼンが殆んど、毎年同時期に英京に滞在してゐたからである。彼等はよく協同の音樂會を開催した。當時人氣の絶頂にあつたヨアヒムの多忙を愁へて、クララはヨハネスに、  
「前にもヨアヒムが成功してゐると書きましたが、大變な忙しさで、私のやうに家族を養ふ必要もないのに、働かされてゐるのは痛ましい氣が致します。あの人が何んな生活をしてゐるか、貴方には想像もつかないでせう。早朝から夜半まで、試演、演奏會、試演とこんな風にとめどもなく進んでゆくのです。私と音樂會でクロイツェル奏鳴曲を合奏してゐて、最後の弓をあてるや否や、もう次の試演の爲に飛んでゆきます。最後まで彼があることが出來た演奏會は一度もなく、演奏する、樂器を箱にをさめる、出發です。こんな状態で精神を新鮮に保つことが出來ませうか、心が濁つて物を感じる餘裕がなくなるでせう」  
音樂會から音樂會へと、あわただしい旅をつづけてゐるものの、クララの心には時々自分でもどうすることも出來ぬ重い憂愁が襲つてくることがあつた。ロバートのみない人生は生きがひがないやうに思はれて、生活の努力の凡てが、倦とましく厭はしく感じられてくるのである。こんな時に旅の宿で書かれた手紙に、暗い翳が寂しくただよつてゐるのを感じると、十四歳も年下のブラームスは、恰も兄が妹を叱るやうに彼女を激励するのであつた。

愛するクララ、貴女の憂鬱症が度を越さぬやう、あまり長びかぬやう。眞劍に考へ、努力しなくてははいけません。そのやうな感情の遊戯は、身心をともに烈しく破壊するものです。人生が貴女に價値がない等とは、どうか云はないで下さい。そのやうな氣分に身をまかせると、前には出來た人生の明るい方面を味ふ力が失はれてしまひます。天からの贈り物である「希望」は何の爲に人類に授けられたのでせうか！ どうか僕の書いたことを、輕々しくおとりにならないで下さい。非常に眞劍なのですから。憂鬱症に感溺することによつて、精神も肉體も墮落します。惡質のベストのやうに腐敗してしまひます。徹底的に克服する必要があります。

愛するクララ、貴女は眞劍に自分を變へなくてははいけない。一日一日をいつも喜んで落着いて平らな氣持で迎へなくてははいけません。激情は人間にとつて自然なものではないのです。歓喜の中にも靜に、苦惱の中にも靜にあることこそ、美しい人間らしいことです。愛するクララ、どうか御自分をひどい病人だと思つて、絶えず御自分の身の心配をなさい。僕の多辯を何卒お許し下さい。僕は思ひを整理して述べることを知らないし、又學ばなかつたのですから。

その頃ブラームスは毎年秋から冬のシーズンをデトモルドに宮廷指揮者として滞在し、春と夏はハンブルグの兩親の家と郊外のロージングハウスで過し、此の三個所で作曲に精進してゐた。その頃完成した二短調のピアノ協奏曲は、一八五八年の三月ハンノーバーでヨアヒムの指揮で試演されたので、此の時はクララも出席して、若い作曲家の將來を祝福した。然し翌年の二月のライプチヒの初演は完全な失敗に終つてしまつた。メンデルスゾーン的な音調の透明さと優雅さに馴れた此の土地の聴衆は、野心的な此の作品を全然理解することが出來なかつたのである。

「愛するヨハネス、協奏曲の不幸な失敗のお報せをいただいて、早速お便りし、やさしい言葉でお慰めしたかつたのですが、きつと貴方は、私の感情を害する短い返事を書くだけだらうと思つて、恐くなつてしまつた、といふ譯なのです。この氣持にうち克つには長い間かかりました。

人氣が悪いことは、作品の高度な藝術的價値を奪ふものではないけれど、藝術家らしい貴方の温い心に、冷酷な息吹きがかけられたと考へるのは本當に悲しうございます。人々の好意ある歓迎を快く思はない程に、超越した人間は誰一人としてゐないのですもの。私が貴方でしたら、自分の作品を聴かせる爲に指一本動かすことも、ライプチヒではやめてしまひます。今に大騒ぎをして貴方の作品を聴きたがる日がきつとくるでせう。貴方の地

圖からライブチヒを抹殺しておしまひなさい。その程度の自尊心は持たねばならぬし、又持つておいでせう」

とクララはヨハネスを激勵してゐる。内氣なブラームスには、ライブチヒを忘れることは、何んでもないことであつた。むしろあらゆる機會を掴んで、世間に彼を紹介しようとしてゐるクララの好意さへ、不快に感じて不平を云ひたくなる程に、彼は自作に関する限りは消極的であつた。

「願ひがあります。それは貴女の熱情を通じて、私の作品へ世間の好意を起させる試みを、よしていただきたいことです。貴女は御自分の愛する人の才能を、あまりに早急に、熱烈に人々に認めさせようと渴望なさいます。藝術の世界は共和國です。これを貴女の標語にして下さい」

ブラームスの此の手紙にクララは直に反對した。

「私が貴方について云ふのは、決して盲目的な熱情ではありません。貴方の作品の或ものには共感が持てず、頭から反對したこともあつたではありませんか。盲目的な熱情がそんなことをするでせうか……私の感情をもう少し高貴に解釋してほしいものですね。私の熱情について貴方の書くものを讀む人は、友人を神の如く崇拝するヒステリックな變人と思ふでせう。

愛するヨハネス、貴方は貴方のことを他人に語つてゐる私の言葉や様子をきいたことも、見たこともないのでせう。私は決して誇張は致しません。貴方の天才の豊かさに強くうたれることも、天が最高の賜物を注ぎ給うた人だと信ずることも、素晴らしい作品の故に貴方を尊敬してゐることも、凡て眞實です。愛するヨハネス、どうか冷たい哲學的な思索で、私の氣持を殺す努力はよして下さいな。貴方の非難は嘗つてなかつた程に、私を苦しめました。何故と云へば、正當ではないのですもの。こんなことは貴方に黙つてゐるべきなのでせうが、私の心は溢れてをります」

ヨハネスは心の中ではクララの好意を深く感謝し、又クララの意見を誰の批評よりも氣にしてゐたのであつた。

「僕の作品について長い手紙を下さい。汚い音調のところ、退屈なところ、片跛な藝術性、感情の冷たさ等について、どうか澤山書いて下さい」

一八六〇年九月十一日の此の手紙にあるやうな依頼は、彼の書簡の隨所に見出される。一生の間、新しい作品が出来るごとに、先づ草稿をクララに送り、彼女の意見に従つて手を加へるといふ風であつた。殊にピアノ曲は、彼女の實際演奏による批判をきくことによつて、作品をずつとピアニスティックにすることが出来たのである。ロバートもヨハネスと同じやうに、世間の理解に對しては淡々としてゐたことを、クララは憶ひ出すのであつた。然し、内氣なロバートのことであつたから、自ら積極的に作品を宣傳するやうなことは決してなかつたが、クララが作品に感激したり、又人々から讚美されたりすると、彼は幼兒のやうな純眞さで、つつましく素直に喜ぶのであつた。その點でブラームスはかなり違つてゐた。クララの鋭い感受性を信じて、未だ推敲中の作品さへ送つてくる程、彼女の意見を尊重しながらも、彼女が折あるごとに演奏し、熱情を以つて世に紹介しようとしてゐる努力を見ると、彼は單純に感謝するより、むしろ重荷に感じるのであつた。

クララは新しい作品にのぞむ時、作者の詩想の純粹な結晶であることを先づ期待した。ヨハネスの場合は、平素は祕められてゐる彼の本質の、最も美しいものの凝結した姿を發見することを欲した。だから如何に作品としての様式が立派で、知的な要素が備はつてゐても、それが十分に認め難い時には、反射的に彼女は不満を直観するのであつた、此の稀なる鋭い感受性は生れつき天より與へられてゐた才能で、これが彼女を一代の名演奏家に育くみ、ロバート・シューマンを發見し、ヨハネス・ブラームスを育て、藝術的にも又私生活に於ても彼女の全生涯を決定したのであつた。そして此の天賦の才能はロバートとの生活のうちに、より純粹に高いものに磨きあげられたものと思はれる。ブラームスはそれを能く知つてゐた。そしてクララに「ブラームス風ではない」と云はれることは如何なる批評家の酷評よりもつらかつたのである。彼は作曲家として名をなした後も、殆んど凡て

の作品の草稿をクララの許に送り、彼女の承認を得て、始めて彼は自信を以つて作品を世に送る決心がついたらしい。ブラームスは曾つてウィドマンに云つたことがあつた。

「何か書いた時、例へばシューマン夫人の如き女性に、その作品を楽しんで讀んで貰へるかどうか、先づ考へてみるとよい。疑はしいと思ふやうだつたら、その作品は抹殺したまへ」

一八五五年の頃、當時未だ青年ピアニストであつたハンス・フォン・ビューローが、演奏會を開きたいものと奔走してゐると、ヨアヒムとクララ・シューマン夫人の合同演奏會の豫告を見出したので、自分の演奏會を斷念したことがあつた。機敏なフォン・ビューローは此の二人の協力の特別な意味を、直に悟つて師のリストの注目を喚起する報告をしたことがあつた。二人がバッハ、ベートーヴェン、シューマンの曲目で演奏會を開いたのを見て、フォン・ビューローは彼等のグループが、バッハ、ベートーヴェンの精神と傳統を嗣ぐ者であることを宣言したのだと、解釋したのであつた。これはフォン・ビューローが、嘗つてのリスト心酔者としての先輩ヨアヒムを、その時に見失つたことを示してゐる。ヨアヒムは個人的にはリストを尊敬してみたが、彼の音樂觀はワイマール派に對して、此の頃から完全に背を向けてしまつた。端的に云へば、ヨアヒムとブラームスが、シューマン未亡人を中心に團結すると共に、浪漫派音樂は二つの陣營にはつきりと分れたのである。

クララのリスト觀は、昔からいつも變らなかつた。クララから見れば、リストのピアノ作品、交響作品の凡てが、彼女の最愛の夫が苦心の末に、音樂の理想として意圖し、創造し、守り、戦ひとつたものへの挑戦であり、否定である如く思はれるのであつた。クララは性格的にリストと反撥するものを持つてゐたやうである。こんなわけで、クララはワイマール訪問を次第に避けるやうになり、此の二つの陣營は、恰も二つの政治黨派の如く互ひに好戦的で、始終緊張してゐた。ヨアヒムは、相方から互に味方の如く期待される苦しい立場を解決する爲に、リストの音樂に對する率直な意見を發表して、彼の旗印をはっきりとさせた。ワグナーはその當時は未だ亡命中であつたし、独自の道を歩んでゐたのであつたが、ワグナーの所謂「未來の音樂」は、世間からはワイマール派と考へられてゐた。

此の二つの陣營の間に燻つてゐた暗闘を明るみに出すことになつたのは、一八六〇年の有名な署名入りの宣言文である。此の宣言文はヨアヒム、ブラームス等が發起人となり、獨逸各地の音樂家の賛意と署名を求めて、發表準備中に、伯林の「エヒョー」誌が、どうして手に入れたものか二人の他にクリム、ショルツを加へて、四人の署名のみで發表してしまつた。結果は思ひがけない反響を喚び起して、非常な騒ぎとなり、ヨアヒムが恰も公然とリストに石を投げたやうな形になつてしまつた。

ヨアヒムもブラームスも共に偏見のない健全な音樂家であつたので、ワグナーの作品に對しては、相當の關心も尊敬も持ち、ヨアヒムはすすんで作品の指揮をしてゐた程であつた。ブラームスはワグナーに共感を持つといふことは、性格的に出来なかつたが、クララのやうに決定的な意見はついで吐かなかつた。或點ではクララのワグナー觀に同感しても、又同時にワグナーの非凡な才能を高く認めてゐたやうである。感受性が強く純粹であればある程、クララは潔癖過ぎると云つてよい程、音樂に關する限り妥協性が年と共に次第になくなっていった。彼女は憚ることなく、ワグナーを嫌惡する感情を友人達に示してゐる。一八七五年九月八日の日記には、

「今夜は『トリスタンとイゾルデ』を聴きに行つた。一生の間に聴いた最も厭はしい歌劇である。一夜中此の狂気の如き戀愛を見、且つ聴いてゐると、人間の禮節感が犯されるやうな氣がする。一般聽衆のみでなく、音樂家までが夢中になつてゐるのを見るのは悲しい經驗であつた。第二場では主役二人が、何もしないで寝たまま歌ひつづける。第三幕ではトリスタンの臨終に四十分もかかる。これを人々は劇的だと云ふ。彼等が白痴なのか、それとも私が白痴なのであらうか。物語の筋は馬鹿馬鹿しいもので、戀の葉で戀愛が始まる。こんな戀人達にどうして關心がもてるのであらう！ これは熱情ではなくて病的である」

クララのワグナー觀は、その後彼が「指輪」を完成した後も變らなかつた。「ラインの黄

金」の上演に際しては「私は沼の中を彷徨してゐるやうな気がした。舞臺の人物は一種の恍惚状態であまりに長く立ちつくしてゐるので、見てゐる方が疲れてしまふ」と書いてゐる。ワグナーの管絃樂の扱ひ方とその効果には、クララも充分に注目してゐたのであるが、彼女は本質的にワグナーとは別世界に住む藝術家であつた。スイスを巡遊中のクララが、一八五七年の早春にチューリッヒを訪れた時、同市に當時亡命中であつたワグナーは、シューマンへの昔の友誼を忘れず、彼女を訪問した。そしてクララはワグナーの希望に應じて、ロバートのエチュード・サンフォニックを曲目に加へたのであつたが、彼女は個人的にもワグナーの人物に、好感を感じる事が出来なかつたらしい。

演奏會から演奏會へと、あわただしい旅に暮れる年が重なるにつれて、ブラームスからクララに送られる手紙の内容も、次第に愛する若者の烈しい焦謀感が薄れてきて、落ち着いた友情に満ちた筆致が見られるやうになつた。クララにはロバート・シューマンの未亡人として、演奏家としての宿命があつたし、ブラームスも亦作曲家として歩むべき運命が待つてゐたのである。二人はいつか水のやうに澄んだ、静な友情の中に憩つてゐるお互ひを見出すやうになつた。かうした状態に、果して此の二人は愛情の重大な危期を経験して、到達したのであらうか。お互ひの間に戀愛と友情の問題について率直に意見の交換が行はれたものであらうか。もしさうであつたとしたならば、彼等はその證據の凡てを消滅してしまつたことになる。然し現存せる多くの書簡を通讀して受ける印象は、ブラームスはクララに對して積極的に愛情を求めるといふより、むしろクララへの切ない思慕の情を心にひそめつつ、一生を通じてスパルタ式の嚴肅な獨身生活を守り、ひたむきに藝術に精進することに悦びを見出してゐた如く思はれる。彼は自分の幸福を切望する以上に、尊敬するロバートとクララの愛情を守ることを考へたのではなからうか。

内氣なブラームスは、長い間心ひそかに期待してゐた、故郷ハンブルグのフィルハーモニーの指揮者の地位が、友人のストックハウゼンに奪はれた大きな失望の中で、クララに、「人々は我々を見捨て、我々が渺茫とした砂浜に孤獨で放浪するのを喜んでゐるのです、それなのに人間はお互ひの人生が結ばれ、織り交ぜられ、幸福になることを切望し、孤獨を恐れてゐるのです。刺戟に満ちた友人との交際、家庭の幸福、それに郷愁を覚えぬ人がありませうか」

と、一八六二年に書いてゐるが、彼は遂に此の家庭の幸福を我ものにする爲の努力はしなかつた。ブラームスの青年時代の生活ぶりには、孤獨で自由に運命のまにまに、勤勉に精進を續ける呑氣さと豊かさが感じられる。かうしたブラームスにも一八五八年の夏には、ロマンスらしいものが訪れた。静な大學街であるゲョッティンゲンに、その頃住んでゐたグリム夫妻が、クララを招待したので、クララはマリエ、エリゼ、ユリー、オイゲニーの四人の娘と赤ん坊のフェリックスを連れて七月末に到着した。クララは白地に黒の花模様の衣装を着て、生々として美しかつた。豊かに成長し、花の蕾の如き美しい娘達に取り圍まれた三十九歳のクララは、彼等の母親とは思へぬ程に若さが溢れてゐた。

無論ヨアヒムもヨハネスも此の機會を逃さなかつた。ヨハネスは丁度出版の運びとなつてゐた「子供の爲の民謡集」をおみやげに訪れてきたが、忽ち若い娘達の仲間に引っぱりこまれて、青葉の美しい夏の庭園で鬼ごっこや、静な田園のピクニック、涼しい夜の音樂の集りが日毎に續いた。かうした生活の中でブラームスは、アガーテ・フォン・シーボルトといふ娘と知り合つた。アガーテは小柄なブルーネットで、教養のある快活さと詩的な感受性の持主であつた上に、新鮮な甘い澄んだ聲を持つてゐた。ヨハネスは自ら伴奏しつつ自作の歌謡を彼女に歌つて貰ふのを楽しんだり、いつのまにかマリエやエリゼをまいて、二人だけで散歩に出かけたりするやうになつた。夏も深くなるにつれて二人の仲は、ロマンスとして人々に囁やかれることが多くなり、最もブラームスをよく識つてゐるクララさへも、彼等に對する一般の見解を黙認してゐるやうに、人々には見えたのである。

やがて秋が訪れた。然し人々の期待は裏切られて、何事も起らないで終つたのである。ブラームスは例年の如くデトモルドに歸り、アガーテは夏の日の想ひ出を胸に秘めたまま、ブラームスの前から姿を消してしまつた。人々は、ブラームスに一家を持つ經濟力が無か

ったこと、ライブチヒに於けるピアノ協奏曲の失敗等を理由としてゐるが、ブラームスにとってアガーテが、何の程度に深い愛情の對象であつたか、それとも若き日の眞夏の夜の夢に過ぎなかつたか、知る者はおそらく當の二人とクララのみであらう。一八六〇年二月五日にクララは、アガーテについてブラームスに書いてゐる。

「カッセルでは哀しいございました。可哀想なアガーテやその他多くのことが頭を去りません。淋しいあのお嬢さんにお目にかかつて、あの方の悩みを共に味ひましたよ。愛するヨハネス、貴方があれまで深入りしなかつたら………グリム夫人、バルギール達と音樂會から歸つて行かれるのを見ましたが、私はあのお嬢さんの勇氣を讃へます。音樂を味ふことなど、きつと出来なかつたでせう」

〔アガーテ・フォン・シーボルト（1835-1909）は、有名なシーボルト家の一族の、ゲョッティンゲン大學の醫學部の教授の娘で、後に同地の醫者シュッテ博士と結婚して、四人の子女を儲けた。一九三〇年にアガーテの娘達の提供した資料によつて、ミヘルマンが編纂出版した「アガーテ・フォン・シーボルト傳」によつて、彼女とブラームスの關係が始めて世に公けにされた。それまでの多くのブラームス傳は凡て、此の點がはつきりと記述されてゐない。一九三三年にブライトコップ・ヘルテル社から出版されたエールマンの六百頁にわたるブラームスの研究書「ブラームスの道、作品、世界」には、此の邊の事情が明確に記されてゐる。〕

## 第二十三章 バーデン 光りの谷街十四號（一八六三年—一八七三年）

旅から旅に暮れる年が重なるにつれて、クララは各地の學校に寂しい生活をしてゐる子供等の爲に、最も都合のよい土地を選んで家を持つ必要をしみじみと考へるやうになつた。ロバートとの想ひ出懐かしいデュッセルドルフではあつたが何んといつても不便な土地であつたので、彼女は一八五七年の九月末に思ひきつて伯林に移轉することにした。伯林は獨逸の中心にあるので、巡遊の往復に彼女が我家に歸る機會も多くなり、子供等と家庭生活を楽しむに都合がよかつた。二人の男の子は寄宿學校にゐたので共に住めなかつたが、此の家は娘達と末子のフェリックスの家になり、十六歳のマリエは既に母に代つて家政をみることに、やうやく出来る年頃になつてゐたし、クララの友人のエリザベート・ウェルナーが、留守中には時々滞在して、子供達のめんどうをみて呉れるのであつた。

「一八五七年五月三十一日……貴女と子供等のことを何んなに想つてゐることでせう……子供達は どうしてをりますか、近況のお報せを待ち兼ねてをります。マリエとエリゼはまだポーツダム（フレデリック大王のサン・スーシー宮殿で有名）を知らないのです。貴女に一日連れてやつていただければ、何んなにか喜ぶことでせう。一日がかりでなくては いけません。午前七時十五分の初發で行き、歸りは午後十時伯林着です。その日一日はきつとお祖母さんが、フェリックスとオイゲニーのめんどうをみて呉れると思ひます。……それとも二人を芝居に連れて下さる方がおよろしければ、どうかさうなさつて下さい。あの娘達の氣晴らしになることを、何かしていただければ私は満足致します」と、こんな手紙をクララは家の宿から、何通となくエリザベート・ウェルナーに書いてゐる。

一八六二年の七月にマリエとユリーを伴つてバーデン・バーデンに静養に出かけた時に、毎夏ごとにその地に住んでゐるエリザベート・ウェルナーとポーリン・ヴィアルドーが、光りの谷街のはづれにある一軒の好ましい家をクララに見せて、彼女や子供達の健康の爲にも毎夏バーデンにくるやうにと熱心にすすめるのであつた。美しい樹木の多い庭と、その家の靜かな環境は一目でクララの氣に入つたので、彼女はその家を買ふ決心をした。毎冬のシーズンを巡遊に過して過勞になりがちな自分の爲にも、あまり頑健ともいへない子供等の爲にも、夏の憩ひの家は是非必要だと、彼女はもう長らく考へてゐたところであつた。

「今まで私は全くひどい生活をしてきた。毎年夏になると、何處へいつて静養したものかと迷つてゐた。我家と本當に呼べる家、のんびりとしたり、靜かに勉強したりする隠れ家のやうな家は、世界中何處にもなかつた。バーデンでは楽しい環境に恵まれ、同時に音

樂家達との交渉を持つことも出来る」

十九世紀の中頃に於けるバーデン・バーデンは全歐洲の最も有名な夏の避暑地の一つとして、全世界からの華やかな湯治客を集めてゐた。音樂家は演奏會を開く機會もあれば、外國の貴族社會の人々や米国の富豪の娘達に、教授をする機會にも恵まれてゐた。クララの買った家は、その主人のつましさにふさはしい素朴な家であつた。當時カールスルーエの歌劇場の指揮者であつたヘルマン・レヴィーは、或日クララに敬意を表しに立寄ることにした。木の間隠れに、白壁の百姓家風の小さな家が見える屋敷の前に馬車がとまつた時、レヴィーがシューマン家の七人の子供達のことを考へて、馭者に向つて「この家は十四號屋敷ではなからう。シューマン夫人の家に行くのだよ」と大きな聲で云つてゐるのを、シューマンの娘達は、垣根の中から聴いてゐて、ひどく面白がつた。彼等は此の新しい小さい別荘に「犬小屋」といふ名をつけて、喜んでゐたからである。

家は大きくはなかつたが、よく陽があたつて明るかつた。此の家で過した最初の夏は、一八六三年の五月からであつた。先づマリエとエリゼが二週間前の四月末に先發して、巡遊を終へた母が到着するまでに、家の内外を住みよく整へることになつた。マリエは既に二十一歳、エリゼは二十歳の娘になつてゐた。栗色の豊かな髪を清楚に巻いたマリエは聰明な感じがしたし、青い瞳で金髪であつた。

エリゼは美しい髪を三つ組に組んでぐるぐると頭に巻いてゐた。エリゼはよく肥つてゐて生れつき丈夫であつたが、マリエの方は母に似て、精神的な耐久力で働くといつた風であつた。

「やつと昨日當地に着きました。自然は今美しさと光彩に満ちてをります。私は露臺の扉にもたれて、達景に暗緑色の樅の森をひかへた、明るい新緑の鮮かさに感歎して眺め入ることがしばしばございます。ささやかな住居でも我家といふものを持つてみれば、色々の心配ごともありませうし、何事にも暗い半面があるのは當然でせうが、此の新宅は明るい面の方が多いやうでございます。

ユリーはまだニースに居りまして、咽喉の方が心配でございますが、他の子供達は此の家が大變に気に入り、皆元氣です。……夏の間にしつかり勉強させて、娘達の音樂にも大きな進歩をさせたく、此の夏は昨年よりも静かな落ち着いた生活を期待してをります」

これは五月五日に光りの谷街十四號から、クララがブラームスに書いた第一信である。

「六月十四日。光りの谷街十四號

愛するヨハネス、何んと素時らしいのでせう、今日はからず耳にしたのですが、維也納で就職なさつたのですつて？ 何んなに私も嬉しいか！ 早速書かずにはゐられません。非常に輝しい地位とは云へなくても最初の一步ですし、もつとよいことがつながつてまゐりませう。

〔ブラームスは、維也納のシンガーアカデミーの合唱指揮音に任ぜられた。〕

こちらからのお報せは、私のささやかな住居もやつと落ち着いてきたことぐらゐでございます。小さいけれど大變に居心地がよくて、大きい子供達は各自の居間を持ち、凡てが時計の如く正確に營まれてをります。家政を上手に切盛りすることが、又私にも出来さうですが、ロバートの爲にやつてゐた頃の楽しさはありません。子供等が各自の役割を樂しんで、上手に出来るやうにと苦心してをります。當地の素晴らしい景色は御存知でせうね。私の家は一番小さな家だから、覺えてはいらつしやらないでせう。外見はまるで百姓家のやうですが、グランドピアノが三臺も入つてゐるのですから、中は相當に廣いわけでございます」

「犬小屋」はシューマンの子供等の天國となつた。早く父を失つた子供達は自然に仲がよくて、母を中心の一つになることは、彼等にとって何よりの喜びであつた。呼吸器が弱い爲に冬の間南佛のニースに避寒してゐたユリーが歸つてくると、久しぶりに四人の娘達と一緒になつて巡遊の旅から歸つてくる母を聲をあげて迎へる。若い心をもつた美しい母は、忽ち一家の中心となり母なくては夜も日もあけない。「母の愛情、母の徳望、母の命令、母の仕事、あらゆる場合に於ける母の責任感、忽ち一家を支配した」と、オイゲニー・

シューマンはその「想ひ出の記」の中で書いてゐる。

多く他人の手で育てられてきたシューマン姉弟は、父に似て生れつき氣持のやさしい子供達であつたので、クララの愛情を常に待ちかまへてゐるのであつた。彼等にとって、母は何か尊い温い懐かしいもの、一口に云へば憧れの的であつた。

何か恥しいやうな氣持が、私と母をへだててゐた。私は自らすすんで母の許にはゆけなかつた。或日のこと——如何にしてさうなつたか、私にも説明出来ない——抑へがたい衝動が、私を母にひきつけたのであつた。まるで夢から覺めたやうに、私はこの素晴らしい女性が私の母であること、彼女が私のものであること、私を含めて子供達が彼女にとって此の世の中で一番大切なものであることを、私は悟つたのであつた。

私は後の方から母のそばに近づいていつて、そつと彼女の頸に腕を巻きつけて、やさしく「マイン、ミュッテルヘン」(私の母ちやま)と囁いた。呪文はとけた。恥しさは消えてしまつた、此の瞬間こそ、年と共に益々深くなり、私の一生にとって神聖な尊きものとなつた母との友情の始りであつた。

とオイゲニー・シューマンが語つてゐるやうに、子供等は母に對して、絶對的な尊敬と讚美と憧憬とを捧げてゐたものの、普通人である子供等は大きくなつて、天才的な母の閃きを意識するやうになると、先つ畏敬を感じ、それがどうかすると、母の存在を遠いものにするのであつた。加へて旅行の爲にお互ひに接觸する折の少ない、父のない母と子の不自然な生活。その凡てを克服して眞に豊かな母と子の関係をつくりあげ得たのは、クララの忍耐と愛情の努力に負ふところが多かつた。聰明な彼女は子供等の性格と才能を冷靜に觀察して、過大な要求や期待を持つやうなことはしなかつた。

然しクララは子供等の音樂の才能をのばす爲に、あらゆる努力を借まなかつた。オイゲニーは幼い日の或るエピソードを書いてゐる。

或日庭で兄姉や友達と遊戯に夢中になつてゐると、姉のエリゼが「オイゲニー、お稽古ですよ」と呼びに來た。遊びに心を奪はれてゐる幼いオイゲニーは、皆に別れて一人ピアノの前に行くのが嫌でたまらない。彼女は、エリゼに捉へられた手をふりほどいて「母さまは大嫌ひ！ 大嫌ひ！」と叫んだ。ところが遊び仲間の子供達が一齊に口を揃へて「母さまは大好きよ！ 大好きよ！」と、はやしたてたのでオイゲニーは急に自分が思はず云つた言葉に恥しくなつて、一目散に家の方に駆けだしていつた。此の些やかな出來事は何年たつても彼女の心に残つてゐて、いつも冷汗と共に想ひ起すと云つてゐる。

マリエは緻密で實際的であつたので、いつか一家の家政の責任者の役を引き受けるやうになつた。母代りをつとめる大きい姉の命令は、常に信頼を以て弟妹達によく守られた。彼女が好んでいつも着てゐる清楚な黒い衣裳と栗色の髪の色は、何かきつい印象を人に與へるのであつたが、事實は正反對でマリエは面白い朗かな、いつも元氣な性格で、幼い弟妹達のめんだうをやさしくみる人であつた。お客が多い家であつたから、マリエの心遣ひには並々ならぬものがあり、召使の姿もあまり見えないのに、ゆきとどいた響應を受けてお客が感嘆する時、クララはいつも誇らしく微笑しながら、長女マリエをやさしく眺めるのであつた。父の死後の母の勞苦を姉弟のうちで誰よりもよく知つてゐた彼女は母の嬉しさうな顔を見る時、自分の努力などは何んでもないといつも思ふのであつた。嘗てロバートの寵兒であつたマリエは、今はクララにとってなくてはならぬ片腕になつてゐたのである。

母が長い演奏旅行に出かけると、マリエは弟妹達の健康に心を遣ひ、お互ひの調和を保つやうに努力した。そして弟達の爲にジャケットを編んだり、母が英國から美しい花模様や縞の生地を、おみやげにもつてくると、妹達の着物を縫つてやるのであつた。

朝の食卓は家族會議の時間であつた。手紙が讀まれたり、一日の豫定が相談されたり、遠足の計畫がたてられたりした。それから一時間ばかりの間クララは、書齋で返事を書いたり近所の人々と逢つたりする。朝のお客はユングさんに付き添はれたレーザ嬢が多かつた。此の盲目の親友はバーデンにクララがある間、毎夏デュッセルドルフからわざわざ出てきて隣家に間借りをしてゐるのであつた。子供達も此の心の美しい婦人を「ロザルヘ

ン小母さん」と呼んで愛してゐた。

マリエとエリゼは一週に二回母から教授を受け、幼い弟妹達の教師の役を務めた。毎朝の母のピアノの練習時間は、子供達の靈感の源泉となり、又或時は彼女達を失望におとし入れるのであつた。オイゲニーは母の練習について記憶を語つてゐる。

グランドピアノがあげられると、家中に美しい音が水の如く流れる。レガート・スタカット、それからオクターブ、六度、十度、三度等の音の波が、まるで海のやうに次々に氾濫する。あらゆる種類のアルペジオ、オクターブ、二重顫音等が間断なく素晴らしく早い速度で續けられる。そして一つの調子から他の調子に移る時は、何んとも云へない美しい轉調が行はれる。それは一種の即興的なファンタジアであつた。何か祕密の力から迸り出てくるやうに、日毎に違つてゐた。

それが済むと、バッハの遁走曲やパルティタが必ず弾かれて、ショパンのエテュードやシューマンのトッカータなどが續くのであつた。

ブラームスの新作品のみが、その頃の母にとって未知の作品であつたが、母は初見ですら、正しい表現を與へることが出来た。彼女が演奏する時、彼女の心は作品の中に深く滲みこんで、作品は恰も彼女の一部の如くなるのであつた。そして、彼女が演奏する時は恰も、新しく創造されるやうな感動がもりあがつてきた。原則として彼女の練習は、楽譜なしで行はれた。母の勉強中にその部屋に入つていつた時に、曲の一部分の記憶を確める爲に、母から楽譜を捜して呉れと頼まれたことを、能く覚えてゐる。何か特別の理由でもなければ、私達は勉強中の母を妨げることはなかつた。私達はいつでも母の部屋に入ることを許されてゐたし、母が私達が行くのをむしろ喜んでゐることも知つてゐた。私達が部屋に入つてゆくと、母はやさしく私達の方を眺めながら練習をつづけるのであつた。

と、オイゲニーの想ひ出はつきない。

静かな夏の日の午後、大きな娘達は涼しい木蔭に集つて、あみ物を始める。こんな時に、ブラームスが彼等の爲に小説を讀んできかせてくれることもある。それはよほど御機嫌のよい時であることを彼女達は知つてゐた。午後四時からクララが訪問を受ける時間で、來客にはホームメイドのお菓子とコーヒーがだされる。黄昏の一時は母と子供等の散歩の時間である。母を中心に大勢の子供達が、賑やかに語つたり歌つたりしながら、夏の森の道を歩いてゆく。フェリックスとオイゲニーは、母が道々石楠の花の美しさに感嘆すると、母さんを喜ばさんものと骨を折つて、花を折つて後から追ひかけてくるのであつた。クララはそれを着物の胸や髪にさしてやると、二人は満足さうに眸を輝かすのであつた。

森の中に入ると、ロバートの「森の風景」(作品八十二)が期せずして皆の心に想ひ出される。そして森の奥の薄暗い處は「忘れられた處」と名づけられた。可憐な野の花は「寂しい花」と呼ばれる。時には森の中のカフェーに一休みをして、おいしい牛乳や苺やお菓子を食ふこともあつた。こんな時にクララが喜ぶのは、砂糖がどつさりかかつた獨逸風のパンケーキであつた。

夜は音樂の集りが時折催された。手のこんだ御馳走などは、だされたことがなかつたが、クララをめぐる此の家の温い空気を慕つてくる人は絶えず、シューマン家の水曜の夜の集りは、毎年バーデンに來る人々の楽しみになつてゐた。ヨアヒム、ヨハネスは無論のこと、ストックハウゼン、ルビンシュタイン、キルヒナー、フロレンティン四重奏團の四人、畫家のフォイエルバッハ、小説家のファニー・レワルド、露西亞から來てゐた文豪のトゥルゲエニエフ等の顔が見られた。トゥルゲエニエフは未だ五十歳位であつたが美しい白髪で、巴里時代からしたしかつた。ポーリン、ヴィアルドーのすすめで、バーデンの彼女の家の向ひに小さな家を建て、毎夏訪れてくるのであつた。

ポーリンの別荘も藝術家にとって、魅力のある家であつた。彼女の家の庭にある野外劇場では、トゥルゲエニエフがわざわざ書きおろしたオペレッタが、ポーリンの作曲で上演されたりした。ポーリンがピアノの前に坐り、彼女の聲樂の弟子や、才能豊かな子供達、トゥルゲエニエフまでが舞臺に現れるのである。クララはさうした一夕を日記に書いてゐる。

「ポーリンは私の知る限り、最も才能豊かな女性である。彼女がピアノで伴奏しながら、舞臺全體をやすやすと指揮してゐるのを見る時、私の心は柔らかく彼女を抱擁したくなる」

クララとポーリンは性格的に不思議な對照を示してゐた。マリブランの妹であるポーリンは、フランスとスペインの血をひく南國生れで熱情と才氣に富んだ華かな人柄であつたが、クララは率直でさつぱりしてゐて、もの靜かなサクソン人であつた。或日のこと、ポーリンの娘が短期間の交際の後に婚約したことをポーリンから告げられると、クララは眞面目な顔になつて「二人とも本當に愛しあつてゐるの？」と心配さうに尋ねた。ポーリンはクララの肩を固く抱きしめて接吻し「私のクレールヘン！ クレールヘン！ 愛する獨逸人のクレールヘン！」といつて微笑するのであつた。

こんな風に性格が違つてゐたに拘らず、二十歳の頃に巴里で日毎に逢つてゐた頃から續いてきた二人の友情は、普佛戦争等にも何の影響もされず、一生を通じて細やかに温く消えることがなかつた。

ヨアヒムは一八六二年に女流聲樂家として名聲があつたアメリー・ワイスと結婚した。ヨアヒム夫人はその後ブラームスの作品の獨唱者として、ブラームスの爲につくしてゐる。バーデンのシューマン家の客の中には、有名なアントン・ルビンシュタインもゐた。

「ルビンシュタインは親切にして呉れます。私は益々彼に好感を抱きます。實に感じのよい性格で嫉妬といふものが少しもありませんね。當地で唯一の誠實な人だと思ひます」と、一八六四年の露西亞訪問の時に、聖ペテルスブルグから、クララがブラームスに書いてゐるやうに、クララも彼の人物と才能に對しては充分に好意を持つてゐたらしいが、彼の藝術に對する態度と演奏には不満であつた。

「ルビンシュタインについては以前にも書きましたが、彼は演奏の時も作曲する時と同じ態度で、音樂を扱つてゐるのです。聖なる眞劍味といふものが不足してゐるのです。彼の作曲、指揮、演奏の凡てにその不足が感じられます。仰せのやうに人間としては稀にみる資質の持主ですね。熱病的な落着かぬ生活をやめれば、多くのものを期待出来る人でせうね」

リスト門下の俊才として賣り出してゐたタウジツヒもフォン・ビュローもクララには物足りなかつた。ブラームスから一八六四年の手紙でタウジツヒに就いて「誠に驚くべき少年で、素晴らしいピアニストです。同時に自分の都合次第で、人間として及ぶ限りに、巧みに變ることの出来る人物です」と書いてきたのに對してクララは、

「貴方からタウジツヒについて伺つたのは驚きでした。あの人についてはバリバリ型の演奏家とだけしかきいてをりませんが、そのバリバリ型の演奏が、私には堪へられないのです。當地でも先日はフォン・ビュローのバリバリ演奏を聴かねばなりません。二回の演奏會で彼は思ひのままリストを弾きまくりました。私にとってビュローこそは、最も退屈なピアニストです。情熱がシュウングもなく、凡てが計算されてゐます。技巧と記憶力が素晴らしいことは眞實ですが、表現される感情がなければ、技巧は何の爲にあるのでせう！」

アントン・ルビンシュタインの弟ニコラスとも、一八六四年に知りあつた。

「短い指に拘らず驚くばかりのテクニックの持主ですが、サロンの作品のみ演奏し、流行に追従してゐるやりかたです。軟い音色、ペダルの連續、然し感情の少い演奏、なかなか愉快的な人物です」

ブラームスがバーデンに滞在中は、シューマン家の食卓には常に彼の分の用意が出来てゐた。ブラームスが出たり入つたりすることは、シューマン家の生活の一部であつた。

彼は私達の家族の一人であつた。私の女學生氣質は彼があまりに身なりにかまはないのが怨めしかつた、彼の色のついたカラーつきのシャツは、常にカラーが忘れられてゐたし、アルパカの上衣はよいとしても、ずぼんは常に短か過ぎた。それ等は常に私の苦勞の種であつた。然し彼が帽子を片手に、家の方に近づいてくるのを見る時、踵に體の重みをのせた弾力のある歩きつきは、いつも私を喜ばした。禮儀作法には全く無關心であつたが、一方彼は自分の無作法さを自覺してゐて苦痛に思つてゐるのであつた。彼は青年にしてはむしろはにかみやで、自分の内氣さを無作法さで隠さうとしてゐたの

である。彼は欲するままに來り又去つていつた。そして彼の氣分のままに、或時は愉快げに、或時は氣むづかしげに、その影響を持ちこんでくるのであつた。

と、オイゲニーはその頃のブラームスを追想する。彼は「フロイライン達」と呼んでゐた、クララの娘達を擲擧ふのが好きであつた。殊にやさしいマリエがいつもやり玉にあがつた。或日料理人が外出した折に、マリエが上手に料理を整へた。彼はしきりに食べてゐたが突然立ちあがつて、臺所の戸棚から料理の本を持つてきて、大きな聲で作り方を讀みあげた。材料を一つ一つたしかめたところ玉葱が不足してゐることが發見された。するとブラームスは鬼の首でもとつたやうに嬉しさうな顔をするのであつた。

又或日、ブラームスはマリエに夕食の食卓で「今日はベートーヴェンの奏鳴曲さへお氣に入らないやうですね」と云つた。食前の時間に二つの部屋から聞えてくるピアノの練習に惱まされて、庭に逃げだしていつたブラームスは、マリエがベートーヴェンの奏鳴曲の出だしばかりを、あれこれとつまらなさうに弾きあらしてゐたのを、窓ごしに聽いてゐたのであつた。

ブラームスの次に娘達に人氣があつたのは、ヘルマン・レヴィーであつた。此の人は東洋的な風貌をしたユダヤ人で、いつも白い犬を連れてゐた。彼の訪問はメンデルスゾーンの「眞夏の夜の夢」のシュケルツオの主題の口笛で告げられるのが常であつた。或日子供達と遊んでゐるとブラームスの足音が聞えてきたので、彼は部屋の隅のトランクの後に隠れた。勢ひこんで入つてきたブラームスは、

フロイライン達が微笑してゐるばかりで、レヴィーが見えないのですつかり狼狽して、

「何處にゐるんですか！」

「誰のこと？」

「レヴィーですよ、此處ではないんですか」

「さあ、レヴィーさんはいらつしやいませんわ」

「どうも失禮」

と云つてブラームスが出てゆかうとする瞬間に、トランクの後から第九交響樂のバリトンの獨唱の旋律が聞えてきて、レヴィーの嬉しさうな顔が現れてくるといつた、愉快な人物であつた。

毎年の九月十三日の母の誕生日は、子供達にとつて楽しい祝日であると同時に、悲しい日でもあつた。幸福な夏の日が終つて、家族は來年の五月まで、又別れ別れにならなければならぬ。母の旅行用の鞆は丁寧なマリエによつて調べられ整理される。弱いユリーは冬を避けて又南佛に出かけねばならぬ。エリゼはクレフェンバッハに、一八六三年からは七歳になつたフェリックスは伯林の學校に、オイゲニーはフランクフルトのヒルデクランツ女史經營の女學校に歸つてゆくのであつた。

此の學校は古い城を校舎にした寄宿學校で、此處で幼いオイゲニーが經驗した苦い想ひ出は、十九世紀の後半期の獨逸の此の種の學校で行はれた教育の一つの記録である。ヒステリックな老嬢達によつて專制的に統率されてゐる暗い學生生活は、もしオイゲニーがクララ・シューマンの娘でなかつたら、人生に對する希望と喜びを失つてしまつたのではなかつたかと思はれる程に陰惨なものであつた。オイゲニーは辛抱に辛抱を重ねた末に、或夏の終りにどうしても歸校しないと云ひ張つた。クララは常に運命を黙つて甘受し、ベストをつくすストイック的な訓練を子供達にさせてゐたので、最初はオイゲニーの我儘だと思つて不満に感じたらしい。然しオイゲニーが涙と共に學校で受けた苦しみの一切を、母に打ち開けた時、此の母は直に彼女の退學に同意したのであつた。

秋になると、シューマン家の子供達は寄宿舎に、親類や友人の家に、散り散りに去つていつた。嬉しいにつけ悲しいにつけ、彼等の心にはバーデンの「犬小屋」と、母の姿が絶えず浮んでくるのであつた。

## 第二十四章 ヨハネスをめぐりて

毎年十月になると、夏の静養で恢復した元氣と、新しく加へられたレパートリーをもつて、クララは廣い世界に旅立っていった。それは藝術家として、又子供等の生活を守る母としての彼女の運命であつた。聴衆のシューマン夫人に對する尊敬と同情は、年と共に根強いものとなり、演奏會の要求は増す一方であつた。彼女は勞多き邊鄙な地方の巡遊さへも、勇敢に引き受けた。七人の子女の教育と未來は、彼女の肩にかかった七つの重荷であつた。長男のルドウィックは智腦の發育の遅い、不器用な子供であつたので、一人前になれる日が果して來るものかと、クララを絶えず不安にした。

「他のことは何も楽しめない程に、ルドウィックのことが心配でございます。あのやうな少年が與へる心懸りといふものは、到底云ひ現はすことも出来ません。どうか何時も夢を見てゐる少年を心に描いて下さい。幻影を追ふこと以外には何の興味も起さないし、何處からみても全く非實際的な少年で、學校の先生もどうしてよいか解らぬと仰しやいます。それに私は彼に生涯の仕事を決めてやらねばなりません」

と、エリザベート・ウェルナーに一八六五年に訴へてゐるやうに、クララは彼の行末を案じて、シューマン家代々の家業であつた本屋の仕事を、將來やらせてはと考へて、カールスルーエの一書肆に務めさせてみることにした。然し、ルドウィックには先天的に耐久力が全然なく、クララの失望と心配は増すばかりであつた。

生れつき蒲柳の質であつた三女のユリーは、クララの努力にも拘らず年頃になつても病氣勝ちであつた。彼女の持つ稀にみる繊細な美しさは、母にとつては、恐怖を感じさせるものがあつた。二十二歳になつた次女のエリゼは、フランクフルトにピアノの教授として赴任することになつた。「エリゼは多くの點で敏感なよい娘で、頼りになり、鐵の如く誠實である。神よ、この娘を祝福し、彼女に力を與へ給へ」とクララは日記に書いてゐる。クララはエリゼと共に、一八六五年の十一月、フランクフルトを訪問し、彼女を紹介する爲に母と娘の演奏會を開いた。親切なヨアヒムもエリゼの門出を祝して賛助出演をして呉れた。

「昨夜の私達の演奏會は輝かしいものでした。凡ては大變によくいつて、最後のハイドンの終曲は繰り返さればならぬ程に、盛んな歓迎を受けました。エリゼは體中が顫へたと云つてをりましたが、まるで何んの恐怖もないやうに弾きました。かへつて私の方がずつと不安だつたのですが、無論あの娘にはそんな氣配は見せませんでした。變奏曲（シューマンの二臺のピアノの爲の變奏曲、作品四六）を二人して演奏しながら、エリゼの門出の爲にヨアヒムが演奏して呉れたこと、彼女の父、ロバートの作品を母娘二人で演奏出來たことに想ひ到つて、心が温かくとけてゆくのを感しました。もし彼が生きてゐて、その光景を見たら、彼の眼がどんなにかやさしく輝いたことでせう！」

とクララは、ブラームスにその日の感激を傳へてゐる。

一八七〇年には途に普佛戦争が勃發し、クララの三人の息子の中で、一番健康でもあり頼りにしてゐたフェルディナンドが動員された。宣戦布告の報せと共に、獨逸國境に近い危檢區域に含まれてゐるバーデンに住む、女と子供ばかりのシューマン家の安否を氣遣つて、ブラームスは維也納から直に急行すると報せてきたが、軍隊の輸送の爲に一般の交通が杜絶し、ブラームスは目的を達することが出来なかつた。クララはブラームスに宛てた長い手紙の中で、次のやうな呉の決心と惱みを訴へてゐる。

「戦鬪が何處から始まるかわかればよいのですが、凡ては不氣味な静穩さで、何も解りません。此のやうな静けさの中では仕事はよく出來ますが、戦争のやうな重いものが心に被さつてゐる場合には、強い克己心が必要です。私は毎日つとめて仕事をして居ります。心の悲哀も仕事中は麻痺して呉れますから、最良の薬でございます。フェルディナンドも仕事をやめ、軍隊に編入されて教育を受けるでせう。苦情を云ふのは恥ぢなければなりません。けれど母の心は平靜であり得ないのでございます」

又、親友のロザリー・レーザーには、七月十七日に、

「考へて頂戴！ 私の可愛い息子の番が廻つてきました。明日から教育を受けて必要に

なれば前線に送られます。然し現在の如く大獨逸自身がその息子達の爲に憂へてゐる時に、自分の息子のことなど考へてはならないと思ひます」

つづいて、八月二十五日の手紙には、

「昨夜八時にストラスブルグ攻撃の砲火が始まり、夜中つづきました。新しい勝利の報の度に、歓喜と共に悲哀がもたらされ、その感動は悦びといふよりも涙ぐましいものです。プロシヤ王の態度は何んと立派なものでせう！七十歳以上の老齡であられながら、眞の英雄の如く……素晴らしいではありませんか。王の云はれる言葉は、凡て高貴な彼の人格を示してゐます」

「八月三十日

愛するロザリー、フェルディナンドからメツツに輸送されると昨夜報せてきました。私は何んなに驚き、心の中で戦つてゐるか、御想像がつくでせう。力の限りをつくして心の烈しい鼓動を制する決心です。神よ、どうか彼と我々を守り給へ。

此の二日間、私達は終日繃帯巻きをして居ります。ストラスブルグの砲撃は未だ續いてをります」

クララはフェルディナンドを戦線に送つた不安と困難の中に、十一月には伯林に移つて、祖國の爲に己の藝術を借しみになく捧げて活躍した。十二月には出征家族保護協會から、會長ビスマルク伯爵夫人の名に於て、感謝状が贈られた。

一八七一年の春になると、例年の如く英國に渡り、親佛的な倫敦の空氣の中で、戦線にあるフェルディナンドを想ひ祖國を想ふ手紙を、ブラームスや友人達に書いてゐる。フェルディナンドは一八七一年の六月、凱旋部隊の一員として、伯林に晴の歸還をした。然しその喜びにひたる間もなく、末子でもあり父に似た才能の閃きもあつて彼女が特に愛してゐたフェリックスの健康が益々悪くなつてきた。フェリックスの肺の疾患の最初の徴候が現れたのは一八六八年の春であつた。

「フェリックスは此の夏一緒によく静養させれば全快する希望もありますが、ルドウィックについては何も考へられません。ライプチヒに幸にも又新しい勤め口が出来ましたが、何時まで續くことやら。一人は勤めを嫌つてぶらぶらしてゐて心配をかけ、一人はあまりに勉強をやり過ぎて心配をかける。何んと違つた兄弟でせう。ユリーは三週間前にフランクフルトに歸りましたが、昨年よりも元氣な様子です。こんな風によかつたり、悪かつたり、哀れな母親の心はやすまる暇もありません」

これは、その頃のブラームス宛の手紙である。

かうした子供等への心遣いと不安は、彼等が成長するに従つて、増すばかりで、各地に巡遊するクララの心を離れる時がなかつた。同時にピアニストとしての彼女の生活も、年と共に多忙になり、一八六五年の倫敦訪問によつて、クララは彼地の樂壇に確乎たる地位を築き、一八八八年の最後となつた英國訪問まで、シーズンごとに彼女の人氣は白熱的に高まるばかりであつた。ロバート・シューマンの音樂は英國の聽衆にも、温かい愛情を以つて受入れられ、不滅の樂聖の未亡人として、クララは何處に行つても熱烈な尊敬と歓迎を経験するのであつた。

「ああ、もしロバートが生きてゐて、此の光景を見るととが出来たら……英國でかくも認められようとは、彼は夢にも思はなかつたであらう。拍手の大部分は私のものではなくて、彼に捧げられたのである」

と日記に書いてゐるやうに、成功が大きい程、彼女の心はロバートを想ひ出さずにはゐられない。クララの後援者バーナンド兄妹は、渡英ごとに彼女をハイパークにある自宅に迎へて、あらん限りの心遣ひをもつて彼女をもてなした。彼女の就寝時間を亂さぬ爲に、此の家の音樂の集りは一般より早い時間に始められるのが常であつた。クララの演奏會の晩など、バーナンド家の人達と夜食の卓に集る時、クララは英國家庭の靜かなホーム・ライフを経験する。バーナンド氏はマリエにその夜の聽衆の中の誰彼、例へば閨秀作家のジョージ・エリオットやジョージ・リュイスがゐたことなどを語つてゐる。かうした家族的な平和な雰圍氣は、打ち續く演奏會で極度に緊張してゐるクララの神經をやすめるのであ

つた。クララはバーナンド兄妹の好意を常に深く感謝してゐた。一八六九年の英國訪問から歸獨する日の日記にクララは「外國人をこのやうに好きになるとは、私は夢にも考へたことがなかつた」と、バーナンド兄妹のことを書いてゐる。

シューマンの作品のみのプログラムが要求される程に、浪漫派の音樂への倫敦の理解が深められた時に、クララは英國人には未だ無名の作曲家に過ぎないヨハネス・ブラームスの作品を紹介する演奏會を計畫した。そして相當の反響を得ることに成功した。

一八六四年の春にはブラームスの母が死んだ。ブラームスが殊に此の母を深く愛してゐたのを知つてゐるクララは、飛んでいつて慰めたい氣持であつたが、運悪く伯林のティア公園で散歩中に足を踏みはずして、ひどく右手を痛めてゐた爲に思ふにまかせなかつた。筆が持てないクララが口述筆記をさせてよこした手紙に對して、「懐かしい心のこもつたお手紙は、貴女が側近くにゐて下さることを、感じさせて呉れました」と、ブラームスは感謝してゐる。ブラームスは一八六六年の夏にはスイスのチューリッヒに落着いて、美しい自然に恵まれた靜かな環境で「獨逸鎮魂曲」の作曲に精進してゐた。その頃の彼等の手紙や日記は、鎮魂曲のことで溢れてゐる。

「當地からは別にお話することもないけれど、私が貴方の鎮魂曲の感動で一杯になつてゐることを云はなくてはなりません。全く力強い作品で聽く者の心を不思議な力で捉へてしまひます。深い誠實が詩想の魅力と溶けあつて素晴らしい効果をあげ、聽く者の心を揺り動して靜寂の境地に導きます。私には到底充分に言葉で表現出來ませんが、作品の豊かな閃きを感じ、曲の精神にうたれたことを申し上げずにゐられません」

ブラームスが彼の精神の美しさを、此の曲の中に音樂を通じて表現したことを、クララは感ずるのであつた。一八六七年の十一月にブラームスは「秋の感情」と題する歌謡を送つて來た。

「嬰へ短調の『秋の感情』は全く貴方独自の作品のやうに思はれます。涙もろいと仰しやるでせうか、あの歌は、涙を流さず最後まで弾き終ることは出來ない程でした。

あの歌曲のたたへてゐる情感は、書かれた以上、貴方のものだと思ひますが、貴方が折々、あのやうに悩んでおいでだと考へねばならないとすると私もひどく苦しい氣が致します。愛するヨハネス！ それはいけません！ 才能に恵まれ、人生の花盛りの時期にある青年が、あのやうな憂鬱な物思ひの餘地を心に與へてはなりません。どうか、早く家をおもちになつて、維也納で裕福な娘さんと結婚して下さいな。（きつと、貴方も愛する人が見つかることと思ひます）そしたら、貴方もきつと又元氣になり、新しい友人も出來て、人生を新しい愛情で把握することがお出來でせう。今が一番よい時期ですから」

此の頃のクララの手紙には、ヨハネスに獨身生活を成算して、新生活に入ることをすすめたものが多い。

獨逸鎮魂曲は一八六八年の四月、復活祭の金曜日にブレーメンで初演され、ヨアヒム夫妻やクララをはじめヨハネスの友人達が集つた。此の曲はブラームスその人の個性と同じく、煽情曲な華麗さはないが、その靜かな美しさは、人々の心深く滲みこんで、聽く者の心を潤すのであつた。

「四月九日。私達はやつと總練習に間にあつた。ヨハネスは既に指揮臺に立つてゐた。……鎮魂曲は私を壓倒した。……ヨハネスは素晴らしい指揮者ぶりを示した。……金曜には鎮魂曲の上演に加へて、ヨアヒム夫人がヨアヒムのヴァイオリンの伴奏で「救世主」からの詠唱を歌つた。

鎮魂曲は嘗つて如何なる音樂もなし得なかつた程に私を捉へた。指揮棒を持つたヨハネスが立つてゐるのを見た時、私はロバートが『彼に魔法の指揮棒をもたして、管絃樂と合唱の指強をさせたら』と云つた言葉を、憶ひ出さずにはゐられなかつた。今日その豫言が成就したのだ。彼の指揮は全く魔法であつた。彼の敵の上にまでその魔力を發揮した。會が果ててから市廳舎の地下室で夜食の集りがあつたが、まるで音樂祭のやうに賑かで楽しかつた」

とクララの筆は、當夜の感激を傳へてゐる。集つた人達は、ヨアヒム、ストックハウゼン、

ディートリッヒ、グリムの各夫妻、ヨハネスの父のヤコブ・ブラームス、マックス・ブルン、ラインターラー等の人々で、ラインターラーは立ちあがって祝辭をブラームスに述べたが、その中で、

「我々の巨匠ロバート・シューマンが永遠の憩ひに旅立つて以來、我々は悲哀と不安に満ちた時期を過ぎて來た。然し今日、彼ヨハネスの鎮魂曲の演奏の後に、我々は巨匠シューマンの後に續く者が、彼の開拓した道を必ず完成出来ることを確信出来るのである」と云つた時、ロバートが生きてゐたら、とその一晚中ひそかに想ひつづけてゐたクララの心は、遂に堪へられなくなつて、人の中も忘れて、涙にむせんでしまつたのであつた。

一八七二年の夏からオイゲニー・シューマンは、一週に二回づつブラームスにピアノを學ぶことになつた。マリエをはじめシューマンの娘達は、ブラームスの氣まぐれや頑固さや毒舌に相當困らせられてゐたものの、父母の愛したブラームスの内心のやさしさや温かい心を知つてゐたので、いつもよく辛抱してゐた。彼等は母の如く、創造する者の苦惱に對する充分な理解力がなかつた。クララはロバートとの長年の生活の経験から、ヨハネスが皮肉になり氣むづかしくなる時に、彼の心の中に烈しい争闘が繰り返され、自らの心を苦しめてゐるのがよく解つた。そんな折にはブラームス自ら云つたやうに「鐵が熔解してゐる」のであつた。

その頃のブラームスは管絃樂の音樂の創作に専心してゐたが、未だ自信がなく、彼の藝術の基礎となつてゐる素朴な獨逸的性格をもつた詩情は、次第に表現力と洗煉の度を深めつつあつた。クララが彼の音樂に、特に深い共感と理解を持つてゐたことは、無論であるが、彼女とブラームスをもつとしたしく近づけてゐたものは、二人に共通な人間的な素朴さにあつたやうである。感じ易い少年期を貧困のうちに成育したブラームスは、本能的に豪華な貴族的なものを嫌惡した。恵まれた環境に素直に育つた人間には思ひもよらぬやうな些細なことにひどく傷けられるかと思ふと、恐ろしい程に大膽で自尊心が強いブラームスに對する時、クララは常に深い同情の心と忍耐をもつてのぞんでゐた。然し彼女の稀にみる感じやすい心は、生地が荒々しいブラームスに接觸する時、どうかして傷つけられることがあつた。

ロバートはしたしい彼女に對してさへ、荒々しく振舞つたり、故意に苦しめるといふやうなことが、全くない人であつた。ロバートが常にたたへてゐた微笑にはそれが此の後の人間とは思へない程の謙遜さと柔和さと素直さがあつた。彼は常に感謝に満ちた澄み切つた心でもの眞髓を直に把握するのであつた。反對にブラームスは主観が強く、誰に對しても用捨なく正面衝突をしてゆく性格で、後に後悔しても、その氣持を率直に云ひ現すには誇りが強過ぎるのであつた。オイゲニーをはじめシューマンの娘達は、長年の間にブラームスのさうした性格を理解してはゐたが、それが愛する彼等の母にむけられる時には、黙つてはゐられなかつた。

ブラームスが不機嫌な折に、母の氣持を平氣で傷けてゐるのを見ると、私達が憤慨したのはごく自然なことである。彼には、誰に對しても平氣で失禮に振舞へる氣分の時があつて、それから幸ひにまぬかれた人を、私は一人も知らない。他人のことはそれとして、私達の母にむけられる時……私達は我慢出来なかつた。その點で私達姉妹は、一致團結して彼に向つた。

或時、私は「ヘル・ブラームス、そんな調子で母様に仰しやるのはよして下さい！」とはつきりと云つて、母の傍に膝まづいて母を慰めた。母の目には、涙が一杯に溢れてゐるのであつた。彼は瞬間、びっくりしたやうに、私を凝視めたが、何も云はなかつた。あのやうなやさしい心持を秘めてゐながら、母の心を痛ましめるやうなことがどうして出来たのか、私は未だに納得出来ない。彼の中には、彼を嘯かける小さな悪鬼がゐるのである。

ブラームスが私の母の中に、彼女の藝術の理解力以上に愛したものは、母の廣い心であつた。彼は例へ自分が悪鬼に敗かされることがあらうとも、母の心は彼を赦すことを確信してゐた。彼は母に對して自らは冷淡に振舞ひ得ても、他人は誰一人、例へば我々娘達でさへも母の缺點を云ふことを承服出来なかつた。これは母とブラームスの關係の一つの特質である。或時、母が外出したばかりで、私達と彼だけが食堂にゐたことがあつた。その時姉の一人が、

「母さまには本當に一つも缺點がないわね」と云ふと、他の一人が

「私には一つ缺點が考へられるわ。私達の間に喧嘩があつた時に、私が自分の立場をお話すると、母さまはそれに賛成して下さる。こんどはもう一人が母さまにその人の立場を訴へるでせう。さうすると又その人に賛成なさるぢやないの」  
と云ふと、ブラームスが眞面目な顔をして  
「その缺點はむしろ美點なことを貴女は忘れてゐる。貴女方のお母さんは謙遜だから、貴女達に對してさへも、御自分の意見を押しつけたりしないんだ」  
と怒つたやうに云ふのであつた。

とオイゲニーは書いてゐる。オイゲニーはブラームスからピアノを學ぶうちに、此の氣儘で口下手な母の友が、音樂に關する限りは實に忍耐強く骨を惜しまぬ人であることを知つた。彼は親指の運動を助ける爲の練習曲を、彼女の爲にわざわざ書いて呉れたり、バッハの演奏では表現とリズムとアクセントを殊に熱心に注意して呉れた。或音に對しては重みによる短い音を許したが、バッハの演奏では決して鋭い眞のスタカットを用ひることを許さなかつた。或時オイゲニーが、

「でも、母さまはバッハにスタカットを使つていらしてよ」

と云ふと、ブラームスは困つたやうな顔をしたが、

「お母さんの若い頃には、バッハにスタカットを用ひた時代だつたので、未だに残つてゐるのです」

と答へた。オイゲニーはブラームスから受けたピアノ教授からも、非常に利するところがあつたと云つてゐる。

シューマンの娘達にとって、ブラームスの新しい作品は、太陽が出たり入つたりするのと同じく、日常の現象であつた。あまりに馴れきつてしまつた彼女達は、彼が僅か一言の讃辭にも感謝する内氣な心であるとは夢にも知らなかつた。或時ト短調のピアノ四重奏の演奏後に食卓に並んで坐つた時、オイゲニーが「四重奏が完成なさつた時は、何んなにお嬉しかつたでせうね」と云ふと、彼女が經驗したこともないやうな美しいやさしい眸で、ブラームスが彼女を見つめてゐたので、彼女は彼を誤解してゐたことを始めて悟つたと、「想ひ出の記」に書いてゐる。

或時私の稽古の前に、母がマリエと私に「貴女方とブラームスの間に何かあつたの？ 貴女方が親切でないやうに云つてゐましたよ」と云つた。私達は腹立しく思ひ、彼に對しては常によくしてゐるから、何の事だか見當がつかないと云つた。「ではもうちき來るだらうから自分できて御覽なさい」と母が云ふので、「怒つてゐるなら來ないでせう」と私達は云つた。

ところが彼は約束の十一時に、きつちりとやつて來た。私達は早速、彼を部屋の隅つこに押しこんで取り囲み、

「ヘル・ブラームス、母さまに私達のことを告げ口なさつたでせう！ 何がお氣に入らないの、云つて下さるまで許してあげないわ」

と云つた。彼はまるで叱られた小學生のやうに、兩手をポケットにつつこんで、もじもじしながら口ごもつてゐた。そして「ああ、僕が大馬鹿者だから」とつぶやいた。

私達はこれ以上の敗北を豫期してゐなかつたので、非常に心をうたれた。私達は彼を隅から解放して仲直りをした。彼が感情を害した理由は遂にきけなかつたが、私達もそのことを忘れることにしたのである。

と、オイゲニーのその頃の想ひ出話のブラームスは頬笑ましい。

一八六八年の秋に、ユリーは伊太利の貴族から求婚されるとクララに報せてきた。ヴィクトル・ラディカッティ・マルモリット伯爵といふ人で、再婚だといふのである。先づユリーは病弱であつた上に、國と言葉の相違もあり、相手は古い貴族の家柄で環境も違ふ上に、宗教もカトリック教であつた。

「彼女がしてゐることがよく解るやうに、私は不安な氣持を凡てユリーに書いてやつた。愛は恐れるべきものでないことは、自分の經驗からもよく知つてゐる。ロバートと私ほどに多くの障害をのり越えねばならなかつた人は少ないであらう」

とクララの日記には讀まれる。

その翌年の一八六九年の夏は、五月頃からめづらしく家族一同がバーデンの家に集まり、ブラームも毎日出入りしてゐた。ユリーの稀にみるやさしい繊細な美しさは輝きを増して、彼女が同じ部屋にゐる時、ブラームスの眼は明るく輝くのであつた。マルモリット伯からの正式の結婚申込みの書状が届いたのは七月十日で、クララはその翌日、承諾の返事をだした。「私の胸が疼いたのを神は知り給ふ」とその日の日記には書かれてゐる。その夜はエリゼとフェリックスがシャンペンをみやげにフランクフルトから帰宅したので、ユリーの婚約が家族の者のみでつつましく祝はれた。

「七月十一日……知人にユリーの婚約を報告した。無論誰よりも先にヨハネスに。彼は思ひもよらなかつた様子で、ひどく取り亂した」とクララの日記にしろされてゐるが、クララは娘を手離す決心はしたものの、ヨハネスに慰められたい氣持で、その朝彼に告げたのであつたが、彼は黙々としてクララに云ひたいだけ云はしてしまふと、ろくに挨拶もせず黙つて歸つてしまつた。

「七月十六日……ヨハネスはすつかり變つてしまつた。顔もろくに見せなくなり、たまに來ても一こと二こと云ふのみで口をきかない。以前には特にやさしくしてゐたユリーに對してもその調子である。あの娘を愛してゐたのだらうか？ ヨハネスは結婚を考へてみたこともなく、ユリーも又その意味で彼を慕つてはゐなかつたが……」

ヨハネスは幼い頃から可愛がつてゐたユリーの婚約に、人目にたつ程狼狽した様子が、此の日記で想像出来る。精神的にも肉體的にも圓熟した三十五歳の壯年に達したヨハネスが、美しく成長して二十四歳の春を迎へたクララに似たユリーに、嘗つて青年時代に彼女の母、年上の豊かなクララに感じた戀心とは全く違つた愛情を、ひそかに抱いてゐたとしても、それは別に不思議ではない。

九月十四日はマルモリット伯が到着した。

「九月二十一日……我々は戀人達を中心に楽しい一夕を過した。一同でハイドンの玩具交響曲を演奏し、私はヨハネスとハンガリア舞曲やシュトラウスの圓舞曲を弾いた。レヴィー、ブラームス、アルゲール達は各自ユリーに贈り物をしたが、私はヨハネスが彼女に贈つた、私の小さな肖像畫が一番氣に入つた」

ユリーの結婚式は二十二日、光りの谷街のカトリック教會でささやかに行はれた。オイゲニーはその日の美しい姉の想ひ出を書いてゐる。

「まるで空のやうに青い彼女の目、長い睫毛に圍まれた美しい目が、今も見えるやうな氣がする。彼女の髪は絹糸のやうに光澤のある金髪で、白く澄んだ額をかこみ、形のよい鼻と唇の細やかな線、それ等を見る時は心から感嘆せずにはゐられない。氣品のある輝くやうな面影と、彼女の愛らしい氣質、彼女の敏感な心について、言葉で云ひ現すことは到底出来ない」

式後、シューマン家の祝ひの食卓を圍み、やがて新夫婦は南の國の我家に旅立つていつた。

ユリーと共に夏が去つて、佗しい秋が又訪れて來た。再び身仕度を整へてクララは演奏旅行に旅立たねばならない。子供達も又各自の冬の生活に散り散りに歸つてゆく日が二三日のうちに近づいてゐた。突然けたたましく玄關の呼鈴が鳴り響いた。食堂にゐたマリエとオイゲニーは、聴き馴れたブラームスの足音が、二階の母の部屋に上つてゆくのをきいた。

「間もなく、私達の耳には深く人の心をゆり動かす、莊嚴な音樂が聴えてきた。私達はしばらくぢつと聴いてゐた。やがてブラームスが歸り、母がひどく興奮して入つてきた。ブラームスはグオーテの『ハルツ紀行』から歌詞をとつた、アルトと管絃樂の爲のラプソディーを、初めて彼女にきかせたのであつた」

とオイゲニーは記してゐる。クララは、

「彼はこの曲を彼の結婚の歌だと云つた。私はこのやうに深い悲哀にこもる音樂に、動かされたことはなかつた……此の曲は彼の心の苦悶そのままに思はれる」

## 第二十五章 悲哀限りなく（一八七三年—一八七八年）

世に優れた才能に恵まれた両親を持つ子供達が、親と同じ天職を選ぶ場合には、常に特別の困難を自覚するものである。マリエ、エリゼ、オイゲニーの三人の姉妹は、痛い程にこれを経験した。三人とも母の熱心な訓練と幼時から恵まれてゐた音楽的環境のおかげで、高い音楽教養を持ち、優れたピアニストであり、教師でもあつたか、シューマン家の輝しい音楽の傳統に、自ら榮光を加へることは出来なかつた。

末つ子のフェリックスも十三歳の時に、ヴァイオリニストになりたい希望を母に打ちあけてゐる。

一八六七年五月十一日

お祖母さんと、フェルディナンドの話によれば、貴方はヴァイオリン弾きになり度いさうですね。それは貴方が考へる以上に困難な道だと母さんは思ひます。本當に立派なヴァイオリン弾きになつたとしても、ロバート・シューマンの息子として、貴方はきつと惨めな立場に立つと思ひます。音楽に對して素晴らしい天才を貴方が發揮するのでなくては、貴方の名に對してすまないことになるのですから、その爲には、大變な忍苦と努力が必要でせう。

母さんは、貴方が自分や他人の楽しみ爲には、充分な音楽才能を持つてゐると信じてゐますが、どうか愛するフェリックス、よく考へて下さいね。貴方は他の知的な才能も恵まれておいでだし、大きな道が開けてゐるのです。何んな仕事を選んでも貴方はきつと秀でることが、お出来だと私は思ひます。そして藝術家になる以上に名譽ある地位が、得られるかもしれませんよ。

ヨアヒムに貴方を試験していただきませうね。貴方がバーデンにきたら、ヨアヒムに尋ねてみます。きつと最も公平なよい判断をして呉れませう。此の計畫をどう思ひますか？ どうか返事を下さい。

と此の時クララは、フェリックスに書いてゐるが、十五歳の時に、フェリックスは再び決心を母に打ちあげた。

僕は今自分の心が、音楽に向つて駆り立てられてゐるのを、繰り返して考へてゐます。色々反對意見があることも承知なのですが、どうしても考へがそこに戻つてくるのです。僕の選擇が困難な道であることも今は音楽家が多過ぎることも知つてゐますが、何故僕がその中の一人になつてはいけないのでせうか？

偉大なる人物の息子達が、凡て偉大なる人物だつたらいつたい何んなことになるのでせう。偉大なる人物の特質がなくなつてしまふでせう。偉大なる人物の息子が、父の偉大さと、父の藝術を把握する爲に捧げる努力には、何か美しいものがあると僕は思ふのです。僕は今、母様が僕の選擇に不承知ではないかと、そればかり案じてゐます。

此の手紙を見るに及んで、クララは、或ひは此の子こそシューマンの名に再び榮光をもたらす者になるかもしれないといふ、ひそかな希望が浮んでくるのをおさへることが出来なかつた。フェリックスは愛情の細やかな感受性の豊かな少年で、四人の姉達にも特に可愛がられ、遂に父を見ることもなかつた不憫さから、母のクララも此の末子を特に愛してゐた。少年期から青年に近づくにつれて、フェリックスはクララに始めて逢つた頃のロバートを想ひ起させる事が多かつた。殊に額と鼻とふさふさとした髪はそつくりであつたし、文學に對する熱情も父に似てゐた。フェリックスがクララによこす手紙は、丁度その頃クララが出版する爲に編纂中のロバートの「若き日の手紙」中の、ロバートが母に書いた手紙と不思議な程によく似てゐた。

シューマンさへもフェリックスの年頃では未だ、音楽の方面でも海の物とも山の物ともわからぬ時代であつた。クララは演奏家の歩む道の苦しさを自らよく知つてゐたので、フェリックスの志望に對しても慎重に考へてゐた。ヴァイオリンは一夜で學べるものではないし、クララは音楽家を最後に決定するものは、その人の人格と教養であることを知つてゐたので、先づ學問に専心して、あらゆる資質を出来るだけ發達させなければいけないと諭した。フェリックスは母の意見に不満ではあつたが、ギムナージウムを優秀な成績で卒業することが出来た。

然し折角のフェリックスの音楽への熱情も、健康の點で主治醫から絶対反對されたので、彼も父と同じやうに法律を學ぶ決心をして、嘗て父が學んだハイデルベルヒの大學に學ぶことになった。然しフェリックスの前に待つてゐたのは、一年半の大學生活の後に、肺の疾患の爲にバーデンの家を送り歸される悲しい運命であつた。一八七三年の九月、母の誕生日の四日前に、病に倒れたフェリックスが歸つてきた。

「九月十七日。フェリックスは私の誕生日の爲に、小さな戯曲を書きました。姉弟で上演するつもりだつたのですが、病気の爲に今は無論諦めねばならなくなりました。月末までにあの子の詩をお送り致しませう。通讀してお氣に入つたところに印しをつけて下されば、大變に嬉しく思ひます。中にはよく書けてゐるものもありますし、しばしば深い詩想とユーモアを示してをります。どうか率直に御意見をおきかせ下さい。私が親馬鹿で、息子を天才だと思つてゐるとは、どうか夢にもお考へ下さいませ。反對に『彼』の子供達の才能を、買ひ破りはしないかと、いつもそののみ心配してをります。それは私が、子供達に期待し過ぎてゐるからかもしれません」と、クララはブラームスに頼んでゐる。

その年の降誕祭に、維也納のブラームスから送られてきた小包の中に、新作の歌謡の樂譜があり、その中からフェリックスの詩「我が愛はリラの繁みの如く緑なり」が美事に作曲されたのが出てきた。クララがその曲のピアノの伴奏部を弾きだすと、同席してゐたヨアヒムがヴァイオリンをとりだして、歌の旋律を美しく奏し始めた。フェリックスは暫く聽いてゐたが、立あがつて歌詞を見ようとピアノに近づいていつた。「彼は興奮して蒼白になりました」と、自作と知つた時のフェリックスの様子を、クララはブラームスに報告してゐる。シューマンの若い息子の詩三篇は、ブラームスによつて永遠の生命を與へられた。

次男のルドウィックは、新しい勤め口を捜しても直に解雇されるので、クララの苦勞の種であつたが、その後精神異状の症状がいよいよ確認され、一八七〇年には重態に陥いつて、家族一同を悲歎に落し入れた。

五月五日附のブラームスへの手紙には、

「ルドウィックは重態で、三四週間は危険でしたが、今は少し落ち着いた様子でございます。いづれ御目もじの上詳しく申し上げますが、結局は精神病院に入れるやうになりませう。一生の間に二度までも此のやうな試煉に逢ふことは慘酷な達命ですが、母として力が及ぶ限り落着いて堪へようと固く決心してをります。他の子供等の爲にもまだまだ生きてゐなくてはならないことや、私の人生にまだ残されてゐるささやかな幸福が、尚ほ苦惱に勝るものであることを強く感じてをります」

六月二十八日には、

「ルドウィックを訪問したフェルディナンドの最近の報告で、心懸りは益々大きくなるばかりでございます。哀れなあの子の苦痛を救つて下さるやう神に縋るより他に、どうしやうもありません。フェルディナンドを見た瞬間、泣きだしたさうですが、直ちに又幻覺に襲はれて『僕は癡人だ！ 僕は癡人だ！』と云ひつづけるのです。

晝間は仕事に追はれ、他の子供達と一緒になのでまぎれてゐることも出來ますが、夜など私の心が何んなに思ひ亂れるか、貴方には解つていただけるでせうね」と書いてゐるやうに、ルドウィックの發病には、氣丈なクララも非常に懊惱し、ロバートの發病以來心に最大の衝撃を受けたのであつた。

ユリーは結婚後夫と共に伊太利のトリノに住み、シューマン家の人々と逢ふことも稀れであつたが、マルモリット伯は彼女を深く愛してゐたし、ユリーの生れつきのやさしい氣品ある人柄は、立派に伯爵夫人の役をつとめて、誰からも敬愛され、幸福な數年を送つてゐた。然し生來病弱であつたユリーは、一八七〇年と七一年に續いて年子を産んだ過勞の爲か、一八七二年の初夏に久しぶりにバーデンの家を訪れてきた時には、家族の者を驚かす程に衰れてゐた。彼女の胸はいつか結核に蝕ばまれてゐたのに、彼女はまたも妊娠してゐたのであつた。

「ユリーの最初の接吻は私の心を深くうつものがあつた。彼女は最早長く生きてゐない

であらうと私は感じた。彼女は重い病氣の後のやうな顔をしてゐた。愛する者は九月二十七日まで滞在してゐたが日毎に彼女の體力が失はれてゆくのを眺めつつ、どうすることも出来なかつた。醫者も彼女を救ふことが出来なかつた。彼女は家政と子供の養育にそのか弱い健康を消耗してしまつたのである。

やがて彼女を失ふであらうといふ考がおほひかぶさつてはゐたが、こんなに早くならうとは誰も夢にも思はないのであつた。彼女を喜ばす爲に音樂會に出かけたりしたが、肉體的な悩みは彼女にそれ等の楽しみを十分に味ふことを許さなかつた。九月末は苦しかつた。私の胸は絶えず疼いてゐた。ユリーは南の方に同行する筈になつてゐた S 夫人を訪ねて巴里にゆくことを氣にしてゐた。私達は此の冬を家でゆつくり静養しながら、出産を待つやうにすすめたのであつたが、彼女の心は常に南の國にむけられてゐた。哀れなあゝの娘はそこに望みの綱をかけてゐたのだ」

とクララは記してゐるが、バーデン滞在中のユリーは、常に明るい微笑をたたへてゐて、自分の苦しみを人に見せなかつた。

昔のやうに庭の花を切つてきては、母の居間やピアノの上にいけたりしてゐるユリーの姿を、母も姉妹達も、痛ましい氣持で見守つてゐたのであつた。ユリーは誰からも深く愛されてゐた。殊に、女では末つ子のオイゲニーは、幼い頃此の美しい姉に寢床に入れて貰ふことが何んなにか嬉しかつたが、幼いオイゲニーは蠟燭の火が吹き消されるのが、いつも恐いのであつた。そんな時、ユールヘンは、「私が蠟燭を吹消すお婆さんのよ」と云つて、奇妙な顔つきをしながら、消さうとするが、なかなか消えない。「旦那さま！ 早く来て消して下さいよ」と、こんどは男の聲色を使ひながら消さうとするが、まだ消えない。それからユリーは、家中の人の名を一人づつ呼んで、その人達の眞似をして、オイゲニーを笑はせるが、最後に、夜廻りのお爺さんになつて、大きな口を開けて一息に消してみせるのである。

「灯は消えた。最後の楽しみ、眞暗な闇の中での愛する姉の接吻、次の瞬間彼女は出ていつてしまつた」

とオイゲニーは「想ひ出の記」の中で、懐しくユリーを描いてゐる。ユリーはきつと此の遊びを自分の二人の男の子達と繰返したことであらう。長男のダドーは母の美しさとやさしさをそのまま受けついでゐて、大勢の伯母さん達の寵兒であつた。次男は祖父にあやかつてロバートと名づけられ、此の次は是非女の子を、そしてダヴィツト結社の一員であつた「キアリーナ」と名づけようとユリーは楽しんでゐたのである。

ユリーがバーデンを去つて五週間目に、彼女の死が報ぜられた。クララは弟のバルギールに悲しみの中で書いてゐる。

「彼女はその言葉の持つ眞の意味に於て、娘であり、姉であり妹であり、妻であり又母でありました。結婚後のユリーを御存知ないでせうが、何んと美しくあゝの娘の人格が發展したことでせう。夫にとつて、彼女が何んなに大切なものであつたか。彼の不幸を考えると私にはつぶやく權利がないと思へる程、私の心は彼の爲に疼いてをります」

かうしてクララがいつくしみ育てて來たロバートの七人の遺兒の中から、白い花のやうな清純なユリーが、先づ召されていつた。クララが特に愛した初孫であるユリーの子のダドーも、五年後の一八七七年に、その短い生涯を終へて母の許に旅立つ運命にあつた。ユリーの死は齡ひやうやく五十を過ぎたクララを待つてゐた、悲哀の序曲のやうなものであつた。天は、女手一つで彼女が守り育てた男の子達を次から次へと奪つていつたのである。

限りない家族の悲劇の中に、クララの心を温く慰めたものは、ロバートに對する後の理解と尊敬が年と共に新しく加へられることであつた。一八七三年の八月中旬には終焉の地ボンで、盛大なシューマン記念音樂祭が開催された。クララはマリエとフェリックスと共にボンに行き、オイゲニーとエリゼはその翌日に、數日前に結婚したフェルディナンドも蜜月の旅の途上出席した。クララは此のシューマン祭の感激を日記につづつてゐる。

八月十五日……先づ第一に私は彼の墓に詣でた。墓は美しく花で飾られ、月桂樹の花環が捧げら

れてみた。私は到底自分の感動を書き記すことは出来ない。それは悲哀と悦びと共に、私と子供達が、此のやうな音楽祭をみることを許された感謝が混合したものであつた。墓場の静けさは、私に新しい生命を與へて呉れた。ここに彼が眠つてゐる……そして彼の努力の刈り入れが彼自身に出来ぬことは何んといふ悲しいことであらう。

最初の練習は今朝行はれた。何んと澤山の藝術家が各地から集つてきたのだらう。ヨアヒムは又何んと素晴らしい大指揮者の貫禄を示したのか。ヨハネスも来てみた。

十七日……音楽祭第一日。第四交響樂で始まつた、そして「妖魔」が續いた。ヨアヒム夫人はよく唱つた。ストックハウゼンは罪人の役を素晴しく歌つた……

何んといふ温い心が各方面から示されたことであらう。何百といふ手が私の握手を求め、凡てのまなざしが喜悅に満されて私に注がれた、此等の愛情に壓倒された私の心に満されてみた想ひを、彼等も感じたことであらう。驚いたことに私は音楽祭の中心人物にされてしまつてみた。前もつて知らなかつたのは幸福である。知つてゐたら非常に神経過敏になつたに違ひない。今となつては力の限り自分を支へるより術がない。悦びは大きく、心の悲哀はそのままに私を夢中にさせてしまふ。

二日目にはクララがピアノ協奏曲イ短調を演奏し、ストックハウゼンが「ファウスト」を唱つた。三日目には五重奏、ピアノ二重奏、イ長調四重奏等が演奏された。シューマン祭にはジェニー・リンド夫妻を始めブラームス、ヒルラー、グリム、その他シューマンを愛する人々が多く出席した。そして「音楽祭は終つた。美しい記憶が一生を通じ、私と子供達の心に残るであらう」と書かれたやうに、感謝のうちに終つた。

二十二歳の少女であつたオイゲニー・シューマンは、母の親友のロザリー・レーザーに手紙を書いてゐる。

私達は大變に興奮してをります。第二日目は「マンフレッド」の序曲で始まりました。ヨアヒムの指揮のもとに驚くばかりに美しく、父さまの作品の中で私が一番好きな曲かも知れません。

そして母様の番になりました。全聴衆が立ちあがって拍手と共に口々に叫びました。喇叭が吹奏され、指揮臺の上に立つてゐるヨアヒムはハンケチを振りました。彼の顔は生々と熱情に輝き、驚く程若々しく美しく見えました。全聴衆のポケットからハンカチがだされた光景を、どうか御想像下さいませ。母さまは大安に美しく、まるで若い少女のやうに、花嫁のやうに、子供のやうに見えました。母さまの衣裳は美しかつたし、髪にさされた薔薇の花が一肩効果をあげましたの。母さまは少しもあがらず、ブラームスもこれ以上に立派に父の協奏曲が演奏されたのは、聴いたことがないと云つてをりました。

演奏が濟むと、巻き起つた嵐のやうな喝采と喇叭の吹奏、舞臺の母さまにむかつて少くとも百五十以上の花束が投げられました。フロイライン・レーザー、それは本當に素晴らしい光景でございました。何んなに私達も嬉しかつたか、到底書けない程でございます。

此の年の秋に、クララは色々考へた末に、伯林にフラットを借りることにした。八月に結婚したばかりの長男のフェルディナンドの、普佛戦争従軍中に始つたリューマチスが、突然悪化して、遂に松葉杖を使はねばならぬやうになつた上に、恐しいことには醫者の不注意から、激烈な苦痛を緩和さす爲に用ひられたモルヒネの中毒症になつてしまつたのである。伯林の家はティア公園に面した澤山の部屋のある快いフラットで、隣りはヨアヒムの住居であつた。然し此の家に集つた家族の数は少かつた。ルドウィックは精神病院に入つてゐたし、フェリックスも各地の療養所にゐて歸宅することが少かつた。三人の娘達が時々歸宅する母を待つて寂しく暮してゐたが、一八七七年には次女のエリゼも、ルイズ・ゾムマーホーフと結婚して米國へ旅立つたので、家は未婚のマリエとオイゲニーの二人となつてしまつた。クララは此のやうな不幸な出来ごとの中で、今は利用することも困難になつた、十年間の想ひ出深いバーデンの家を思ひ切つて手離してしまつた。その成長期の毎夏を過したバーデンの家はシューマンの子供達にとつて、天國のやうに懐しい想ひ出に満ちてゐた。バーデンの家を手離すと共に、老境に近づくクララの心は何か淋しく翳つてくるやうであつた。

一八七三年は事の多い年であつた。伯林に移轉する少し前、十月六日に、クララの父のフリードリッヒ・ヴィークも、數日の患ひでその生涯を閉ぢた。

「父の最後は平和であつた。八十八歳になつてゐたが藝術と自然に親しんで、感情は常に青年の如く生々してゐた。父と共に私の青春への絆が消え去つたことを、私は深く感じる。私達は種々な點で一致出来なかつたが、感謝の氣持で温められた父への私の愛情を私の一生を通じて何もかも犯すことは出来なかつた。父は何んと長い歳月を私の教育に捧げ、現実生活の美しさへの私の理解を深める爲に、何んと大きな影響を與へたことであらう。……私の父を失つた深い悲哀は、云ひ現はすことが出来ない。幼い頃の私にとって父は凡てであつた」

とクララは日記に記してゐる。ブラームスにクララが書いた手紙によると、生来勤勉で質素な生活に甘んじて、家族の爲に最後まで働きつづけてゐたヴィークが、六萬ターラーの遺産を家族の者に遺してゐたことが發見された。そしてシューマンとの結婚をめぐる長い確執があつたに拘らず、クララに對しても好意ある配慮がなされてゐたことを知つた時、クララは何か不思議な深い悲哀を感じるのであつた。

今は不治の宣告を受けて、精神病院に入つてゐるルドウィックの事は、絶えず彼女の心に重い翳のやうにつきまといつてゐた。ルドウィックを見舞う折など、クララは自らの心が苦惱に狂わないのが不思議な程に思はれた。「夜は殊に苦しい。あの哀れな子が、正直な人のよい目つきで、何時までもまじまじと私を凝視してゐるやうに思はれる」と、クララはさうした日の日記に書きつけてゐる。ルドウィックは、生きた骸のやうに遂に正氣に戻ることなく、長い間精神的に、經濟的に、母の重荷になつたままで、その哀れな生涯を終つたのであつた。

ルドウィックを訪ねるのも苦しかつたが、フェリックスを療養所に見舞ふのはクララにとつてもつと辛かつたやうである。シューマンの名を再び榮光に導き得たかもしれない才能豊かな青年が、結核の爲に餘命幾許もなく、最愛の母との數分間の會見にさへ、肉體的な苦痛を感じる病状に呻吟してゐるのであつた。

「私をめぐる凡てが悪くなりつつあります。フェリックスは明かに衰弱を増すばかりで、僅か數分間しか逢ふことも出来ません。彼を見る時私の心は疼きます。何をしてみてもあの哀れな子の面影が目の前にちらついてゐて、その悲哀に打ちひしがれぬやう、あらん限りの力で我心を支へねばなりません。此のやうに悲哀が私の心を押しつぶし、一瞬間も苦惱を忘れる折もないのに、力と自由さを以つて、今だにピアノが弾けるのが、不思議でございます」

と、クララはその頃ブラームスに訴へてゐる。フェリックスは長い闘病の後に、一八七九年の二月十六日の午前三時に、長姉マリエの腕に抱かれてその若い生命を終へた。二十四歳であつた。

「マリエは私をよばなかつた。彼は恐しく苦しんだ。彼は文字通りに死と闘争したのである。マリエはその様子を見守る苦しみを、私にさせたくないと考へたのであつた。いつも喜んで自分を犠牲にする彼女、常に愛に満ちてゐるマリエ……私は朝になつて、最早冷い亡き骸となつた彼に會つた。私はむしろ彼の死を神に感謝する氣持になつたことを告白する」

フェリックスの悲報をきいたブラームスは早速心の籠つた慰めの手紙をよこした。フェリックスと殊に仲のよかつたオイゲニーの身を案じ、又「貴女の側にゐられたらよかつたと思ふ。如何に長く書いたにしても、黙つて貴女の側に坐つてゐる方がすつと勝るのですから」と書かれてゐた。クララは、

「愛するヨハネス、御手紙に感謝します。大きな大きな慰めでした。私達が生きぬいてきた日々について語らうとすれば、言葉では到底私の思ひを云ひつくせないでせう。

一番辛かつたのは埋葬の爲にあの子がいよいよ連れてゆかれた時……落着いてはゐたものの私は恐ろしいほどに悲しかつたのです。死は残された唯一の救ひでした。あのやうな苦しみから、遂に彼が救はれたことは私達にも平安を與へて呉れました。オイゲニーもそのことをよく感じてをります。オイゲニーのことは今私の一番心懸りでございます。有難いことに春がもう戸口まで近づいてきてをります。やがて新緑が芽ぐんでくるのを見れば

……心も慰められることでせう！」

此のやうに次々と襲ってくる不幸に、クララは悲嘆のどん底に幾夜か投げ込まれ、或る時は日記に「人間はまるで子供を葬る爲に、長命をしてゐるやうだ」と述懐しつつも、遂に最後まで人生に絶望することがなかつた。かうした不幸の上に、その頃は寄る年波と共に、彼女の神経痛やリウマチスの發作も頻繁に起るやうになり、數箇月にわたつて公開演奏は勿論のこと、手紙さへ口述しなければならぬやうな日が續いた。一八七四年は殊に激烈なリウマチスの爲に、殆んど伯林とバーデンで靜養に過ごさねばならなかつた。

かうした日々をクララは當時ヘルテル社から發行の運びになつてゐた夫ロバート・シューマンのピアノ作品の全集の編纂に、マリエとオイゲニーの助力を得て専心したり、ロバートの歌謡曲を巴里のデュラン社からの依頼でピアノ曲に編曲する仕事などをして過してゐた。然し痛みが少しでも薄らいで、腕や指が僅かでも動かせるやうになると、毎日音階やアルペジオの練習を少しづつ始めて、演奏會の準備を怠らなかつた。

神経痛が悪化することは、演奏旅行に出られないことであり、収入の激減を意味してゐた。一家の經濟の責任者であつたクララは、定収入を得る爲に教職につくことを眞剣に考へるやうになつた。クララの女でありながら始終不自由な旅に出なくてはならない不安な生活を愁へて、ヨアヒムなどはもうずっと前から、音樂學校の教授になることを、機會あるごとに彼女に勧めてゐた。伯林の高等音樂學校やフランクフルトの音樂院等の教授の地位が提案されてゐたが、クララには種々な事情から決心が付き兼ねてゐたのである。丁度その頃再びフランクフルトの市の委員會から、非常な好條件の許に照會してきたので、クララはブラームスに相談した。ブラームスはもう既に長い間、家族の生活を支へる爲に、クララが無理な演奏家生活を續けてゐるのに反對して、折あるごとに演奏生活から隱退することを云ひだしてはクララの氣持を傷けたり、悲しませたりしてきたのだから、無論この話には大賛成であつた。一週に九人の生徒を教へ、夏期の四箇月の休暇の上に、冬期に演奏旅行に出る自由もある好條件であつたので、一家は一八七八年の夏に、不幸な想ひ出しか残らぬ伯林の家をたたんで、フランクフルトのミリウス街三十二番に移轉した。

教授を始めてみると、何事にも熱心で熱情を傾けて努力を惜しまないクララは、門下生が次第に一人前の藝術家に育つてゆくのに励まされて、音樂の教育の仕事の中にも、愛情と生きがひを感じるのであつた。後にはマリエもオイゲニーも音樂院の教授陣に加はり、クララ・シューマンの名聲を慕つて、歐洲ばかりか遠い米國からも、フランクフルトに生徒が集つて來た。毎年降誕祭の晩にシューマン家で催される音樂會は、シューマン家の知人にとっては忘れ難い大きな楽しみとなり、その日はクララの弟子達が師への感謝の贈り物として、各自得意の曲目を演奏するのである。ブラームスも此の集りの常連の一人であつた。ブラームスはその夜の光景について手紙に書いてゐる。

「各自思ひ思ひの樂器を手にした大勢の少女達の幸福さうな一團と、ピアノの前に嚴肅に坐つておいでの貴女、凡てがまるで短調で語られるバッハの遁走曲のやうな光景を、目の前に浮べることが出来ます」

ブラームスの理解者であり、クララの友であつたエリザベート・ヘルツォーゲンベルグはクララを訪問した後、ブラームスに書いてゐる。

「シューマン夫人が生々と頬を輝やかしながら、優秀な門下生達に弾かせて下さるのを、聽いてゐるのは楽しいございました。彼女は嚴格で寛大で、母であり教師であるのでした。もう一度生れて來て、彼女の弟子になれたら、何んなによいだらうと、私は心の中で思はずにはゐられませんでした」

その頃のブラームスは、最早幼兒のやうに純眞な眼をした内氣な少年ではなくて、印象的な髭をもつた堂々たる風采の大作曲家であつた。一八六六年、三十三歳の頃、ブラームスは一度髭を何んとなくのばしてバーデンの家を訪れたことがあつた。ところが此の髭はシューマン家の人々の大問題となつて、「折角の美しい容貌をぶち壊す」と、クララを始めフロイライン達の絶對反對にあつて、僅か數日で剃り落されてしまつた。然し四十代になり五十に近くなるに及んで、彼の體も、詩人的な細やかさを感じさせた容貌も、次第に肉

をつけ重々しくなってきたので、今ではその立派な髭が、彼の風采に一種の風格を與へることを誰も疑はなかつた。

ロバート・シューマンの死後既に二十五年に近い歳月が流れ去り、その長い年月の間の血のにじむやうなクララの捨身の努力が實を結んで、シューマンの音楽は最早獨逸國民にとって、なくてはならぬ魂の隠れ家となつてゐた。同時にブラームスの作品も、一作ごとに世の注目を浴び反響を起して、今では作曲界の權威として絶大の尊敬を捧げられてゐた。ロバート・シューマンは不滅の樂聖の一人として眺められ、その作品は神聖化され、多くの音樂者の研究の對象となり、演奏家は争つて曲目に加へた。多くの出版書肆は音樂作品の全集の出版のみでなく、彼の手紙や評論集の出版を計畫し、終焉の地ボンにはシューマン記念碑の建設の運動が起つてゐた。

かうした機運に向ふに従つて、シューマン未亡人に對しても、新しい尊敬と感謝が捧げられるやうになり、最愛の妻として演奏家として樂聖と共にその創作生活を體驗して來たクララは、樂聖の意圖を直接に後世に傳へる權威者として認められ、同時にブラームスの音樂の理解者として、彼女の音樂文化面に於ける地位は確乎たるものとなつた。クララの演奏が別に變つたわけではないのに、聽衆はシューマンの作品を演奏する彼女の腕の上げ下げにさへ、恰も聖なる啓示を聽くやうな讚仰の思ひで息をのむのであつた。教授生活に縛られて昔の如く頻繁に舞臺に現れなくなつたことは、一般の彼女の演奏への要求を益々刺戟することになつた。晩年のクララは外國は、おなじみ深い英國だけしか訪れなかつたが、行く度に涙ぐましい程の大歓迎を受けるのであつた。

「告別奏鳴曲（ベートーヴェン）はうまく弾けた。舞臺に戻ると花束が天井から、ギャラリーから、まるで雨のやうに降つてきた。聽衆は立ちあがつて何時までも拍手をつづけた。私は花束の上を踏んでピアノのそばに戻り、へ長調のノヴェレットを弾いた。英國人の好意は心に觸れるものがある」

と六十四歳のクララは、一八八四年の倫敦訪問の日記に書いてゐる。シューマンのノヴェレットは、當時倫敦に大流行をしてゐて、凡そピアノを弾く人々で弾かぬ人はない有様であつた。一八八六年の訪問では演奏會が果てた後、彼女の馬車を圍んだ群集が「又いらつしやい、クララ・シューマン！」と口々に叫ぶのを聽いた感動がしるされてゐる。

六十歳を越えたクララの演奏には、若きダルベールの絢爛たる技巧や、ルビンシュタインの熱情は見出せなかつたであらう。然し半世紀に亙る絶えざる研究と錬磨は、血と涙と共に生きぬいてきた人生の體驗に裏づけられて、彼女の演奏に、人の心に深く訴へずにはおかない内面性を與へたのであつた。彼女はその透明な音調を通じて、直接に聽衆の心につつましく然しひたむきに働きかける術を知つてゐた。晩年に於ける彼女の輝しい成功には、彼女の音楽を通じて、感じられる彼女の人格に對する一般聽衆の敬愛の情が、多分に働いてゐたことは眞實である。伯林の高等音樂院の教授である異父弟のワルドマー・バルギールは一八八五年に書いてゐる。

「寄る年波が貴女の演奏を下げないばかりか、或る點で進歩してゐるのは驚くべきことです。クララ、貴女は常に非常に明確な演奏をしてきた。然も貴女は音の清澄さの點でも、尚ほ進歩を示して居られる。貴女は年と共に演奏の完璧に近づき、常に個性に忠實であると同時に、貴女の音楽は益々精神化され、純粹性を加へてゆきます。その道こそ眞の藝術家が直觀的に進んでゆく唯一の道であり、センセーションを求めて焦つてゐる人々の道と自ら明確な對照を示してゐるのです。此の點についてのみ考察しても、貴女の演奏の純粹さと清澄さの影響の滲透力が、如何に普遍的であるか注目出来ることは誠に愉快です。……故に出来る限り公開演奏を續けられることが、必要だと考へます」

一八七八年の十月二十日には、クララの演奏家生活五十年記念の祝賀會がフランクフルトで催された。美しい豊かな卷髪と大きな眸をした九歳の少女が、はにかみながら、ゲヴァンドハウスの舞臺を踏んでから、五十年の星霜が早くも過ぎたのであつた。其の日、大勢の門下生や友人に圍まれ花束や祝辭に祝福されつつ、夢の如く過ぎ去つた五十年を想ふクララの心は、感激に溢れてゐた。

フランクフルト、十月二十日、日曜……忘れ難い日である。五十年昔の今日、私は生れて始めてライプチヒのゲヴァンドハウスで演奏をした。當地の人々は此の事を聞き傳へて、ラフ（フランクフルト音楽院の校長で作曲家）は音楽院で私の爲に楽しい祝賀會を催して呉れた。彼に家まで迎へられて學校に着くと、私の歩む道には花がふりまかれ、ラフの案内で花で飾つた椅子に導かれた。ラフは懇切な演説をした後に、私に月桂冠を贈つた。それから音楽が始まつた。曲目全部が私の作品のみで、教授達によつて演奏された。……これは全く思ひがけない驚きであり、此の温い心遣ひに私はひどく心をうたれた。馬車に乗ると私の周りに花の雨が降つて來た。歸宅するとラフ夫人、キッセル夫人等が私を待つてゐて、フランクフルトの人々からの美しいお祝品を贈られた。最も素晴らしい贈り物は、子供達と婿からの美しい時計で、ラファエロの繪が精巧に描かれ、子供等の名とフェリックスの詩が文字盤の下に彫られてゐた。

ライプチヒでもゲヴァンドハウス委員會の招待により、演奏生活五十年記念音樂會が催されることになつたので、クララは二十二日にライプチヒに旅立つた。

二十二日……私にとって楽しい此の出來事が公開の席上で行はれることは、私の希望ではない。……私には拒絶出來なかつた。故郷に於て、五十年前の初舞臺と同じ會堂で、此の祝典が行はれることは、私にとってあまりに意味深い。

二十三日……總練習で温く迎へられる。グラバウ、ウェンツェル、ウェンドレルの三人の老樂人は、五十年前の初演奏の折にも管絃樂員の中にゐた由、今日そのことを語つて呉れた。

二十四日……忘れ難い日。午前中は素晴らしい贈り物、祝辭、花、電報等にぼんやりしてしまふ。夜は演奏會。ロバートの作品のみが演奏され、私はイ短調の協奏曲を弾いた。會場は緑の常盤木と紅葉した柏の葉で飾られてゐて、一足舞臺に踏みだすと、全聽衆が立ちあがり、私は忽ち花の雨の中に埋つてしまつた……ピアノの前に坐るまで長い時間がかかつた、一度び、二度び、私は感動に壓倒されさうになり、烈しく身が顫ふのであつたが、やつと身を支へて協奏曲を落着いて演奏することが出來た。

會の終りに再び迎へられて、フィネックから立派な黄金の月桂冠を、ゲヴァンドハウス管絃樂團からの贈り物として贈られた。それは極めて精巧な細工で、葉の一枚ごとに私が一生の間に演奏した作曲家の名がしるされてゐた。

藝術家としての能力を、未だ充氣に保つうちに、此の日の喜びを神が與へ給うたことに心からの感謝を捧げつつ床についた。

此の日のクララを祝ふ爲に、その昔ロバートと死別れた直後の奮闘時代に、マリエとエリゼを預つて學校に通はせてゐたプロイサー夫人を始め、多くの昔からのクララの友人が列席してゐた。然しクララはそれ等の女友達の誰よりも、はるかに若く美しく見えた。相變らず大きく美しい彼女の眸は、温く生々と輝いてゐて、血色のよいなめらかな肌は少女のやうであつたと傳へられてゐる。然し此の輝しい榮先に満ちた席上で、豊かに微笑してゐるクララの腦裡に絶えず閃いてゐたのは、ロバートへの溢るる想ひであつた。

## 第二十六章 餘 光（一八七八年—一八八九年）

「朝の食卓の裁判所」と、或時ブラームスが形容したやうに、朝の食卓がそのまま家族會議になつて、種々の問題が相談され、決定されると共に、門下生が訪れてくる呼鈴が鳴るまでの時間は、家族の者にとつて楽しい團樂の時でもあつた。

シューマン家に滞在中のブラームスは、家中の誰よりも早く目を覺して、朝の公園に散歩に出かけて、食事の頃までに歸つてくるのが常であつた。いつも一番朝寝坊のオイゲニーが、遅れて食堂に入つてゆくと、ブラームスが誰に達慮もなく燻ゆらしてゐる葉卷の煙りの中で辛抱してゐる母の顔と（葉卷の煙りの嫌ひだつたクララもブラームスが手離さないの、いつか馴らされた。）長い髭をたらししたブラームスが、肥つた體を椅子から半分はみださせて、お腹をすかせて彼女を待ちかねてゐるのを見出すのであつた。懶け者のオイゲニーを非難するやうに、ブラームスは青い眼で眺めながら、

「君達は、朝の五時の森が、何んなに素晴らしいか知らないだらう」と云ひだす。オイゲニーもマリエも馴れてゐるので、こんな時には黙つてやり過すことに決めてゐるのであつた。香りの高いコーヒーを飲みながら、母娘が相談することは常に多かつた。葉巻を片手にブラームスも時々口をだしてゐるうちに、どんどん時間がたつてゆく。

「ヘル・ブラームス、練習を始めないと、音樂會で弾けませんよ」と、マリエにせきたてられて、ブラームスは黙々と立ち上がり、葉巻を手にしたまま、のつそりと音樂室の方に歩いていく。と間もなく名調子で弾かれるアルペジオの両手の反對進行が、閉された扉を通じて聴えてくるのであつた。

「彼の演奏には常に、何か挑戦的な鬭争的なものがあつた。私はブラームスが、私の母のやうにピアノを、愛する信頼する友に對する如く、勞はり考へてゐたとは思はれない。ブラームスはピアノを必要上嫌々ながら何か充分に利用すべき物、といつた風に考へてゐた如く思はれる」

と、オイゲニーは書いてゐる。

マリエは嘗つてブラームスの自作の變口長調協奏曲の演奏について「靈的な素描」と形容してゐるが、ブラームスは演奏にあつて常に曲の主なる輪郭を、韻律的にも破格をもつて強調し、明確なアウトラインを示して、人々に明暗の對照を鋭く印象づけるのであつた。そして熱情曲な部分にくると、恰も嵐が雲を吹き散らすやうな強烈な効果をあげるのであつたが、彼が技術的に無理な樂句にくると、勝手に速度をおとして弾いて平然としてゐた。此の正確さを缺く演奏振りは、鋭い精練された耳を持つ専門家達にとつては、相當聴きづらかつたやうである。そしてブラームスが年をとるに従つて此の傾向は益々ひどくなつた。ブラームスも或る程度までは此の缺點を自覺してゐて、自作以外はあまり演奏しなかつたが、一八八〇年、ボンのシューマン記念碑除幕式の記念演奏會に、シューマンの變ホ長調の四重奏のピアノを、ブラームスが演奏した折の日記に、クララは、

「變ホ長調の四重奏には失望した。ブラームスの演奏はよくなかつた。私もヨアヒムも茨の上に坐つてゐるやうな氣がした。ヨアヒムは時々絶望的な眼ざしを私に向ける。…四重奏を自分で弾かなかつたことは、かへすがへすも残念である」

此のシューマン記念碑除幕式は、クララの晩年を飾つた、幸福な出來事の一つであつた。

「一八八〇年五月三日午前十一時三十分、除幕式。お天氣に恵まれ、木の葉一つそよがず、淡い雲が太陽を軟かくおほつてゐて、暖かつた。

喜びと悲しみが私の心を満してゐたが、遂に悲しみが喜びと心の興奮を押へて、私の心を支配してしまつた。此の祝典に參列を許された幸運に對して、私の心は感謝に満された。凡ては素晴らしく計畫され、除幕と共に管樂器と合唱のみで演奏された『妖魔』の合唱は、鮮やかな効果をあげた。式の間私の心を去らない一つの思ひがあつた。それは子供等が間もなく私の遺骸を守つて此の同じ道を歩むであらうといふことであつた」

ブラームスが新作品をもつて訪れてくる度に、亂暴な演奏を聴かねばならぬことは、クララの神經にとつて一苦勞であつたが、老齡になるに従つて、クララの耳も遠くなり、荒い強過ぎる音にも次第に堪へられるやうになつた。一八七六年に第一交響曲のスケッチをもつて、バーデンを訪れて來た折に、クララは期待してゐたブラームスの「閃き」が感じられなかつたので「彼に告げるべきか否か、長い間心の中で争つてゐた」と日記にあるやうに、クララはひどく失望した。然し翌一八七七年一月に、ゲヴァンドハウスで演奏された時には、クララはその練習を終りまで聴かぬうちに、ブラームスに何も云はなかつたことを喜んだのである。ピアノで弾いた時と、色彩豊かな管絃樂になつた効果には大きな差があつた。

「此の交響樂は素晴らしい。靈感に満ちた導入部を持つた終樂章は、殊に稀にみる深い印象を私に與へた。陰鬱な導入部、それが次第に素晴らしく巧みに明るくなり、遂に輝しい終樂章の主題が現れる。恰も長い陰鬱な冬の日の後の、春の息吹きを如く、聴く者の心を暖めるのであつた」

然しクララは、第一樂章の第二主題と第三樂章のトリオの部分には不満で、その點をブ

ラームスに率直に述べてゐる。

次の秋にブラームスがバーデンに持つて來た、第二交響樂は、忽ち氣に入つて、その初演の日の日記には「第一よりもめざましい大成功。曲の持つ靈感と技巧に對して、我々音樂専門家は熱狂した」と書かれてゐる。

ブラームスのピアノ曲、室内樂、歌謡等は直接ピアノで味へるので、クララは殊に深く理解したやうである。既に作曲界の權威者になりながらもブラームスは常に彼女の意見を尊重してゐた。ブラームスは一見、他人の意見等は如何にも無視し勝ちな性格に思はれながら、あらゆる樂聖の中で最も謙遜な態度で、クララのみでなくヘルツォーゲンベルグ夫妻をはじめ、多くの人の意見を喜んで傾聴したことは、誠に不思議な感じがする。温順な性格のシューベルトですら、一生の間に僅に二度だけ非常な不機嫌な態度で、作品に對する忠告を聽いたのみであり、ショパンは批評らしいものは一切受けつけなかつたと、傳へられてゐる。如何にしたしい間柄とは云へ、かうした作品への率直な批判を、快く云ひ且つ受け入れ得る友情といふものは、お互ひの間に誠實があつて始めて、成立出来るのである。

クララはブラームスのピアノ協奏曲は、變口長調も、二短調も演奏を断念してゐた。曲の要求するダイナミックな力強い表現は、女性ピアニストの力に餘ることを、聰明な彼女はよく自覺してゐたからである。一八八四年の二月の或日、第三交響曲の草稿が届けられた時、クララはブラームスの理解者ヘルツォーゲンベルグ夫人と、作曲者に喜びを書き送つた。

「第三交響曲を二臺のピアノ用に編曲したものを、エリゼとやつと弾くことが出来ました。先日聽いた時は曲の美しさを充分捉へることが出来なかつたのです。どんなにもう一度聽きたいことでせう。編曲を半分しか送つてよこさないブラームスは、ひどい人です」

ヘルツォーゲンベルグ夫人は此の手紙を持つて、早速ブラームスの家を訪ねた。

「お手紙を見せた時、彼の顔は悦びに輝きました。あの交響樂が貴女にそんなに氣に入るとは思つてゐなかつたやうです。お手紙を讀む彼は、まるで小學生のやうに嬉し氣に頬を赧らめてゐました」

エリザベート・ヘルツォーゲンベルグは音樂的教養の高い婦人で、ブラームスとクララに氣に入られたばかりでなく、彼女を知る凡ての人に好感を與へた。「人は一瞥して彼女に戀心を感じずにはゐられない」と、一八七六年のクララの日記には書かれてゐる。彼女の夫のハインリッヒも音樂的な人で、時々作曲してはブラームスを悩ましてゐた。此の氣持のよい夫妻は、ブラームスの氣むづかしい氣質をすつかり呑み込んでゐて、彼が時として行ふ氣儘な振舞も、笑つて黙殺してしまふ朗かさを持つてゐたのである。なかなか他人とはしたしめぬ性格で、殊に晩年になつてからは孤獨を愛したブラームスも、此の夫妻とは眞の友情に結ばれることが出来た。夫妻とブラームスの間にかはされた書簡を見る時、エリザベートの手紙はブラームスの音樂への限りない讚美の言葉に溢れてゐて、理解あるうちにも常に批判的態度をとつてゐたクララのは誠に違つた感じがする。クララはブラームスの心を傷ける心配なく、新作品の不滿な點を自由に論ずることが出来た。例へば作品六九から七二までの歌謡について、此の二夫人の意見をブラームスが求めた折に、クララは大膽にその中の數曲に對して反對意見を述べてゐるが、エリザベスは彼女が好む曲への感嘆の言葉で頁を埋め、氣に入らぬ曲へは僅か一行しか言及してゐない。

ブラームスの友人中彼の毒舌からまぬがれた者は一人もゐなかつた。共にバーデンの家に出入りしてゐたヘルマン・レヴィーとの軋轢は、レヴィーがワグネル陣營に加はつたので、藝術的理由から理解出来るとしても、青年時代からの無二の親友であつたヨアヒムとの確執は、此の二人を心の友としてゐるクララの心を、ひどく苦しめたのであつた。ヨアヒムと歌手である夫人との間が不和になり、離婚訴訟をヨアヒムが提起した折に、人のよいブラームスは、夫人が夫の理由なき嫉妬による誤解の、犠牲になつたと信じこんで、夫人に同情の手紙を書いた。此の手紙が夫人側の利用するところとなつて、證據物件の一つとして、法廷に持ちだされた爲に、ヨアヒムの激怒を買ひ、以後ヨアヒムをブラームスに

對して以前より冷淡にさせてしまった。クララの希望と絶えざる努力に拘らず、その後の二人は若い頃互ひに抱いてみたやうな、絶対の信頼と愛情を取り戻すことは出来なかつたやうである。

或時、シューマン家の朝の食卓で、物思ひに耽つてみたブラームスが、

「私には友がない。友だと名のる者があつても信じてはいけませんよ」

と、いきなり眞面目な顔をして云つたので、マリエとオイゲニーは顔を見合せた。オイゲニーが思ひ切つて、

「ヘル・ブラームス、友達は何世の中で人間が得られる、最も有難いお恵みではないかしら、貴方はどうしてそれをお拒みになるの？」

と云ふと、瞬間、彼の青い眼が驚愕したやうに、オイゲニーの顔をまじまじと凝視してみたが、そのまま立ちあがると、一口も云はないで、のつそりと部屋を出て行つてしまった。

ブラームスは自らの癩癩や毒舌に悩むことが多かつた。彼をよく知る者達は、彼の氣質を心得てゐて、彼の氣持が追ひつめられる前に巧みに話題をそらしてしまふのであつた。クララの日記にさうした一例が、鮮かに描かれてゐる。

「話題はいつかヘンデルに對する口論となり、ワルドマー（クララの異父弟）はひどく興奮した。ブラームスは始めは黙つてゐたが、やがて荒々しく失禮なことを云ひ始めた。と、ストックハウゼンが云ふことがなくなつたので、突然美しい聲で唱ひだした。おかげで口論が鎮まつた」

クララとブラームスの友情の中にも、お互ひに不快な感情が度々生れたり消えたりした。その中で最も大きな誤解は、ロバートの第四交響曲の出版が原因であつた。當時ブライトコップ・ヘルテル社から、シューマン全集が刊行されることになり、クララはその準備に忙殺されてゐたので、無論ブラームスも喜んで援助を申し出たのである。シューマンに對する根本的な理解の點ではお互ひに一致してゐるのであるから、些細な意見の對立があつても、それ等は自ら解消したのであつたが、ブラームスがあまりに悠々と氣長にやつてゐるので、完成の期日が非常に遅れてしまつた。次第に年をとつてきたクララは、最愛の夫を記念する此の仕事の完成を見ずに、死ぬやうになつてはといふ不安から、次第に辛抱が出来ない氣持になつてきた。その結果他の人にも仕事の援助を頼むことにしたのであるが、それがシューマンに對する純粋な高貴な動機から仕事に加はつたブラームスを、ひどく不快に感じさせる原因となり、加へて解釋上の意見の對立などがこじれて、お互ひの間の不快な感情が益々大きくなつていつた。

そこへ二短調交響曲の問題が起つて來た。此の交響曲は青年時代に一度完成し、後にシューマンが改曲して、第四交響曲として發表したのである。クララはシューマンが作曲家として初期時代に屬する此の原作を改訂した時には、作曲家としても圓熟した時代であり、自分のしたことを自覺してゐた筈であるから、ロバートの意志に忠實である爲にも改訂版を全集に加へるといふ意見を持つてゐた。

ブラームスは原作の方の草稿を見て興味を持ち、オーケストレーションの効果に對する専門家の意見を求めて、ドレスデンの指揮者フランツ・ウエルナーに、クララに無斷で相談した。ウエルナーは研究の結果、シューマンの晩年のデュッセルドルフ時代には見られぬ「魅力と輕快さと透明さ」があると云つた。クララは納得出来なかつたので問題をそのままにしてゐると、二年後になつて、ウエルナーが此の初期の草稿を、シューマンの遺作として出版するといふことを雑誌の記事から知つたのである。「シューマン全集」以外に、他人が無斷でそのやうな出版をすることを、クララはひどく不快に感じた。

一八八九年に此の原曲の出版について、ブラームスがクララに相談したことがあつたが、その時クララは確答を避けたのであつた。ブラームスは此の原曲と、後にロバートが改曲したものを、頁の左右に對照させた豪華版の出版計畫に夢中になつてゐたので、クララに相談すれば折角の計畫が挫折せぬかと恐れたのであつた。立派に出來た暁には、彼女に赦して貰へるものと身勝手に考へてゐたのである。然し凡ての計畫が、彼女の背中で行はれたこと、ワグナー派の指揮者ウエルナーが加はつたことは、彼女の怒りを刺戟するに充分

であつた。クララがドレスデン巡遊中に受けたウヰルナーの態度への個人的不快も手傳つて、クララは夫から残された彼女の聖なる権利に對する、此の冒瀆に堪へられなくなつたのである。

「出版に私が反對しなかつたとしても、承諾したものと勝手に解釋されては困ります。ウヰルナーが加はつたことも私には理解出来ません。出版者が貴方なら又全く別問題です。作者に誰よりも近く居た方のことですから、貴方の不満については、私は何も申しません。一致は到底不可能です」

とクララは書き送つた。ブラームスは彼女の赦しを求めてその年の降誕祭にクラリオネットの五重奏と三重奏の二曲を捧げた。然し此の和解の試みもお互ひの間の蟠りを解く力がなかつた。その頃のブラームスはクララの愛情の圏外に残された自分を意識して、ひどく淋しく惨めに感じるのであつた。翌一八九二年のブラームスの五十九歳の誕生日にはクララから短い祝ひの手紙が届いた。「彼女の手紙は灰色に包まれた私の明け暮れに暖い陽光を投げかけた」と、ブラームスは喜ぶのであつたが、秋が近づいてクララの満七十三歳の誕生日がくると、ブラームスは最早寂寥に堪へられなくなつて……

ブラームスからクララへ。

一八九二年九月十三日、維也納にて

此の佳き日にあたり、放浪の子が昔のままの尊敬のうちに貴女を想ひ——貴女は彼にとって世界で最愛の人です——總て美しく望ましい事を、心から祈ることを何卒お許し下さい。寛大な貴女の心を誰よりも失つた私は、長い間その爲に苦しみました。こんなにも御非難を受けるとは夢にも思はなかつたのです。

私には御立腹の眞の理由が例の交響曲の出版だけによるとはどうも受けとれません。數年前にも同じことを感じたことがあります。私が編輯したシューマンのピアノ曲が、全集に加えられなかつたことから、私は全集に私の名が關係することを貴女が好まれないといふ印象を受けました。私にはその他に理由が発見出来ません。友人に對する時、私が不器用であることを自覺してをりますが、貴女は此の私の短所に對しても、長い間忍耐して下さいました。もう二三年我慢していただけたらと思ひます。

四十年にわたる忠實な御奉公（貴女と私の關係を如何におよびなさらうと結構です）の後に「新しい經驗の一つ」と諦めてしまふのは、あまりに残念です。私は孤獨に馴れてゐますし、この大きな空虚さに直面することも堪へ得ることと信じてますが、今日はどうかもう一度、貴女と御主人が私の人生の最も美しい經驗であり、私にとって最も豊かな高貴なものであつたことを、繰り返させていただき度く存じます。貴女にお目にかかる機会を失ふ苦痛に逢ふのは、自らの振舞が招いたことだと深く感じてをります。然し貴女と「彼」に捧げる愛情と尊敬の想ひは、永遠に私の心を暖め、明るく照らしつづけることでありませう。

此の和解の手紙はスイスのインターラーケンに靜養してゐたクララの出發の日が届いたので、返事は九月末になつてフランクフルトから書かれた。

シューマンの名と貴方の名を結びつけるのを、私が好まぬとは、何んといふとんでもない誤解をなさるのでせう。そんなお考へはきつと魔がさした折にでも起つたのだと思ひます。長年の藝術的な協力の後に、そんなことがお考へになれるとは、私には到底呑み込めぬこととございます。そんなことは私が長年云つてきた貴方への讚美や、貴方がお手紙の最後に書かれたこととも、一致しないではありませんか。貴方がしばしば御交際のしにくい方だと仰しやるのは本當です。けれども私の貴方への友情は常にそれに堪へてまゐりました。

もうやめませう！ 不和や口論程私を不幸にするものではありません……私は此の世の中で最も平和を愛する人間ですから……愛するヨハネス、私達も亦調子を揃へませう。貴方も望みなら、貴方の美しい新しいピアノ曲が、よい機会を與へて呉れることと思ひます。

長い間待ちこがれてゐたクララの此の手紙を受けると、ブラームスは「心の底」から、彼女のやさしい心に感謝して「インターメツオ」を早速送つてよこした。このやうにして、お互ひの誠實さと率直な努力によつて、二人の間の誤解は常に和解への道が開けるのであつた。四十三年間に彼等二人の間にとりかはされた、現存してゐる八百餘通の手紙を詳し

く検討する時、眞の意味での争ひは発見出来ない。若い時代はお互ひの性格にも融通性もあり、互ひに理解する餘裕もあつたので、クララが受ける心の傷手も深刻なものではなかつたが、孤獨な生涯を送つたブラームスは、老境に近づくに従つて、次第に氣むづかしさが烈しく露骨になつて來た。一方既に七十歳になつてゐるクララにも、若い時のやうな忍耐と寛容を求めることが過酷となり、お互ひに愛し信じながら、些細な事に意見を譲らず、お互ひに苦しむことがあつたのであつた。

然し此の和解を最後として、老境に入つた二人は、互ひの存在が如何に大切なものであるかを、明かに悟つたのであつた。殊にクララはブラームスの所謂「機嫌のよい日」を望んで、二度と不快な誤解が起らぬやうにと心を遣つたので、クララの死に至るまでのその後の数年間は、平和な靜かな夕陽の光りが、二人の友情の上に淡く照り輝いたのであつた。

交響曲についての誤解が起りつつあつた一八八八年の七月に、クララは長男フェルディナンドの家族に關する、彼女の心勞を打ちあける手紙をブラームスに書いた。

「フェルディナンドは元氣さうですが、松葉枝でやつと歩ける程度で、醫者は全快はおぼつかないと云つて居ります。伯林の氣候がよくない由ですので、夫婦と小さい子供達二人を、何處かあまり生活費のかからぬ小都會に、移さなくてはなりません。シュネーベルグにやつてある三人の男の子は丈夫で、ゆき届いて養育されてゐるやうです。彼等の將來についても亦心遣ひが多く、出来るだけ早く各自仕事につかせてやり度いと考へてゐます。あの孫達の教育費を、いつたいどうして調達したらよいのでせう。私の死後は又子供達が？三人の孫の生活費だけでも一年に二千マークはかかつてゐる上に、フェルディナンドの家族を支へる爲に、毎月五百マークも私にかかつてくるのです。家を賣つて、小さい住居に引越でもしないことにはとしばしば考へるのですが、私の生命ももう残り少ないし、子供等もそんなことはして呉れるなど申してをります。こんな話は、したい貴方にだけ申し上げるのです」

悪性のリューマチスに不治を宣言され、既に十年近くも病みつづけてゐるフェルディナンドと、その妻子達七人の生活費は、今も尚ほ七十歳に達したクララの双肩にかかつてゐたので、クララの教授及び演奏による収入と、その少し前に設立されたシューマン基金からの収入を加へてもシューマン家の經濟は充分だとは云へなかつた。シューマン基金といふのは、一八七三年にベンデマン、ウェンデルシュタット等シューマンの友人達が發起人となつて、全國から募集されてクララに捧げられたのである。

藝術家として生涯の凡てを、シューマン夫妻に負つてゐると考へてゐたブラームスは、何かの機會に恩返しをしたいものだと待ち兼ねてゐたので、したいあまりに不用意に彼女が洩らしたシューマン家の經濟の内幕話は、ブラームスに、好機來れりと思はしめるのであつた。

七月二十四日。御手紙を一瞥するなり「自筆で書かれてゐる、ではリューマチスが快方に向つたのであらう。目出度い！」と私は喜びました。

然し私は直ぐお返事が出来ませんでした。私の心にある想ひが容易にペンをとらせないのでした。然し、さうしても居られませんので、何卒寛大な温いお心を私によせて下さつて「諾」とお答へ下さいませんか。私は貴女を煩はす凡ての事柄、貴女の豊かな御生活にさへ、何時か這ひ寄つた御心勞に對して、心の底から御同情申し上げてをります。

幸に私には經濟上の心勞は何にもなくなりました。使ひ道も享樂することもない私に、金が豊かに恵まれてゐるのに貴女にその御苦勞があることは、全く何ふさへ腹立しい事です。私は現在の生活を變へようと思はず、今與へてゐる以上に親族の者に金を送る必要もありません。ですから私は何の感慨もなく餘つた金を、欲するままに使用することが出来るのです。私は死後も別に責任もなければ希望もありません。

短く云へば問題は簡單です。此の二三日の間、私は僅の金を如何にして貴女にお贈りしたものかと思ひ煩つてをりました。富裕な一藝術後援者として、匿名でシューマン基金に寄附したものか、又何んとか……貴女が私をよい人間と考へて下さり、私が望む如く私を愛して下さるなら……問題の第二段は極めて簡單です。何も仰しやらずに、お孫さん方の今年の出費の、私の分擔額として一萬マークを、私の餘分の収入からお受け下さいませんか。

ジムロックが再び多くの合唱曲、四重奏、歌謡等を持つてゆきましたが、結構過ぎる報酬も私には何の役にもたらず、国立銀行に空しく入れられるだけなのです。貴女が簡単に「諾」とさへ云つて下されば、私の仕事と報酬が何んな悦びに變るか、よくお考へ下さい。御返事は二つ考へられますから、お受け頂けない場合は、ジムロックにシューマン基金に拂ひ込ませる決心であることも、申し上げておきます。

#### クララの返事。

御親切な御申し出に對して、何んと申し上げたらよいでせうか。御手紙を拝見しつつ、深く感動せずにはゐられませんでした。このやうな瞬間に感ずるものに對して、言葉はあまりに貧しく響くものでございます。私は貴方の御手紙を手に、貴方の御心遣ひは永らく味はなかつた心の安心を與へて下さつたと、申し上げるより他に術がございません。

けれども、只今は折角の御好意を、お受けすることが出来ないでございます、未だ本當に逼迫してゐないのに、頂くのは正しいことではありません。昨年と今年の英國の収入から、未だ殘金がありますので、今年中は充分間にあひますし、エリゼも男の子一人の教育費を、引き受けて呉れると申してをります。

私の不安は主に將來のことなのです。演奏會による収益が次第に減るに従つて、フェルディナンドの子供達への支出は増す一方なのです。私は貴方をよい方だと思ひ、お望みのやうに愛して居りますから、本當に逼迫した折には早速お願ひすることをお約束致します。此の答で満足していただけますか？ 私の言葉を今は信じて、それ以上にお取り計らひ下さらぬやうに、呉々もお願ひ致します。…では感謝に満ちた心の温い御挨拶をお受け下さいませ。

勝氣なクララの自尊心を、傷けまいと、用心を重ねて試みたブラームスの折角の計畫も、失取に終つた。承諾を求めることに焦り過ぎた結果、かへつてはつきりと辭退させる機會を與へてしまつたのである。シューマン基金に寄附することさへ、許可なくては出来ないことになつてしまつた。ブラームスはがっかりしてしまつたが、その後二箇月の間色々考へてゐるうちに、此のやうな問題に、最初から承諾等を求めたのが間違つてゐることに氣がついたのである。ブラームスは次の機會を待つことにした。

此の年のクララ六十九歳の誕生日は、晩年のクララにとつて感動的な日となつた。フランクフルトの音樂院では、特に彼女の爲の祝賀會が催され、生徒の心のこもつた祝辭は、涙もろくなつたクララを涙ぐませた。ライプチヒ、伯林、英國等の音樂關係者からも祝辭が送られ、祝ひの手紙や、電報の数が二百を越え、詩や花籠や贈り物が部屋に溢れる程届けられた。

彼女は又彼女の爲に計畫された祝賀演奏會に出演して、聽衆の非常に温い拍手に迎へられた。

「私はこんなに協奏曲を立派に弾けたことはありませんでした。一晚よくやすんだので今日の私は少女の如く元氣なものでした。ああ懐しいロザリー！ 貴女に凡てをお見せして、嬉しい祝辭を讀んで差し上げられたら！ こんなにも人々に愛せられてゐるとは、私は夢にも思ひませんでしたの。自らを顧みると恥しい氣が致します」とクララは、親友のロザリーに、書くのであつた。誕生日の興奮もいづらか冷めた或日、ブラームスから手紙が届いた。

愛するクララ、どうかお怒りにならないで下さい。da Capo で再び申しあげます。過ぐる夏の私の申し出に對して、温かい心で御辭退なさいましたので、何の蟠りもなく敢へてもう一度申し上げます。

もう少しよい工夫もあつたでせうが、私にはわかりません。ですから貴女の足許に一萬五千マークを捧げることをお許し下さい。入手したと、郵便はがきにそれだけ書いて下さるだけで結構です。…他には何にもお書き下さいますな…美しい秋の日を貴女が楽しんでお過しの御様子、貴女の氣持のよい家と美しいお庭を私はしばしば愉しく想ひ浮べてをります。心から皆様によるしくお傳へを願ふと共に、何卒御腹立ちなきやう、美しい友情のうちにお受け下さるやう、切に願ひ上げます。

心情の溢れた此の手紙を受け取つたクララは、ヨハネスの温い心遣ひに對しても此度は

喜んで受けずにはみられぬ氣持になった。クララは早速ブラームスに

十月九日、お金は着きました。私は途方に暮れてをります。お返しは貴方の温い友情に對しても出来ません。ではお受けしては？ 私は到底感想を申し上げられないのです。ただ私が世界中の他の誰にも望まないことをおさせする程に貴方を信頼してゐることを、何卒お知り下さい。

暫くの間此のお金はフェルディナンドや子供達の爲に、是非必要になる折まで保管致します。御好意は私に眞の安心を與へて下さいました。握手をもつて心から御禮申し上げます。心からの感謝の中には、多くの悲哀もまじつてをります。私の感動は到底云ひつくせません。近く當地でお目にかかれませんか。御機嫌よう、愛するヨハネス、どうか貴方の御様子も近くおきかせ下さいな。

十月末にはクララの演奏家生活六十年の祝賀會が、友人達の手によつて盛大に催された。

## 第二十七章 日 没 (一八八九年—一八九六年)

一八八九年 九月十三日 バーデン

七十歳といふ歳が遂に訪れて來た。悦ぶべきであらうが、哀愁に満ちた悦びである。未だ多くの愛情が私を圍んでゐるものの、如何に多くのものが、既に失はれたことであらう！

老境に入ることは、藝術家にとつて容易なことではない。然し友人と子供等の愛のおかげで、その日は祝日となつた。限りなく届けられる花籠。最初に來たのはバーデンの大公妃から、心の籠つた書状と共に贈られた素晴しく美しい薔薇の花籠であつた。

朝食が儂んだところにワルドマーが、大きな月桂樹の花輪をもつて來た。子供等はそれ等の美しい贈り物を次の間に運んで忙し気に飾つてゐる。凡てはあまりに私には勿體ない品ばかりである。ウィルヘルム皇帝から藝術に對する私の功績を嘉して、黄金のメダルを授けられた。驚きの中にも嬉しく思ふ。祝電が一日中絶え間なく届けられた。その中には皇后、皇太后、ヘッセンのアナー大公妃から等。夜、床につく時、私は唯一つの想ひと祈りを心に持つてゐた。それは、もう数年間、肉體も健康で子供等の愛の中に生きることを、天よ許し給へといふことであつた。

書齋の机の上には祝電や手紙が盛りあがつてゐたし、フランクフルトの音樂院からは、一人では抱へられない程の大きな花籠を届けて來た。次女エリゼ・ゾムマーホーファー家に招かれて午餐の席についたクララは、贈られた美しい花が枯れることを氣にしたり、澤山の手紙に返事をしなければならないことを考へるのであつた。

此の日彼女は多くの人々の好意の中で、大いなる喜びに感動しつつも、心の中に身に食ひ入つてくるやうな悲哀の情があることを、どうすることも出来ないでゐたのである。それは人々の好意が、現在の彼女にではなくて、彼女が成し遂げた過去に對して捧げられてゐることを、彼女自身がしみじみと感じてゐたからであつた。過去に満足し、過去の想ひ出に生きるといふことは、彼女の性格では考へられぬことであつた。七十歳になつてさへ彼女は、老いて尚ほ自分の演奏が少しづつであらうと進歩してゐることを信じ努力する事に生きがひを感じる人であつたのである。

長い間の血のにじむやうな努力の結果、クララの優美な詩情に溢れた調和ある演奏は、音量の鮮やかな對照と熱情を荒々しく露出するリストやその一派と對抗して、もつと内面的な靜かな温い音樂境地を守り續けてきたのであつた。それは最高の意志の力によつて統御されて始めて生れてくる種類の、純粹さと透明さをもつた音樂であつた。生々しい音、荒々しいタッチ、不自然な誇張された表現、さうしたものをクララは非音樂的なものとして嫌惡した。彼女のレガートとカンタビレの美しさについて、多くの演奏家が、クララのメロディーは液體の如く人聲の如く流れてゆくと感嘆してゐる。彼女は又インタープリテーションに於ても獨特の境地と手腕をもつてゐた。偉大なる俳優がシェクスピアやゲーテの劇の人物に生命を與へるやうに、彼女は作曲者と聽衆の間に温い感情の交流を虹の如くかけることが出來た。殊にシューマンのピアノ作品を弾く時、彼女のピアノは、最早、ピアノではなくて、愛する夫の心と彼女の心の合唱であり、魂の燃焼であつた。作品への深い愛情が、彼女の聽衆の心を、何よりも温め、忘れ難い感動を與へたのである。

演奏中にさへ突然發作が起る程に、晩年は神經痛とリウマチスに悩まされ、指先まで

麻痺することがしばしばであつたが、クララは肉體的條件と必死の思ひで戦ひつつ、平静さをもつて演奏を續けるのであつた。聴衆は老いたるクララ・シューマンの烈々たる精神とヘロイズムと、永遠に心の若さを失はぬみづみづしい感情に壓伏されて、老齡による技術的な缺陷や、力の不足などは気にならなかつたのである。彼女が女性の身で大ピアニストが輩出した十九世紀の後半期にかけて半世紀以上にわたつてピアノの女王としての地位を確保し得たのは、ピアノ演奏史から見ても驚嘆に値ひすることである。

父ヴィークの厳格な教育により、昔から過酷な程に藝術に對して自己批判的であつたので、筋肉の運動の支配が昔の如くゆかなくなつたことを、やがてクララ自らが悲しくも認めるやうになつた。彼女の演奏は老齡の演奏となつた。若いピアニスト達は雨後の筍の如く、水平線上に現れてきた。彼等は彼女には失はれた若さと、弾力性のある筋肉を持つてゐた。彼等の多くはリストを眞似て、雷の如く荒々しい和絃をたたき、ピアノにオーケストラ的効果を要求した。時代はピアノといふ楽器に對する概念を變へたのである。聰明なクララは戦ひが既に終つたことを悟つてゐた。

ブラームスは最早如何なる支持者も必要としない。彼の作品の偉大さは未だ一般に充分に理解されないにしても、明かに理解に向つてすすんでゐた。ブラームスは孤立してゐた。ボヘミアのドヴォルザーク、露西亜のチャイコフスキー、ノールウェーのグリーク等、國民音樂派の人々が次第に頭角を現してはゐたが、シューマンや、ブラームスの浪漫主義を嗣ぐ人は現れなかつた。

一方ワグナー派の音樂運動は、一般聴衆の支持を得て潮の如く全世界に擴がつていつた。ワグナーは既に死んでゐたが、彼の幻惑的なオーケストレーション、感覺的な美しさ、感情の誇張等は、若い作曲家に流行病の如き逞しい感化力を持つてゐた。クララは嘗て「未來に於て、此等の昔樂が凡て消滅しても、ブラームスの静かな美は残るだらう」と云つたことがあるが、二十世紀も半ばに近い今、彼女の豫言は將に實現した。ブラームスは現在世界各國で、最も多く演奏される作曲家の一人である。

七十歳の誕生日も過ぎた九月末日の日記にクララは「悲しいことに演奏は非常に私を疲らせる。もし全く弾けなくなつたら、私はどうして生きていつたらよいであらうか」と悲しい口調で記してゐる。その日居合せてゐたブラームスは、維也納に歸ると彼女を慰める手紙を書いた。

「貴女の指の下で、夢見るやうに軟かくさまよつてゆくニ短調の奏鳴曲（ブラームスのヴァイオリン奏鳴曲第三）への想ひは、あまりに美しく懐しい氣が致します。草稿を机の上に擴げて、私の空想は貴女と共にやはらかいペダルの効果の中にさまよつてゆきます。貴女のお側にゐる時に勝る幸福を、私は知りません」

一八九〇年の正月早々、クララは流感にかかつた。老齡のことではあるし、相當悪質のものだつたとみえて、恢復はかなり永びいた。「私には二人の守り天使がゐた。何んとうよく看とつて呉れたことか！ 何んといふ愛情で私を守つてくれたことか！」とクララは、今は五十歳に近いマリエと、四十歳に近いオイゲニーの二人の娘の愛情に、感謝を捧げてゐる。

老齡とリューマチスと耳が不自由になつたことから、長らく公開演奏をしなかつたクララは、一八九〇年十一月にムゼウムでショパンのへ短調協奏曲を久しぶりで弾くことになつた。その前の一週間を、彼女は嘗つて味つたことがない不安のうちに、どうしても落着くことが出来なかつた。彼女は記憶力を失ひ、日に何度となく、樂句を繰り返し繰り返し頭で考へてゐる自分を見出すのであつた。

「まるで我家で弾いてゐるやうに、うまく弾けました。しかも聴衆に刺戟されて家では弾けない程よく出来たのです。神に感謝すると共に、これが私の最後の演奏になるのではないかと思ひます……ピアノの前に坐つた時は若い頃と同じやうな感動を覺えましたが、時々メランコリックな想ひが心に翳を落すのでございました。永遠に舞臺から別れるのは何んとう辛いことでせう」

と親友のロザリー・レーザーに報告してゐる如く、演奏は立派に出来たが、これが、彼女

の最後の公開演奏となつた。七十一歳の秋であつた。その翌春には再び肺炎を患ひ、その後は健康が急に衰へたことを悟つて、音楽院の教授の地位も退き、自宅で楽しみに數人の弟子を教へて佗しさをまぎらせてゐた。その中には長男フェルディナンドの子供である孫のフェルディナンドとユリーがあつた。四女のオイゲニーがその頃ピアノ教授として英國に行くことになり、急に淋しくなつたところへ、何十年來の友のガーデやフェルールストや英國の友人バーナンド等が引き續いて死んだので、クララの心はともすればしめり勝ちになるのであつた。

一八九一年の五月には、長らく病みクララの重荷であつた長男フェルディナンドの死の報知がクララを驚かした。既に二十年の長い歳月を、不治の病と戦つてきた、残された最後の男の子も、遂に五人の子女を残して、母より先に逝く運命であつた。かうした不幸の中で、次女のエリゼ一家が、三人の孫と共にフランクフルトの彼女の住居に近く移つてきたのは、晩年のクララの明け暮れを賑はすことになつた。

此の頃からクララの聴覺の減退は、年と共に益々烈しくなつて來た。

「ゼムブリッヒの『フィガロの結婚』あの輝かしい音楽が殆んど聴えず、斷片的に聴えるので少しも楽しめなかつた。では何故歌劇場に出かけて行くのか。私は幻想に生きてをり、今日こそは、もう少しましかしらと思つてゐるからである」

と、一八九〇年五月二十日の日記には書かれてゐる。ブラームスは、相變らず新しい作品を送つてくるので、クララはこれと死闘する。せまい部屋で演奏されるピアノや室内樂は、相當に聴えるのであつたが、管絃樂を味ふことは絶望的であつた。

「ブラームスの二長調交響曲を聴き度く、出かけてみたが駄目であつた。フォルテの部分が一回よく聴えただけで、凡てが違ふ音に聴え、静かな部分は皆目わからなかつた」

と、一八九三年十一月三日の日記にあるやうに、七十四歳の頃には聴覺は完全に破壊されてゐた。然も彼女はマリエと共に演奏會に行くのを楽しんでゐたのである。一八九四年には、スイスのバーゼルでの日記には

「本寺（ドーム）で大演奏會があつたが、私は第九交響曲だけで歸つた。自分の耳の中で鳴つてゐる四分の六拍子の音の他は、何一つ捉へることが出来なかつたのである。第九交響曲を何一つ聴けないとは、實に苦しいことだ。辛かつたことは誰にも云はなかつたが、黙つてゐることも亦苦しい」

一八九四年の十一月に、ブラームスは新しいクラリオネットとピアノの爲の奏鳴曲をクララに聴かせる爲に、クラリオネット奏者をフランクフルトに招んで演奏したことがあつた。丁度ヨアヒム四重奏團も來てゐた。此の時のことを當時十八歳であつた孫のフェルディナンドが書いてゐる。

「小柄な肥えた紳士（フェルディナンドはブラームスを斯く形容する）の頤髭は銀鼠色に變りかけてゐるが、彼の奇妙な鼻髭は一方は赤く一方は銀色である。彼の聾は高く澄んでゐてかんかん響いた。祖母は相愛らずシガーを離さぬブラームスと並んで、長椅子に坐り、樂譜を見ながら聴いてゐて、時折、『ブラヴォー』と云つた」

これはヨアヒム四重奏團の練習の時の光景である。ブラームスは、クラリオネット嬢と呼んでゐるおとなしいミュールフェルドを停車場まで迎へに行き、夕べの食卓に意気揚々として現れた。食卓が片づけられると二冊の草稿がとりだされた。ストックハウゼン夫妻も聴きに來てゐた。今では作曲界の大御所的存在となつてゐるブラームスも、クララの前では、ひどくおとなしい。

「彼は、喉を鳴らして甘えてゐるやはらかな小猫のやうだ」

と少年フェルディナンドは、ブラームスの様子を髭髯とさせる。ブラームスはクララに樂譜をめくることを頼んだ。樂譜を見つつ、なるたけ近くで聴ける爲である。

「一樂章ごとに祖母は彼女の喜びを述べ、ブラームスは『續けませうか』と尋ね、彼女が嬉しげに頷くのを見て演奏を續けた」

とフェルディナンドは書き續けてゐるが、彼もブラームスも、彼女が音樂を楽しみ得たかどうかは知らなかつたのである。

「私は少ししか聴けませんでした。簡単な音の組み合せだけで、和聲が複雑になると、渾沌としてしまふのです。それが私を寂しくさせたことはお解りでせうね。ブラームスは大變に上機嫌です。いつものやうにブラームスが泊つてゐるので、マリエは忙しくして居ります」

とクララは親友のロザリーだけには、眞實を打ちあけてゐる。クララは此の時、私的な集りで、モツアルトのピアノ、ヴィオラ、クラリオネットの爲の三重奏と、シューマンがピアノとクラリオネットの爲に書いた幻想作品を、ミュールフェルトと演奏した。

一九九五年の二月にブラームスは、ライプチヒに於て壓倒的な勝利を経験した。彼の二つのピアノ協奏曲はゲヴァンドハウスの定期演奏會の曲目に加へられ、ライプチヒの聴衆も遂にブラームスの音樂の地味な美しさに陶醉するやうになつた。二短調のピアノ協奏曲が大失敗をして、クララに慰められたのは未だ昨日の如く思はれるのであつた。

シューマン家で音樂の集りが催される時、クララは手押車に静かに坐つてゐた。黒い絹の衣裳に黒の頭布をかぶり、やさしい目に温い微笑をたたへてゐるだけで、彼女がゐるといふことが來客一同に大きな力を與へた。彼女は聴いてゐる振りをしてゐたが、この頃は會話さへ相當困難になつてゐたのである。音樂が奏されてゐる間、彼女は靜に坐つて、七十年間ピアノを弾きつづけてきた兩の手を膝に、ちつと遠くを視つめながら、物思ひに耽つてゐるのであつた。こんな時老いたるクララの顔には、何か不思議な美しさと力が内から輝いてゐるのが感じられるのであつたが、彼女の心に如何なる想ひが流れてゐるか、誰にも悟ることは出来なかつた。

ロバートの主題によるヨハネスのピアノ變奏曲の樂譜はその頃もいつもピアノの近くに見出された。その頃彼女はデュッセルドルフの家の産褥の床にゐた。フェリックスが生れた四五日目で、ロバートをエンデニッヒの精神病院に送つた寂しい日々であつた。變奏曲は二十歳のブラームスの心を寵めた贈り物であつた。それはともすれば涙にしめり勝ちな彼女の心を、如何に温く包んだことであらう。變奏曲への想ひは、いつか彼女の心を遠いロバートへの初戀の少女時代に導いてゆく。維也納からのロバートの手紙、ひたむきな愛の言葉、相見ること許されなかつた悲しい何箇月、然し遂に二人は勝つことが出来た！そしてロバートの音樂！彼の音樂こそは二人の愛情の子供であつた！新しいピアノ作品が出来るとロバートは彼女の共感を求めた。それなのに、若い彼女はその稀なる美しさを未だ充分に理解出来なかつたのだ。今になつてクララは、彼の作品が恰も彼女自身の生命であり呼吸であつたやうに、完全に理解出来る。ああロバートが長生きをしてくれてゐたら！腕が云ふことをきかなくなる前の演奏を聴いて呉れたら！

ロバート自身さへも、一般向きにはあまり、に氣まぐれで個人的だと思つてゐた「謝肉祭」は、演奏會で最も喜ばれる作品となり、ロバートの作品の凡てが、寶玉の如く貴ばれ、その美への鍵を持つ者として、如何にクララが仰ぎ見られてゐるか！ロバートが知ることが出来たら！

彼女の腦裡に閃いては消え、又生れてくる想ひの數々は、いつかロバートの上に集められる。インゼル街のささやかな新婚の家、幸福に輝いてゐたロバートの顔、やさしい眼、突然クララはエンデニッヒの病院にロバートを送つた日の胸の痛みが、未だに疼いてゐるのを感じる。ロバートと別れた日、あの日から生きてきた自分は、全く別な自分のやうな気がする。彼女を遺して死んでいつた子供達、生れた時から弱々しかつたエミール、母の目にさへ此の世のものとも思はれぬ程に美しかつたユリー、若いフェリックス、五人の子供を残して死んだフェルディナンド、最後に彼女は、三十年に近く生きながら葬られたやうに、精神病院にゐた哀れなルドウィックを想ひ出す。いつたいどうなるのであらう。クララは襲つてくる暗い翳に身を顛らせて、はつと我にかへり、音樂に聴きほれてゐるしたしい人々の顔、殊に生々としてゐる孫達の若々しい顔を眺めながら、寄る年波と共に周圍から注がれる人々の愛情と、榮譽に感謝する氣持を強く感じるのであつた。そして又改めてロバートが生きてゐたら、としみじみ思はずにはゐられない。

豊かに育つ子供達に圍まれた暖い家庭と藝術に生きること、それがロバートのつつまし

い夢であつた。そのことを想ひ出す時、クララはただ一人早死をしたロバートが哀れになり、シューマンの音楽への世の讚美と愛情を、自分一人で受けることが心苦しく感じられてくる。と突然クララの心は感動に溢れて、涙がはらはらと頬を傳ふのであつた。そして此の度こそ、本當に我にかへるのであつた。

彼女は友情と榮光に包まれた晩年を、心から深く感謝してゐた。父から、そしてロバートやヨハネスから教へられた、眞の音楽への理想は次第に世に實證されることになり、彼女の演奏家としての半世紀にあまる良心的な努力が、此の世界的機運を導きだす運動の、有力な一翼になり得たことは、彼女に大きな喜びと満足を味はせたのである。

然しいつか老齡は、嘗つて「仕事こそは苦惱の最良の慰藉である」と書いた彼女の、最後の隠れ家である仕事まで奪ひ、聴覺の喪失はあらゆる音楽生活の楽しみから、彼女を閉め出してしまった。彼女は己の苦惱をまぎらす何の手段もなく、森の中にあるやうな永遠の静けさの中に坐つてゐるより他にしかたがなくなつてしまった。

ロバート・シューマン、メンデルスゾーン、ブラームス等が始めた戦ひは、既に終りに近づいてゐた。音楽の浪漫主義運動の英雄達は凡て墓場に入り、ブラームスと彼女のみが淋しくとり残されてゐた。ヒルラー、フェールルスト、ベンデマン、ガーデ等のロバートの友人を始め、リスト、ワグナー、ハンス・フォン・ビューロー、ルビンシュタインさへも既に此の世を去つてゐた。ロバートの美しい歌謡に生命を吹きこんだ、十九世紀の偉大なプリマドンナ達、ジェニー・リンド、シュレーダー・デヴリアンは死に、ポーリン・ヴィアルドー、ガルシアの歌手としての生命も既に終り、バリトーンのストックハウゼンは老い込んで盲目に近い状態であつた。ブラームスの理解者であつたエリザベート・ヘルツォーゲンベルグも死んだ。輝かしい藝術家達に豊かに取り囲まれてゐた時代は、既に遠い過去のものとなつた。老齡と病苦と勞苦の荒野の中に、ただ一人とり残された自分を、クララは感じるのであつた。友も音楽も去つた今、彼女の心は、彼女の爲に、シューマン家の爲に一生を捧げたマリエとオイゲニーの二人の娘に温くより添つてゆく。一八九五年の一月にオイゲニーが倫敦に出かけた頃の日記には、彼女を想ふあまり笑ふ氣にもなれないと、記されてゐる。同年の四月十六日の日記には、

「オイゲニーが數曲を眞に素晴らしく弾いてきかせた。聴くごとに彼女の演奏は成熟してくるやうである。體さへ弱くなければ……私の娘達は何んと優れた女性達であらう。私はそのことをしばしば思ひやがて彼女達と別れることや、私の愛情が最早彼女等を包むことが出来なくなつたことなどを考へる。彼女等の爲に何かつくしたいと望みつつ、今は彼女等から受けるばかりである」

一八九五年の六月の始めに、クララはマリエを伴つて長い間楽しみにしてゐたデュツセルドルフ訪問を實現することが出来た。昔のやうに、今は未亡人となつたベンデマン夫人の家に滞在して、ロザリー・レーザーとも毎日のやうに逢ふことが出来た。これはクララが此の二人の親友と逢つた最後となつた。盲目の心美しき友ロザリー、ロバートの病む頃から、淨い温い心でクララを包み、慰め勵まして呉れた此の不幸な婦人は、その翌年のクララの死の二日前に、その淋しい然し美しい生涯の最後の息をひきとつたのである。

「八月六日。インターラーケン。最愛の友、リダ・ベンデマンの死の報せがあつた。彼女の死と共に、誠實な友情に豊かにされ高貴にされた家、私が多くの時を過した家庭がなくなつたわけである。かうならねばならなかつたことが、私には未だ納得出来ない。私は深く悲しみ、間もなく私も彼女のあとを追ふやうな気がする」

とあるやうに、ドレスデン時代からの此の友も、クララより先に死んでしまった。

一八九五年

八月十三日……今日はダヴィット結社舞曲を再び人の前で弾いた。こんな靈感をもつて弾けたことは、嘗つてなかつたやうな気がする。實に素晴らしい曲！ 何んといふ魂であらう！ あまりに美しい。耳鳴りが又烈しくなつた。その音に妨げられて、夜、何時間も眠られず覺めてゐることがある。

九月十三日……楽しい誕生日（七十六歳）であつた。私は元氣であつた。あのやうな子供達を持つ幸福と、彼等の豊かな愛情に包まれてゐる喜びを感じる。ああ子供等を幸福にすることが私に出来た

ら！ 彼等の贈り物は新しいピアノ掛けであつた。現在用ひてゐるのが私の一生の間もつと思つてみたが、新しいのも嬉しい。ピアノが古くなつたので、今日一臺シュタインウエーに注文したので、新しいピアノに掛けることになるであらう。山のやうな手紙に、昨夜は目が痛くなつて讀めない程であつた。

十月……此の一週間、又音階の練習を始めた。ひどく疲れる。昔好きだつた曲、シューベルトのハ短調即興曲、グルックのガヴォット等の小さな曲を弾いた。技巧の練習は私の爲によいことだと思ふ。もう殆んど忘れてしまつてゐた。いつも練習の前に弾く私の前奏曲を楽譜に書いておきたいと思つたが、いつもその時の気分で變へて弾くので、書き残すのは相當困難である。

十一月六日、七日……ヨアヒムが二度訪れた。最初の時は二人だけであつたので、彼は家族のことについて語つた。彼はひどく老けたやうに思はれる。

二十五日……ヨアヒムが再び立寄つて呉れたので、一緒に音楽をやりたいと思つたが、あまりに気分が悪く心が不幸であつたので、一時間ばかり愉快地話した後、彼は伯林に去つた。

十二月七日……マリエの病は少しよくなつた。シムロック博士は私の食事に厳格な制限を命じた。年寄りになつても美味な食物に對して注意がいるとは、何んとかしいことであらう！

以上はクララ七十六歳の秋の日記の抜萃である。此の年の十月には、ブラームスも二三日クララの家を訪れた。上機嫌であつたので、マリエが病中なので気を遣つてみたオイゲニーは安心するのであつた。ブラームスが泊つた翌日、珍らしく母の居間からバッハの前奏曲と遁走曲が、明快なタッチで聴えて來た。「母さまが弾いていらしてよ」と、オイゲニーは驚いて姉に囁いた。バッハがすむとヨハネスのローマンスと新しいインターメツオが續いて聴えて來た。

「母が弾き終つて暫くしてから入つてゆくと、母は書机の横に坐つてゐた。母の頬は心持上氣して眼は内からの光りに映えるやうに輝いてゐた。母と向つて坐つたブラームスは明かに深い感動にひたつてゐる様子である。『お母さまが今私の爲に、大變に美しく弾いて下さつたところですよ』と彼が云つた。數時間後にブラームスは別れを告げた。二人の友は長年の間いつもしてきたやうに、互ひに抱擁し接吻を交した。然し再び逢ふことはなかつたのである」

とオイゲニーはその日の想ひ出を記してゐる。

遂に最後の年、一八九六年が訪れた。

一月三十日……今日ルイズ（エリゼの夫でひどく患つてゐた）に數分間逢ふことが出来た。何んとか悲しく感じられたことであらう！ ああ天が我々にもう少し親切であつたら！ 内も外も心懸りばかりである。然しマリエもずつと恢復したのだから、こんなことを云つては申し譯ない。それに勤勉なフェルディナンドがある。あの子はいつも快活で、能ふ限りなつくす氣持でゐるのだ。非常な進歩をしてゐる。こんな風に光と蔭は常に一緒にやつてくる、然し今は後者があまりに大きい。

二月七日……アンサンプルの教授をした。近頃のピアニストは初見でベートーヴェンの奏鳴曲が弾けると考へてゐる。あまりに嘆げかはしく、反對する力さへ最早自分にはないやうな氣になることもあり、がっかりする。然し私は反對する、せずにはゐられない。

三月二十一日……夜はたまらない。頭をあげてゐることも出来ない程に疲れ切つてしまふ。苦痛と病ひはたまらない。

三月二十四日……又苦しい夜、私は死ぬやうな氣がする。今私達は惨めな毎日を過してゐる。哀れなマリエは朝から夜まで私を看とつて呉れて、私が苦しい時には一緒に泣いて呉れる。私が間もなく子供等と別れねばならぬか、誰にわからうか。此の想ひは私を去らない。私はオイゲニーの帰宅を心配する。あの娘には休養が必要なのに、こんな悲しい状態の私を見出すのだから。

これがクララの書いた最後の日記であつた。二日後の二十六日に孫のフェルディナンドにピアノを教へた後、午後マリエと共に馬車で出かけたところ、マリエは突然話の最中に母の顔に愛化が起つたのに気がついた。極く軽微な脳溢血の發作が起つたのである。その後次第に悪くなり、言語も動作も不自由になつて來た。二十八日には寫眞に署名をしようとしてペンを握つたが、マリエの顔を悲しげに見つめながら、首を振つてペンを置くのであつた。

四月になると経過が非常によくなり、クララは夏をバーデンで過さうと自ら云ひ出す程

になつた。

「フランクフルトからシューマン夫人について吉報がありました。神に讃へあれ！ 彼女を失ふことを想ふと私は身が顫へます」と、その頃ヨアヒムは維也納のヨハネスに書いてある。この手紙に對してブラームスからは、

「貴君が書かれたことは、私には悲しく思はれません。私はシューマン夫人が彼女の子供達や私が死んで後も、生き残られるのではないかと、しばしば考へたことがありますが、これは私の望まぬところです。既に多くの人々に先だたれて、此の世に孤獨な私のやうな者でも、彼女を失ふ想ひを最早恐れてはをりません。彼女が逝けば、長い我々の生涯に、相知る幸福を許され、益々愛し尊敬した榮光に満ちた女性を想ふ度に、我々の面は輝やかされるのではないでせうか……」

といふ、如何にもブラームスの性格を現す返事が、ヨアヒムに送られた。ブラームスは彼の訪問がクララの養生の邪魔になることや、必要以上にクララを刺戟することを恐れてはゐたが、マリエに手紙を書いて、生きてゐる間にクララに逢ひたいと相談した。ところがマリエからは、來ないやうにとの返事だつたので、彼は仕方がなくオーストリアのイシュルに到着かない春の日を送つてゐた。美しい新緑の森の散歩も死の床にあるクララを思ふ時、ブラームスの心を慰めることは出来なかつた。そんな時ブラームスは机の上の聖言を讀むことにした。クララにとつて死は決して恐いものではなくて、清くやさしい彼女の魂に、永遠の平和が與へられる日であることを、ブラームスもよく知つてゐた。彼女の純粹さ、やさしさ、澄み切つた心の調和は、常に烈しいものに襲はれてゐるブラームスには、此の世のものとも思はれなかつたのである。クララこそは、天が彼を守る爲に遣はされた天の使ひであつたかもしれないと、ブラームスは思ふのであつた。ブラームスはクララに對する想ひに濡れながら、聖書から歌詞を得て、死を歌ふ歌謡を書いて焦躁の日をまぎらしてゐた。

五月七日にクララは孫のフェルディナンドに助けられて、ブラームスの誕生日に祝ひの言葉を書き送つた。

心からのお喜びを、心から貴方の

クララ・シューマン

今はこれより書けません、でも近く、貴方の……

と、終りはかすれてしまつてゐる。それはクララと知つた二十歳の時から、ブラームス六十三歳の此の年まで、毎年五月の誕生日ごとに缺かされたことがない祝ひの手紙であつた。これがクララの絶筆となつた。ブラームスは弱々しい彼女の筆跡と、短い言葉の中に含まれた彼女の温い愛情に非常に感動した。

「貴女の七日の爲の御便りをいただいたこと程に、嬉しい美しいお志は受けたことがあります。あつくあつく御禮申し上げます。貴女の上にも御幸福が近く訪れること、殊に御健康が御恢復になることを心から祈ります。

バーデンにお出かけの由ですが、その時にはどうか何日頃から何日頃まで御滞在か、私にもきかせて下さい。長くお讀みになることはお障りになるでせうし、私も他の事は書く気が致しません……」

ブラームスが此の手紙を書いた日には、恰も彼の祈りが天に嘉みせられたかのやうに、クララは珍らしく非常に気分がよくて、發病して以來始めて手押車にのせられ、マリエに押されて庭に出ることが出来た。ライラックやカスクニンの花が吹き香つてゐる五月の庭の、暖い陽ざしの中で心地よささうにしてゐる母を見ると、マリエも久しぶりに明るい気持になるのであつた。

翌日も気分がよかつたので、クララはフェルディナンドが祖父ロバートのインターメツオ三曲と、嬰へ長調のロマンスを弾くのを微笑しながら聴いた程であつたが、これは彼女が聴いた最後の音楽となつてしまつた。

五月十六日の夜にクララは、再び此度は激烈な腦溢血を起した。その後は言語も殆んど不可能になり、母の胸に耳を寄せてマリエがやつと聞き得た言葉は「可哀想なマリエ」そして「此の夏は二人できれいな處にお行き！」といふ言葉であつた。急をきいたオイゲネーは倫敦から十七日に到着した。彼女を認めたクララの頬には微かな微笑みが浮んだ。

五月二十日の早朝、死は遂に近づいて來た。二人の娘の涙のうちにクララ・シューマンは同日の午後四時二十一分に、七十七年に亙るその長い、多難な、然し生きがひのある生涯をやすらかに終へたのである。

「五月二十日。母は今日、靜かに永眠致しました。マリエ・シューマン」

ブラームスは此の電報を翌々日の二十二日になつて受け取つた。維也納から廻送されてくるのに手間どつたのである。ブラームスはクララを想ひつつ作曲した新作の歌謡の草稿を鞆に入れて、直に維也納・巴里間の急行に乗つた。途中時間の手違ひで手間どり、やつとフランクフルトに着いてみると、告別式は既に済んでボンで埋葬式が行はれることを告げられた。三十六時間の汽車の旅に疲れ切つて、ボンに到着したブラームスが、息をはづませながら、墓地の禮拜堂に駆けつけた時は、丁度出棺するところであつた。

二十三日に自宅で盛大に行はれた告別式には、音樂院や市の有力者をはじめ、伯林からヨアヒム、ヘルツォーゲンベルク、ロバート・メンデルスゾーン等も出席した。ロバートの「妖魔」の中の葬送合唱曲で式が終り、遺骸は同日ボンに移された。

翌二十四日聖靈降臨祭の日曜の朝、今は豊かに繁つた樹木に圍まれたロバート・シューマンの墓が、四十年目に再び開かれて、長い間別れてゐた夫と妻は途に永遠に一つにされる時が來た。クララを愛しクララに愛された人々が、各地から集つてせまい禮拜堂に群がつてゐた。四十年前の七月三十一日の夕べ、ロバートの遺骸が葬られる間、クララがただひとり神の前にぬかづいて、ひとり生きる力を與へ給へとひたむきに神に祈つた禮拜堂である。彼女の棺はその同じ場所に安置されてゐた。その周りには彼女が力の限り守り愛した子供達と孫達が並び、兄弟や友人達の悲しい顔が並んでゐた。

外は明るい五月の朝であつた。さはやかな陽光に樹々の新緑が輝やき、鶯の聲が繁みの中から聞えてきた。禮拜堂の扉の上にからまる木蔭の葉蔭からは、小鳥が出たり入つたりしながら囀つてゐた。

聖靈降臨祭の爲に鳴らされるボンの各寺院の鐘の者と小鳥の聲、咲き満ちた花の香氣の中を、人々は悲しみに濡れながら、遺骸を守つて墓所に達した。墓は美しい様々の花に飾られてゐて、朝の陽光に明るく輝いてゐる。それ等の美しい花は、長い旅路の末に、遂に永遠の憩ひの家に歸つたクララに、祝福の言葉を囁いてゐるやうに、微風に顫へてゐるのであつた。

四十年前に敬愛するロバートの遺骸が埋葬されてゐるのを見守つてゐた同じ場所に今再び孤獨で立つブラームスは、いよいよクララの遺骸がそこに運ばれると、最早五月の明るい陽ざしの中に見守ることは堪へられなくなつてしまつた。傍の木立の中に身をひそめた白髪のブラームスは、彼の哲學も信仰も、彼女を永遠に失つた現實の悲哀の前に、消えてゆくを感じるのであつた。ブラームスにとって、クララ・シューマンの死は、再び癒えることなき魂の痛手であつた。

ブラームスはクララの葬式後の數日を、ライン河畔の親族の家で、友人達とクララの愛した音樂を演奏して過した。シューマンとブラームスの室内樂の作品の多くが選ばれた。最後に彼の新しい「四つの嚴肅なる歌曲」がとりだされた。自らピアノの伴奏を弾く白髪のブラームスは、こみあげてくる感情を押へようと努力してゐた。然し涙が彼の頬をあとからあとから傳つて、弾く手もとどまりがちであつた。それは不思議な、然し心をうつ光景であつた。

「嚴肅なる歌曲集」をお受け取りになつても、どうか誤解なさらぬやうに願ひます。お宅宛に先づ最初にお送りする懐しい習慣は別として、此の度の歌曲は眞實、貴女にお送りしたのです。

私は五月の最初の週にそれ等作曲しました。あのやうな想ひは、お母様の悲しいお報せを待つやうになる前から、私の心の中にあつたのです。人間の心の深みには詩なり音楽の形をとるまで無意識のうちに彼を動かし推してゆく何かがあります。あの歌曲を貴女は終りまで弾くことはお出来にならぬでせう。あの歌の言葉は今の貴女をあまりに強くうつでせうから。どうかあの歌曲はそのままにしておいて、貴女の最愛のお母様に捧げられた、一つの眞實の死と見ていただき度くお願い申し上げます。

この手紙と共にブラームスは、これ等の歌曲をマリエに送った。彼は四十年來新作を始めクララに見せることが出来なかつたのである。クララに新作を送ることはブラームスにとって既に生活の一部となつた長い間の習慣であつた。その後は新しい作品が出来るとクララの生きてゐる間には夢にも思はなかつた寂寥にブラームスの心は疼くのであつた。

クララの葬式後に、維也納に歸つてきたブラームスに逢つた友人達は、彼が急にひどく老いこんでしまったことを感じた。彼等の前に現れたのは、昔の頑健で、精力的で、意志の強かつたブラームスではなくて、疲れ切つた、顔色の優れぬ一人の老人であつた。人々は彼の顔色があまりに悪いのに驚いて醫者にゆくことをすすめた。診断の結果、肝臓が既に致命的に犯されてゐることが明かにされた。これが原因となつて、クララを葬つて未だ一年にもならぬ翌一八九七年の四月三日、ブラームスもその孤獨な生涯を終へたのである。

## あとがき

一つの仕事に生きる夫と妻の協力が、彼等の家庭生活を幸福に豊にしたばかりでなく、人類の文化に偉大なる贈り物を遺すまでに高揚された例を、私達は、英國の大詩人ロバート・ブラウニングと女流詩人のエリザベス・ブラウニング夫妻や、ラヂュームの発見者マリー・キュリーとピエール・キュリー夫妻の家庭に見ることが出来ますが、ドイツ浪漫派音楽の巨匠ロバート・シューマンと優れたピアニストであつたクララ・シューマンの家庭も、かうした祝福された家庭の一つで、音楽史の中に稀に見る美しい頁を占めてをります。そしてこのやうな純粋な愛情と音楽に結ばれた淨らかな夫婦が、嘗つて此の世でつましい営みを持つたといふことは、人類に対する私共の信頼と夢を温く育んでくれます。

クララ・シューマン程に、天才少女として全歐に謳はれた少女時代、病身な夫ロバートとの結婚生活、苦難な未亡人時代を通じて、身も心も音楽に捧げ、音楽に生き、音楽に影響を與へた女性は比類がないと存じます。リスト、タールベルグ、フォン・ビュロー、ルビンシュタイン等、ピアノ界の超弩級の巨人が輩出した時代に生を享けながら、クララは最初の世界的な女流ピアニストとして、七十年に近い長い演奏生活の間、独自の音楽境地を守りつづけたばかりでなく、ピアノ演奏家としても實に革命的な先覺者の道を歩いたのでございました。

世をあげて華麗な伊太利歌劇の影響下にあつた當時のドイツ樂壇に、顧る者もなく埋れてゐたセバスチアン・バッハの遁走曲や協奏曲を、クララは敢然として演奏曲目に加へ、メンデルスゾーンと協力して古典復古運動の先驅をなし、又、時流におもねる演奏家が未だ敬遠してゐたベートーヴェンの作品、例へば熱情奏鳴曲や作品一〇六のハムマークラヴィア奏鳴曲を始め、後期の奏鳴曲の最初の公開演奏をする勇氣と確信を持つてをりました。ショパンの新鮮な作品を最初にドイツ樂壇に紹介したのも彼女であり、ドイツ浪漫主義音楽の成長のいぶきの中に育つた彼女は、幼い頃からメンデルスゾーン、シューマン、ブラームス等の作品を演奏して、之等翼ある若者達の音楽と聽衆の心をつなぐ役割をつとめたのでございます。

藝術家としてのクララが、常に眞實で勇敢でそして忍耐を持つてゐたやうに、女性としてのクララも常に信ずるところに眞實で勇敢で、夫を愛し、子を愛し、生活を愛して恰も親鳥が翼を擴げて雛をかばふやうに、身をもつてささやかな家庭の幸福を守りました。誠にクララ・シューマンこそは藝術と家庭生活を兩立さすべく、才豊かに恵まれた女性に課せられた、困難な然し光榮ある道を、ひたむきに實踐した最初の女性でございました。そして彼女の愛情と眞實は、あらゆる苦難試煉に耐へて、立派に此の使命を成就したばかりでなく、さらに驚くべきことは、最愛の夫を精神病院に送り、やがてその死と共に遺された七人の幼児を女手一つで育てあげ、そのうち四人の子女に次々と先きだたれて、七十歳の老齡になつて尚ほ一家の生計を双肩に擔はなくてはならなかつた烈しい一生を送りながらも、常に感謝と希望を失ふことなく、人生に對して絶えず積極的な愛情と信頼を持つて、たゆまぬ精進をつづけてゐたことにあると存じます。

クララ・シューマンの興味深い生涯の記録は「我が日記は一八二七年五月七日、父の筆で始められ、クララ・ヨセフィネ・ヴィークによつて繼續せらる」と、父ヴィークの手跡で扉にしるされた第一巻から始まつて、一八九六年の春に終る全四十七巻の日記に、その喜びも悲しみもこめて、クララ自らの手で詳しく眞實に書き残されてをります。又シューマンとの長い戀愛時代にとり交された、若々しい愛情に溢れた手紙や、ヨハネス・ブラームスとの四十年に渡る美しい友情の記念ともなるべき八百通に近い書簡、ヨアヒムを始め、多くの友人や子供等に宛てて書かれたものを繙く時、何よりも讀者の心を強く捉へるものは、彼女の淨らかなそして眞實な女心と厭くことなき精進の精神でございます。それ故にこそクララがピアノを弾く時に、彼女の心に脈搏つてゐる愛情と氣魂が、精神化された音の言葉を通じて、聽衆の心に温く迫つたのでございませう。

これ等の日記や書簡としたしむうちに、私はクララの献身的な心遣ひと信頼がなかつた

ならば、あの不思議な香気と美しさに満ちたロバート・シューマンの音楽は無論のこと、眞摯で内省的なヨハネス・ブラームスの作品も、現在あるやうな姿では残されなかつたのではないかと思ふやうになりました。そして拙い筆ではございますが、此の音楽の娘であり、戀人であり、妻であり、そして偉大なる母であつた女性の眞實に生きる姿と、苦難に満ちた然し比類ない生涯の物語りを、まとめてみたいと考へるやうになりました。

我國は只今建國以來のロマンチックな時代に邁進して、大いなる使命の許に世界に飛躍せんとしてをります。音楽の分野に於きましても、今日のやうに偉大なる作曲家が渴望されてゐる時代はございません。若い日本人は我々の魂の壯なる旋律を歌つてくれる作曲家の出現を待つてをります。シューマンやブラームスの音楽が自己に眞實であり、同時に最もドイツ的で又世界的であり得たやうに、日本的民族的であることが世界の共感をよび得るやうな作曲家を日本に生む爲には、先づクララ・シューマンのやうな愛情と夢を持つた、逞しい女性が現れなくてはなりません。クララ・シューマンが前世紀にひたむきに歩んだ道は、彼女が女性であり、母であつた限り現代の日本の女性にとつて、決して遠いものではないのでございます。

このやうなひそやかな夢と、クララ・シューマンに對する憧れから生れたのが、此のささやかな物語りでございます。その名（クララは光りの意）の如く多くの人の「光り」となり得た、クララ・シューマンの豊さを描くには、あまりに貧しい私の言葉をお詫びすると共に、意のあるところを汲みとつていただける方がございますれば、幸でございます。

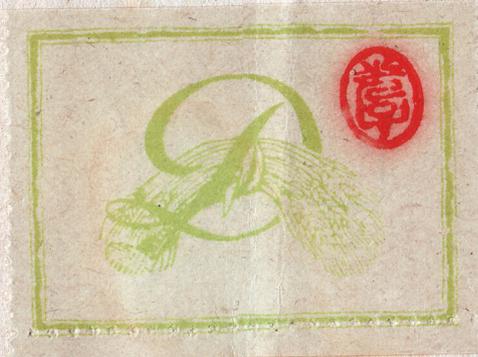
昭和十六年八月

野尻湖畔にて

原 田 光 子

眞實なる女性

クララ・シューマン



會員登錄番號  
一一六五〇八

昭和十六年十月十五日印刷  
昭和十六年十月二十日第一刷發行  
昭和十七年八月十五日第二刷發行(五千部)

定價 一圓八十錢

著者 原田光子

刊行者 東京市麹町區三番町一  
長谷川巳之吉

刊行所 東京市麹町區三番町一  
第一書房  
振替東京六四二二三  
電話九段一四一五  
三三四四

東京銀座數寄屋橋  
發兌 第一書房

電話京橋五九八七

東京市神田區淡路町二丁目九番地

配給元 日本出版配給株式會社

東東四三五 印刷者 東京市芝公園一五ノ一一 勝田 茂

\*落丁・飢丁の際は直接本社にてお取替へ致します。